

平城京右京北辺

2005

(財)元興寺文化財研究所

序

元興寺文化財研究所は、昭和50年以来、特定公益増進法人として文化財に関する様々な分野の調査・研究を継続的に行ってまいりました。考古学的な発掘調査もこうした活動の柱の一つとして、西日本を中心に各地で実施し、多くの成果をあげているところです。

奈良県内におきましては、これまで元興寺旧境内を中心に実施してまいりましたが、今回、幸いにも平城京内を調査する機会に恵まれました。

当該調査地は、官の尼寺である西隆寺の北西部分と平城京右京北辺三坊とに位置しています。調査の結果、これまで学会において、その存否を含めて多くの議論がなされてきました平城京北辺坊に関する新知見が得られ、成立時期や範囲、利用状況等の一部について明らかにすることができました。また、古墳時代前期の遺構や遺物についても成果があり、平城京成立以前の土地利用や集落のあり方等を検証する有力な資料が得られました。

奈良に位置する研究所として、地元を代表する遺跡である平城京の調査に関わることができ、ここにこうした調査成果を上梓できましたことは、望外の喜びであります。

本書を多くの方々にご利用いただき、文化財の調査・研究に資するところがあらんことを願ってやみません。

最後になりましたが、調査及び整理報告に関しまして多くの機関、関係者の方々のご協力、ご助言を得ることができました。厚くお礼申し上げる次第であります。

平成17年3月
財団法人 元興寺文化財研究所
理事長 辻村泰善

例言

1. 本書は、平城京右京一条北辺地域における発掘調査の成果をまとめたものである。奈良県教育委員会の指定する遺跡名は、「平城京一条北大路・西二坊大路・右京一条北辺二坊七坪、西大寺境内、西陸寺境内」であるが、調査の名称は表題のとおりに統一した。ただし本文中においてそれぞれに関連する事項は、調査名にとられることのないよう配慮した。
2. 調査地は、奈良県奈良市西大寺東町1丁目ほかで、開発面積は約12,635.5m²、調査面積は3,000m²である。調査は、(財)元興寺文化財研究所が平成15年8月18日～12月21日にかけて行い、岡本広義、佐藤正聖が担当した。
3. 調査地の測量は、世界測地系(改正後)を利用し、測点移動の実務を(独)文化財研究所奈良文化財研究所にお願した。
4. 発掘調査における遺構の実測作業および写真撮影は、岡本、佐藤のほか、橋本英将・関野泰一・高志こころ・寺岡希華・西口智彦・春日仲康・浦上志保・森垣一馬が行い、調査地全体の航空写真は有限会社ウイング(代表取締役 湯地健一)に委託した。
5. 出土遺物の実測及び浄書は、藤井章徳、船架紀子、武田浩子、仲井光代、鉛谷曜子、大久幸代、辻村希里子、清水依子が行き、写真撮影は大久保治(財)元興寺文化財研究所)が行った。
6. 本書で用いる土器の分類名は以下の文献に依拠している。

古代の土器：奈良国立文化財研究所1982『平城宮発掘調査報告』Ⅺ 奈良国立文化財研究所30周年記念学報(学報第40冊)
古代瓦：奈良市教育委員会1996『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』
輸入陶磁器：太宰府市教育委員会2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ- 陶磁器分類編-』太宰府市の文化財第49集
7. 製塩土器内面の布目については、1平方センチメートルあたり縦糸×横糸が40本×40本程度の粗いものをA類、80本×80本程度の細かいものをB類とする。
8. 本書で参考とした編年は以下の文献に依拠している。

古墳時代の土器：寺沢薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」、『矢部遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告第49集 奈良県立橿原考古学研究所
奈良時代後半～平安時代の遺物：三好美穂 1995「南都における平安時代前半期の土器様相」『奈良市埋蔵文化財センター紀要』1995 奈良市教育委員会
瓦器碗：川越俊一1983「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」、『文化財論叢』奈良国立文化財研究所(なお、実年代については森島康雄氏による補正を参考とする。森島康雄1992「畿内産瓦器碗の併行関係と歴年代」、『大和の中世土器』Ⅱ 大和中世研究会
東播系須恵器：森田稔1986「東播系須恵器生産の成立と展開」、『神戸市立博物館研究紀要』3 神戸市立博物館(なお、実年代についてはその後の補正を参考とする。森田稔1995「中世須恵器」、『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編)
9. 本書の執筆は、第2章を藤井、第3章第1節を岡本、第3章の石器に関する記述を船架が、第4章第2節を狭川真一が担当した以外は佐藤が行った。
10. 整理作業段階において、調査の意義付けを考えるべく検討会を行った。第5章に検討会の概要を記

載すると共に、検討会の内容についてテープ起しを行った。当日は岡本、佐藤の他に武田和哉氏、三好美穂氏、井上和人氏のご講演を頂き、他にも多数の方々のご参集を頂いた。記して感謝したい。なお、講演記録のテープ起しは神明美が行った。

11. 本書の編集は、佐藤が担当した。
12. 当該調査において出土した遺物は、奈良市埋蔵文化財センターが保管し、実測図や写真については当面、(財)元興寺文化財研究所が保管している。活用されたい。

目次

第1章 調査体制と調査の経緯	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	5
第3章 調査の成果	
第1節 1区の調査	
第1項 概要	9
第2項 古墳時代の遺構・遺物	11
第3項 奈良時代の遺構・遺物	16
第4項 平安時代以降の遺構・遺物	36
第2節 2区の調査	
第1項 概要	54
第2項 古墳時代の遺構・遺物	59
第3項 奈良時代の遺構・遺物	63
第4項 平安時代以降の遺構・遺物	99
第3節 確認トレンチの調査	
第1項 確認トレンチ1の遺構・遺物	119
第2項 確認トレンチ2の遺構・遺物	121
第4章 調査のまとめ	
第1節 遺構変遷について	122
第2節 S X10420出土瓦の検討	126
第3節 S E20130・S K20120・S K20160の遺物組成	127
第5章 検討会の記録	
平城京研究史と今後の展望	130
古代土器研究の現状と問題点	141
考古学から見た平城京北辺坊について	148
平城京右京北辺の調査成果と北辺坊	157
討論	169

写真図版

第1章 調査体制と調査の経緯

平成15年4月、近鉄不動産株式会社（取締役社長 大友滋三）から奈良県教育委員会に対して、奈良市西大寺東町一丁目68-1他における（仮称）西大寺北集合住宅新築工事に係る発掘調査の届け出がなされた。これを受けた県は同年5月、発掘調査の実施を指示するとともに、同年7月に（財）元興寺文化財研究所に対して発掘調査の実施について依頼を行った。またこれと並行して埋蔵文化財の確認調査を奈良市教育委員会が行い、開発予定面積約5,500㎡（敷地面積は約12,600㎡）のうち、約2,900㎡について本調査が必要であると回答した。

（財）元興寺文化財研究所ではこの試掘調査結果と、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会の指導を受けて、当該地の工事担当会社である三和建設株式会社（代表取締役社長 有井邦夫）と発掘調査委託業務について契約を交わし、平成15年度に現地における発掘調査を実施、整理報告作業については翌16年度にあらかじめ契約を交わし実施することとなった。

現地での調査は、平成15年8月18日に開始し、12月21日に終了した。調査地は、奈良市西大寺東町一丁目68-1、69-1、70-1、72-1、189、同市西大寺本町205-4、205-5、206-6他で、調査面積は3,000㎡である。遺物整理と報告書作成は、平成16年度に（財）元興寺文化財研究所にて実施した。

調査及び整理に係る体制は以下のとおりである。

調査指導：奈良県教育委員会、奈良市教育委員会

調査主体：（財）元興寺文化財研究所

理事長 辻村泰善

所長 坪井清足

事務局長 奥洞二郎

研究部長 狭川真一

考古学研究室

室長 塚本敏夫

主任研究員 岡本広義（現地調査担当）

主任研究員 佐藤亜聖（現地調査担当）

専門研究員 橋本英将

現地作業員：有限会社ワーク（取締役社長 岩崎栄作）

調査補助員：関野泰一、小田真由美、武田浩子、岩本真和（以上（財）元興寺文化財研究所）

高志こころ（大阪市立大学大学院）寺岡希華、山本真琴（以上帝塚山大学大学院）

森垣一馬、大田有紀、森田清美、磯谷美和子、浦上志保、春日伸康、西口智彦、

根岸晶子、山田愛、（以上奈良大学）

整理作業参加者：藤井章徳、小野亜由美、船菜紀子、武田浩子、仲井光代、鉛谷囃子、小田真由

美、大西美奈、大久幸世、辻村希里子、清水依子（以上（財）元興寺文化財研究

所）春日伸康、西口智彦、井戸竜太、新田いくみ（以上奈良大学）

なお、当該地の世界測地系による基準点測量は、（独）文化財研究所奈良文化財研究所にご指導いただき、併せて実務もお願いした。感謝申し上げる次第である。

この他、調査及び整理報告にあたっては、次の方々から貴重な助言や指導をいただいた。記して感謝

の意を表したい。(順不同・敬称略)

田辺征夫、岡村道雄、井上和人、金田明大、林正憲、高橋克壽、馬場基、山本崇、中島義晴、渡辺晃宏、和田一之輔(以上(独)文化財研究所奈良文化財研究所) 寺沢薫、岡林孝作、今尾文昭、清水康二(以上奈良県教育委員会) 廣岡孝信、土居規美、大西貴夫(以上奈良県立橿原考古学研究所) 森下恵介、藤原豊一、西崎卓哉、三好美穂、立石聖志、森下浩行、武田和哉、安井宣也、池田裕英、宮崎正裕、中島和彦、山前智教、原田香織(以上奈良市教育委員会) 山川均(大和郡山市教育委員会) 中島恒次郎(太宰府市教育委員会) 田部剛士(山添村教育委員会) 岡本智子((財)大阪府文化財センター) 籠野和己(奈良女子大学) 安倍みき子(大阪市立大学大学院) 藤澤典彦(大谷女子大学) 森郁夫(帝塚山大学) 東野治之(奈良大学) 下高大輔(奈良大学大学院生) 須田史(奈良大学学生)

調査の経過(調査日誌(抄))

2003年

8月18日(月); 現地に調査前の打ち合わせを行う(参加 奈良市教育委員会藤原豊一氏・原田香織氏、三和建設春田裕也氏・市川学氏、有限会社ワーク岩崎栄作氏、((財)元興寺文化財研究所岡本・高志)。1区の調査区設定後に、北から重機掘削開始。奈良市の実施した試掘調査結果に基づき、1区北端付近の堆積状況を確認する。第1遺構面(平安時代以降)より素掘り小溝検出。

8月20日(水); 1区重機掘削。北端より第1遺構面の精査。多数のピットおよび素掘り小溝検出。調査地周辺より調査区内にレベル移動。(独)文化財研究所奈良文化財研究所中島義晴氏・山本 梓氏による座標測定用のGPS測量を午前・午後1回ずつ行う。その結果に基づき、座標基準杭および地区杭設定の準備を行う。

8月25日(月); 1区重機掘削。ベルトコンベアー設置。北側第1遺構面精査終了。遺構配置略図作成開始。奈良市教育委員会藤原氏・武田氏来訪。

8月27日(水); 1区重機掘削終了。調査区中央付近で東西方向に走る溝(一条北大路南側溝S D 10821)および一条北大路らしき路面痕跡S F 10020検出。中央南側で瓦溜り2箇所検出。

8月30日(土); NPO法人による発掘調査見学受け入れ(大人10名・子供17名)。

9月3日(水); 1区北辺坊側第1遺構面のS D 10009掘削およびS B 10080柱穴の検証を行う。遺構面全体の精査ほぼ終了。各所で大小瓦溜り検出。奈良市教育委員会安井宣也氏、帝塚山大学教授森郁夫氏来訪。

9月10日(水); 奈良市立春日中学校職場体験2名(わくわくワーク)受け入れ。

9月16日(火); 1区北辺側各遺構掘削および遺構図作成。奈良市教育委員会藤原氏・三好美穂氏、安堵町教育委員会橋本紀美氏来訪。

9月17日(水); 奈良市教育委員会武田氏、(独)文化財研究所奈良文化財研究所井上和人氏来訪。

9月22日(月); 前日の雨による復旧作業。南側の遺構面精査および遺構検出。配置略図作成。(独)文化財研究所奈良文化財研究所金田明大氏・林正憲氏・馬場基氏来訪。

9月26日(金); 終日雨による復旧作業。(独)文化財研究所奈良文化財研究所田辺征夫氏・岡村道雄氏、奈良市教育委員会武田氏、奈良大学教授東野治之氏来訪。

10月1日(水); 1区遺構検出および掘削。西側遺構配置略図作成後に遺構掘削。2区東側より重機掘削開始。奈良市教育委員会武田氏、奈良女子大学教授籠野和己氏来訪。

10月8日（水）；2区重機掘削および座標設定および地区杭打ちを実施。（独）文化財研究所奈良文化財研究所井上氏、奈良市教育委員会西崎卓哉氏・立石聖志氏・森下浩行氏、山添村教育委員会田部剛士氏来訪。

10月17日（金）；（財）元興寺文化財研究所所有の文化財保存・保護啓発広報車「宝くじ号（愛称シバラ号）」のデモンストレーションを行い、1区西側調査区の三次元計測を実施した。

10月20日（月）；愛知みずほ大学博物館実習8名受け入れ。

11月7日（金）；1区北辺側第1遺構面調査終了。午後から重機にて北辺側第2遺構面（奈良時代）の検出実施。2区東側で西二坊大路SF20398および西側溝SD20010検出。坪内道路SF20399上に位置するSE20016内より墨書木簡が出土する。

11月11日（火）；雨天、外部作業中止。奈良市立二名中学校職場体験3名（わくわくワーク）受け入れ。

11月20日（木）；午前中、前日の雨による復旧作業を行う。午後から作業再開。奈良文化財研究所渡辺見宏氏来訪。

11月27日（木）；本日調査区全体空中撮影および1・2区主要遺構の写真撮影実施。終了後、1区第2遺構面遺構図作成およびレベル記入。SE10009の井戸枠取り上げ。2区西側各遺構検出および掘削。南側遺構実測図作成およびレベル記入。

12月1日（月）；1区北側から埋め戻し開始。SE10358実測図作成。井戸枠取り上げ。2区北側遺構掘削。南側遺構図作成およびレベル記入。

12月5日（金）；1区埋め戻し終了。2区北側第1遺構面遺構掘削。SB20394・20395写真撮影後に平面図および柱穴断面図作成。南側遺構図作成およびレベル記入終了。

12月12日（金）；2区東側から埋め戻し。北側第1遺構面全体写真撮影実施。全体遺構図作成およびレベル記入。

12月13日（土）；2区北側第2遺構面検出精査。大型建物跡、井戸跡など検出。遺構配置図作成。

12月16日（火）；2区北側第2遺構面各遺構掘削。全体遺構面および主要遺構写真撮影。

12月18日（木）；2区北側第2遺構面主要遺構図作成およびレベル記入。出土遺物コンテナを（財）元興寺文化財研究所へ移送。

12月19日（金）；各遺構図作成およびレベル記入終了後に、井戸枠および出土遺物取り上げ。

12月21日（日）；現地調査終了。撤収作業。

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

調査地は奈良県奈良市西大寺東町および西大寺本町に位置する。奈良県は日本列島のほぼ中央部、紀伊半島の付け根に位置し、南部には隣県の和歌山県・三重県へ続く紀伊山地、北部には奈良盆地が広がる。この奈良盆地の最北部に位置するのが奈良市であり、東・北・西側は丘陵によって囲まれ、南側は奈良盆地中央部へ向けて平坦部が開けている。平坦部は南流する佐保川の堆積作用によって形成された沖積地である。今回の調査地は奈良盆地の北西隅で、佐保川支流の秋篠川が丘陵部から平坦部へ流れ出る付近の右岸、平坦地上に立地する。

調査地がある奈良盆地北部は、古代において平城京が造営された場所であり、佐紀古墳群など、著名な古墳が集中する地域としても知られている。

考古学的な調査から確認できる遺跡は、旧石器時代・縄文時代の遺物出土が見られるものの、明確な遺構が確認できるのは弥生時代以降である。右京一条二坊二坪⁽¹⁾より弥生時代前期の住居跡、右京三条三坊一坪⁽²⁾より弥生時代中期の周溝基状遺構、平城京下層遺構⁽³⁾より弥生時代後期の集落跡が検出されており、前期段階より弥生時代の全期にわたって集落・墓等が営まれていた様子が認められる。

続く古墳時代では平城宮跡⁽⁴⁾等で竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出されており、規模の大きな集落が営まれていた可能性がある。また、佐紀丘陵上には前期後半より、大王級の規模を持つ五社神古墳・佐紀石塚山古墳・佐紀陵山古墳⁽⁵⁾などを中心とする佐紀古墳群の造営が開始される。中期に入っても市庭古墳⁽⁶⁾等大規模前方後円墳の造営が続けられるものの、後期段階では大規模古墳の造営が見られなくなる。

奈良時代には平城宮が営まれたことは周知の通りであり、今回の調査もこの時代の遺構を中心とする。平城京に関連する資料の蓄積は膨大であり、調査地に関連する北端部でも西隆寺付近において、奈良文化財研究所を中心に比較的広域の調査が行われている。西隆寺6次、平城京212次・221次・299次調査では一条条間北小路が、西隆寺3次、平城京299次・306次・309次調査では右京一条二坊坊間西小路がそれぞれ検出されている。また、平城京207次調査では一条条間大路北側溝も確認されている。現状では二坊内部の状況は西隆寺を中心としてかなり解明されつつあるが、一条北大路に関しては検出例が希薄で、その規模や位置関係すら把握されていない。また三坊側の調査は著しく立ち遅れている。

調査地周辺は天平宝字8(764)年に西大寺、神護景雲元(767)年に西隆寺が建設され、その伽藍地が接する部分に当たる。両寺の設置はこの地域における画期であり、後述する北辺坊の存在とも密接なかわりを持つものと考えられる。寺院建設が周辺に及ぼした影響を考えるためにも、坊内の土地利用の変遷を押さえることが重要であろう。さらにこの問題は『西大寺流記資料帳』に記載されている「畏懼寮」の位置と、それによって導かれる西大寺寺地の範囲論にも波及するものと考えられる。

さらに、平城京北辺坊についても調査が行われている。平城京には一条北大路から北側に2町分の張り出しが存在するが、これは北辺坊と称され、関野貞・喜田貞吉による論争⁽⁷⁾等、古くよりその存在について議論されてきた。考古学的な調査でも、奈良文化財研究所による調査⁽⁸⁾により平城京造営当時の建物跡が検出されており、造営当初より居住域が該地に営まれていたことは分かっているが、祭坊施行の存否など、解明すべき課題は多く残されている。

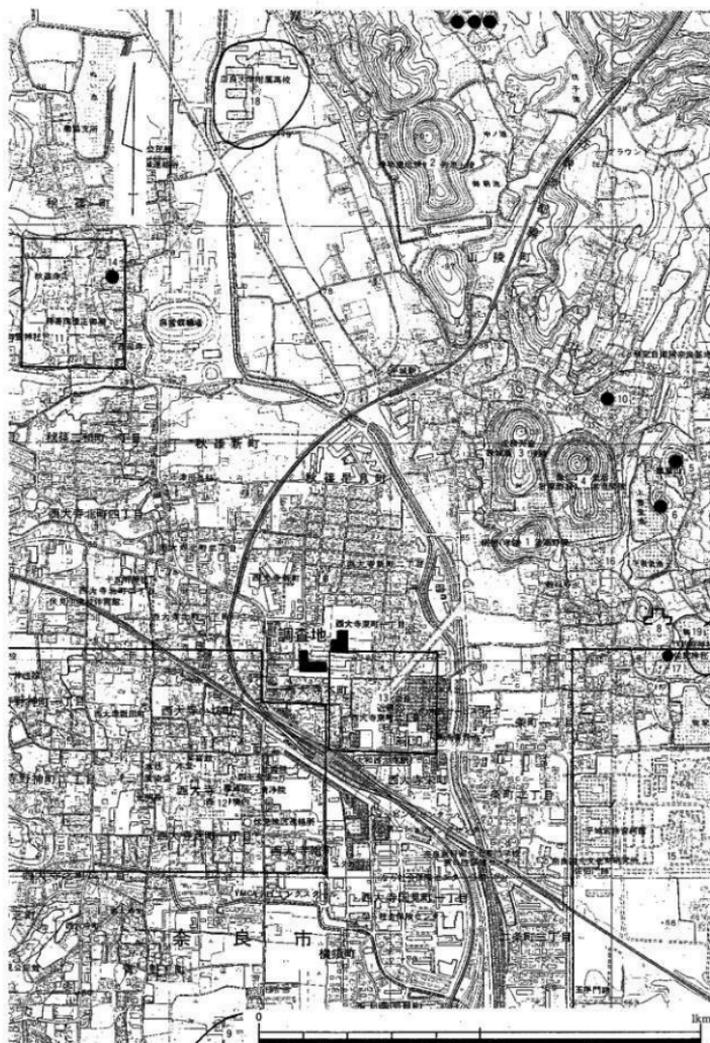


Fig.1 調査地の位置と周辺の遺跡 (S = 1/10,000)

Tab. 1 周辺遺跡一覧表

1 孝謙天皇陵	8 佐紀池遺跡	15 平城宮跡
2 五社神古墳	9 菅原東古墳	16 超昇寺跡
3 佐紀石塚山古墳	10 マ工塚古墳	17 佐紀城遺跡
4 佐紀陵山古墳	11 秋篠寺	18 山積遺跡
5 瓢箪山古墳	12 西大寺旧境内	19 超昇寺城跡
6 マル山古墳	13 西陸寺	
7 狐塚横穴第 1 - 3 号墳	14 トヨ一塚	

註

- (1) 『昭和56年度平城宮跡発掘調査概報』奈良国立文化財研究所 1982
- (2) 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成元年度』奈良市教育委員会 1990
- (3) 『奈良国立文化財研究所年報 1965年度』奈良国立文化財研究所 1965
- (4) 奈良国立文化財研究所150次・171次・216次調査等
- (5) 末永雅雄『古墳の航空大観』学生社 1975
- (6) 『平城宮北辺地域発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所 1981
- (7) 関野貞『平城京及大内裏考』東京帝國大學紀要 第三冊 1907
喜田貞吉『平城京及大内裏考』評論、『歴史地理』12- 1 - 6、13- 2 - 5 1908、1909
- (8) 奈良国立文化財研究所103- 16・112- 7・151- 26調査等

第3章 調査の成果

第1節 1区の調査

第1項 概要

1区は、旧正強学園敷地内東半分、新築建物の影響を受ける場所に、南北長辺52m、東西44mの変形方形で調査区を設定した。調査面積は約1,500m²である。奈良市教育委員会による試掘調査の結果から、北側の一辺22m余りの張り出し部は、遺構の残存が良好であると判断されたため、茶灰色砂上面と地山直上の2面の遺構面を認定し、それぞれ上層を第1遺構面・下層を第2遺構面として調査を行った。北半以外は攪乱が地山面まで達しており、第1遺構面の認定が困難であったため、第2遺構面のみにて調査を行った。1区西側には周辺住宅地の生活排水路が存在しており、除去することができなかつたためこの水路を挟んで別区として調査を実施した。

調査区は平城京復元でいうところの右京一条二坊、北辺二坊に位置し、かねてより注目を集めていた平城京北辺域にあたる。調査前には一条北大路に関連する遺構や、西隆寺に関連する遺構の存在が予想された。

重機掘削は北側の張出部より開始し、造成土・現代耕土および床土とみられる堆積土を除去したのちに、第1遺構面のベース土である茶灰色砂を検出した。張出部以外は、この茶灰色砂が攪乱による影響のために良好に遺存せず、下層の包含層とみられる灰褐色砂、および瓦や土器片を多く含む暗青灰色砂を検出した。この結果を受けて、以後は暗褐色砂および暗灰色砂を検出するレベルで掘削を行った。地表から遺構検出面までの掘削深度は100cm前後を測り、北西から南東に緩やかに傾斜する旧地形を復原することができる。

調査の結果、古墳時代の斜行する溝や土坑、西隆寺建立以前の土坑や井戸、西隆寺建立以降の土坑・溝・柵列、平安時代の掘立柱建物・井戸・土坑など多数の遺構を検出した。条坊関連遺構としては、調査前から検出が期待されていた一条北大路の北側溝・南側溝の両者を検出し、一条北大路の規模を決定することとなった。西隆寺との関連が明確に認められる遺構はみられないが、調査区中央付近では多数の平瓦を投棄した瓦溜まりを検出し、供伴する遺物から10世紀前半には大量の瓦を投棄する事態が生じていたことが明らかとなった。当該期には井戸と建物が検出されており、また、一条北大路も規模を縮小しながら機能していることから、規模を縮小した西隆寺を中心として、その周辺の道路に沿ってに小規模な住居が展開する景観が復元できる。

この他に当地区北半分は北辺坊地域に該当する。調査の結果、北辺坊地域に西隆寺造営に伴って埋められた井戸と考えられる土坑が存在するほか、切り合いを有する柵列などの遺構が存在することが判明した。これまで北辺坊地域の実体はほとんど不明とあってよい状況であり、今回の調査成果は今後の平城京研究に貴重な基礎データを提供することとなった。その評価は第5章において詳述しているので参照されたい。

以下検出遺構について詳述する。

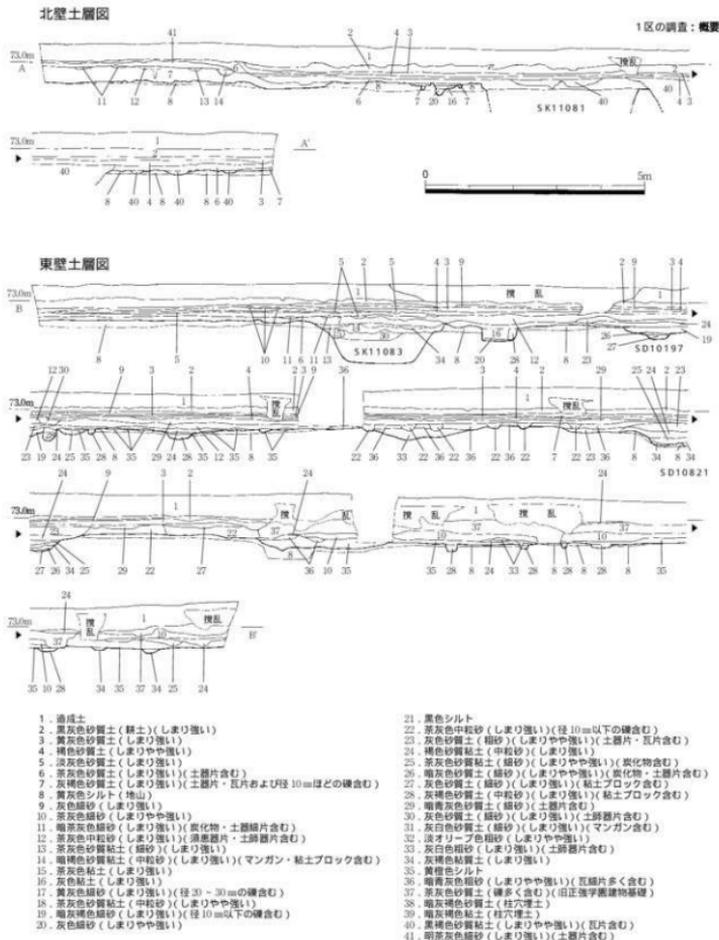


Fig.3 1区壁面土層図(S=1/100)

第2項 古墳時代の遺構・遺物
溝

S D 10323 (Fig.4) 1区南側のP2区からQ6区で検出した東西方向に走る溝である。幅30~40cm、深さ約20cmを測り、断面形状は浅い「U」

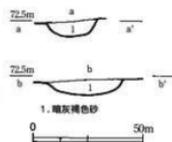


Fig.4 S D 10323
土層断面図(S=1/20)

字形を呈する。東端は消滅するが、西側は調査区外に続く。満心方位は $W-15^{\circ}0'17''-S$ である。埋土は暗灰褐色砂を主体とする。

SD10711 (Fig. 5) 調査区西端付近のI16からL15区にかけて検出した、南北方向に走る溝である。幅約90cm、深さ約15cmで、断面形懸浅い「U」字形を呈する。埋土は暗灰褐色砂で須恵器・土師器の細片が出土した。北側は調査区外へと続くが、南側は一条北大路南側溝や現代の掘込に切られるため詳細は不明である。満心方位は $S-16^{\circ}45'45''-E$ である。

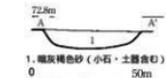


Fig. 5 SD10711土層断面図 (S = 1/20)

SD11082 (Fig. 6) 調査区北側のB3区からF3区で検出した溝である。北側の調査区外より続きF2区付近で西側へ直角に屈曲する。中程で後世の遺構で切られる。西端もSK10196に切られる。幅約30cm、深さ約15cmを測り、断面形状は浅い「U」字形を呈する。埋土は暗灰褐色砂を主体とするが、F3区付近では径1~2cmの礫を含む。出土遺物は古墳時代後期とみられる土師器礫の細片がある。南北方向満心方位は $S-15^{\circ}34'51''-E$ である。

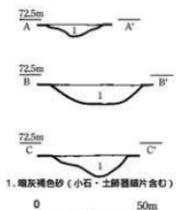
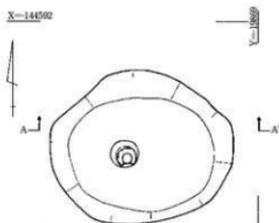


Fig. 6 SD11082土層断面図 (S = 1/20)

SD11082は先述のSD10323およびSD10711と出土遺物および遺構形状に類似性がみられる。Fig. 2の全体図でみると、北側が調査区外のため詳細不明であるが、東西溝間約45mで各溝共に約15°偏向し規則的に並ぶことから、何らかの規格性をもつ溝である可能性がある。また、後述するSK11096やSK11119との関係も含め、今後の課題となる遺構である。

土坑

SK10340 調査区南側P・Q3区で検出した、径約90cm、深さ約100cmを測り円形を呈する土坑である。埋土は2層で、上層は瓦片や土師器片を含む暗灰褐色砂、下層は黄褐色の粘土ブロックを含む暗灰褐色砂である。下層から須恵器杯蓋が出土した。



SK10581 調査区南側P8区で検出した、長軸約100cm短軸80cm、深さ約60cmを測る楕円形を呈する土坑である。埋土は暗灰褐色砂で、古式土師器壺、甕、高杯などが出土した。

SK10581出土遺物 (Fig.10) 出土遺物のうち古式土師器高杯(1)について報告する。

古式土師器壺 1は脚部径11.5cmを測り、内面ナデ調整、裾部ヘラケズリ、外面ナデのちヘラミカキを施す。胎土は淡褐色で長石・雲母をやや多く含む。

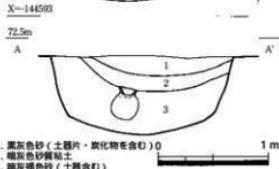


Fig. 7 SK10581平面図・土層断面図 (S = 1/40)

SK10858 (Fig. 7) 調査区北側のE4区で検出した径約70cm、深さ約60cmを測り円形を呈する土坑である。埋土は3層で、上層より黒灰色砂、暗灰色砂質粘土、暗灰褐色砂である。

暗灰褐色砂層から古式土師器などが出土した。

S K 10858出土遺物 (Fig.10) 出土遺物のうち古式土師器壺 (3)・古式土師器甕 (4) について報告する。

古式土師器壺 3は直口壺である。口径11.8cmを測り、直線的に開く口縁部と球形の体部を有する。内面ユビオサエのち板状工具によるナデ調整を、外面ユビオサエのち体部下半をヘラケズリする。

古式土師器甕 4は複元口径15.0cmを測り、口縁端部を内側に折り返す。内面ヘラケズリ、外面横方向のハゲ調整を施す。肩部には棒状工具による波状の線刻を有する。胎土は淡褐色で長石粒をやや多く含む。

これらの遺物群は布留3もしくは4式のものである。

S K 11094 調査区北側F3区で検出した、長軸136cm、短軸113cm、深さ62cmを測り不成形な楕円形を呈する土坑である。埋土は2層で、上層が黄灰粘土ブロックを含む暗灰褐色砂、下層が暗灰色砂である。暗灰褐色砂層から古式土師器高杯や甕が出土した。

S K 11094出土遺物 (Fig.10) 出土遺物のうち古式土師器甕 (2) について報告する。

古式土師器甕 2は口径11.9cmを測り、球形の体部を有する。内面ユビオサエ、外面縦方向のハゲ

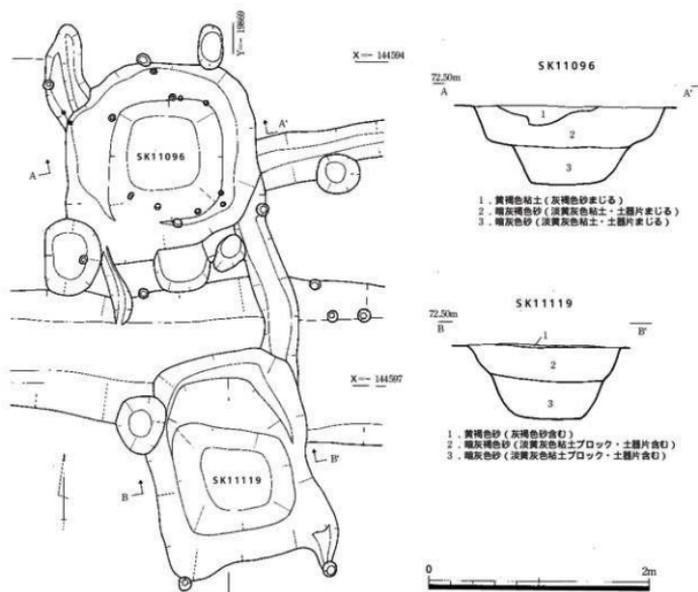


Fig.8 S K 11096・11119平面図・土層断面図 (S = 1/40)

調整を施す。胎土は暗褐色で雲母を多量に含む。

S K 11096 (Fig. 8) 調査区北側の E 3 - 4 区で検出した一辺約180cm、深さ約70cmを測り、隅丸方形を呈する土坑である。埋土は3層で、黄褐色粘土、淡黄灰色粘土ブロックを含む暗灰褐色砂、淡黄灰色粘土ブロックを含む暗灰褐色砂である。遺物は下層2層から古式土師器の壺・甕が出土した。S K 11096はS D 11082を介して、S K 11119と連結しており、両者の間には有機的な関係が想定できる。

S K 11096出土遺物 (Fig. 10) 出土遺物のうち古式土師器の壺 (7・8) について報告する。

古式土師器壺 7は直口壺である。復元口径18.4cmを測り外面および口縁部内面をナデ調整、体部内面ヘラケズリを施す。胎土は暗褐色で雲母を多く含む。8は短頸壺である。外面縦方向のハケをナデ消し、内面ナデ調整を施す。胎土は淡褐色で長石・赤色酸化土粒を多量に含む。

S K 11108 (Fig. 9) J 2区S F 10020一条北大路路面上で検出した径約100cmの円形を呈する土坑である。S K 11109を切り、埋土は4層で、上より灰褐色砂、炭化物混じる灰褐色砂、淡黄灰色粘土ブロックを含む灰褐色砂、黒灰色砂で、最下層から須恵器や土師器の細片、埴輪片が出土した。

S K 11108出土遺物 (Fig. 10) 出土遺物のうち形象埴輪 (9) について報告する。

形象埴輪 9は不明形象埴輪片である。内面板状工具によるナデ調整、外面縦方向のハケ調整ののち低い突帯を貼り付ける。全体像等は不明であるが、古墳時代後期に位置づけられよう。胎土は淡褐色を呈し、長石粒を少量含む。

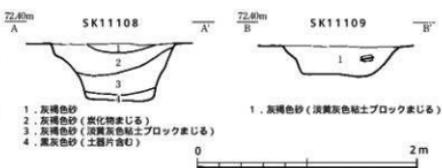


Fig. 9 S K 11108・11109土層断面図 (S = 1/40)

S K 11109 (Fig. 9) J 2区で検出した長軸約140cm、短軸約110cmを測り楕円形を呈する土坑である。S K 11108に切られる。埋土は淡黄灰色粘土ブロックを含む灰褐色砂を主体とする。埋土内より6世紀半ばに相当する杯身および杯蓋が出土した。

S K 11109出土遺物 (Fig. 10) 出土遺物のうち須恵器杯蓋 (5)・須恵器杯身 (6) について報告する。

須恵器杯蓋 5は復元口径15.4cm、器高4.0cmを測り、平坦な天井部と直立する口縁部を有する。天井部外面は2/3をヘラケズリする。天井部ヘラケリの際の失敗により孔が開いたと思われる。天井部内面には補修用粘土が充填される。胎土は灰色で黒色粒子を多く含む。

須恵器杯身 6は口径12.6cm、器高5.5cm、受け口径15.7cmを測る。口縁部には段を持たず、底部外面1/2をヘラケズリする。胎土は灰色で長石粒と黒色粒子を多く含む。

これらの遺物はT K 10窯式に該当する。

S K 11119 (Fig. 8) G 3 - 4 区で検出した長軸約180cm、短軸約140cm、深さ約70cmを測り、隅丸方形を呈する土坑である。S D 10197 (一条北大路北側溝) に切られる。埋土は3層で上より黄褐色砂、淡黄灰色粘土ブロックを含む暗灰褐色砂、淡黄灰色粘土ブロックを含む暗灰褐色砂である。遺物の出土はみられない。

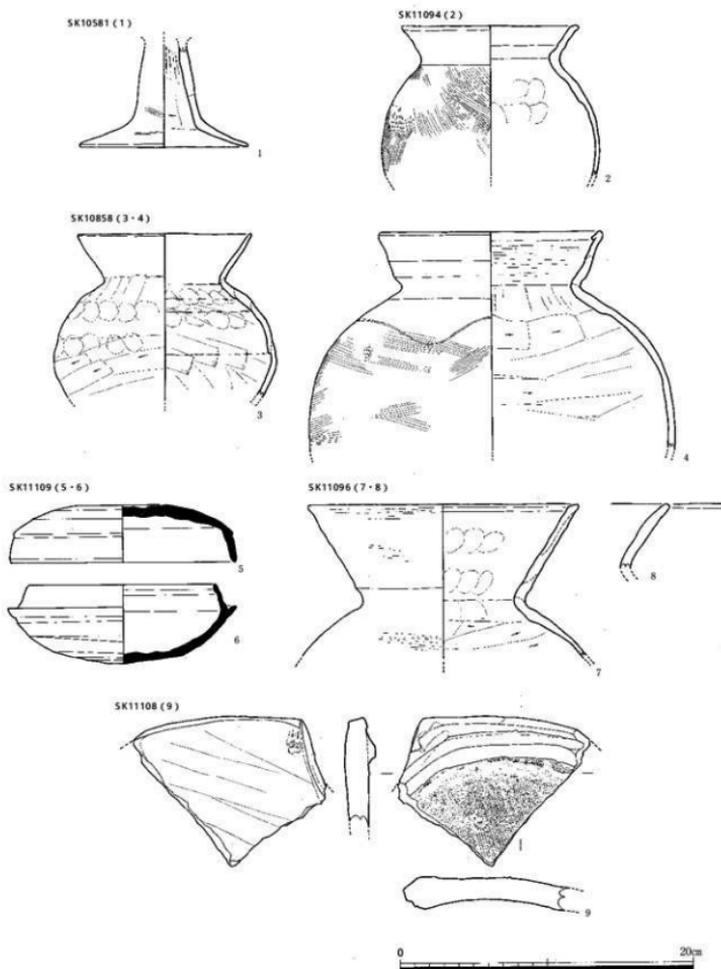


Fig.10 古墳時代の土坑出土遺物 (S = 1/3)

流路

S R 10369 調査区中央西側のI10・11区からO11区にかけて検出した、平城京造営以前の自然流路である。幅150cm～220cm、深さ約20cmを測り、底部形状は一定ではない。埋土は灰色砂を主体とし、上面は赤褐色砂が堆積する。南端は平城京造営以後の遺構であるSD10371やSK10420に切られる。

SR10912 I7区からK3区にて検出した自然流路である。東南方向に流れSD10821(一条北大路南側溝)に切られる。埋土内より石鏝が出土した。

S R 10912出土遺物(Fig.11) 出土遺物のうち石鏝について報告する。
石鏝は全体に丁寧な押圧剥離を施し、体部に素材面を残さない。基部の凹みは一撃の剥離で作れ出す。腹面側から背面側、さらに腹面側の一部の順に調整を施す。完形で、最大長2.65cm、最大幅1.6cm、最大厚0.4cm、重量1.1gを測り、石材はサヌカイトである。

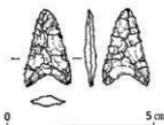


Fig.11 S R 10912出土遺物 (S = 2/3)

第3項 奈良時代の遺構・遺物

条坊関係遺構・遺物

SD10821(一条北大路南側溝)(Fig.12・13) L1～16区にかけて検出した、調査区を東西方向に横切る溝である。南北方向の自然流路SR10369を境に東側は幅80～100cm、深さ20cm～60cmを測り、底部

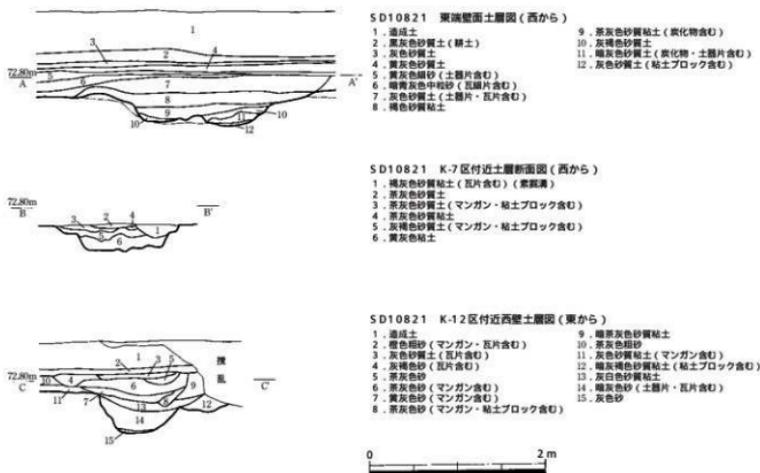


Fig.12 SD10821土層断面図(S = 1/50)

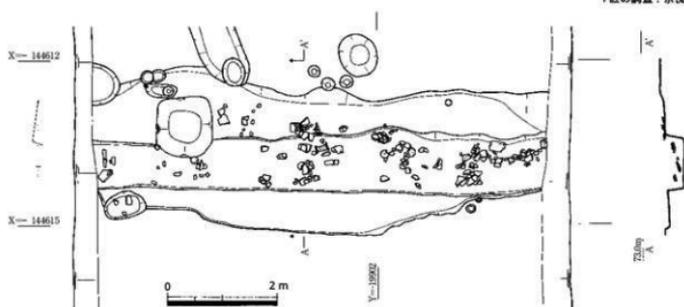


Fig.13 S D10821西側遺物出土状況図 (S = 1/80)

の起伏が著しく、西側は幅約100cm、深さ約50cmを測り、底部形状が一定である。埋土は概ね3層で、上より灰褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、灰色細砂が滞積する。溝の溝心座標はX = -144,613.570、Y = -19,881.000を測り、溝心方向はほぼ座標西を指向する。

遺物は8世紀後半の土器類が、東端付近と西側に集中して出土した。特に西側のL14～16区では溝の北側から遺物を投棄した状況がみられる。東端付近は土坑(S K11116)に切れ、最上面はS X10901(瓦溜り)が存在する。これら上層遺構からは10世紀前半頃の遺物が出土しており、この頃には溝としての機能を喪失していたと考えられる。

S D10821出土遺物 (Fig.14・15) 出土遺物のうち土師器皿(1・3・5)・土師器杯(4・6・8)・土師器碗(9・12)・土師器壺(13)・土師器高杯(14)・製塩土器(15)・土師器甕(16～20)・須恵器蓋(21～24)・須恵器皿(25・26)・須恵器杯(27～32)・須恵器甕(33)・漆附着土器(34)・須恵器横瓶(35)・須恵器平瓶(36)・軒平瓦(37)について報告する。

土師器皿 1は皿Cである。口径9.7cm、器高1.55cmを測り、口縁端部を僅かに外反させる。内外表面劣化の為調整等不明である。胎土は橙褐色で、赤色酸化土粒を少量含む。2～5はいずれも皿Aである。2は外面口縁部直下まで、3は底部外面のみそれぞれケズリを施す。5は内外表面劣化のため調整等不明である。2は口径15.4cm、器高2.25cm、3は復元口径10.0cm、器高2.45cm、5は復元口径21.1cm、器高2.65cmを測り、胎土は2が橙褐色で精良、3は暗褐色で雲母を少量含み、5は淡褐色で精良である。

土師器杯 4・7・8は杯Aである。4は復元口径17.8cm、器高3.6cm、内外面ナデ調整のち底部外面をヘラケズリする。胎土は淡褐色で精良である。7は口径18.1cm、器高4.7cmを測り、体部外面をヘラケズリのち横方向のヘラミガキを施す。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を多く含む。8は口径18.3cm、器高4.4cmを測り、外面口縁部までヘラケズリを施す。胎土は橙褐色で精良である。8は底部外面に墨書有する。「御」の可能性もあるが判断困難である。6は杯Bである。復元高台径11.9cmを測り、外面僅かにヘラミガキの痕跡が残る。胎土は暗褐色で雲母を多く含む。

土師器碗 いずれも碗Aである。9は復元口径9.6cm、器高2.9cmを測り、表面劣化の為調整等は不明である。10は口径12.4cm、器高3.65cmを測り、外面底部付近をヘラケズリしたのち体部外面を分割ミガキする。11は口径12.4cm、器高3.3cmを測り、外面僅かにヘラミガキの痕跡が残る。12は復元口径13.8cm、器高4.0cmを測り、外面僅かにヘラミガキの痕跡が残る。胎土はいずれも橙褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

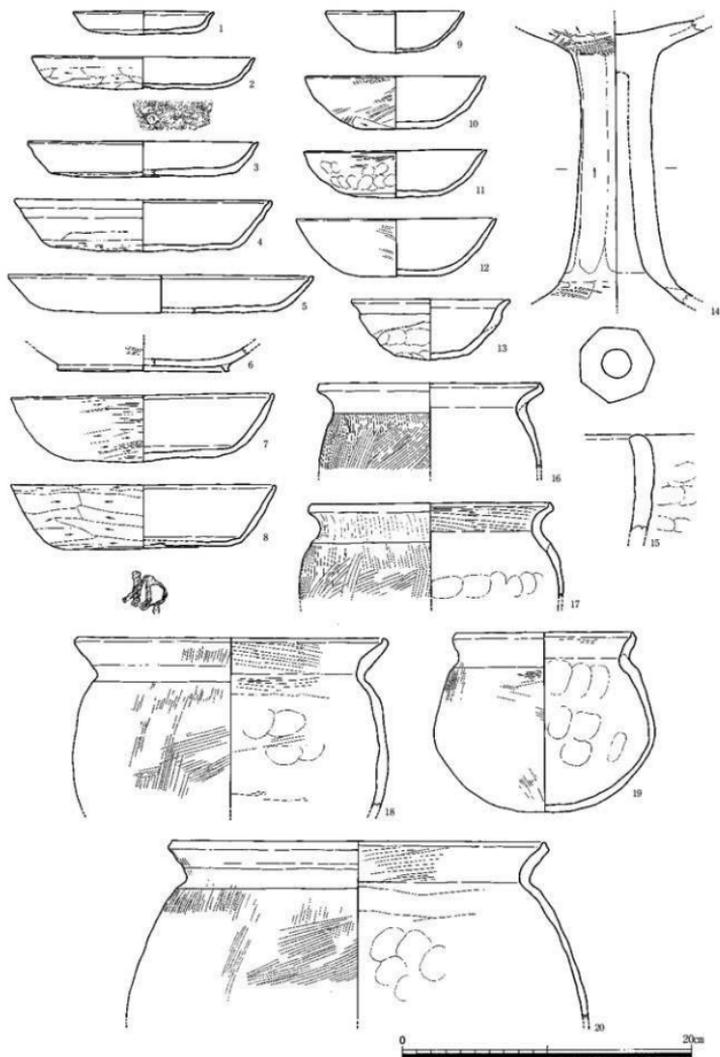


Fig.14 S D10821出土遺物(1)(S = 1/3)

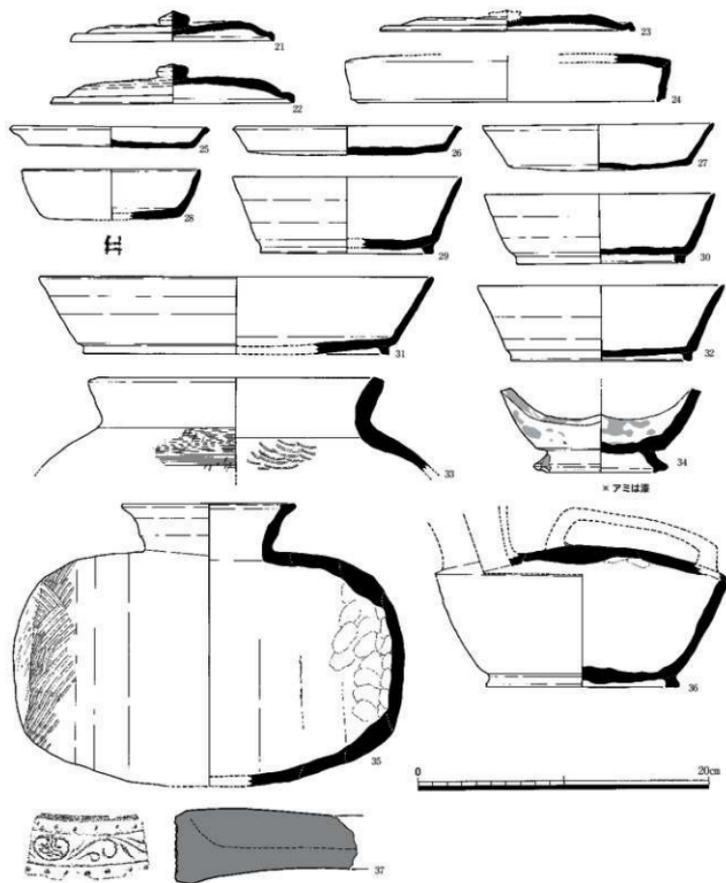


Fig.15 SD10821出土遺物(2)(S = 1/3)

土師器壺 13は壺Bである。復元口径10.9cm、器高4.2cmを測り、内外面ユビオサエで成形する。胎土は褐色でチャートと長石粒を少量含む。

土師器高杯 14は脚部のみ残存する。7面に面取りを行い、杯部、脚底部には分割ミガキの痕跡が残る。胎土は橙褐色で精良である。

製塩土器 15は僅かに内湾する口縁部を有し、内面ナデ、外面ユビオサエで調整する。胎土は橙褐色で長石粒をやや多く含む。

土師器椀 16-20はいずれも椀Aである。いずれも内面オサエ調整、外面縦方向ののち肩部以下を右上がりのハケ調整を施す。16は復元口径15.2cm、17は口径16.6cm、18は復元口径21.0cm、19は復元口径12.4cm、器高12.5cm、20は復元口径25.8cm、残存高12.3cmを測る。胎土は16が暗橙褐色で赤色酸化土粒を大量に含み、17-19は褐色、20は淡褐色を呈する。

須恵器蓋 21・22・23は杯B蓋、24は壺A蓋である。21は口径13.9cm、器高2.1cm、22は口径16.6cm、器高2.7cm、23は口径17.5cmを測り、いずれも扁平で口縁部の屈曲が強い。胎土はいずれも灰色で、22は黒色粒子を、23は長石粒をそれぞれ多く含む。24は復元口径20.8cmを測り、胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

須恵器皿 25・26はいずれも皿Cである。25は口径13.2cm、器高1.5cm、26は復元口径15.2cm、器高1.95cmを測り、26は外底面を丁寧にナデ調整する。胎土は25が灰色、26が淡灰色を呈し、25には火罨がみられる。

須恵器杯 27・28は杯A、29-32は杯Bである。27は復元口径15.8cm、器高3.15cmを測り、底部外面はヘラキリののち軽いナデ調整を施す。胎土は淡灰色で精良である。28は復元口径12.2cm、器高3.4cmを測り、底部外面はヘラキリののち軽いナデ調整を施す。胎土は灰色で黒色粒子を少量含む。底部外面には「井」の墨書が存在する。29は復元口径15.8cm、器高5.35cm、復元高台径11.9cmを測り、底部外面はヘラキリののち軽いナデ調整を施す。胎土は灰色で長石粒を少量含む。30は口径15.7cm、器高4.95cm、高台径11.5cmを測り、底部外面はヘラキリののち軽いナデ調整を施し、板状の圧痕を有する。胎土は灰色で長石粒を少量含む。31は復元口径27.0cm、器高5.4cm、復元高台径21.0cmを測り、底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。胎土は灰白色で長石粒を少量含む。32は復元口径17.0cm、器高5.25cm、高台径12.4cmを測り、底部外面はヘラキリののち未調整。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

須恵器椀 33は復元口径19.0cmを測り、直立気味に立ち上がり端部を肥厚しておさめる口縁部を有する。内面同心円状圧痕を残し、外面縦方向の平行タタキ調整ののち横方向のカキメを施す。胎土は灰白色で精良である。

漆付着土器 34は須恵器壺Qを転用したものである。漆はあまり厚くなく、破断面にも付着することから容器ではなくパレットとして使用されたものと考えられる。

須恵器横瓶 35は口径12.0cm、器高19.65cm、復元最大径27.0cmを測る。側面外面はタタキをナデ消し、内面には著しいユビオサエを施す。胎土は灰色で黒色粒子を少量含む。

須恵器平瓶 36は最大径20.2cm、高台径13.2cmを測り、焼成不良のため胎土内に著しい気泡が存在する。胎土は灰色で黒色粒子をやや多く含む。口縁部および把手は意図的に打ち欠いた可能性もある。

軒平瓦 37は中心飾りが花頭形で、均整唐草文を持つ軒平瓦である。外区は珠文帯で6667C型式のものである。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

これらの遺物群は南部I期古段階の様相を持ち、8世紀後半に相当する。

S D 10197 (一条北大路北側溝)(Fig.16) 調査区北側、F 1-7区で検出した東西方向に走る溝である。幅100-150cm、深さは大半の部分が約15cmであるが、調査区東端付近では段を持って深くなり、約23cmを測る。埋土は概ね2層で暗灰褐色砂と粘土混じりの灰色砂質土を主体とする。満心座標はX=-144,596.200、Y=-19,872.000を測り、満心方位はW-1°12'16"-Nである。埋土内からは8世紀後半頃



Fig.16 S D 10197土層断面図(S = 1/50)

の須恵器片・土師器片・黒色A類碗片などが出土した。

S D 10197出土遺物(Fig.17) 出土遺物のうち土師器皿(1)・土師器杯(2・3)・土師器甕(4)・須恵器鉢(5)・須恵器蓋(6)・須恵器杯(7~9)・須恵器壺(10)・須恵器盤(11)について報告する。

土師器皿 1は皿Aである。復元口径21.8cm、器高2.15cmを測り、口縁端部を玉縁に仕上げ上げる。内外面ナデ調整を施し、胎土は褐色で長石粒を少量含む。

土師器杯 2・3は共に杯Bである。2は復元口径26.6cm、器高9.4cm、復元高台径14.6cmを測り、体部外面をヘラケズりする。3は復元口径27.4cmを測り、内面ナデ調整、体部外面をヘラケズりする。胎土はともに橙褐色で精良である。

土師器甕 4は甕Aである。復元口径18.5cmを測り、内面オサエを施すが、表面劣化のため調整等は不明である。胎土は褐色で長石粒を少量含む。

須恵器鉢 5は鉢Dである。復元口径23.4cmを測り、胎土は灰色で径4mm前後の長石粒を少量含む。

須恵器蓋 6は杯B蓋である。復元口径20.9cmを測り、口縁部の屈曲は比較的緩やかである。胎土は淡灰色で長石粒を少量含む。

須恵器杯 いずれも杯Bである。7は復元口径10.6cm、器高3.75cm、復元高台径8.0cmを測り、底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。胎土は灰色で精良である。8は復元口径14.0cm、器高4.6cm、復元高台径8.8cmを測り、底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。9は復元高台径12.0cmを測り、底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。胎土は灰色で精良である。

須恵器壺 10は壺Aである。底径10.9cm、胴部最大径20.0cmを測る。底部外面はヘラキリののちナデ調整を施し、「×」のヘラ記号を有する。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

須恵器盤 11は盤Aである。復元口径44.2cm、器高12.3cm、復元底径20.8cmを測る。直線的な体部と、端部に面を持つ口縁部を有し、内面ヨコナデ、外面ヨコナデののち下半をヘラケズりする。ヘラケズりは底部外面に及び、胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

これらの遺物群は南部1期古段階に相当し、8世紀後半の年代が考えられる。

S F 10020(一条北大路) 調査区のほぼ中央部で検出した、S D 10197を北側溝、S D 10821を南側溝とする東西方向の大路である。南北側溝間距離は17.2~17.8mを測り、道路心座標はX = - 144,605.000、Y = - 19,881.000を測る。10世紀代にはS D 10230を北側溝として、南北側溝間距離13~13.6mの規模に縮小していたと考えられる。路面上には路面整地土と考えられる茶灰色砂、暗青灰色砂が存在し、特

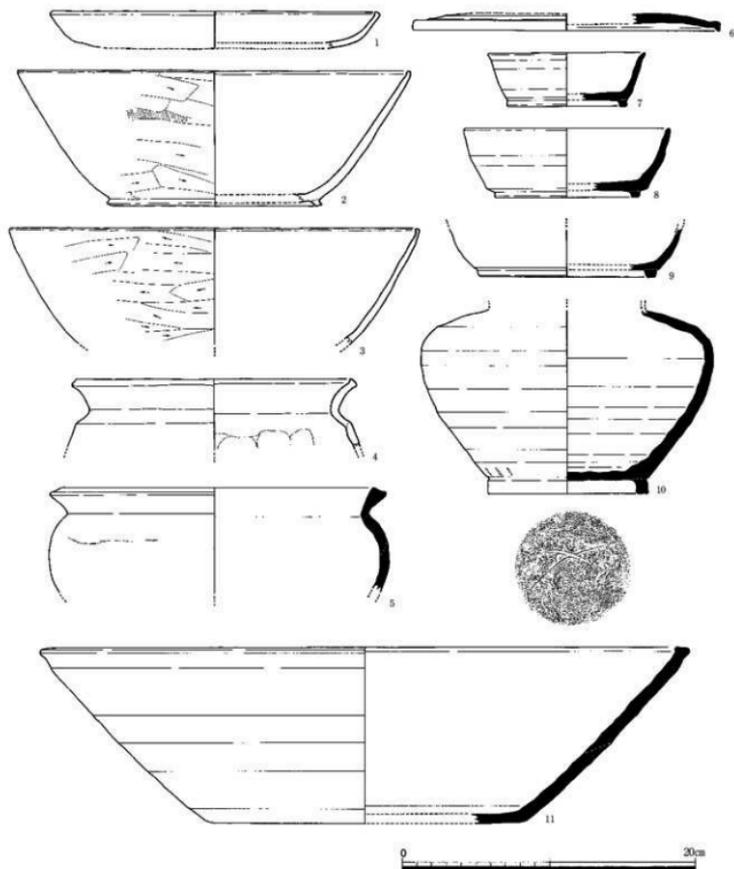


Fig.17 S D10197出土遺物 (S = 1/3)

にI～L区の1～9区付近には瓦小片や土器片などを多く含む厚さ10cmほどの暗青灰色粗砂が存在する。道路側溝埋没後も12世紀前半頃まで道路機能が維持されていたと考えられる。

S F 10020出土遺物 (Fig.18)

茶灰色砂出土遺物 出土遺物のうち須恵器襷(1)について報告する。

須恵器襷 1は東播系須恵器襷である。内面オサエ、外面タタキ調整を施し、口縁部は上面にナデに

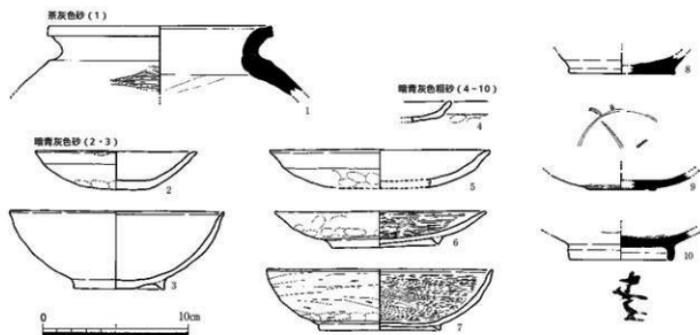


Fig.18 SF10020出土遺物 (S = 1/3)

よる窪みを有する。胎土は灰色で黒色粒子をやや多く含む。

暗青灰色砂出土遺物 出土遺物のうち土師器皿(2) 瓦器椀(3)について報告する。

土師器皿 2は口径11.1cm、器高2.7cmを測り、口縁端部はナデにより僅かに外反する。口縁部には煤が付着する。胎土は白色で長石粒を少量含む。

瓦器椀 3は口径14.7cm、器高5.4cm、高台径6.3cmを測る。表面劣化のため内外面調整等は不明である。胎土は灰白色で精良である。Ⅱ段階A型式のものと考えられる。

これらの遺物は3の瓦器椀の型式、土師器皿の口縁部形態などから12世紀前半の年代が想定できる。

暗青灰色粗砂出土遺物 出土遺物のうち土師器皿(4・5)、黒色土器皿(6)・黒色土器椀(7)、須恵器椀(8)、白磁皿(9)、灰釉陶器椀(10)について報告する。

土師器皿 4は口縁端部を丸く納める。胎土は暗褐色で比較的精良である。5は復元口径15.0cmを測り、口縁端部をナデにより僅かに外反させる。胎土は淡褐色で長石粒をやや多く含む。

黒色土器皿 6は口径14.4cm、器高2.5cm、高台径7.3cmを測るA類皿である。内面見込み部には平行暗文、体部を横方向の密なヘラミガキで調整する。胎土は橙褐色で雲母を多く含む。

黒色土器椀 7は復元口径15.5cm、器高4.3cm、高台径8.2cmを測るA類椀である。体部外面ユビオサエのちへケズリ、内面密な横方向のヘラミガキ内面見込み部を密な平行暗文を施す。胎土は橙褐色で雲母を多量に含む。

須恵器椀 8は円盤状の高台を有する椀である。底部外面を糸切りする。胎土は灰色で精良である。

白磁皿 9は復元底径4.6cmを測る。低い削り出し高台を有し、内面にはヘラ描きで蕉葉文を描くが詳細は不明である。胎土は淡灰色で精良、釉の発色も良好である。Ⅶ-2b類のものである。

灰釉陶器椀 10は復元高台径7.2cmを測り、内面および体部下半までをハケ塗りにより施釉する。高台内には墨書をするが文字種等は不明である。K90窯式のものと考えられる。

これらの遺物は黒色土器や灰釉陶器椀に9世紀後半から10世紀前半のものが見られるが、土師器皿や白磁皿などは12世紀前半の様相を示す。

溝

S D 10342 M 4 ~ 7区で検出した、東西方向に走る浅い溝状遺構である。長さ10m、幅約80cm、深さ約15cmを測り、後世のピットや旧正強学園の攪乱に切られる。埋土は灰褐色砂を主体とする。埋土内より奈良時代の須恵器・土師器・瓦などが出土した。位置的には一条北大路南側築地推定ライン南側に当たることから、築地の雨落ち溝の可能性も考えられる。

S D 10342出土遺物 (Fig.19) 出土遺物のうち土師器皿 (1)、須恵器壺 (2)、丸瓦 (3) について報告する。

土師器皿 1 はやや外反する体部を有し、口縁端部を玉縁に成形する。胎土は橙褐色で精良である。

須恵器壺 2 は短く外半する口縁部を有する。胎土は灰色で黒色粒子を多量に含む。

丸瓦 3 は外面丁寧なナデ調整、内面は布目を有する。円筒を二分割する形態を有し、胎土は灰色で長石粒を多く含む。

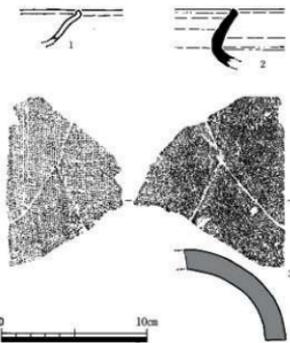


Fig.19 S D 10342出土遺物 (S = 1/3)

S D 10371 (Fig.20) 調査区西側、L - P 11区で検出した南北方向に走る溝である。幅82cm - 100cm、深さ40cm - 45cmを測る。S D 10821から南方向に分岐し、南端は調査区外に続く。O 11区以南はS X 10420に流れ込む。埋土は3層で上より灰褐色中粒砂、暗灰色細砂、暗青灰色細砂である。出土遺物は灰褐色中粒砂からのものが大半で、奈良時代中期 - 後期頃の須恵器片・土師器片が出土した。また、こ

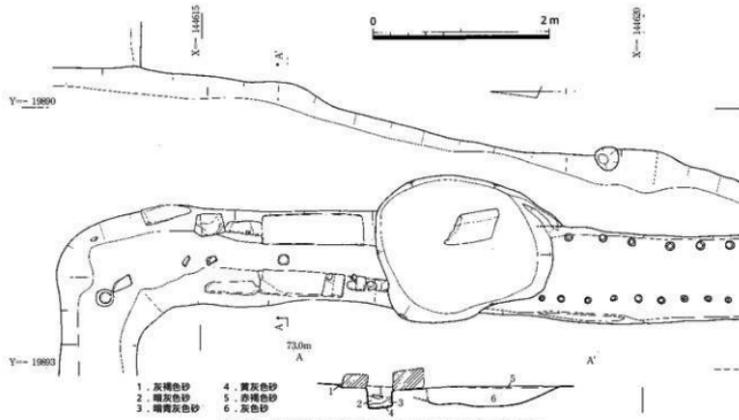


Fig.20 S D 10371平面図・土層断面図 (S = 1/50)

の溝に伴う施設として、L・M11区で溝上端両岸に設置された方柱状凝灰岩や人頭大凝灰岩列石がある。位置的には一条北大路南側築地推定ライン上にあることから、築地の暗渠と考えられる。このほか、溝の底部両側から護岸用の板材を支えていたとみられる杭列を検出した。

土坑

S K 10336 調査区南端R 3区で検出した長軸約100cm、短軸約70cm、深さ約5cmを測る土坑である。上部は後世の削平を受ける。埋土は暗灰褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器杯や土師器甕などが出土した。

S K 10345出土遺物 (Fig.22) 出土遺物のうち須恵器杯A (1) について報告する。

須恵器杯 1は杯Aである。底部外面ヘラキリののち未調整で、細片のため詳細不明である。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

S K 10345 調査区南側Q 6区で検出した径69cm、深さ21cmを測り、S D 10323を切る土坑である。埋土は暗灰褐色砂を主体とし、埋土内からは8世紀半ばの遺物が出土した。

S K 10345出土遺物 (Fig.22) 出土遺物のうち土師器皿A (2) について報告する。

土師器皿 2は皿Aである。復元口径16.7cm、器高2.9cmを測り、口縁端部を玉縁に成形する。体部内面に放射状暗文、底部内面に連結輪状暗文、体部外面に横方向のヘラミガキをそれぞれ施す。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を多く含む。

一点のみで年代を決定する事は困難であるが、おおむね平城Ⅲ期に属するものと考えられ、8世紀半ばの年代が想定できる。

S K 10347 調査区中央南側M 5区で検出した径65cm、深さ40cmを測り、円形を呈する土坑である。埋土は暗灰褐色砂で、ほぼ完存する須恵器杯のほか、土師器・瓦が出土した。

S K 10347出土遺物 (Fig.22) 出土遺物のうち須恵器杯B (3) について報告する。

須恵器杯 3は杯Bである。口径17.4cm、器高5.1cm、高台径13.1cmを測り、底部外面はヘラキリののち未調整である。焼け歪により平面楕円形を呈する。胎土は灰白色で長石粒を多く含む。

S K 10348 調査区中央南側M 6区で検出した径138cm、深さ約20cmを測り、円形を呈する土坑である。埋土は暗灰褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器杯・須恵器壺・須恵器甕・土師器・瓦が出土した。

S K 10348出土遺物 (Fig.22) 出土遺物のうち土師器甕 (4)、須恵器壺 (5)、須恵器杯 (6) について報告する。

土師器甕 4は甕Aである。口縁部を折り返して玉縁状に成形し、頸部外面にはナデにより稜線を形成する。内外面ナデ調整を施し、胎土は橙褐色で長石粒を少量含む。

須恵器壺 5は壺Mである。内外面ヨコナデ調整で胎土は灰色で黒色粒子をやや多く含む。

須恵器杯 6は杯Bである。復元高台径11.8cmを測り、底部外面はヘラキリののち軽くナデ調整する。胎土は灰色で精良である。

S K 10352 調査区中央南側M・N 8区で検出した、一辺136cm、深さ約56cmを測り、隅丸方形を呈する土坑である。S D 10342の延長とみられる小溝を切る。埋土は2層で、上層より暗灰褐色砂、黄灰色粘

土泥じり暗灰褐色砂である。上層から 8 世紀後半の土師器杯片や瓦片が出土した。

S K 10352 出土遺物 (Fig.22) 出土遺物のうち土師器杯 B (7) について報告する。

土師器杯 7 は杯 B である。復元口径 23.0cm、器高 9.5cm、復元高台径 12.0cm を測る。口縁端部を小さく玉縁に成形し、外面比較的密なヘラミガキを施す。胎土は褐色で長石・赤色酸化土粒を少量含む。

共伴遺物が少ないが概ね南都 I 期古段階に属するものと考えられ、8 世紀後半の年代が想定できる。

S K 10355 調査区西半の N 9 区で検出した長軸 161cm、短軸 128cm、深さ 56cm を測り、隅丸方形を呈する土坑である。西側で小溝を切る。埋土は暗灰褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器や土師器・瓦が出土した。

S K 10355 出土遺物 (Fig.22) 出土遺物のうち須恵器蓋 (8)・須恵器皿 (9)・須恵器杯 (10) について報告する。

須恵器蓋 8 は杯 B 蓋である。復元口径 16.1cm を測り、口縁部の屈曲は比較的緩やかである。天井部外面はヘラケズリののち丁寧になで調整する胎土は灰褐色で長石粒を少量含む。

須恵器皿 9 は皿 A である。器高 2.7cm を測り、底部外面ヘラキリののち未調整である。胎土は暗灰色で長石粒を少量含む。

須恵器杯 10 は杯 B である。復元高台径 9.1cm を測り、比較的湾曲した体部を持ち、底部外面はヘラキリののち未調整である。胎土は暗灰色で長石粒を少量含む。

S K 10410 調査区南側 P 1 区で検出した径 40cm、深さ 35cm を測る土坑である。土坑の東半は調査区外に続くため詳細は不明である。埋土は灰褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器襷が出土した。

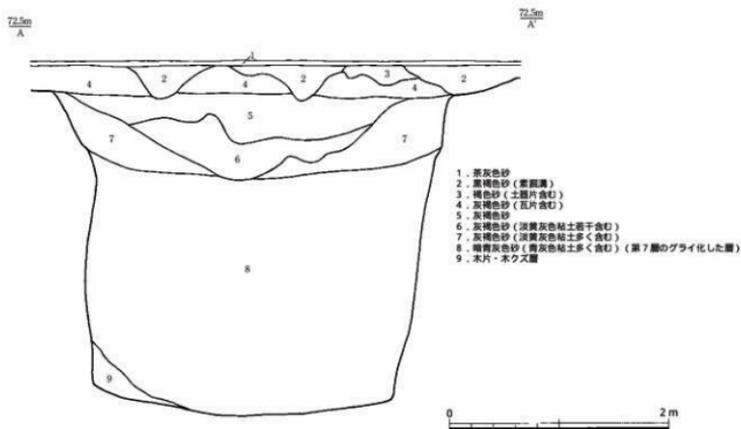


Fig.21 S K 11081土層断面図 (S = 1 A10)

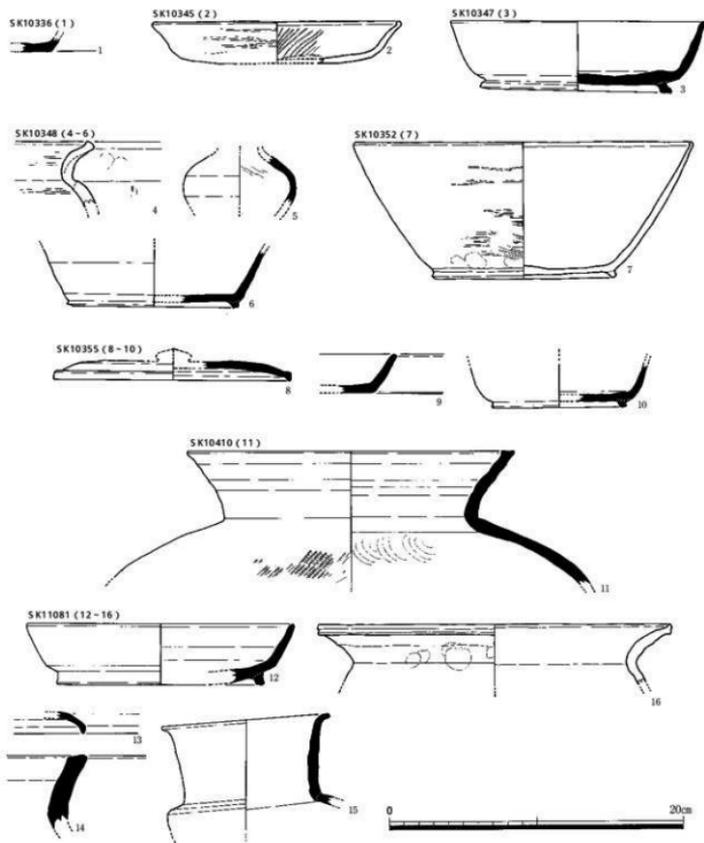


Fig.22 奈良時代土坑出土遺物 (S = 1/3)

SK10410出土遺物 (Fig.22) 出土遺物のうち須恵器甕(11)について報告する。

須恵器甕 11は甕Bである。口径22.2cmを測り、外面擬格子タタキナデ消し、内面同心円圧痕ナデ消しで調整する。胎土は灰白色で長石粒を少量含む。

SK11081 (Fig.21) 調査区北端B 3～4区で検出した最大幅355cm、深さ290cmを測る大型の土坑である。北半は調査区外に位置する。埋土は主に4層で、上層より暗灰褐色砂・淡黄灰色粘土を含む暗灰褐

色砂・淡黄灰色粘土を多く含む暗灰褐色砂・青灰色粘土ブロックを含む暗青灰色砂である。また、西側底部付近には加工木片や削り屑が堆積する。出土遺物の大半は暗青灰色砂からで、8世紀半ばの須恵器片・土師器片・瓦片が出土した。

遺構の規模や堆積状況などからみて、杵材抜き取り後非常に丁寧に埋め戻された井戸であったと考えられる。

S K 11081 出土遺物 (Fig.22) 出土遺物のうち須恵器杯(12)・須恵器蓋(13)・須恵器甕(14)・須恵器平瓶(15) 土師器甕(16) について報告する。

須恵器杯 12は杯Bである。復元口径18.3cm、器高4.2cm、復元高台径14.2cmを測り、底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。胎土は褐色を帯びた灰色で長石粒を多く含む。

須恵器蓋 13は杯B蓋である。口縁部は屈曲せず、端部を垂直気味に折り曲げる。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

須恵器甕 14は甕Bである。破断面は色調のグラデーションを持つサンドイッチ構造を有し、胎土は灰色で長石粒を比較的多く含む。

須恵器平瓶 15は復元口径11.4cmを測る。胎土は淡灰色で黒色粒子を多く含み、口縁部から肩部にかけて自然釉がかかる。

土師器甕 16は口縁部だけの破片である。口縁端部を上方へ引き出し、頸部はユビオサエが顕著である。胎土は淡橙褐色で長石粒を少量含む。

これらの遺物群は土師器が稀少で正確な年代決定が困難であるが、13の須恵器蓋の形状や16の土師器甕の形状から平城Ⅲ期に相当し、8世紀半ばの年代が考えられる。

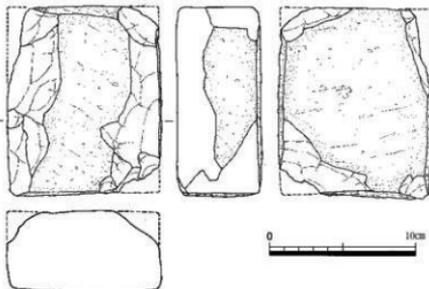


Fig.23 S K 11104出土遺物 (S = 1/3)

S K 11104 調査区北側 F 1・2 で検出した径70cm、深さ14cmを測り、円形を呈する土坑である。埋土は暗灰褐色砂

を主体とし、埋土内より須恵器細片や土師器細片、瓦片のほか、直方体の石製品が出土した。

S K 11104出土遺物 (Fig.23) 出土遺物のうち不明石製品について報告する。

不明石製品 長辺13.3cm、短辺10.6cm、高さ5.8cmの直方体を呈し、表面は被熱のため発泡する。石材は不明である。

柵列

S A 11088 (Fig.24) 調査区北端付近 C・D 1-5 で検出した東西方向の柵列である。各柱間の平均距離は245cmを測り、柵列主軸はW-0°36'43"-Nの方位を有する。調査区内で五間分を確認したが、さらに東側に続く可能性がある。各柱穴は長軸90cm、短軸約70cmを測る長方形のものと、一辺約70cmの正方形のものがある。残存する柱痕跡から径約25cmの柱を使用していたと考えられる。平面および土層断面の観察から柱はすべて抜き取られていたと考えられる。柱掘り方から須恵器片や土師器片が出土した。

S A 11088はC 4区でS A 11089と交差するが、切り合い関係からみて南北方向のS A 11089が先行す

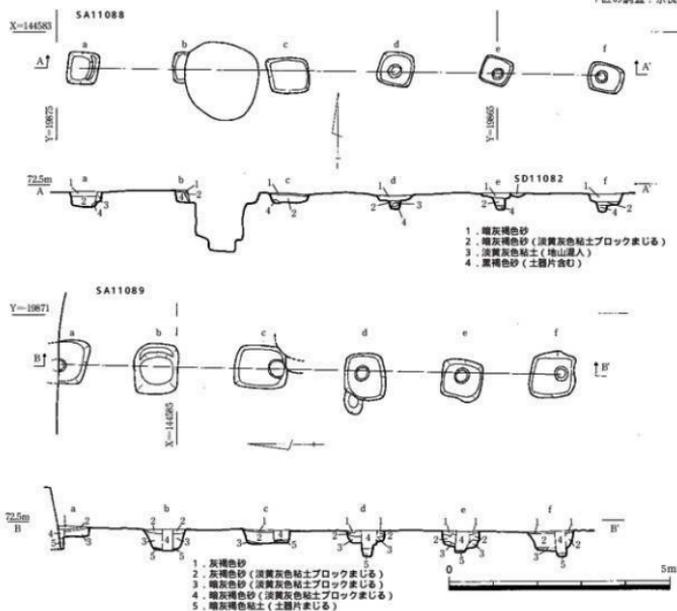


Fig.24 SA11088・11089平面図・土層断面図 (S = 1/100)

る。

S A11088出土遺物 (Fig.25) 出土遺物のうち土師器甕 (1)、須恵器甕 (2) について報告する。いずれも柱抜き取り痕からの出土である。

土師器甕 1は「く」字状に外反する口縁部を有し、内外面ナデ調整を施す。胎土は淡橙褐色で長石粒を少量含む。

須恵器甕 2は甕Bである。断面灰色と褐色のサンドイッチ構造を有し、胎土は灰色で長石粒を少量含む。

S A11089 (Fig.24) 調査区北端付近B-F5区で検出した南北方向の柵列である。柱穴は五間分を検出したが、北端は調査区外に続く可能性がある。各柱間の平均は240cm前後を測り、柵列主軸はN-1°0'56"-Eの方位を有する。各柱穴は長軸98cm、短軸69cmを測る長方形のもと、一辺約100cmを測る正方形のものがある。残存する柱痕跡から25cm前後の柱を使用していたと考えられ

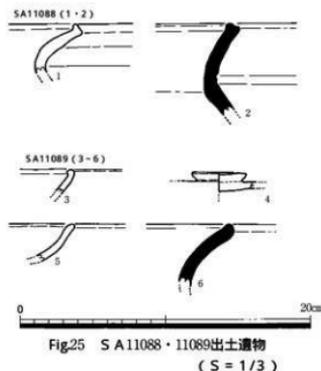


Fig.25 SA11088・11089出土遺物 (S = 1/3)

るが、柱はすべて抜き取られる。遺物は柱抜き取り跡や柱痕跡からで、奈良時代中～後半とみられる須恵器片や土師器片および木片が出土した。特徴ある遺物としては、漆が付着した須恵器壺片がある。S A 11089出土遺物 (Fig.25) 出土遺物のうち土師器皿 (3)・土師器蓋 (4)・土師器椀 (5)・須恵器壺 (6) について報告する。いずれも柱抜き取り痕からの出土である。

土師器皿 3は皿Aである。口縁端部を玉縁に成形し、胎土は橙褐色で精良である。

土師器蓋 4はボタン状掴みを持つものである。胎土は橙褐色で長石粒をやや多く含む。

土師器椀 5は椀Aもしくは椀Dと考えられる。表面劣化のため調整は不明であるが、外面かすかにヘラミガキの痕跡がみられる。胎土は橙褐色で長石粒を僅かに含む。

須恵器壺 6は口縁端部を肥厚しておさめるものである。胎土は淡灰色を呈し、黒色粒子を少量含む。

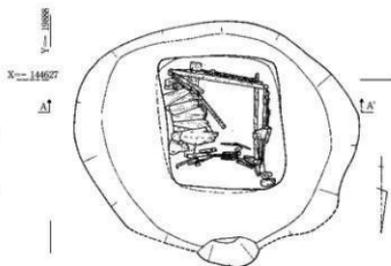
これらの遺物群は3の土師器皿や5の土師器椀の形態が平城Ⅲ期の特徴を有するが、3に暗文がみられないなどやや新しい要素もあり、現状では奈良時代中期～後期としておきたい。

井戸

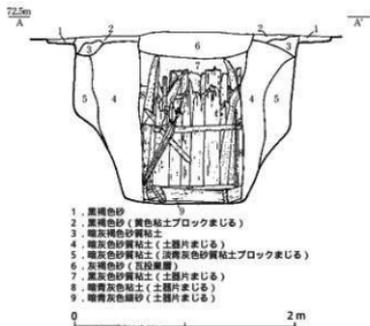
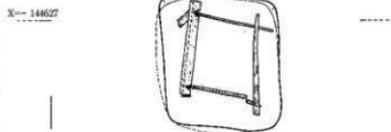
S E 10358 (Fig.26) 調査区西南側P・Q10～11区で検出した井戸である。掘り方は長軸250cm、短軸約205cmの楕円形を呈し、井戸枠は縦板を横柱で補強した形態である。縦板は上部破損していたが、残存長約110cm、幅約20cm、厚み約1cmである。井戸枠最深部には全長約90cm、幅15cm、厚み約2cmの板を4枚組み合わせた井桁を設置する。埋土は概ね4層で、上層から多量の瓦片を含む灰褐色砂・黒灰色粘質土・暗青灰色粘土・暗青灰色細砂である。出土遺物の大半は井戸枠内からで8世紀半ばの様々な器種の須恵器片、土師器片が出土した。

S E 10358出土遺物 (Fig.27・28)

黒灰色砂質粘土 (枠内上層) 出土遺物 出土遺物のうち土師器杯 (1・2・3)・土師器椀 (4)・須恵器蓋 (5～7)・須恵器壺 (8・14・15)・須恵器杯 (9～13) について報告する。



最下層井桁出土状況



1. 黒褐色砂
2. 黒褐色砂 (黄色粘土ブロックまじる)
3. 黒灰色砂質粘土
4. 黒灰色砂質粘土 (土器片まじる)
5. 暗灰色砂質粘土 (淡青灰色砂質粘土ブロックまじる)
6. 灰褐色砂 (瓦片まじる)
7. 黒灰色砂質粘土 (土器片まじる)
8. 暗青灰色粘土 (土器片まじる)
9. 暗青灰色細砂 (土器片まじる)

Fig.26 S E 10358平面図・土層断面図 (S = 1/410)

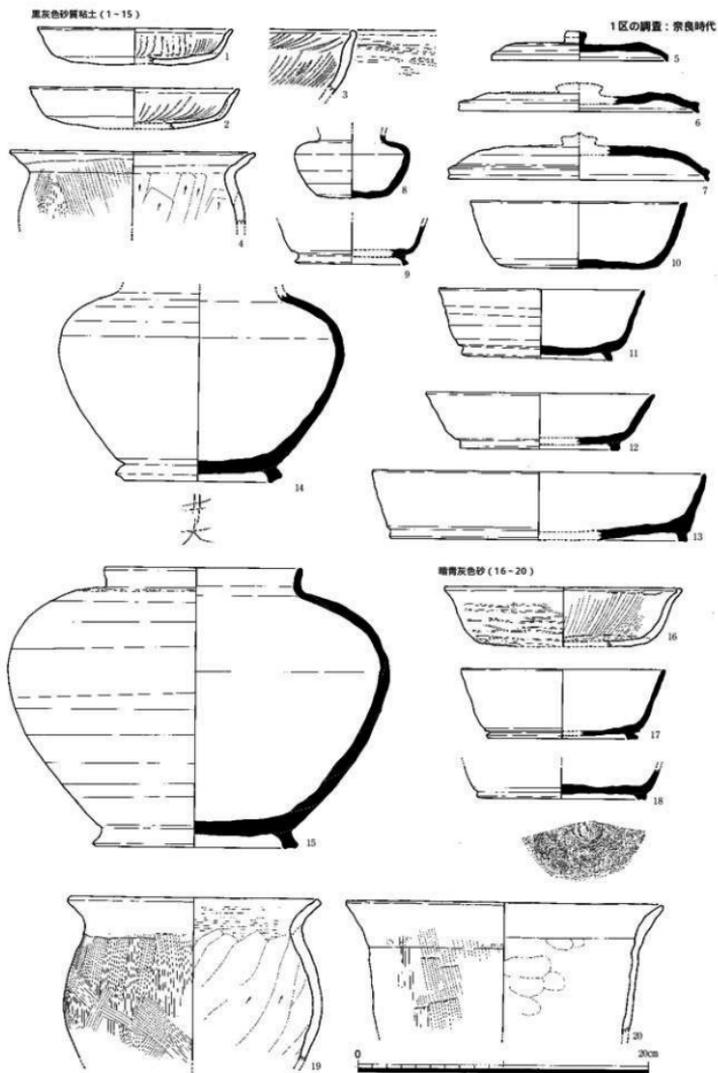


Fig.27 SE 10358出土遺物 (1) (S = 1/3)

土師器杯 いずれも杯Aである。1は復元口径13.4cm、器高2.6cmを測り、内面見込み部に崩れた連結輪状暗文ののち、見込み部から体部まで一体化した放射状暗文を施す。外面底部ユビオサエ、体部ナデ調整を施す。胎土は褐色で微細な長石粒を少量含む。2は復元口径14.4cm、器高2.8cmを測り、内面見込み部に崩れた連結輪状暗文と体部に放射状暗文を施し、底部外面ユビオサエ、体部ナデ調整を施す。胎土は褐色で精良である。3は杯Aである。僅かに外反したのち玉縁に成形する口縁部を有し、内面2段の放射状暗文を、外面横方向のヘラミガキを施す。胎土は褐色で精良である。

土師器椀 4は復元口径10.8cmを測り、口縁端部はナデにより僅かに外反する。内面縦方向のケズリ、外面縦方向のハケ調整を施す。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

須恵器蓋 いずれも杯B蓋で、口縁部の屈曲は弱く比較的器高が高い。5は口径12.2cm、器高2.0cmを測り、天井部にはボタン状の柄がつく。天井部はヘラキリののち4/5をヘラケズリする。6は復元口径16.6cmを測り、天井部外面ヘラキリののちナデ調整を施す。内面は研磨を受け、墨痕を有する。碗への転用が考えられる。7は復元口径18.0cmを測り、天井部2/3程度をヘラケズリする。胎土はいずれも灰色で、5・6が長石粒を、7が黒色粒子を少量含む。

須恵器壺 8は壺Cである。広く開く肩部と短く立ち上がる口縁部を有し、底部外面ヘラキリののち未調整である。胎土は灰色で長石粒を少量含む。14は壺Aである。高台径11.5cm、復元胴部最大径19.7cmを測り、底部外面には「井大」の焼成後線刻を有する。胎土は灰色で精良である。15は壺Aである。復元口径14.5cm、器高19.4cm、高台径13.6cm、胴部最大径26.8cmを測り、胴部上半をヨコナデ、下半を回転ヘラケズリする。底部外面はヘラキリののちナデ調整を施し、肩部には自然釉がかかる。胎土は灰色で長石粒を多く含む。

須恵器杯 9・11-13は杯B、10は杯Aである。9は復元高台径7.8cmを測り、「八」字状に強く張る高台を有する。胎土は灰色で精良である。10は復元口径15.0cm、器高4.6cmを測り、口縁端部を面取りする。底部外面はヘラキリののちヘラケズリする。11は口径14.2cm、器高4.9cm、高台径10.4cmを測り、底部外面はヘラキリののち軽くナデ調整する。胎土は灰色で長石粒少量含む。12は復元口径14.8cm、器高3.9cm、復元高台径11.0cmを測る。底部外面はヘラキリののち未調整である。胎土は灰色で黒色粒子をやや多く含む。13は復元口径23.1cm、器高4.7cm、復元高台径20.6cmを測り、底部外面はヘラキリののち未調整で仕上げ、内面見込み部には僅かに墨痕を有する。胎土は灰白色で精良である。

これらの遺物群は3の土師器杯が平城Ⅱに相当する以外は平城Ⅲに相当し、8世紀半ばの年代が想定できる。

暗青灰色砂(枠内最下層)出土遺物 出土遺物のうち土師器杯(16)、須恵器杯(17・18)、土師器椀(19・20)について報告する。

土師器杯 16は杯Aである。復元口径16.4cm、器高4.1cmを測り口縁端部を玉縁に成形する。内面見込み部に連結輪状暗文、体部内面に放射状暗文を施し、外面には横方向のヘラミガキを施す。底部外面にはヘラケズリを施す。

須恵器杯 いずれも杯Bである。17は復元口径14.0cm、器高4.85cm、復元高台径10.4cmを測る。外側にやや強く張る高台を有し、内面見込み部に墨痕を有する。底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。18は復元高台径11.6cmを測る。外底面には墨痕と「×」のヘラ記号を有する。胎土はいずれも灰色で長石粒をやや多く含む。

土師器椀 19は壺Aである。復元口径17.0cmを測り、口縁部内面横方向のハケののちナデ、体部内面縦方向のヘラケズリを施す。体部外面は縦方向のハケののち左上がりのハケ調整を施す。20は壺もしくは瓶である。復元口径21.8cmを測り、内面ユビオサエ、外面縦方向のハケ調整を施す。

これらの遺物群は16の杯などから平城Ⅱに相当し、8世紀前半の年代が考えられる。

暗灰色砂質粘土（掘り方）出土遺物 出土遺物のうち須恵器蓋（21）土師器蓋（22）・土師器皿（23）・製塩土器（24）について報告する。

須恵器蓋 21は杯B蓋である。復元口径11.0cmを測り、口縁部の屈曲は弱い。胎土は灰色で精良である。

土師器蓋 22は杯B蓋である。復元口径19.6cmを測り内面ナデ調整、外面表面劣化のため調整等不明である。胎土は褐色で精良である。

土師器皿 23は復元口径12.4cmを測り、内面、口縁部外面をナデ調整する。胎土は白色で精良である。

製塩土器 24は復元口径14.4cmを測り、内外面ユビオオサエで成形する。内外面被熱により赤褐色～黒褐色に変色する。胎土は長石・チャートを少量含む。

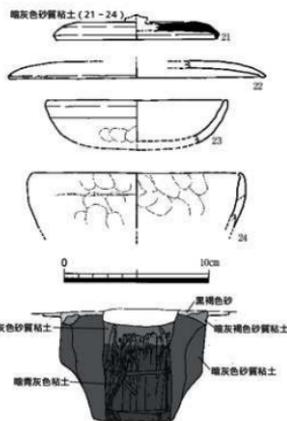


Fig.28 S E 10358出土遺物(2)
(S = 1/3)

その他の遺構

S X 10349 調査区南側N-Q 1～9区で検出した東西方向に伸びる落ち込みである。東側は調査区外に続く。上面は後世のピットや土坑に切られる。埋土は概ね2層で、上層から灰褐色砂と暗灰褐色砂である。埋土内より古式土師器高杯、8世紀半ばの須恵器や土師器が出土した。N・O 2～3区付近は上面をさらに淡黄灰色粘土を含む灰褐色砂が被覆し、人為的な整地の可能性がある。

S X 10349出土遺物 (Fig.29・30)

灰褐色砂出土遺物 出土遺物のうち須恵器杯(1～3)について報告する。

須恵器杯 1・2は杯A、3は杯Bである。1は復元口径14.7cm、器高4.95cmを測り、口縁端部は僅かに外反、底部は若干膨らむ。底部外面は粘土紐巻上げ痕跡をナデ消す。胎土は淡灰色で精良である。2は復元口径16.0cm、器高4.8cmを測り、底部外面はヘラキリののち丁寧ヘラケズりする。内面には火罨がみられ、胎土は灰色で精良である。3は復元口径19.5cm、器高7.35cm、復元高台径13.8cmを測り、器壁はやや厚い。底部外面はヘラキリののちナデ調整を施し、胎土は淡灰色で長石粒を多く含む。

暗灰褐色砂出土遺物 出土遺物のうち土師器蓋(4)、須恵器杯(5)・須恵器壺(6・7)、土師器模(8～10)、埴(11)について報告する。

土師器蓋 4は杯B蓋である。復元口径19.4cmを測り、外面には分割ガキを施す。胎土は橙褐色で精良である。

須恵器杯 5は杯Aである。焼け歪のため平面楕円形を呈する。口径18.4～20.4cm、器高5.4cmを測り、底部と体部の境界付近は丸く仕上げる。底部外面ヘラキリののちヘラケズりを行い、底部はやや上げ底になる。胎土は淡灰色で長石粒を少量含む。

須恵器壺 6は壺Qである。高台径7.75cmを測り、高台接地部は若干層減する。口縁部を欠損するが、破断部分は多方向から打ち欠かれた状況を示し、意図的な打ち欠きが行われた可能性がある。胎土は灰色で長石粒を少量含む。7は壺Aである。口径11.4cm、高台を除く器高10.1cmを測る。体部中央付近には1対の把手の痕跡が残る。把手および高台は意図的に打ち欠かれたものと考えられる。胎土は灰色で

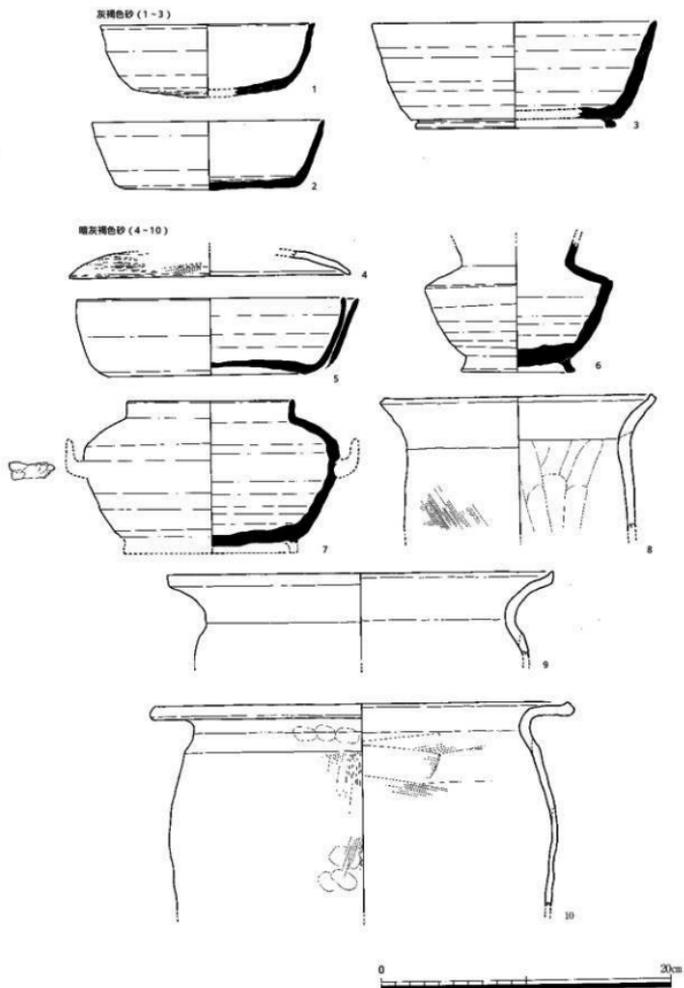


Fig.29 S X10349出土遺物 (1) (S = 1/3)

黒色粒子及び長石粒をやや多く含む。底部に不明確ではあるが「井大」とも読める線刻が存在する。

土師器甕 8・9は甕C、10は甕Aである。8は復元口径18.4cmを測り、外面縦方向のハケ、内面縦方向のナデで調整する。胎土は褐色で赤色酸化土粒を多量に含む。9は復元口径26.6cmを測り表面劣化のため調整等は不明である。胎土は淡褐色で長石粒を多量に含む。10は復元口径29.2cmを測り、口縁部は水平近く折り曲げる。外面オサエのち縦方向のハケ調整、内面横方向の板状工具によるナデ調整を施す。

埴 11は厚さ7.3cmを測る。断面は片側が破損しており長方形か方形かは折り難い。胎土は長石粒を多量に含みやや粗い。

これらの遺物群は1・2・5の須恵器杯が比較的直立する体部を有すること、体部・底部の境界付近をなだらかに成形すること、底部外面のヘラケズリなどの特徴を有する事から、平城Ⅲの様相を有し、8世紀半ばの年代が考えられる。

S P 10205 調査区西壁付近、F 7区で検出した径約40cmを測るピット。建物を形成する柱穴ではなく、その性格については不明である。

S P 10205出土遺物 (Fig.31) 出土遺物のうち土師器皿(1・2)、須恵器鉢(3)・須恵器壺(4)について報告する。

土師器皿 1・2はいずれも皿Aである。1は復元口径20.0cm、器高2.8cmを測り、底部外面をヘラケズりする。胎土は橙褐色で長石粒をやや多く含む。2は復元口径15.8cmを測り、外面全面ヘラケズリを施す。2次焼成を受けており、橙色を呈する。

須恵器鉢 3は鉢Aである。復元口径17.6cmを測り、内面火罨が残る。胎土は灰色で精良である。

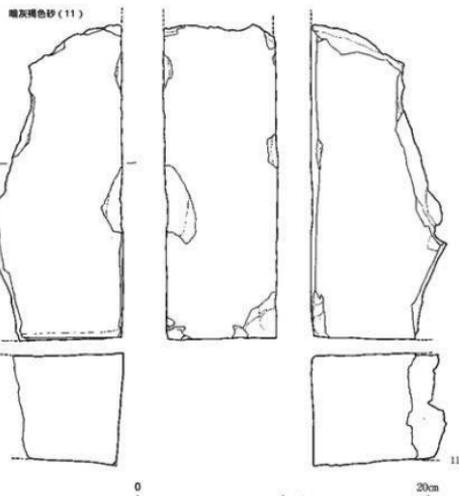


Fig.30 S X 10349出土遺物(2)(S = 1/3)

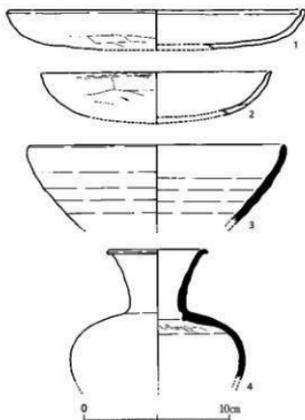


Fig.31 S P 10205出土遺物(S = 1/3)

須恵器壺 4は壺である。口径6.9cmを測り、胎土は灰色で黒色粒子を多く含む。
これらの遺物群は南部Ⅰ期古段階に相当し、8世紀後半の年代が考えられる。

S P 10565 調査区南側O 6区で検出した東西長軸41cm、短軸29cm、深さ約13cmを測り楕円形を呈する
ビットである。埋土は灰褐色砂を主体とし、埋土内より古墳時代の須恵器や奈良時代の土師器が出土し
た。

S P 10565出土遺物 (Fig.32) 出土遺物のうち土師器
杯について報告する。

土師器杯 復元口径22.0cmを測り、口縁端部を僅かに
外反させ、端部内面には僅かに沈線状の窪みを有す
る。内面には放射状の暗文、外面横方向のヘラミガキ
を有する。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を少量含む。



Fig.32 S P 10565出土遺物 (S = 1/3)

第4項 平安時代以降の遺構・遺物

溝

S D 10230 (一条北大路北側溝) 調査区北側H 1 - 7区で検出した東西方向に走る溝である。溝幅45

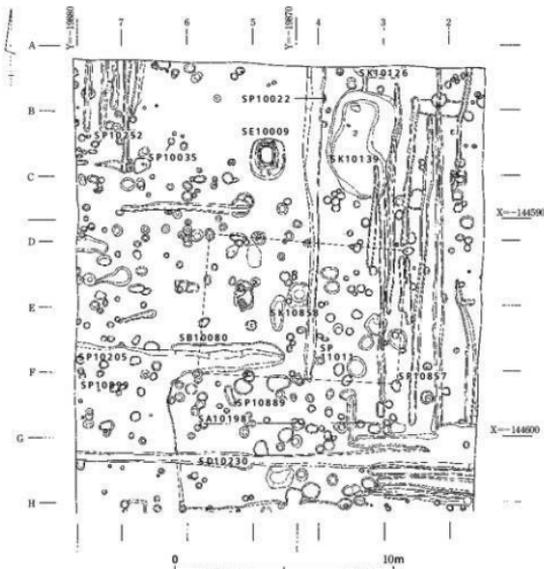


Fig.33 1区第1遺構面全体図 (S = 1/200)

～80cm、深さ10～32cmを測り、断面形態「U」字形を呈する。東西両端は調査区外へ延びる。溝底部は西から東へと傾斜する。埋土は暗灰褐色砂質土を主体とし、埋土内より9世紀後半～10世紀初頭の須恵器片や灰釉陶器片・土師器片・黒色土器片などが出土した。S F 10020（一条北大路）の北側に位置し、東西に続く状況などからみて、道路幅が狭められた際の一条北大路北側溝と考えられる。溝心方向はほぼ座標西を指向する。

S D 10230出土遺物 (Fig.34) 出土遺物のうち土師器皿(1)、黒色土器鉢(2)、灰釉陶器椀(3)、須恵器円面硯(4)について報告する。

土師器皿 1は口縁端部をわずかに玉縁に成形する。内面ナデ調整、外面ユビオサエを施し、胎土は橙褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

黒色土器鉢 2は直立気味の体部と短く折り返す口縁部を有する。内面ヘラミガキを施す。残存部が少なく、A類であるかB類であるかは折り難い。胎土は雲母を多く含む。

灰釉陶器椀 3は復元口径15.6cmを測り、外反する口縁部を有する。軸は大半が剥離し不明瞭である。K90窯式のものである。

須恵器円面硯 4は復元口径13.0cmを測り、脚部は多孔透かしである。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

これらの遺物群は1の土師器皿や3の灰釉陶器から9世紀後半～10世紀初頭の年代が考えられる。

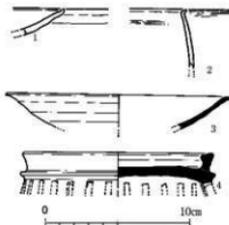


Fig.34 S D 10230出土遺物
(S = 1/3)

土坑

S K 10139 調査区北端付近B-D 2～3区で検出した長軸510cm、短軸268cmを測り、楕円形を呈する大型の土坑である。底部は東西側と北側に比高差10cmの段差を設け、北側底部には長さ約25cm、幅約15cm、厚み約10cm程度の自然石を水平に設置する。埋土は2層で、上層から黒褐色砂質土・暗黒褐色粘質土である。

遺物は主に上層から10世紀前半の須恵器片・土師器片・緑釉陶器細片・灰釉陶器片・黒色土器・瓦片などが出土した。

S K 10139出土遺物 (Fig.35) 出土遺物のうち土師器杯(1・2・4・5)・土師器皿(3)、黒色土器椀(6・7)・黒色土器甕(8)・黒色土器鉢(9)について報告する。

土師器杯 1・2・4・5はいずれも内面ナデ調整、外面ユビオサエで調整し、1は復元口径13.8cm、器高2.4cm、2は復元口径15.3cm、器高2.9cm、4は復元口径13.2cm、器高3.3cm、5は復元口径16.6cm、器高3.35cmを測る。胎土は1・2・4が褐色、5が橙褐色で、いずれも長石粒を少量含む。

土師器皿 3は内面ナデ調整、外面ユビオサエで調整し、復元口径15.6cm、器高2.5cmを測る。胎土は褐色で、長石粒を多く含む。

黒色土器椀 6・7はいずれもA類椀である。6は復元高台径9.2cmを測り、外面ヘラケズリのち密なヘラミガキ、内面横方向の密なヘラミガキを施す。胎土は橙褐色で長石粒をやや多く含む。7は復元口径16.4cm、器高4.1cm、復元高台径8.0cmを測る。口縁部僅かに外反し、内面ナデ調整のちヘラミガキ、外面ユビオサエを施す。体部内面には花卉状ミガキの崩れたものを施す。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を多く含む。

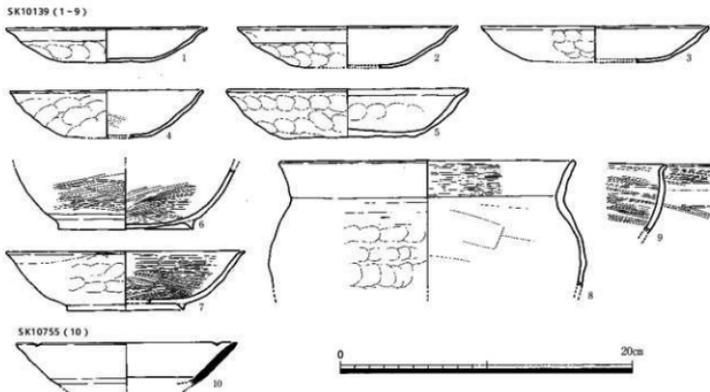


Fig.35 S K10139・10755出土遺物 (S = 1/3)

黒色土器鉢 8は復元口径20.0cmを測り、内面板状工具によるナデ調整ののち口縁部付近を横方向のヘラミガキ、外面コビオサエを施す。胎土は暗褐色で雲母を少量含む。

黒色土器鉢 9は口縁端部を短く折り曲げるものである。内外面密なヘラミガキを施し、胎土は淡褐色で雲母をやや多く含む。

これらの遺物群は土師器皿の器厚、調整、黒色土器の形態などから南都Ⅱ期新段階の様相を持ち、10世紀前半の年代が考えられる。

S K10755 調査区西側K・L15区で検出した、径50cm、深さ約30cmを測り、円形を呈する土坑である。埋土は灰褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器・土師器・黒色土器などと共に9世紀頃とみられる越州窯青磁皿が出土した。

S K10755出土遺物 (Fig.35) 出土遺物のうち越州窯青磁皿 (10) について報告する。

越州窯青磁皿 10は復元口径15.0cmを測り口縁部に輪花状の切り込みを有する。内面には底部付近に一条の沈線を施し、釉はオリーブ色を呈する。皿Ⅰ-1b類のものである。

建物・櫛列

S B10080 (Fig.36) 調査区北側D-F2-5区で検出した建物跡である。桁行き四間、梁行き三間の東西棟で、各柱間の平均距離は桁行き226cm、梁行き218cmを測る。南側桁行き910cm、西側桁行き635cmを測り、建物桁行軸はW-5°18'26"-Nである。東側は素掘溝に切られる。

各柱穴は径25-59cmを測る円形を呈し、深さは一定でない。柱穴の根固めとして、柱穴i・j・m・pには石、rには平瓦片、qには木片を設置する。柱抜き取り痕から9-10世紀の土器が出土している。S B10080出土遺物 (Fig.37) 出土遺物のうち緑釉陶器について報告する。

緑釉陶器 柱穴nからの出土である。復元底径6.2cmを測り、蛇の目状削り出し高台を有し、内面ヘラミガキがみられる。高台接地面まで施釉し、内面には重ね焼きの痕跡が残る。畿内産のものである。

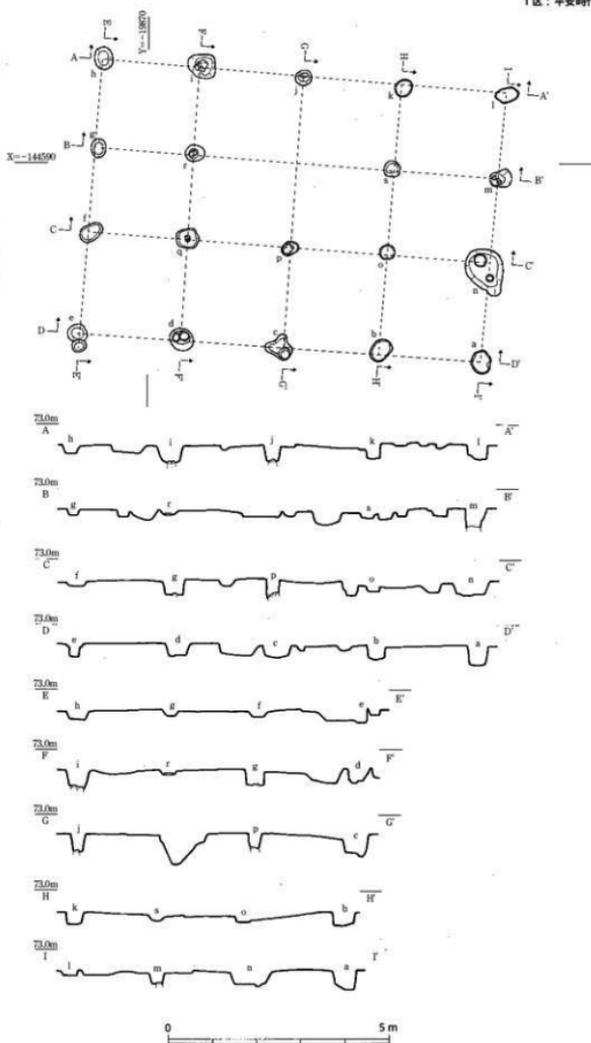


Fig.36 S B.10080平面図・柱穴断面図 (S = 1/100)

S B10433 (Fig.38) 調査区南側P-R3-S区で検出した南北棟建物である。桁行き三間、梁行き二間で、各柱間の平均距離は桁行き147cm、梁行き169cmを測る。西側桁行き441cm、北側桁行き338cmを測り、建物桁行軸はN-6°8'14"-Wである。



Fig.37 S B10080出土遺物 (S=1/3)

柱穴は32-70cmを測り円形および楕円形を呈する。深さは一定でない。柱抜き取りからは、わずかであるが9-10世紀頃の土師器片が出土した。

S A10198 調査区北側G2-5区で検出した柵列である。各柱間は不揃いではあるものの、平均距離は約199cmを測り、柱列方位はW-2°17'42"-Sである。東側調査区外に続く可能性もある。

柱穴は径約40cm前後を測り円形を呈する。埋土は黒褐色砂を主体とする。柱穴より9-10世紀頃の須恵器・土師器・黒色土器・瓦などが出土した。

井戸

S E10009 (Fig.39) 調査区北端付近C-D4-5区で検出した井戸である。掘り方は南北188cm東西154cmを測り隅丸方形を呈する。検出面から最深部までは138cmを測る。枠材は上部が長さ60-70cm、幅20-30cm、厚さ1.5cmの板材を4段積み重ねて設置し、下部には高さ30cm、長軸76cm、短軸60cmの隅丸長方形の曲げ物を設置して水溜めとする。また、これらの補強として、井戸枠裏込め部に多数の瓦片を詰め込んだ痕跡がみられる。枠内埋土は3層で、上層より、黒褐色砂・暗灰色粘質土・暗青灰色粘土である。最深部には径2-3cmの玉石を敷設する。遺物は10世紀前半の須恵器片・土師器片・緑釉陶器片・灰釉陶器片・黒色土器片・瓦片などが出土した。このほか古代の土馬なども出土している。

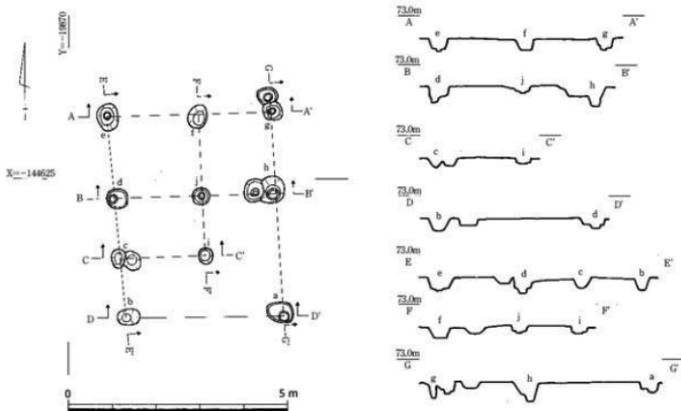


Fig.38 S B10433平面図・柱穴断面図 (S=1/100)

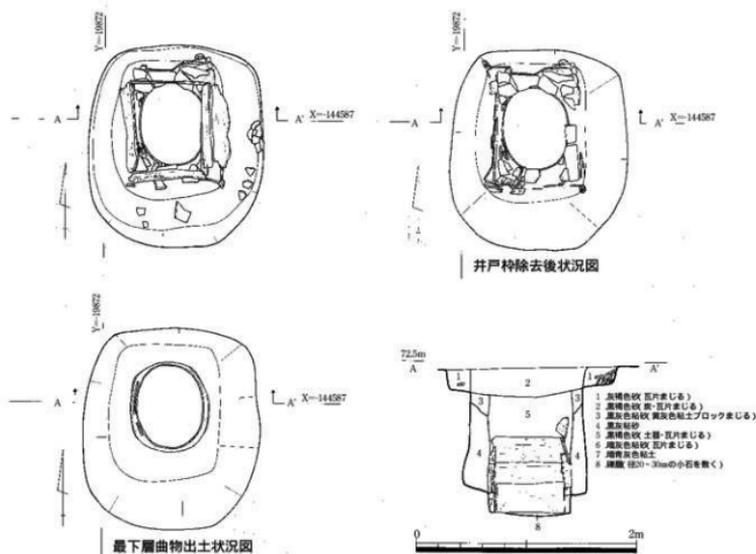


Fig.39 SE 10009平面図・土層断面図 (S = 1/40)

SE 10009出土遺物 (Fig.40)

黒褐色砂 (枠内上層) 出土遺物 出土遺物のうち土師器皿 (1・2)、黒色土器碗 (3)、緑釉陶器碗 (4)、灰軸陶器碗 (5)、土師器釜 (6) について報告する。

土師器皿 1・2共に強く屈曲する口縁部を有し、内面ナデ調整、外面ユビオサエを施す。2は復元口径14.8cmを測る。胎土は橙褐色を呈し、長石粒、雲母をやや多く含む。

黒色土器碗 3はA類碗である。復元口径14.0cmを測り、内面密なヘラミガキ、外面ケズリののち粗いヘラミガキを施す。胎土は淡褐色で雲母を多く含む。

緑釉陶器碗 4は外反する口縁を有し、軸は剥落が著しい。胎土は淡褐色で長石粒を少量含む。

灰軸陶器碗 5はやや高い貼付け輪状高台を有し、軸は内外面底部に及ばない。K90窯式のものである。

土師器釜 6は復元口径25.9cmを測り、端部に沈線を持つ口縁部と、水平方向に長く張る罅を有する。内面オサエ、外面ナデ調整を施す。胎土は淡褐色で長石粒を多く含む。このほかに図化していないが融着した須恵器残片が出土した。

これらの遺物群は土師器皿の調整や黒色土器碗の形態から南部Ⅱ期新段階に相当し、10世紀前半の年代が考えられる。

暗灰色粘砂 (枠内下層) 出土遺物 出土遺物のうち黒色土器碗 (7)、灰軸陶器重 (8) について報告する。

黒色土器碗 7は復元口径16.8cm、器高5.65cm、復元高台径9.9cmを測る。体内内面に密なヘラミガキ、

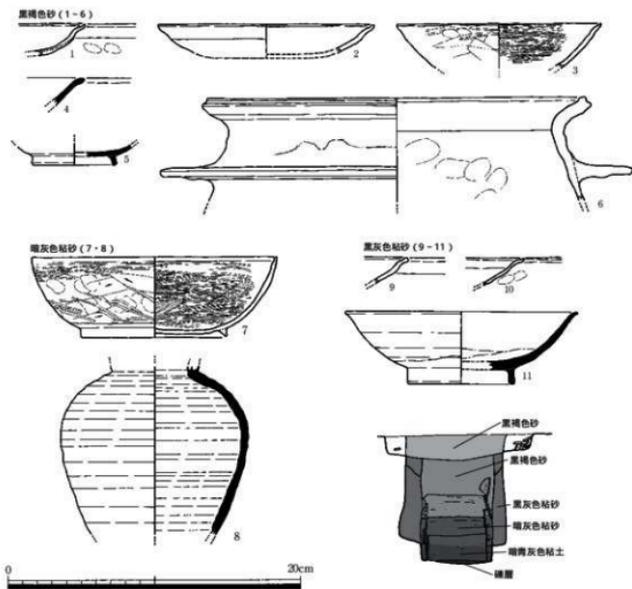


Fig.40 SE10009出土遺物 (S = 1/3)

内面見込み部に密な平行暗文、体部外面をヘラズリののちやや粗いヘラミガキを施す。口縁部内面には一条の沈線を有する。胎土は赤褐色で雲母を多く含む。

灰釉陶器壺 8は口縁部および底部を欠損する。釉は薄くハケ塗りする。胎土は淡灰色で精良である。これらの遺物は黒色土器碗の形態から、南都Ⅱ期新段階に相当し、10世紀前半の年代が考えられる。

黒灰色粘砂（掘り方）出土遺物

土師器皿（9・10）、灰釉陶器碗（11）が出土した。

土師器皿 9・10はいずれも屈曲する口縁部を有し、内面ナデ調整、外面ユビオサエを施す。胎土は9が暗褐色、10が橙褐色を呈し、雲母を多く含む。

灰釉陶器碗 11は復元口径17.8cm、器高5.05cm、復元高台径7.3cmを測り、外反する口縁部と高い高台を有する。内面全面と外面体部下半まで釉をハケ塗りする。胎土は淡灰褐色で精良である。K90窯式のものである。

これらの遺物群は土師器皿の形態および調整から南都Ⅱ期新段階に相当し、10世紀前半の年代が考えられる。

その他の遺構

S P 10022 調査区北端付近 B 3 区で検出した径35cm、深さ28cmを測り、円形を呈するビットである。

埋土は黒褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器片・土師器片・瓦片などが出土した。

S P 10022出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち軒丸瓦 (6) について報告する。

軒丸瓦 6は復元径16.4cmを測り、外面および貼付け部をヘラケズリする。6133 P 型式のものである。胎土は灰白色で砂粒を多く含む。

S P 10035 調査区北側 C 6 区で検出した径28cm、深さ25cmを測り、円形を呈するビットである。埋土は黒褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器片・土師器片に混ざり、二重高台の瓦器椀片が出土した。

S P 10035出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち瓦器椀 (1) について報告する。

瓦器椀 1は二重高台を持つもので、復元底径9.0cmを測る。内面見込み部ジグザグ状暗文を有し、外面高台付近までヘラミガキする。胎土は灰白色で精良である。I 段階 B - C 型式のもので、11世紀後半の年代が考えられる。

S P 10252 調査区北側 C 7 区で検出した径20cm、深さ23cmを測り、円形を呈するビットである。埋土は暗灰褐色砂を主体とし、埋土内より土師器椀片が出土した。

S P 10252出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち土師器椀 (2) について報告する。

土師器椀 2は内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施し、胎土は橙褐色で雲母を多く含む。南都Ⅱ期古段階のもので、9世紀後半の年代が考えられる。

S P 10376 調査区中央南側の M 5 区で検出した径32cm、深さ25cmを測り、円形を呈するビットである。S D 10342を切る。埋土は暗灰褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器片・土師器片と共に瓦質の埴が出土した。

S P 10376出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち埴 (7) について報告する。

埴 7は厚さ7.6cmを測り方形埴の一部と考えられるが、全体像は不明である。胎土は灰白色で長石粒を多く含む。

S P 10384 調査区南側 O 2 区で検出した径36cm、深さ29cmを測り、円形を呈するビットである。S X 10349の整地土を切る。埋土は灰褐色砂を主体とし、須恵器片・土師器片と共に瓦質の埴が出土している。

S P 10384出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち埴 (8) について報告する。

埴 8は方形埴の一部と考えられるが、全体像は不明である。胎土は灰白色で長石粒を多く含む。

S P 10857 調査区北側 F 2 区で検出した径29cm、深さ26cmを測り、円形を呈するビットである。埋土は黒褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器片・土師器片・黒色土器片・瓦片などが出土した。

S P 10857出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち須恵器壺 (9) 軒丸瓦 (10) について報告する。

須恵器壺 9は復元高台径7.4cmを測り、内外面丁寧にヨコナデを施す。胎土は白色で精良である。

軒丸瓦 10は復元直径13.6cmを測り、外区には縷歯文を有する。6282 C a 型式のものである。胎土は灰色で長石・チャートをやや多く含む。

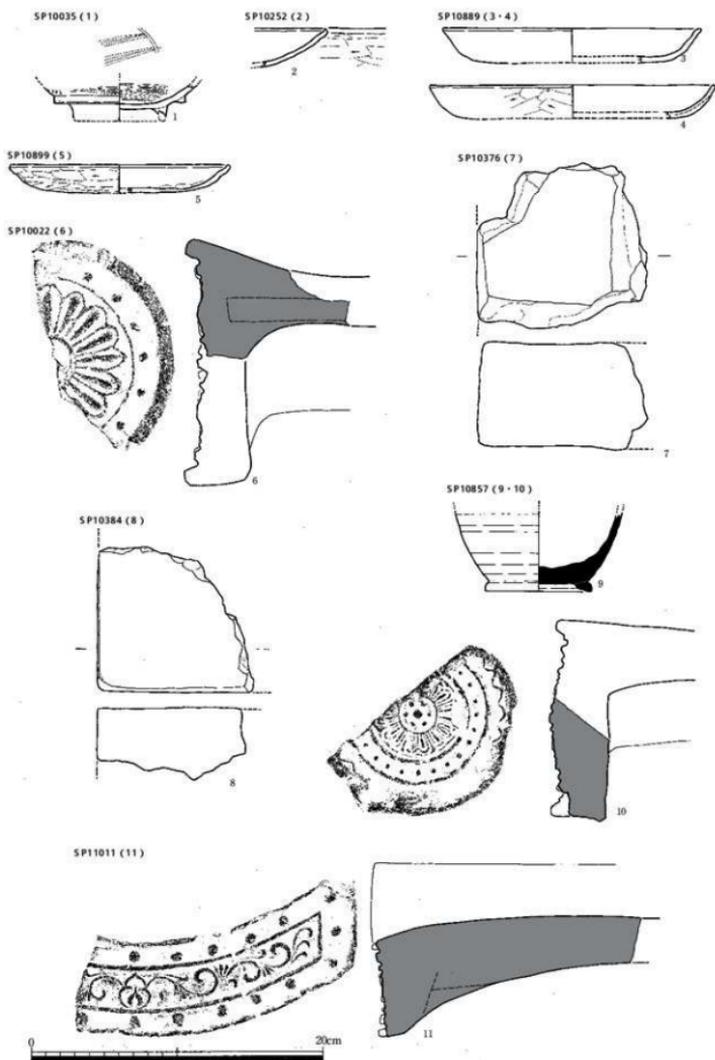


Fig11 平安時代以降のピット出土遺物 (S = 1/3)

S P 10889 調査区北側 F 5 区で検出した長軸76cm、短軸29cm、深さ23cmを測り、楕円形を呈するビットである。埋土は黒褐色砂を主体とし、埋土内より9世紀末～10世紀初頭の須恵器杯片・土師器片が出土した。

S P 10889出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち土師器皿(3・4)について報告する。

土師器皿 3・4はいずれも皿Aである。3は復元口径17.8cm、器高2.4cmを測り、表面劣化の為内外面調整等不明である。4は復元口径19.6cm、器高2.3cmを測り、内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施す。胎土は橙褐色で長石粒をやや多く含む。

S P 10899 調査区北側 G 7 区で検出した径35cm、深さ27cmを測り、円形を呈するビットである。埋土は黒褐色砂を主体とし、須恵器杯蓋片・土師器皿片・瓦片が出土した。

S P 10899出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち土師器皿(5)について報告する

土師器皿 5は口径15.0cm、器高2.0cmを測り、内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施す。胎土は橙褐色で長石粒をやや多く含む。南部Ⅱ期中段階のもので9世紀末～10世紀初頭の年代が考えられる。

S P 11011 調査区北側 F 3 区で検出した長軸50cm、短軸41cm、深さ30cmを測り、楕円形を呈するビットである。埋土は暗灰褐色砂を主体とし、埋土内より須恵器片・土師器片・瓦片と共に緑釉陶器碗片が出土した。

S P 11011出土遺物 (Fig.41) 出土遺物のうち軒平瓦(11)について報告する。

軒平瓦 11は桃実形中心飾りと5回転唐草文を持つ。顎形態は曲線顎で凸面縄タキのちケズリを施す。6761A型式のものと考えられる。

S X 10184 調査区北側 H・I 1～7区で検出した落ち込み状遺構である。西側を整地土に切られる。埋土は黒褐色砂質土を主体とし、埋土内より9世紀末～10世紀初頭の須恵器片・土師器片・黒色土師片・瓦片などが出土した。

S X 10184出土遺物 (Fig.42) 出土遺物のうち土師器杯について報

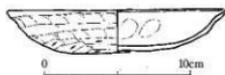


Fig.42 S X 10184出土遺物
(S = 1/3)

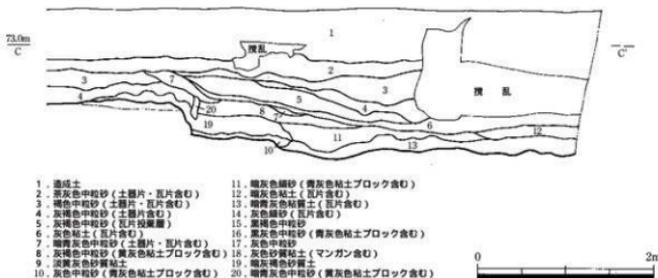


Fig.43 1区南壁 S X 10420付近土層断面図 (S = 1/50)

告する。

土師器杯 口径15.0cm、器高3.1cmを測り、内面ナデ調整、外面コビオサエのち粗いヘラケズリを施す。胎土は橙褐色で雲母を少量含む。南部Ⅱ期中段階のもので、9世紀末～10世紀初頭の年代が考えられる。

S X10420 (Fig.43) 調査区西側O-P11-12区で検出した、南北640cm、東西415cmを測り、方形を呈する落ち込み状遺構である。南および西側は調査区外に続き、東岸でS D10371を切る。埋土は概ね5層で、上層から褐色砂・灰褐色砂・灰色粘土・暗灰色粘土・暗青灰色粘質土が堆積する。褐色砂以外の4層は大量の瓦片を含んでおり、出土状況からみて東側から丸・平瓦片が大量に投棄されたと考えられ

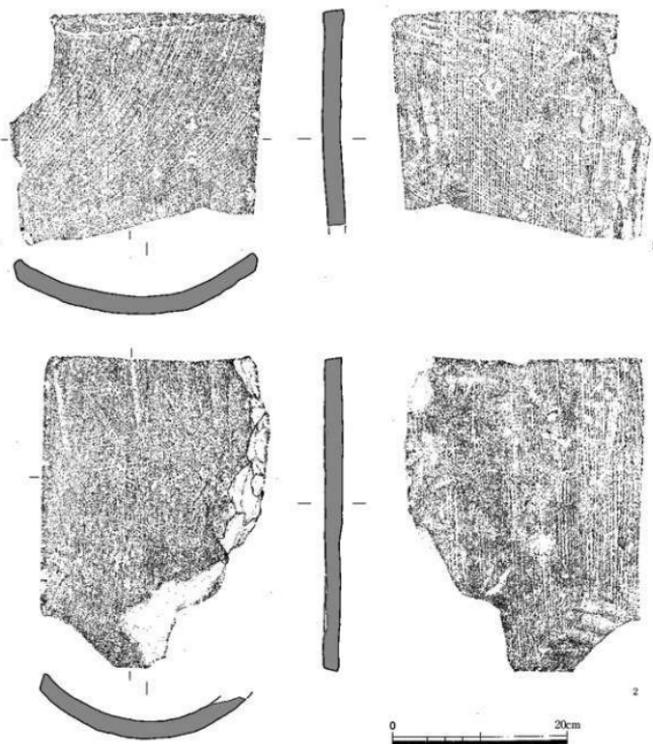


Fig.44 S X10420出土遺物(1)(S=1/5)

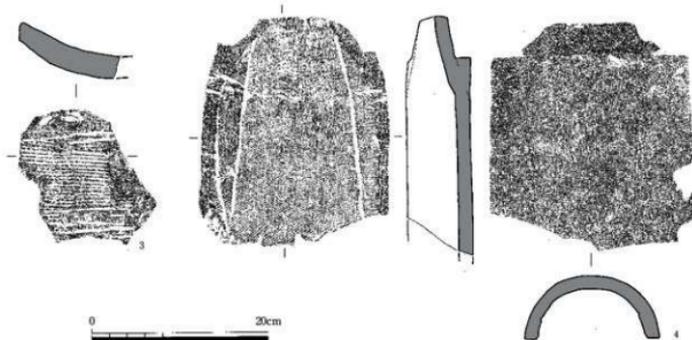


Fig.45 S X 10420出土遺物(2) (S = 1/5)

る。これらの瓦片の一部には「理」の刻印がみられた。瓦片以外にも、様々な器種の須恵器片・土師器片が出土している。

S X 10420暗青灰色粘質土層出土遺物 (Fig.44-46) 出土遺物のうち平瓦(1-3)・丸瓦(4)・須恵器鉢(5)・軒丸瓦(6・7)について報告する。

平・丸瓦ともに破片化したものが多く、辛うじて全体の様相を窺うことのできる資料を抽出した。平瓦は種極的な条件を見出せないものの、いずれも一枚作りとみられ、凹面に模骨の痕跡は観察できない。丸瓦はすべて玉縁式である。

平瓦 1は、硬質に焼成されるもので、凹凸両面に糸切痕が明瞭に残っている。残存長24.8cm、中央部付近の幅27.8cm。凹面広端部付近に布の端部が観察できる。凸面は長軸に並行する縄叩き目である。2は、全長36.0cmを測る。凸面は長軸に平行する縄叩き目がみられ、凹面は布目痕を残すが、側縁の片側を意図的に打ち欠いている(図の下半部は自然破損部)。軟質に焼成され、風化も進んでいる。3は、破片化して全体を知り得ないが、凸面の縄叩き目に特徴があるので抽出した。叩き板の幅は約5cmで、長軸に対して平行して叩く方法は他の資料と同じだが、叩き板に対して横向きに縄を巻きつけたと思われ、縄目が瓦の長軸に対して直行している。資料は風化が進行し、抽出できる情報は少ない。

丸瓦 4は筒部幅15.2cm、現存長27.8cmで、広端部は失われている。凹面の観察から模骨は、端部から9cmの位置に玉縁製作に伴う段を作り、瓶型を呈する。その上に布をかぶせ、おそらく粘土板巻きつけ技法による製作と考えられる。3箇所につき紐が垂れており、いずれも模骨と布の間に存在している。玉縁部の端部はケズリ調整される。筒部凸面は縄叩きを施し、表面全体を簡素なナデで仕上げられる。玉縁部と筒部の境には粘土を細くして肩部を作る。その粘土と筒部の境目は丁寧にナデが施され、縄叩き痕は消されている。玉縁部の長さは4.6cm、玉縁部基部の幅11.6cm、同端部の幅8.8cmで、凸面は横方向のナデで仕上げられ、わずかに内傾している。

なお、この遺構から出土した平瓦・丸瓦の数量的な検討については、第4章を参照されたい。

須恵器鉢 5は直線的な体部を持ち、口縁部を短く内側に傾斜させる。口縁部直下には縦位の把手を有する。胎土は灰白色で精良である。

軒丸瓦 6は外区外縁と中房以上を欠損し、詳細は不明である。外区内縁は圓縁を持ち、6225 E 型式

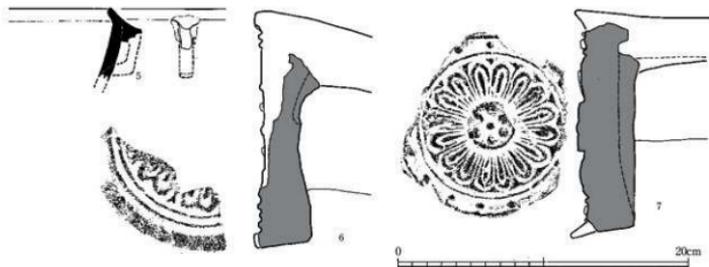


Fig.46 SX10420出土遺物(3)(S=1/3)

を改変したのかもしれない。7は外区外縁を欠損する。八葉復弁蓮華文で、中房の珠文は7個を数える。6304型式のものである。

SX10901 調査区中央K-L1~4区で、SF10020(一条北大路)およびSD10821(一条北大路南側溝)を被覆する瓦投棄遺構である。平城京期の大量の丸・平瓦片と、若干であるが軒丸・軒平瓦片が面的に投棄される。これらの瓦片に混ざり、須恵器片・土師器片・黒色土器片・青磁片・凝灰岩砕片などが出土した。

SX10901出土遺物(Fig.47) 土師器杯(1)、須恵器蓋(2)、緑釉陶器碗(3)、土師器釜(4・5)、須恵器壺(6)、軒平瓦(7)、軒丸瓦(8)について報告する。

土師器杯 1は口径15.3cmを測り、屈曲する口縁部を有する。内面ナデ調整、外面ユビオサエで調整する。胎土は橙褐色で長石粒を少量含む。

須恵器蓋 2は壺蓋である。復元口径11.9cm、器高3.05cmを測り、扁平なボタン状の柄みを有する。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

緑釉陶器碗 3は体部中央に屈曲を持つ碗である。軸は内外面薄くかかり、胎土は淡灰色で精良である。外面にはヘラ描きの傷があるが、意図的なものとは考えにくい。

土師器釜 4・5いずれも「く」字状に外反する口縁部と幅の広い踵を有し内面オサエ調整、口縁部ユビオサエ、体部外面をナデ調整する。4は復元口径27.2cm、5は復元口径28.4cmを測る。胎土は4が淡褐色で長石粒をやや多く含む、5が橙褐色でチャートを少量含む。

須恵器壺 6は壺Hである。復元底径8.0cmを測り、外底面ヘラキリののちナデ調整を施す。器壁内部気泡が大量に存在し、焼成は不良である。胎土は灰色で黒色粒子をやや多く含む。

軒平瓦 7は曲線頸の頸形態を有し、均整唐草文で中心飾りを欠損する。6721HC型式のものである。胎土は灰白色で精良である。

軒丸瓦 8は復弁蓮華文軒丸瓦で、内区を欠損する。外区鋸齒文で6301L型式のものである。胎土は淡灰褐色で長石粒を多量に含む。

これらの遺物群は最新のものが1の土師器杯であり、形態・調整から南部Ⅱ期新段階に相当するもので、10世紀前半の年代が想定できる。

S X10902 調査区南側N~O4~9区で検出した瓦投棄遺構である。S X10349北岸縁を被覆する。平城京期の大量の丸・平瓦片と、若干であるが軒平瓦片を投棄する。これら瓦に混ざり、須恵器片・土師器片・花崗岩片なども出土した。瓦片投棄層下からは、ピットや土坑を検出したが、埋土内から遺物の

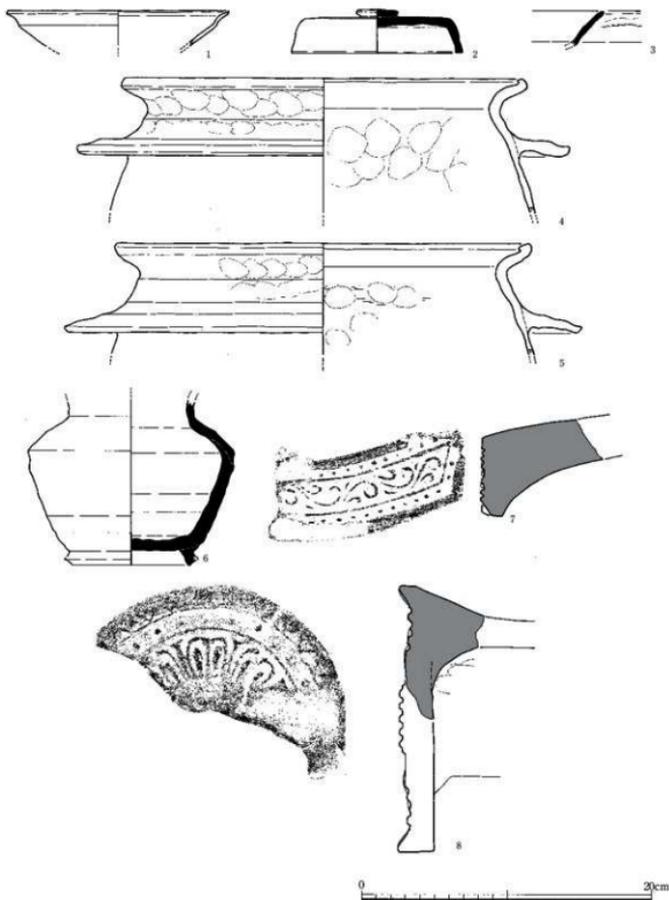


Fig.47 S X10901出土遺物 (S = 1/3)

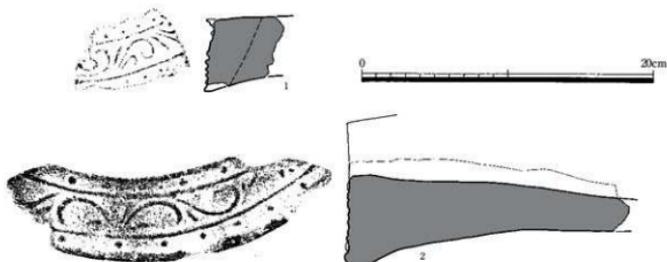


Fig.48 S X10902出土遺物 (S = 1/3)

出土がなく時期は不明である。S X10901およびS X10902を検出した位置は、一条北大路南築地推定ラインに近接していることからみて、築地に間わる瓦類である可能性も考えられる。

S X10902出土遺物 (Fig.48) 出土遺物のうち軒平瓦 (1・2) について報告する。

軒平瓦 1は均整唐草文のもので、花頭形中心飾りを有する6664型式のものである。2は均整唐草文で、対抗四重C字唐草のものである。6775型式のものである。凹面布目、凸面ケズリ調整を行う。

包含層出土遺物 (Fig.50)

灰褐色砂、暗青灰色砂、茶灰色砂から遺物が出土した。層別に記載したが各層から中世以降の遺物が出土しており年代は明瞭でない。出土遺物のうち土師器皿 (1・14)・土師器杯 (2) 黒色土器椀 (3) 黒色土器甕 (4) 須恵器皿 (5) 須恵器杯 (6・7・17) 白磁椀 (9) 白磁皿 (10) 軒丸瓦 (11) 平瓦 (12・21) 緑釉陶器椀 (13) 緑釉陶器皿 (16) 須恵器鉢 (15) 灰釉陶器皿 (18) 磁石 (19) 土製紡錘車 (20) について報告する。

土師器皿 1は口径10.3cm、器高2.0cmを測り、僅かに外反する口縁部を有する。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。14は皿Aである。復元口径22.0cm、器高2.65cmを測る。底部外面をコビオサエのちヘラケズリを施し、胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を少量含む。

土師器杯 2は杯Aである。復元口径17.1cm、器高3.9cmを測り、体部外面をヘラケズリする。胎土は橙褐色で砂粒をやや多く含む。

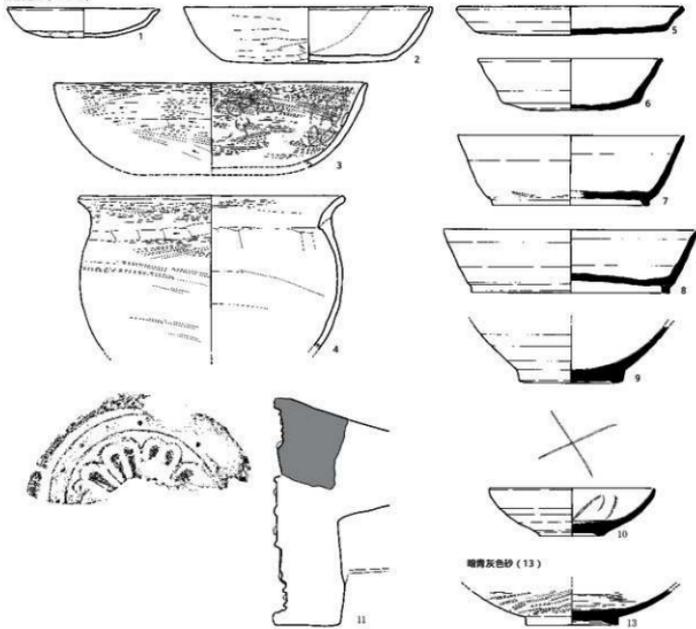
黒色土器椀 3はA類のものである。復元口径21.6cmを測る。杯形の体部を有し、内面横方向のヘラミガキと花卉状暗文、外面ヘラケズリののち密なヘラミガキを施す。9世紀初頭のものである。

黒色土器甕 4はA類のものである。復元口径18.2cmを測り、内面板状工具によるナデ調整、外面横方向のヘラミガキを施す。胎土は橙褐色で雲母をやや多く含む。

須恵器皿 5は口径15.4cm、器高2.0cmを測り、底部外面はヘラ切後未調整である。胎土は淡灰色で精良である。

須恵器杯 6は杯Aである。復元口径12.6cm、器高3.6cmを測り、底部外面ヘラ切ののちナデ調整を施す。胎土は灰色で精良である。7・8・17は杯Bである。7は復元口径15.6cm、器高4.9cm、高台径10.8cmを測り、底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。8は復元口径17.5cm、器高4.4cm、高台径13.6cm

灰褐色砂 (1-12)



暗青灰色砂 (13)

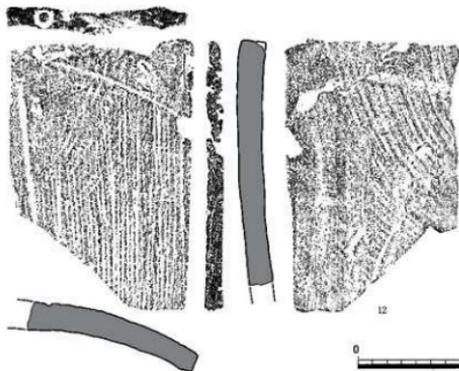


Fig.49 灰褐色砂・暗青灰色砂出土遺物 (S = 1/3)

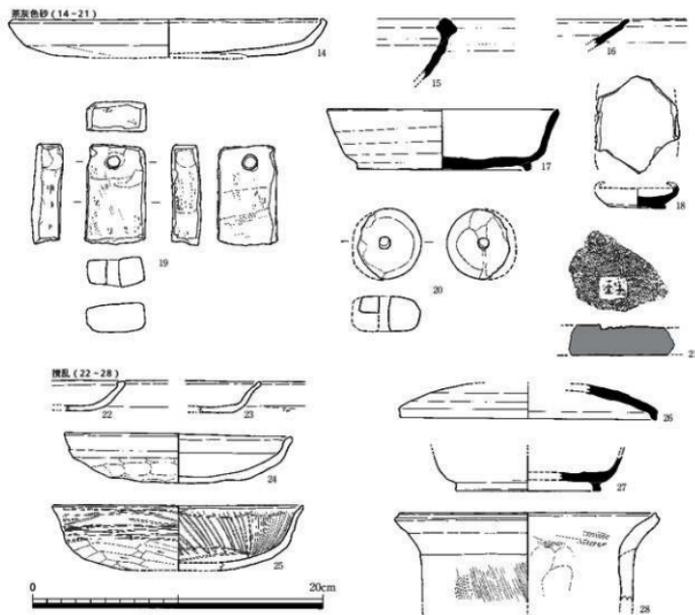


Fig.50 茶灰色砂・攪乱出土遺物 (S = 1/3)

を測り、底部外面はヘラキリののち未調整である。17は口径15.8cm、器高4.25cm、高台径11.9cmを測り、緩やかに湾曲する体部を有する。底部外面はヘラ切ののちナデ調整を施す。

白磁碗 9は復元高台径7.2cmを測り、外面底部直上まで施釉する。胎土は黒色粒子を含む。

白磁皿 10は復元口径11.2cm、器高3.3cm、底径4.4cmを測り、削り出しにより高台状に仕上げる。内面には崩れた花卉状の線刻を有し、見込み部には「×」状の線刻を持つ。特殊なものであるがVI-2b類のものである。

軒丸瓦 11は十弁複弁蓮華文で、外区は素文である。6316D c型のものである。

平瓦 12は凸面縞目タタキ、凹面布目とコビキ痕を有し、広端部に「○」の刻印を有する。21は凸面縞目タタキ、凹面布目痕を有し、凹面には「理」の刻印を有する。

緑釉陶器鉢 13は削り出しの輪状高台を有し、内外面密なヘラミガキを施す。釉は薄く、発色不良である。胎土は灰色で堅緻である。畿内産のものと考えられる。

緑釉陶器皿 16は口縁部だけの破片である。端部は僅かに外反し、釉は外面剥落する。胎土は淡灰色で堅緻である。

須恵器鉢 15は口縁部を玉縁状に仕上げるもので、胎土は灰色で堅緻である。篠原産のものと考えら

れる。

灰釉陶器皿 18は耳皿である。底径3.9cmを測り、底部外面は糸切を行う。釉は自然釉状のものを薄く施す。

砥石 19は提砥である。残存長6.95cm、幅4.1cm、厚さ2.1cm、重量107.4gを測り、全面に研磨痕を有する。穿孔は片面穿孔と考えられる。

土製紡錘車 20は復元径4.3cm、厚さ2.4cm、残存重量43.3gを測る。専用に焼成されたもので、円孔部の層減は顕著でない。胎土は淡褐色で砂粒をやや多く含む。

攪乱出土遺物 (Fig.50)

攪乱からも多数の遺物が出土している。このうち土師器皿(22・23)・土師器杯(24・25)・須恵器蓋(26)・須恵器杯(27)・土師器甕(28)について報告する。

土師器皿 22・23は皿Aである。いずれも細片のため詳細は不明である。

土師器杯 24は杯Cである。口径15.6cm、器高3.45cmを測り、内面ナデ調整、体部外面はコビオサエを施す。胎土淡褐色で赤色酸化土粒を少量含む。25は杯Aである。復元口径17.2cm、器高4.5cmを測り、内面見込み部に連結輪状暗文を施す。平城Ⅲ期のものである。

須恵器蓋 26は杯B蓋である。復元口径17.6cmを測り、なだらかに湾曲したのち直立する口縁部を有する。天井部外面はヘラ切ののちナデ調整を施す。

須恵器杯 27は復元高台径10.0cmを測り、高台は内側に貼り付ける。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

土師器甕 28は復元口径17.5cmを測る。やや厚手で、外面縦ハケ、内面オサエ調整ののち口縁部に横方向のハケ調整を施す。胎土は淡褐色で精良である。

表採遺物 (Fig.51)

表採遺物のうち石器について報告する。

石器 楔形石器である。完形で、最大長4.3cm、最大幅3.6cm、最大厚1.3cm、重量19.2gを測り、石材はサヌカイトである。背面側に顕著な階段状剥離が確認できる。左右側辺から上下側辺の順に加撃する。

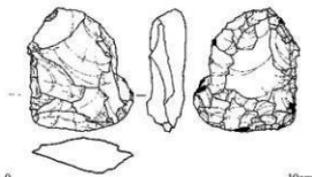


Fig.51 表採遺物 (S = 2/3)

第2節 2区の調査

第1項 概要

2区の調査は旧正強学園敷地内西半分の範囲に、「L」字状の調査区を設定して行った。調査面積は約1500㎡である。このうち北端部分については1区同様削平が浅く、古代の遺構面直上に灰黄色細砂層があり、これをベースとする中世の遺構を主体としトレンチ上層遺構面の存在が確認されたため、上下二層で調査を行った。

北端部分以外は調査区全域にわたって旧正強学園校舎による遺構の破壊が著しく、特に西端付近は著しい攪乱により全く遺構が確認できなかった。調査区の堆積環境及び地形的環境は1区と同様で、造成土・現代耕土および床土とみられる堆積土を除去したのちに、下層の包含層とみられる灰褐色砂、下層遺構検出面である黄灰色シルト（地山）層を検出した。下層遺構のベースは安定した黄灰色シルトが主体であるが、北端付近には流木や多数の自然遺物を包含する旧河道がベースとなっており、遺構検出面は地表下約100cmである。

調査の結果古墳時代前～中期の大規模な溝・少数の土坑・掘立柱建物、奈良時代前～中葉の道路遺構・掘立柱建物、奈良時代後葉の建物群・土坑・溝・井戸、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物・土坑・溝・井戸など多数の遺構を確認した。

奈良時代の祭坊関連遺構については、当初想定通り西二坊大路東西側溝を検出し、大路の規模、位置が確定したほか、坪内を二分割する坪内道路の存在が確認されている。これらは8世紀後半に廃絶しており、代わって大型の掘立柱建物が複数建てられるほか、多数の井戸が掘られようになる。この事実が当該地が8世紀後半に大規模な土地利用の改変を被ったことを意味し、これまで稀薄であった西陣寺寺域外の土地利用について貴重な資料を得ることができた。また、当地は西大寺資料流記帳に記載される「喪儀寮」推定地に該当し、調査成果と「喪儀寮」との関係が課題となっていたが、奈良時代後葉における土地利用の変化は、西大寺・西陣寺創建に伴い喪儀寮推定地までが影響を受けているという意味で非常に示唆的である。

このほか、平安時代以降には1区同様10世紀前半頃まで活発な活動が確認でき、その後10世紀後半以降11世紀半ばまで遺構が稀薄となること、11世紀後半から13世紀前半まで再び遺構がみられるようになることも明らかとなった。特に西二坊大路西側溝は規模を大きくした後10世紀初頭頃に埋没する事が確認でき、平城京内の祭坊遺構の廃絶過程を知る上でも重要な発見であると言える。さらに、11世紀以降比較的活発な活動が見られることは、中世の当該地域の景観変遷を考える上でも非常に興味深い発見と言えるが、これらが13世紀前半頃に消滅するという現象は、西大寺に多く残される絵図・文書類との比較検討を行う上でも重要な資料となる。これまでの研究では当該地域では13世紀半ば以降、西大寺を中心とした活発な開発が行われていた事が指摘されており、今回の調査成果はこの問題にも一石投じる事となる。この問題については第5章「討論会の記録」「平城京右京北辺の調査成果と北辺坊」において詳述しているので参照されたい。



Fig.52 2区第2遺構面全体図 (S = 1/300)

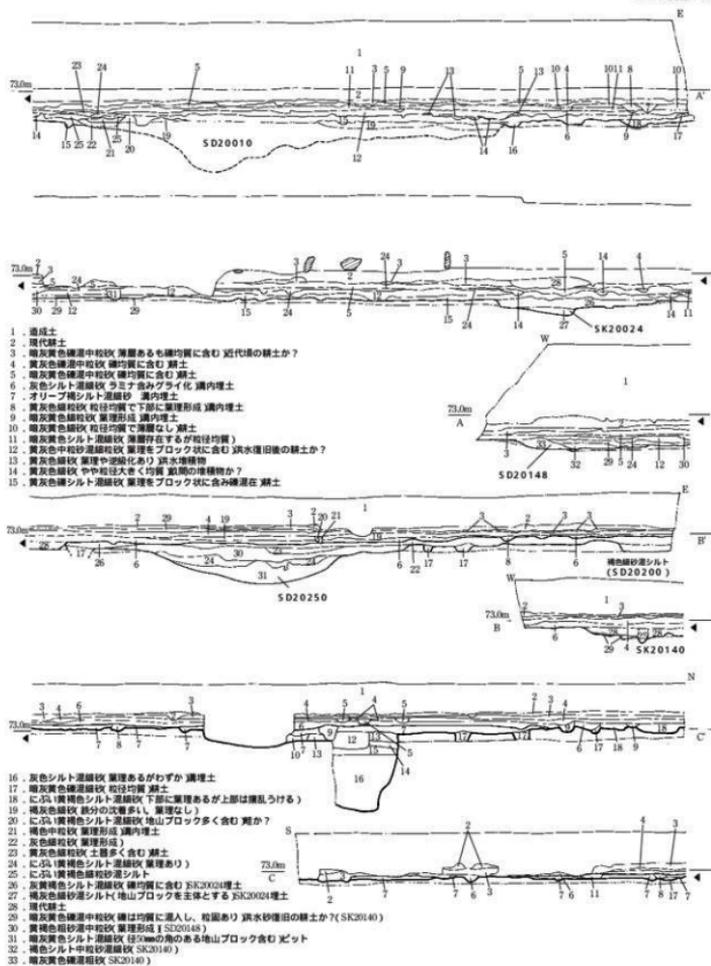


Fig.53 2区壁面土層図 (S = 1/100)

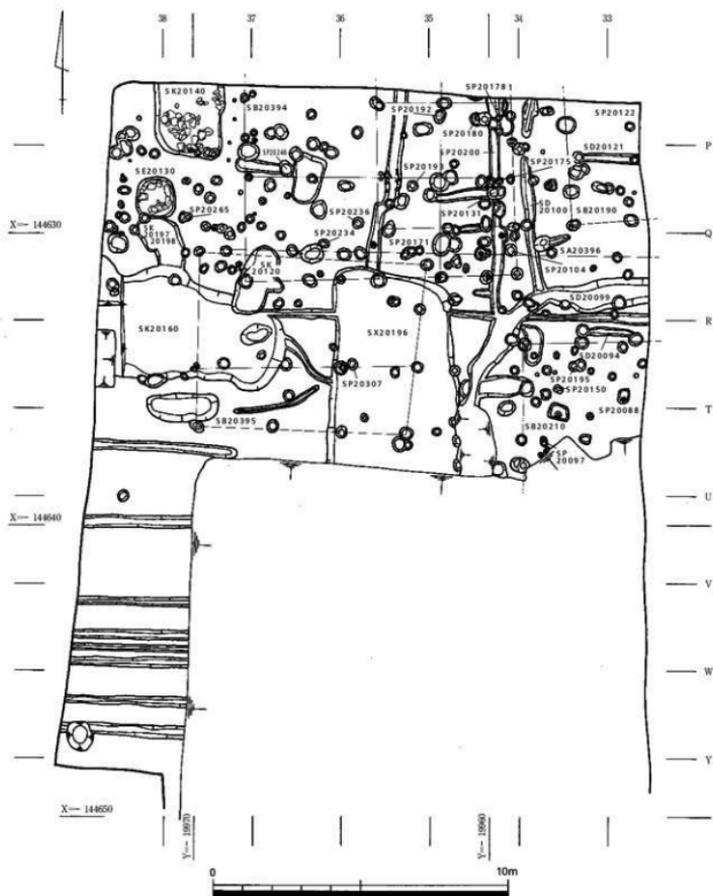


Fig.54 2区第1遺構面全体図 (S = 1/150)

第2項 古墳時代の遺構・遺物

溝

S D20079 調査区西側、A C～A E33区で検出した溝。断面形態浅い「U」字形を呈し、古墳時代の溝S D20148に切られる。大半を攪乱により破壊され、詳細は不明である。埋土内より土師器細片が出土したが、時期等は不明である。

S D20148 調査区西側、P31～A E33区で検出した溝である。幅85～167cm、深さ約10～30cmを測り、断面形態浅い「U」字形を呈する。底部のレベルは北端と南西端で14cmの高低差を持ち南西へ傾斜する。奈良時代以前の建物S B20397に切られる。埋土は暗褐色の凝滞じり細砂を主体とし、埋土の観察からは流水の存在が看取される。埋土内より布留式前半に該当する古式土師器が出土した。

S D20148出土遺物 (Fig.55) 出土遺物のうち古式土師器甕(1)・古式土師器壺(2)・古式土師器杯(3)について報告する。

古式土師器甕 1は復元口径13.0cmを測る口縁部の破片である。端部を小さく折り返し玉縁状に成形する。口縁部内面は横方向のハケ調整のちナデ調整のちナデ調整を施す。胎土は褐色で砂粒やや多い。

古式土師器壺 2は底径7.6cmを測り、やや窪む底部と広く開く体部を有する。外面は密なヘラミガキを有し、内面には放射状の強いナデ痕跡を有する。胎土は淡褐色で砂粒は少ない。

古式土師器杯 3は復元口径14.2cmを測り、あるいは高杯の可能性もある。口縁部直下で弱く屈曲し、屈曲部には弱い稜線を有する。内外面ナデ調整を施すと思われるが、表面劣化のため不明瞭である。胎土は橙褐色で長石・石英粒を少量含む。

これらの遺物群は布留式前半段階の特徴を有する。

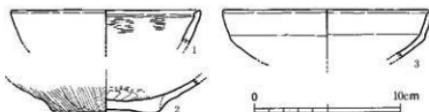


Fig.55 S D20148出土遺物 (S = 1/3)

S D20250 (Fig.56) 調査区北端O34・35～U34・35・36区で検出した南北方向に走る溝である。幅600～710cm、深さ55cm前後を測り、断面形態は広い逆台形を呈する。溝最下面是北端と南端で10cmほどの高低差を持ち南へ傾斜する。古墳時代以前に調査区全域を網流していた河道の埋没最終段階の窪みに存在していたと考えられる。埋土は概ね2層で、上層から褐色土(図中第1・2層)・灰色粘土(図中第3層)である。上層はシルト混じり細砂及び中粒砂を主体とし、径約50mmの歪角礫状ブロックを多量に含み、人為的に埋められた土である。下層はシルトを主体とし、一部に葉理が見られるなど初成の堆積構造を残すが、流水痕跡は明確でなく、穏やかな水の移動がある状態であったと考えられる。

下層より加工痕のある木製品が、中・上層より古式土師器が出土した。

S D20250出土遺物 (Fig.57)

褐色土出土遺物 出土遺物のうち古式土師器小型丸底壺(1)・古式土師器壺(2・3)・古式土師器甕(4～6)・製埴土器(7)・須恵器甕(8)について報告する。

古式土師器小型丸底壺 1は口縁部を欠損する。頸部径6.8cm、胴部最大径7.6cmを測る。口縁部は直線的に開き、体部内面にはヘラ状工具によるナデ調整を施す。内外面細いヘラミガキがあったものと考えられるが、表面劣化の為不明である。胎土は橙褐色を呈し精良である。

古式土師器壺 2は広口壺である。復元口径15.8cmを測る。口縁部には強いユビオサエ痕を1つ有し、端部には面を持つ。表面劣化の為内外面調整等は不明である。3は短頸直口壺の口縁部である。復元口径20.4cmを測り、口縁端部は内側へ小さく折り返す。内外面表面劣化の為調整等は不明であるが、内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が残る。胎土は淡橙褐色で砂粒をやや多く含む。

古式土師器甕 4は復元口径11.3cmを測り、器壁2mm前後と非常に薄い。表面劣化の為調整等不明であるが、内面にはヘラケズリの痕跡が僅かに残る。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。5は復元口径11.9cmを測り、器壁2mm前後と非常に薄い。表面劣化の為外面調整は不明であるが、内面にはヘラケズリを施す。胎土は褐色で砂粒多い。6は口縁部を「S」字状に屈曲させるいわゆるS字甕である。外面左上がりのハケ調整ののち縦方向のハケ調整を施し、内面ヘラケズリののちナデ調整を施す。

製塩土器 7は口縁部を欠損する。外面に成形時のオサエの痕跡と粘土紐接合痕を多数残し、内面には縦方向のナデ調整を施す。全体的に非常に粗製で、被熱痕を有する。胎土は褐色で長石粒を多く含む。

須恵器甕 8は体部の細片である。

器壁1.5cm程度と厚く、内面同心円状あて具痕を強いナデが切り、外面格子状タタキをナデ消す。焼成非常に堅緻で胎土は長石粒を少量含む。

これらの遺物群は布留式前半の様相を有するが、一部に庄内式の様相を持つもの、布留3式前後の様相を持つものなどが存在しており、若干時期差が存在する。

灰色粘土出土遺物 出土遺物のうち古式土師器甕(9)・古式土師器高杯(10)について報告する。

古式土師器甕 9は口径14.5cmを測る。口縁部の伸びは短く、内外面ナデ調整を行う。外面は煤の付着が著しい。胎土は暗褐色で雲母を多量に含む。

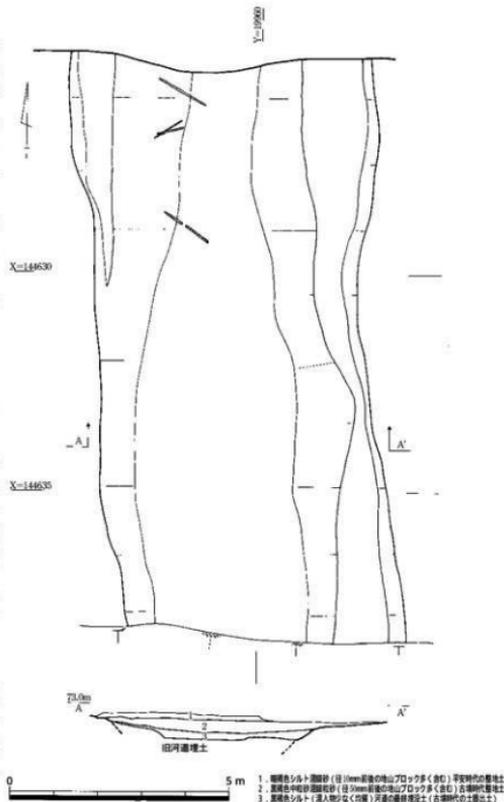


Fig.56 S D 20250平面・土層断面図 (S = 1/100)

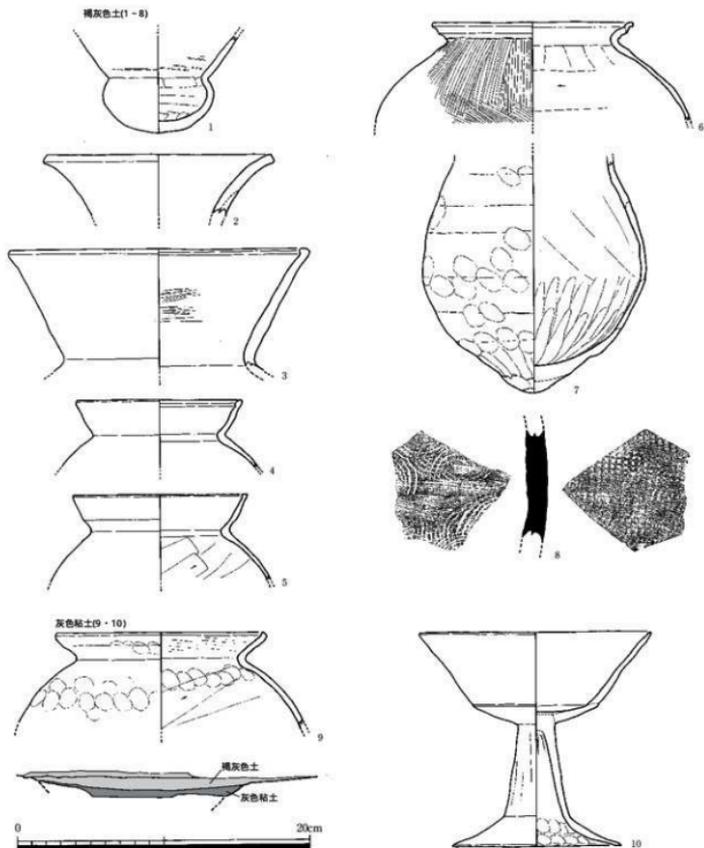


Fig.57 S D20250出土遺物 (S = 1/3)

古式土師器高杯 10は復元口径15.9cm、推定器高14.9cm、復元脚部径11.6cmを測る。内外表面劣化の為調整等は不明である。胎土は赤褐色で非常に精良である。

土坑

S K20147 調査区西側、A F33区で検出した径約60cm前後を測り円形を呈する土坑である。古墳時代

の溝 S D 20148、奈良時代の建物 S B 20045の柱穴 h に切られる。埋土は暗褐色のシルト混じり中粒砂を主体とする。埋土内から布留式に相当する土器類が出土した。

S K 20147出土遺物 (Fig.58) 出土遺物のうち古式土師器小型丸底甕について報告する。

遺存が悪く、詳細は不明であるが、復元頸部径8.0cmを測り、口縁部は比較長く伸びる。胎土は淡褐色を呈しチャート・長石粒をやや多く含む。



Fig.58 S K 20147出土遺物
(S = 1/3)

S K 20381 (Fig.59) 調査区北端 Q34区で検出した、長軸304cm、短軸200cm、深さ20cm前後を測る楕円形を呈する土坑である。断面皿型を呈する。奈良時代の建物 S B 20230柱穴 n、奈良時代の井戸 S E 20364に切られる。埋土は黒褐色の細砂を主体とし、埋土内に葉理がみられるなど自然に埋没した状況が窺える。埋土内より布留式前半段階の土器が出土した。

S K 20381出土遺物 (Fig.60) 出土遺物のうち古式土師器甕 (1~3)・古式土師器高杯 (4~6) について報告する。

古式土師器甕 1は復元口径12.0cmを測り、「く」字状に外反する口縁部を有する。口縁端部はわずかに内側へ肥厚させる。表面劣化のため調整等は不明で、胎土は淡褐色で長石・石英粒を少量含む。2は復元口径12.4cmを測り、「く」字状に外反する口縁部を有する。口縁端部は内側へ肥厚させる。内面へラケズリを施し、2次焼成のため外面調整は不明である。胎土は淡褐色で長石・石英粒を少量含む。3は復元口径14.0cmを測り、「く」字状に外反する口縁部を有する。口縁端部はわずかに内側へ肥厚させる。内面へラケズリ、外面横方向のハケ調整を施す。胎土は褐色で長石・石英粒を少量、雲母を多量に含む。

古式土師器高杯 4は復元口径16.0cmを測り、平坦な杯底部と直線的に開く体部を有する。表面劣化のため調整等不明瞭だが、内外面ナデ調整を施すものと考えられる。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。5は復元脚部径12.3cmを測り、透かし孔を持たない。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒をやや多く含み、4に類似する。6は復元脚部径12.0cmを測り三方に透かし孔を有する。杯部との接合部はジョイント式と考えられる。外面ナデ調整を行い、内面にはシボリ目が残る。胎土は淡褐色を呈し、赤色酸化土粒を少量含む。これらの遺物群は布留式の前半段階の様相を示す。

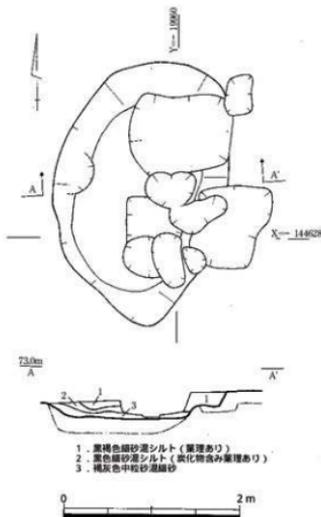


Fig.59 S K 20381平面・土層断面図
(S = 1/50)

建物

S B 20397 調査区西端 A D - A F 32・33区で検出した建物である。古墳時代の溝 S D 20148を切り、奈

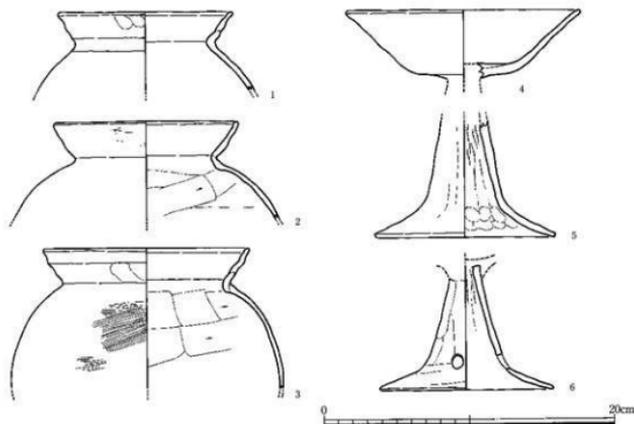


Fig.60 S K20381出土遺物 (S = 1/3)

良時代の建物 S B 20075 に切られる。年代を決定する遺物が出土していないが、奈良時代の建物に切られ、桁方向が東に振れることから古墳時代の建物と考えた。

桁行き三間以上、梁行き推定二間で、各柱間の平均距離は121cmを測る。残存部桁行き365cm、梁行き330cmを測り、建物桁行軸は N-35°15' - E である。

第3項 奈良時代の遺構・遺物

条坊関係遺構

S D 20010 (西二坊大路西側溝) (Fig.61) 調査区東側 A D ~ A I 22 ~ 25区にかけて検出した、調査区を南北に横切る溝である。埋没の最終段階に広く拡張され、検出幅785cm、深さ110cmを測る。断面形態は起伏に富み、検出面下40cm付近に段差を持ち、検出面下50cm付近にさらに段差を有する。下層は「U」字形の断面形態で、立ち上がり及び底部に起伏を有する。下層の断面形態より復元される掘削時の溝幅は約270cmが推定される。底部形態を基にして推定した溝心の座標は X = -144,675.0、Y = -19,930.2 を測る。埋土は概ね3層で、上層より暗灰色砂混じりシルト (図中第1~17層)、青灰色粗砂 (図中第18~27層)、灰色細砂 (図中第28~31層)、粘土ブロック混じり灰色砂 (図中第32~39層) である。上2層は検出面下約40cmの段差の上面に堆積している。上面から多数の索掘溝が切込んでいる。土層の堆積状態から複数回の浚渫が考えられる。層中には菓理など初生の堆積構造が見られるが、著しい攪乱を受けており、草木が繁茂する状況下で埋没したものと考えられる。中層は埋土に菓理を形成する。遺物の出土は少ないが、一部に東側から瓦礫が投入されたと考えられる様子が見られる。下層は菓理が著しく発達する。底部付近の起伏が著しいことや、肩部の堆積状態から複数回の浚渫が想定されるが、最終的な埋土には地山のブロックを多く含む比較的短期間で埋没したと考えられる。

以上の堆積状況および後述する出土遺物より、西一坊大路西側溝の埋没過程は以下のように考えられる。まず8世紀前半に掘削され維持管理が行われた後、8世紀末~9世紀初頭に下層が埋没する。その

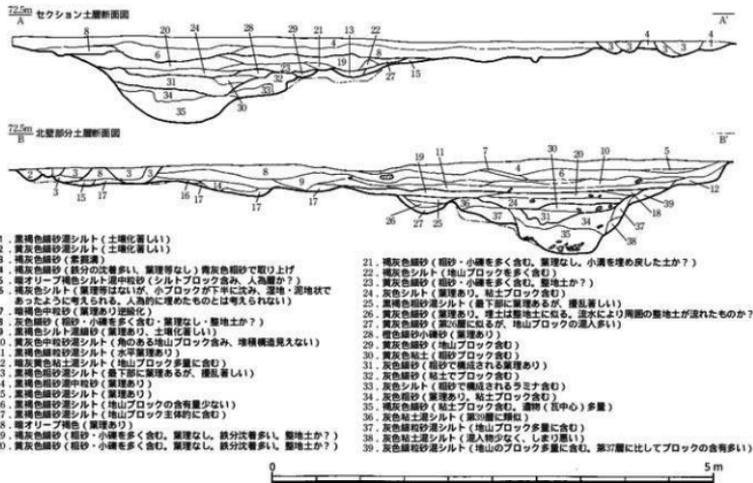


Fig.61 S D 20010 (西二坊大路西側溝)土層断面図 (S = 1/50)

後も浸淫を繰り返しながら9世紀後半-10世紀初頭にかけて、中層が埋没する。そのち溝幅が著しく拡大するが、流水等があまり無く草木が繁茂するなかに小規模な溝が時折掘削されるような状態がしばらくあり、最終的に10世紀前半には完全に埋没し耕地化したものと考えられる。

S D 20010 (西二坊大路西側溝) 出土遺物 (Fig.62-64)

暗灰色砂混シルト出土遺物 出土遺物のうち土師器皿(1)、黒色土師碗(2)、灰釉陶器碗(3)、緑釉陶器碗(4)、墨書土器(5・6)について報告する。

土師器皿 1は器壁が2mm前後と薄く、口縁端部を小さく玉縁状に成形する。胎土は淡褐色で砂粒少ない。

黒色土師碗 2は黒色土器A類である。器壁は2-3mm前後と薄く、口縁端部の沈線は不明確である。胎土は淡褐色で雲母を多量に含む。

灰釉陶器碗 3は口縁部の破片である。軸は内面のみ薄くかかる。

緑釉陶器碗 4は底部の破片である。淡い緑釉を外底面まで施し、釉の下にはヘラミガキがみられる。内面見込み部には一条の沈線が巡る。畿内産のものと考えられる。

墨書土器 5は須恵器杯の底部である。「□上□」の3文字が確認できる。6は土師器杯の底部で、「小」の文字が確認できる。

以上の遺物群は南部I期新段階に該当し、10世紀初頭の様相を示す。

青灰色粗砂土遺物 出土遺物のうち土師器皿(7・10)・土師器碗(8)・黒色土師碗(9)・緑釉陶器碗(11-14)・須恵器壺(15・16・19)・須恵器蓋(17)・須恵器円面碗(18)について報告する。

土師器皿 7は復元口径17.8cmを測る。口縁端部を僅かに玉縁状に成形する。内外表面劣化のため

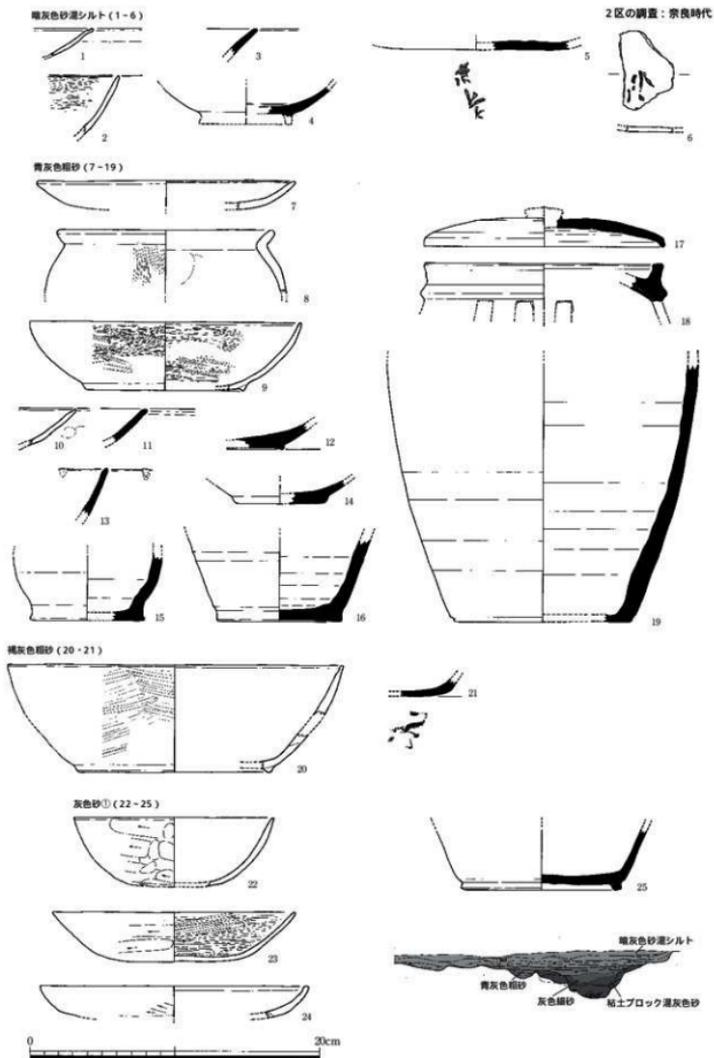


Fig.62 S D20010出土遺物 (1) (S = 1/3)

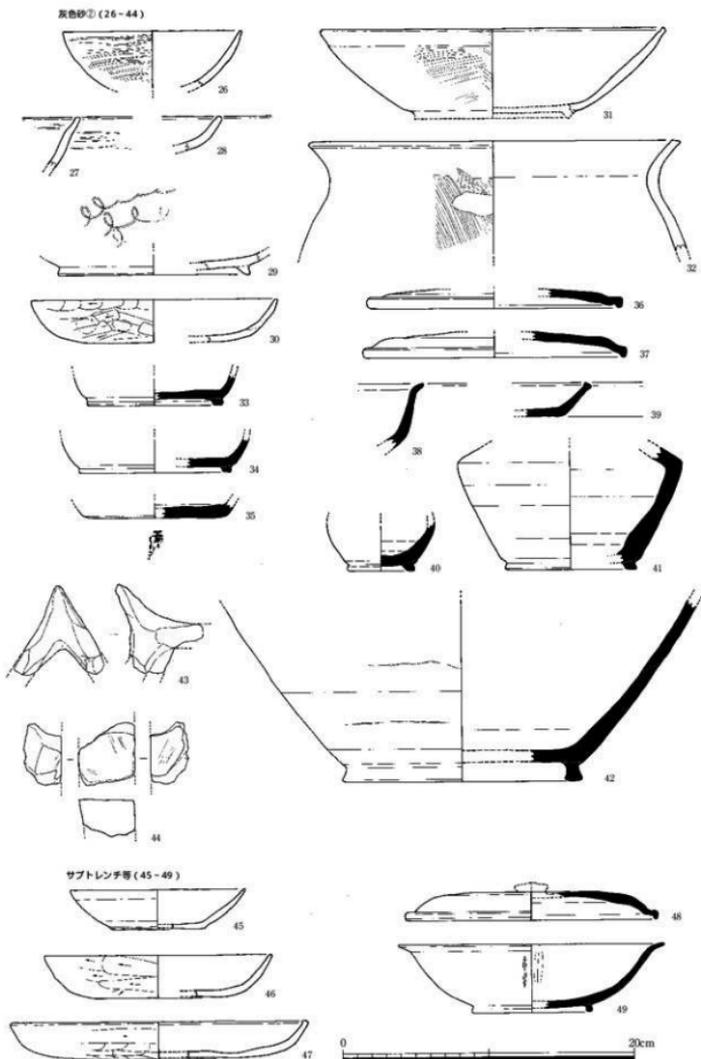


Fig.63 SD20010出土遺物 (2) (S = 1/3)

調整等は不明瞭である。胎土は赤褐色を呈し赤色酸化土粒を多く含む。10はやや薄手で、口縁端部を僅かに玉縁状に成形する。胎土は赤褐色を呈し赤色酸化土粒を多く含む。

土師器甕 8は復元口径15.1cmを測る。「く」字状に外反させる厚い口縁部を有し、端部は丸くおさまる。外面縦方向のハケ調整、内面は工具によるオサエを施す。胎土は赤褐色を呈し砂粒少ない。

黒色土師椀 9は黒色土器A類である。復元口径18.8cm、器高4.75cmを測る。口縁部内面には1条の沈線を有し、内外面密なヘラミガキを施す。胎土は褐色で雲母を多く含む。

緑釉陶器椀 11は口縁部の破片である。濃緑色の釉を施し、胎土は灰色で砂粒少ない。12は削り出し成形の円盤状高台で、釉は剥離のため不明である。胎土は淡褐色で砂粒を少量含む。13は口縁部の破片である。輪花を呈し、釉は淡緑色である。胎土は灰色を呈し精良である。14は復元底径6.3cmを測り、削り出し成形の円盤状高台である。釉は剥離のため不明である。胎土は淡褐色で砂粒を少量含む。

須恵器壺 15は壺Mである。復元底径7.9cmを測り、底部外面を糸切りする。内面には降灰がみられる。胎土は灰色で砂粒少ない。16は壺Mもしくは壺Kである。直線的な体部を有し、底部外面を糸切りする。胎土は白色で砂粒少ない。19は壺Nである。平坦な底部と直線的な体部を有し、外底面には植物圧痕を多く有する。内外面ともに成形時の凸凹を多く有し、底部と体部の境界付近には底部の粘土を掻き取った際のヘラもしくは棒状工具の痕跡が残る。胎土は淡灰色を呈し、黒色微粒子をやや多く含む。

須恵器蓋 17は杯B蓋である。復元口径16.6cmを測り、口縁部はほとんど屈曲せずに端部を折り曲げるのみである。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

須恵器円面鏡 18は復元口径16.5cmを測る。長方形透かしを多数有するタイプと考えられる。外底面は灰を被り、胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

これらの遺物群は奈良時代の遺物を多く含むが、南部Ⅱ期中段階の様相を示し、9世紀末～10世紀初頭の年代が考えられる。

灰色細砂出土遺物 出土遺物のうち土師器杯(20)、墨書土器(21)、土師器椀(22)、土師器皿(24)、黒色土師杯(23)、須恵器杯(25)について報告する。

土師器杯 20は杯Bである。復元口径23.0cm、器高7.45cmを測る。緩やかに湾曲する体部を有し、口縁端部は小さく玉縁を形成する。内面ナデ調整、外面ヘラミガキを施す。胎土は赤褐色で雲母・長石を少量含む。

土師器椀 22は椀Aである。復元口径13.7cmを測る。内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施す。胎土は赤褐色で砂粒少ない。

墨書土器 21は須恵器杯Aの底部であり、文字種は不明である。胎土は灰白色を呈し砂粒少ない。

土師器皿 24は皿Aである。復元口径18.5cmを測る。口縁端部を玉縁状に仕上げ、内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施す。胎土は淡褐色で砂粒少ない。

黒色土師杯 23は黒色土器A類である。復元口径16.7cm、器高3.45cmを測る。器壁は約4mmと薄い。内面密なヘラミガキ、外面ヘラケズリのちヘラミガキを施す。胎土は褐色で雲母を多く含む。

須恵器杯 25は杯Bである。底径11.0cmを測る。底部はヘラキリののち未調整である。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

以上の遺物群は南部Ⅱ期古段階の様相を示し、9世紀後半の年代が考えられる。

粘土ブロック混灰色砂出土遺物 出土遺物のうち土師器椀(26)、土師器杯(27・29・31)、土師器皿(28・30)、土師器甕(32)、須恵器杯(33・34・38)、須恵器皿(39)、須恵器蓋(36・37)、須恵器

壺(40・41)・須恵器鉢(42)・墨書土器(35)・土馬(43)・砥石(44)について報告する。

土師器椀 26は椀Aである。復元口径12.3cmを測る。器壁は約5mmで比較的厚く、内面ナデ調整、外面粗い横方向のヘラミガキを施す、内面はナデアグの痕跡がみられる。胎土は赤褐色で赤色酸化土粒を多く含む、表面には化粧土を塗布する。

土師器杯 27は杯Aである。内外面ナデ調整ののちヘラミガキを施し、胎土は淡褐色を呈し砂粒少ない、29・31は杯Bである。29は復元底径13.4cmを測り、内面見込み部には連結輪状暗文を施す。全体的に唐減する。胎土は淡褐色で砂粒少ない。31は復元口径23.7cmを測る。口縁端部を玉縁状に成形し、内面ナデ調整、外面ヘラミガキを施す。胎土は赤褐色で赤色酸化土粒を多く含む。表面には化粧土を塗布する。

土師器皿 28・30ともに皿Aである。28はやや厚手で、口縁端部を玉縁状に成形する。胎土は淡褐色で砂粒少ない。30は復元口径17.6cm、器高3.0cmを測る。内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施す。胎土は赤褐色で砂粒少ない。全面に油煙状の煤が付着する。

土師器椀 32は復元口径25.5cmを測る。口縁部は比較的緩やかに外反し、口縁端部は上面に面を持つ。内面オサエののちナデ調整、外面縦方向のハケ調整を行う。胎土は淡褐色で長石粒をやや多く含む。

須恵器杯 33・34は杯Bである。33は復元底径9.3cmを測り、外底面はヘラキリののち軽いナデ調整を施す。胎土は灰色で砂粒少ない。34は復元底径10.5cmを測り、外底面はヘラキリののち軽いナデ調整を施す。胎土は褐色で黒色の微粒子を少量含む。38は屈曲する口縁部を有するものである。内外面ヨコナデ調整を施し、胎土は灰色で長石粒を少量含む。

須恵器皿 39は皿Cである。直線的に開く体部を有し、口縁端部に面を持つ。外底面はヘラキリののち未調整で、胎土は灰白色で砂粒をやや多く含む。

須恵器蓋 36・37は杯B蓋である。いずれも扁平で口縁部の屈曲が強い。36は復元口径17.6cm、を測り、胎土は灰色で黒色微粒子を少量含む。37は復元口径17.8cmを測り、胎土は灰色で長石粒を少量含む。

須恵器壺 40は壺Mである。復元底径4.6cmを測り、胎土は灰色で砂粒をやや多く含む。41は壺Qである。復元底径9.0cmを測り、肩部の稜は強い。高台は貼付的で、体部との境界付近をヘラ状の工具によりなでつける。肩部上面には自然釉がかかる。胎土は灰色で砂粒少ない。

須恵器鉢 42は鉢Dである。復元底径16.5cmを測り、直線的に開く体部を有する。体部下半には乾燥の際についたと思われる帯状の圧痕を有する。胎土は灰色で砂粒少ない。

墨書土器 35は須恵器杯Aの底部に墨書したもので、2文字が確認できる。「東□」もしくは「丙□」とも読めるが、確定できない。

土馬 43は後肢および尾部が残存する。胴部断面「へ」字状を呈し、脚先端を欠損する。てづね成形ののちナデ調整を行う。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒を多量に含む。

砥石 44は凝灰岩製で、欠損部以外の面全てを使用する。本来の形状は不明である。

以上の遺物群は、29の土師器杯Bが平城I期に帰属し、そのほかはいずれも南部I期古-中段階に帰属する。掘削時期については平城京造営当初に遡る可能性があるものの、最終的な埋没は8世紀末-9世紀初頭と考えられる。

サブトレンチ等出土遺物 溝中央付近のセクション際に設置したサブトレンチサブトレから出土した遺物である。帰属層位が不明確なため一括して報告する。出土遺物のうち土師器皿(45-47)・土師器杯(50)・須恵器蓋(48)・緑釉陶器椀(49)・墨書土器(51)・漆附着須恵器(52)・砥石(53)について報告する。

土師器皿 45は復元口径12.0cm、器高2.8cmを測り、直線的に開く体部を有する。体部には回転台成形の土器にみられる連続するナデ痕跡がみられ、回転台成形のものである可能性がある。底部は比較的丁寧にクビオサエを行い、成形痕跡が確認できない。胎土は赤褐色を呈し、赤色酸化土粒をやや多く含む。他地域からの搬入品である可能性がある。46・47はいずれも内面ナデ調整、外面ヘラケズリを行う皿Aである。46は復元口径15.5cm、器高2.95cmを測り、胎土は赤褐色で赤色酸化土粒を多く含む。表面には化粧土を塗布する。47は復元口径20.6cm、器高2.55cmを測り、口縁端部を内側に肥厚させる。胎土は赤褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

土師器杯 50は杯Bである。高い高台と強く張り出す体部を有する。表面磨滅し、暗文の有無等は不明である。胎土は褐色で雲母を多く含む。

須恵器蓋 48は杯B蓋である。復元口径17.1cmを測り、口縁部の屈曲は強い。天井部はヘラキリののち未調整である。胎土は灰白色で砂粒少ない。

緑釉陶器椀 49は輪花椀である。復元口径18.6cm、器高4.75cm、復元高台径8.2cmを測り、強く屈曲する口縁部と幅の狭い貼付け輪高台を有する。釉は淡緑色のハケ塗りて外底面まで丁寧に施釉する。内面にはトチンの痕跡を有する。9世紀前半の東海産のものである。

墨書土器 51は土師器皿底部である。内外面ナデ調整を施し、外底面に墨書を記す。文字は判読困難であるが、「□□女」とも読める。

漆着須恵器 52は杯Aである。底部外面ヘラキリののち丁寧なナデ調整を施す。漆は比較的薄く付着する。胎土は灰色で黒色微粒子を少量含む。

砥石 53は砂岩製である。折損するもの、断面は形態不定形な多角形を呈し、多方向から使用する。

S D 20392 (西二坊大路東側溝) (Fig.65)

調査区東端AH・AI18区で検出した溝。本来調査区に含まれていなかったが、埋め戻しの際に確認のため拡張を行ったところ西二坊大路東側溝を確認した。

幅205cm、深さ28cmを測り、断面形態が段差を有する逆台形を呈する。溝心の座標はX = -144,675、Y = -19,912.9を測る。埋土は

出土層位不明(50-53)

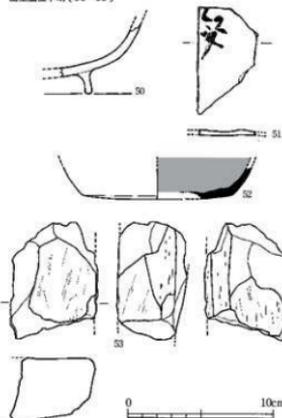


Fig.64 S D 20010出土遺物(3)(S = 1/3)

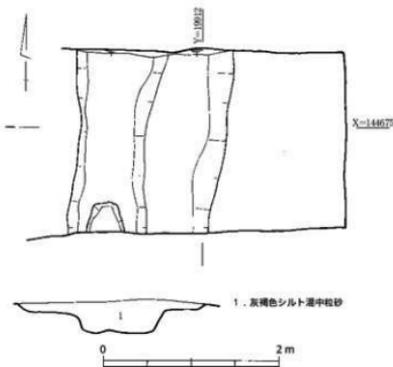


Fig.65 S D 20392 (西二坊大路東側溝) 平面図・土層断面略測図 (S = 1/50)

葉理を形成する灰褐色のシルト混じり中粒砂である。

SD20392 (西二坊大路東側溝) 出土遺物 (Fig.66) 出土遺物のうち須恵器皿について報告する。

須恵器皿 復元高台径10.8cmを測る皿Bである。やや外側に張る高台と広い底部を有する。高台は底部内側に貼り付ける。底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。胎土は灰色で精良である。

正確な年代比定は困難であるが、高台の径や位置から奈良時代初頭のものと考えられる。

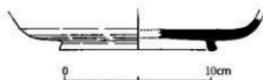


Fig.66 SD20392出土遺物 (S = 1/3)

SD20041・20042 (坪内道路北側溝) (Fig.67) 調査区中央付近A G27-29区で検出した溝である。攪乱等により分断されており、調査段階では別番号の遺構として扱った。幅68cm、深さ約15cmを測り、断面形態が逆台形を呈する。底部は起伏に富む。傾斜については不明確である。埋土は灰褐色のシルト質中粒砂で、攪乱により葉理等初生の堆積構造を残さない。

SD20041出土遺物 (Fig.68) 出土遺物のうち須恵器椀 (1)・須恵器皿 (2)・須恵器蓋 (3・4) について報告する。

須恵器椀 1は椀Aである。口径12.4cm、器高6.95cm、底径9.0cmを測り、底部外面はヘラキリののち丁寧にナデ調整を施し、ヘラ記号と思われる線刻を有する。胎土は灰白色で黒色粒子をやや多く含む。

須恵器皿 2は皿Aである。口径17.8cm、器高3.3cm、底径14.5cmを測り、外面はヘラキリののちナデ調整を施す。内面には火罫がみられる。胎土は灰白色で砂粒少ない。

須恵器蓋 3・4ともに杯B蓋である。3は復元口径22.4cm、4は復元口径23.8cmを測る。3は4に比して口縁部の屈曲が強い。ともに天井部外面をヘラケズリののち軽いナデ調整を施す。胎土は共に灰

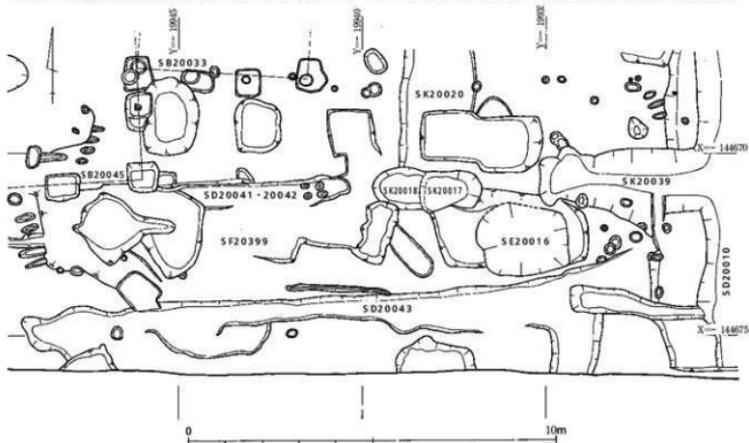


Fig.67 SD20041・20042・20043及び周辺遺構平面図 (S = 1/120)

色だが3は長石粒を多く含む。

S D 20042出土遺物 (Fig.68) 出土遺物のうち須恵器蓋について報告する。

須恵器蓋 5は杯B蓋である。摘み部分のみが残存し、詳細は不明である。扁平な形態を持ち、胎土は灰色で砂粒少ない。

S D 20043 (坪内道路南側溝) (Fig.67) 調査区南端AH・A I 25-30区で検出した溝である。幅60-130cm、深さ約12cm前後を測り、断面形態が緩やかな「U」字形を呈する。S E 20016付近で分岐しており、一方は直角に曲り南側調査区外へ伸びるのに対し、もう一方は段を持ちながら深さを増し、S D 20010に合流する。溝心の方はW-1°45'44"-Sである。埋土は灰褐色のシルト質中粒砂で、擾乱のため初生の堆積構造を残さない。

S D 20043出土遺物 (Fig.68) 出土遺物のうち土師器皿 (6・7)、須恵器杯 (8-10)・須恵器蓋 (11)・須恵器甕 (12) について報告する。

土師器皿 6・7はともに皿Aである。6は復元口径17.7cm、器高3.55cmを測る。内面ナデ調整を施し、外面は表面劣化の為調整等不明である。7は口縁端部を玉縁状に成形する。外面ヘラケズリを行い、内面は表面劣化の為調整等不明である。胎土はともに橙褐色を呈し、精良である。

須恵器杯 8は杯Aである。復元口径12.7cm、器高3.65cmを測り、底部外面ヘラキリののち丁寧ナデ調整を施す。胎土は灰色で黒色粒子を少量含む。9は杯Bである。復元口径10.4cmを測り、高台は若干内側寄りに貼り付ける。外底面はヘラキリののち未調整であると思われる。胎土は灰色で砂粒少ない。10は杯Bである。細片のため詳細は不明である。胎土は灰色で砂粒少ない。

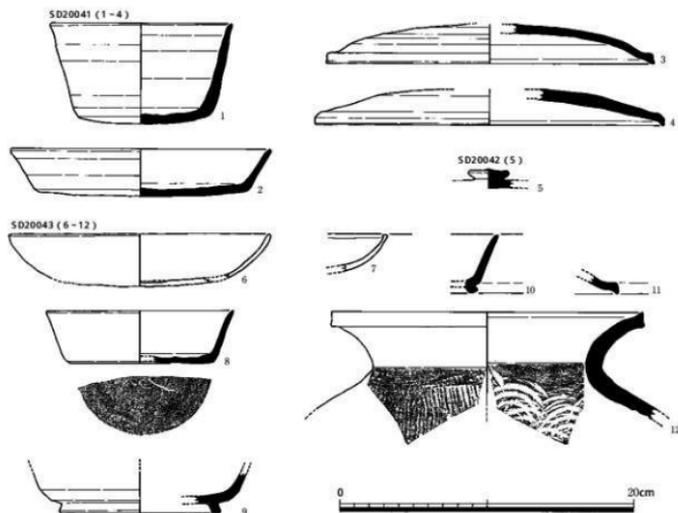


Fig.68 S D 20041・20042・20043出土遺物 (S = 1/3)

須恵器蓋 11は杯B蓋である。細片のため詳細は不明であるが、口縁部の屈曲は強く、胎土は灰色で砂粒少ない。

須恵器椀 12は椀Aである。口縁部は広く開き、端部に面を持つ。口縁端部は小さく上方へ引き上げる。内面同心円圧痕、外面縦方向の平行タタキ痕が残り、頸部は縦方向の平行タタキを丁寧にナデ消す。胎土は灰色で長石粒やや多く含む。

S F 20398 (西二坊大路) A D - A I 18 - 22区で検出した、S D 20010を西側溝、S D 20392を東側溝とする大路。東西側溝心間距離17.3 - 17.9cmを測り、道路心座標はX = - 144,675、Y = - 19,921.55である。路面上には路面硬化や波板状凹凸などはみられず、後世の紫掘小溝以外顕著な遺構も検出できなかった。

S F 20399 (坪内道路)(Fig.67) A G - A H 24 - 31区で検出した、S D 20041・20042を北側溝、S D 20043を南側溝とする道路。側溝心間距離320 - 325cm、残存路面幅255cm前後を測る。南側溝の方位に現れるように、若干南に偏向して存在し、Y = - 19,940においてX = - 144,674.3を測る。

溝

S D 20121 調査区北端Q32・33で検出した溝である。S B 20240を切る。幅27 - 32cm、深さ10 - 30cmを測り、断面形態が「U」字形を呈する。埋土は灰褐色の砂質シルトで、葉理等は観察できない。

S D 20121出土遺物(Fig.69) 出土遺物のうち土師器杯について報告する。

土師器杯 口縁部を小さく玉縁状に成形し、内面放射状噴文と口縁部に連続輪状噴文を、外面分割ミガキを有する。胎土は橙褐色で精良である。

S D 20220 (Fig.70) 調査区北東隅P - U32区で検出した溝である。底部は南に傾斜しており、南端と北端では約10cmの高低差がある。東半分が調査区外のため詳細は不明であるが、西岸の形態から溝主軸はN - 4°27' - Wであると推定される。埋土は亜角礫状の地山ブロックを主体とする褐色砂質シルトで、短期間に人為的に埋められた土と考えられる。

S D 20220出土遺物(Fig.71) 出土遺物のうち土師器皿について報告する。

土師器皿 皿Aである。口縁端部を玉縁に成形し、外面表面劣化のため調整等不明であるが、内面には放射状噴文を施す。胎土は橙褐色を呈し精良である。

土坑

S K 20015 調査区南端、A I 25区で検出した径240cm、深さ2 - 5cmを測り、不整形を呈する土坑である。S D 20043を切るが、攪乱により大半を破壊される。非常に浅い。S K 20020・20021・20024・20025などと同様の整地に関する遺構と考えられる。

S K 20015出土遺物(Fig.72)

出土遺物のうち須恵器杯(1)・須恵器蓋(2)について報告する。

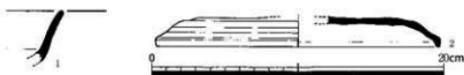


Fig.72 S K 20015出土遺物(S = 1/3)



Fig.69 S D 20121出土遺物(S = 1/3)



Fig.70 S D 20220土層断面図(S = 1/50)

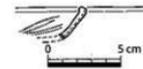


Fig.71 S D 20220出土遺物(S = 1/3)

須恵器杯 1 は体部の破片である。高台の有無等は不明である。胎土は灰色で砂粒少ない。

須恵器蓋 2 は杯B蓋である。復元口径19.3cm、残存高2.1cmを測り、天井部外面はヘラキリののちヨコナデ調整を行う。掴みの形状は不明である。内面に墨痕を有するが、文字の形を成さない。胎土は灰色で砂粒少ない。

S K 20017 (Fig.73) 調査区中央部、A G 26・27で検出した長軸205cm、短軸100cm、深さ25cmを測り、楕円形を呈する土坑。S K 20018・20020を切る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈し、底部は起伏少ない。埋土は黄灰色の中粒砂を主体とし、葉理を形成する。土坑下面より8世紀後半の多数の須恵器・土師器が出土した。大型の須恵器鉢や盤はS K 20017から破片の大半が出土したが、S K 20018出土のものと同接合関係を持ち、本来S K 20018に所属したものと考えられる。

S K 20017出土遺物 (Fig.74) 出土遺物のうち土師器杯 (1)・土師器蓋 (2)・土師器高杯 (3)・土師器椀 (8) 須恵器杯 (5・7)・須恵器蓋 (4)・須恵器皿 (6) について報告する。

土師器杯 1 は杯Bである。復元底径11.0cmを測る。内面暗文の存在が想定できるが表面劣化のため不明である。

土師器蓋 2 は杯B蓋である。復元口径17.0cmを測る。内外表面劣化のため調整等不明である。胎土は赤褐色を呈し赤色酸化土粒を多く含む。

土師器高杯 3 は高杯Aである。復元口径18.8cmを測る。内面には比較的密な放射状暗文を施すが、2次焼成のため不明瞭である。胎土は赤褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

土師器椀 8 は椀Bである。「く」字状に外反する口縁部と、上方に掴み上げる口縁端部を有する。体部中央付近には一対の把手を有する。外面縦方向のハケ調整、内面ユビオサエのち体部上半から口縁部に横方向のハケ調整を施す。

須恵器杯 5・7共に杯Bである。5は復元口径13.5cm、器高4.05cm、底径9.9cmを測る。外底面はヘラキリののちナデ調整を行い、口縁部外面は灰を被る。胎土は灰色で砂粒が少ない。7は復元口径19.3cm、器高5.55cm、復元底径13.9cmを測る。厚手で体部は緩やかに湾曲し、外底面はヘラキリののちナデ調整を行う。胎土は灰色で砂粒が少なく、微細な黒色粒子を含む。

須恵器蓋 4 は杯B蓋である。復元口径16.7cm、残存高1.85cmを測り、口縁部は強く屈曲する。胎土は灰色で砂粒が少ない。

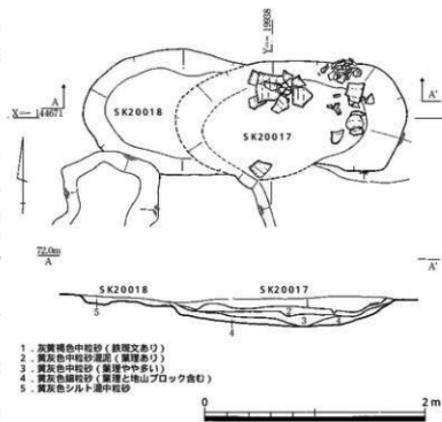


Fig.73 S K 20017・20018遺物出土状況平面・土層断面図 (S = 1/40)

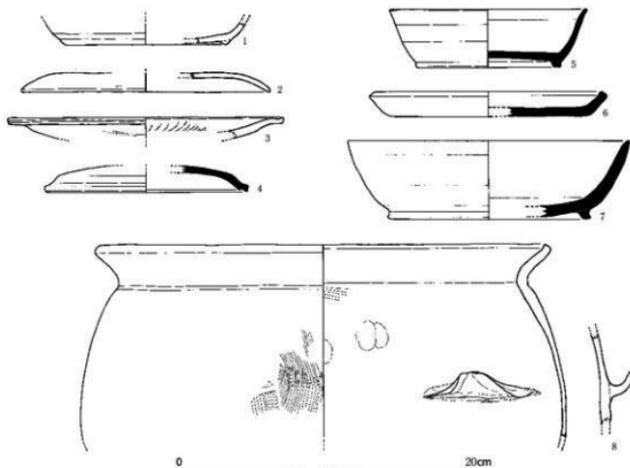


Fig.74 S K20017出土遺物 (S = 1/3)

須恵器皿 6は復元口径16.3cm、器高1.75cmを測り、直線的に外傾する体部を有する。口縁端部は四角く面を持ち、底部外面はヘラキリののち軽くナデ調整するが、一部磨滅する。胎土は灰色で砂粒少ない。

以上の遺物群は南都I期古段階のもので、8世紀後半の様相を示す。

S K20018 (Fig.73) 調査区中央部、AG26・27区で検出した短軸11.5cm、深さ4～9cmを測り楕円形を呈する土坑。S K20017に切られS K20020を切る。断面形態は緩やかな「U」字形を呈し、底部は起伏に富む。埋土は黄灰色の中粒砂を主体とする。土坑底部より8世紀後半の須恵器・土師器が出土した。S K20018出土遺物 (Fig.75) 出土遺物のうち須恵器蓋(1・2)・須恵器杯(3)・須恵器壺(4・5)・須恵器盤(6)・須恵器鉢(7)について報告する。

須恵器蓋 1は杯もしくは壺蓋である。復元口径9.6cmを測り、口縁端部の折り返しは短い。胎土は灰色で砂粒が少ない。2は杯B蓋である。復元口径16.0cm、残存高1.4cmを測り、口縁部の屈曲は緩やかである。焼成は白色で、口縁部のみ黒色化する。

須恵器杯 3は杯Bである。復元口径11.8cm、器高3.9cm、復元底径8.8cmを測る。外底面はヘラキリののちナデ調整を行う。胎土は灰色で砂粒が少ない。

須恵器壺 4は壺Aである。復元口径14.6cmを測り、強く張る肩部と短く直立する口縁部を有する。肩部は僅かに灰を被る。胎土は灰色で砂粒が少ない。5は壺Lである。底径9.8cm最大径15.8cmを測る。肩部には鈍い稜を持ち、底部には低い高台を有する。口縁部は全周にわたって端部を意図的に打ち欠く。胎土は灰色を呈し、長石粒や黒色粒子を多量に含む。

須恵器盤 6は復元口径49.0cm、器高12.5cmを測り、平坦な底部と強く外傾する体部を有する。体部

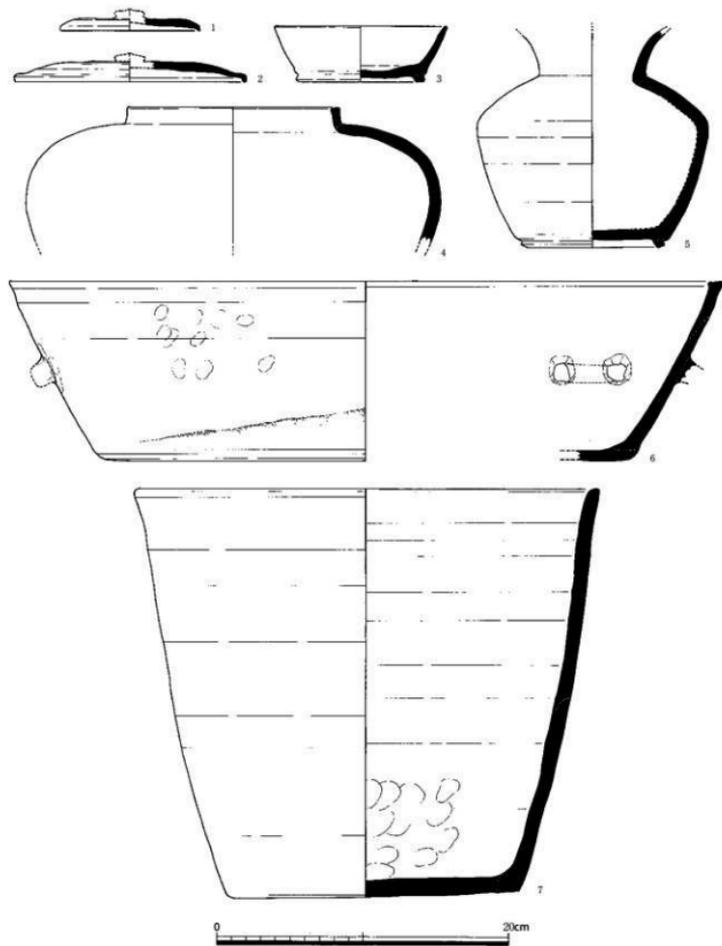


Fig.75 S K20018出土遺物 (S = 1/3)

にはユビオサエの痕跡を多く有し、中央部付近には一對の把手を有する。また、体部下半には木目の圧痕を有する。胎土は灰色で砂粒が少ない。

須恵器鉢 7は鉢Eである。口径31.9cm、器高28.4cm、底径20.1cmを測り、バケツ形の形態を呈する。内外面ヨコナデ調整を施し、体部内面下半にはユビオサエを多く残す。外面底部と体部の境界付近には粘土を掻き取った痕跡がみられる。胎土は灰色を呈し、長石粒をやや多く含む。

以上の遺物群は南都1期古段階のもので、8世紀後半の様相を示す。

S K 20020・20021・20024・20025 (Fig.76) 調査区中央部A B～A G 26・27区で検出した土坑群である。S K 20020は短軸100cmを測り、S K 20017・20028・20021・20025に切られる。S K 20021は長軸145cm、短軸97cmを測り、S K 20020・20025を切る。S K 20024は径170cmを測り、S K 20025を切る。S K 20025は短軸100cm前後を測り、S K 20020を切り、S K 20021・20024に切られる。いずれも深さ10cm以内の浅いもので、底部は若干起伏を有する。埋土は褐色灰色の砂質シルトを主体とし、攪乱のため葉理等初生の堆積構造を確認できない。人為的な埋土の可能性が高い。埋土の状況や土坑の規模等から、造成の際の整地の可能性もある。埋土内より奈良時代半ば～後半の遺物が出土している。

S K 20020出土遺物 (Fig.77) 土師器甕 (1) が出土した。復元口径15.3cmを測り、2次焼成を受ける。口縁端部を上方向に折り上げ、内面オサエ工具の痕跡が残る。外面は表面劣化のため調整等不明である。胎土は褐色で砂粒と赤色酸化土粒をやや多く含む。

S K 20021出土遺物 (Fig.77) 出土遺物のうち土師器皿 (2) について報告する。

土師器皿 復元口径21.0cmを測り、口縁端部を玉縁状に成形する。内外面表面劣化の為調整等は不明である。胎土は褐色で砂粒少ない。

S K 20024出土遺物 (Fig.77) 出土遺物のうち土師器杯 (4)・土師器皿 (5) 須恵器蓋 (3) について報告する。

土師器杯 4は杯Bである。底部のみの細片で、詳細は不明である。外面ナデ調整を施すが、内面は表面劣化の為調整等不明である。胎土は橙褐色を呈し赤色酸化土粒を少量含む。

土師器皿 5は皿Aである。復元口径18.5cm、器高2.3cmを測り、体部はナデにより強く屈曲する。口縁端部は玉縁状に成形し、内面には放射状のヘラミガキを、内面見込み部には連結輪状噴文を施す。

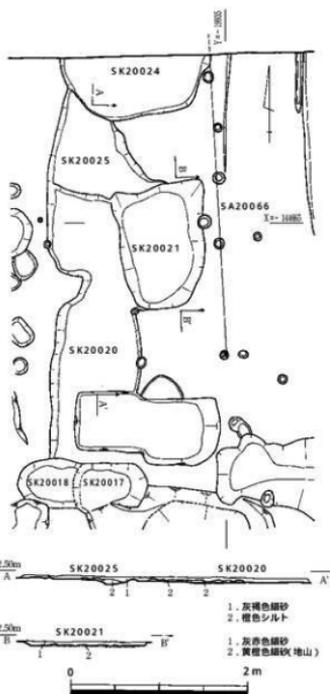


Fig.76 S K 20020・20021・20024・20025平面・土層断面図 (S = 1/50)

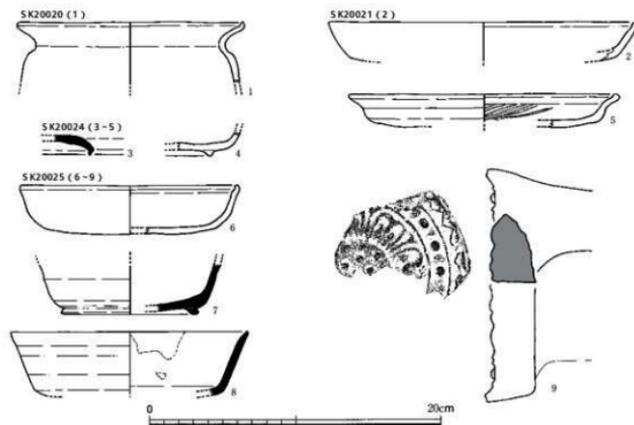


Fig.77 SK20020・20021・20024・20025出土遺物 (S = 1/3)

須恵器蓋 3は杯B蓋である。口縁部のみ残存する。湾曲して端部を下方に引き出す口縁部を有し、天井部外面はヘラケズリのものチナデ調整を施す。胎土は灰色で長石粒をややく含む。

以上の遺物群は平城Ⅲ - 南都Ⅰ期古段階のもので、奈良時代半ば - 後半の様相を示す。

SK20025出土遺物 (Fig.77) 出土遺物のうち土師器杯 (6)、須恵器杯 (7・8)、軒丸瓦 (9) について報告する。

土師器杯 6は杯Aである。復元口径15.7cm、器高3.4cmを測る。口縁端部を玉縁状に成形し、内外面チナデ調整を行う。内面暗文の存在も考えられるが、表面劣化の為確認できない。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を多く含む。

須恵器杯 7は杯Bである。復元底径9.4cmを測り、若干起伏を持つ体部を有する。底部外面はヘラケズリの軽いチナデ調整を施し、胎土は灰色で砂粒少ない。8は杯Aである。底部付近まで丁寧なチナデ調整を施し、口縁部内面には一部煤が付着する。胎土は灰白色で長石粒をややく含む。

軒丸瓦 9は複弁蓮華文軒丸瓦である。外区は線鋸歯文で珠文は大ぶりのものが巡る。胎土は灰白色で精良である。6301型式に相当する。

以上の遺物群は平城Ⅲ - 南都Ⅰ期古段階のもので、奈良時代半ば - 後半の様相を示す。

SK20039 (Fig.78) 調査区中央付近A G24 - 26区で検出した検出長軸550cm、短辺195 - 230cm、深さ35 - 45cmを測り、不整形長楕円形を呈する土坑である。底部は起伏に富む。SE20016に切られる。SD20041・20042と本来同一の遺構であった可能性があるが、詳細は不明である。土坑中央付近には南北方向に板を打ち込んだような痕跡が確認できる。埋土は概ね2層に分かれ、上層はSD20010に切られるが、下層はSD20010灰色砂と一体化している。下層は葉理が発達するが、上層は確認できず、埋没環境が異なっていた事が指摘できる。満底からは多数の瓦や土器片が出土した。

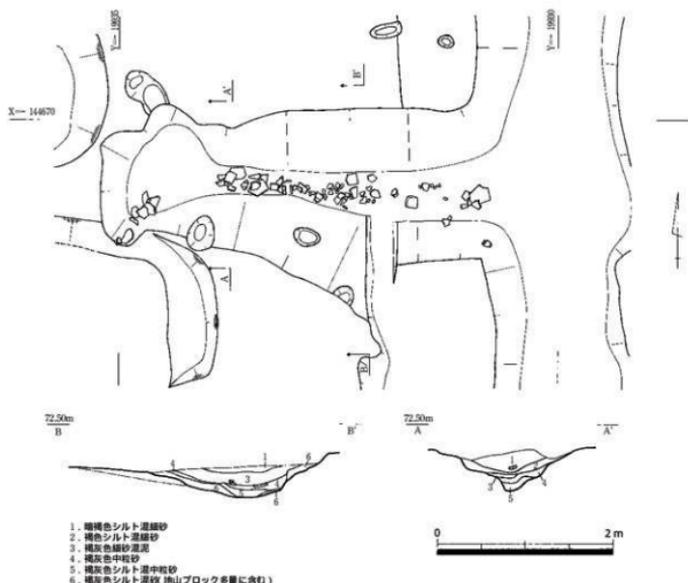


Fig.78 S K 20039平面・土層断面図 (S = 1/60)

遺構の形態や、仕切り板らしき痕跡から、トイレ遺構の可能性も考えられる。

S K 20039出土遺物 (Fig.79・80)

褐色細砂出土遺物 出土遺物のうち土師器杯(1)・須恵器蓋(3)・須恵器杯(4)・鞆羽口(2)について報告する。

土師器杯 1は杯Bである。復元口径16.0cmを測る。内面にはやや粗い放射状暗文を有する。胎土は赤褐色で砂粒少ない。

須恵器蓋 3は杯B蓋である。復元口径24.4cmを測り、口縁部はやや強く屈曲する。胎土は灰色でやや石英・長石粒を多く含む。

須恵器杯 4は杯Bである。復元口径30.0cm、器高4.95cmを測り、体部はやや湾曲しながら開く。胎土は淡灰色で砂粒少ない。

鞆羽口 2は土師質で、径6.1cm、通風孔径2.4cmを測る。被熱痕は顕著でなく、付着物もみられないが、一部に紐状の粘土瘤が付着する。胎土は淡褐色で石英・長石粒をやや多く含む。また、口縁部から5.5cm前後の位置に径6mmの円孔を穿つ。

暗灰色砂出土遺物 出土遺物のうち土師器皿(5・6)・土師器盤(10)・須恵器杯(7・9)・須恵器皿(8)・須恵器視(11)について報告する。

土師器皿 5は皿Aである。器高2.9cmを測り、口縁部を玉縁に成形する。内面ナデ調整、外面横方向のヘラケズリを施す。胎土は赤褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。6は皿Aである。器高3.5cmを測り、

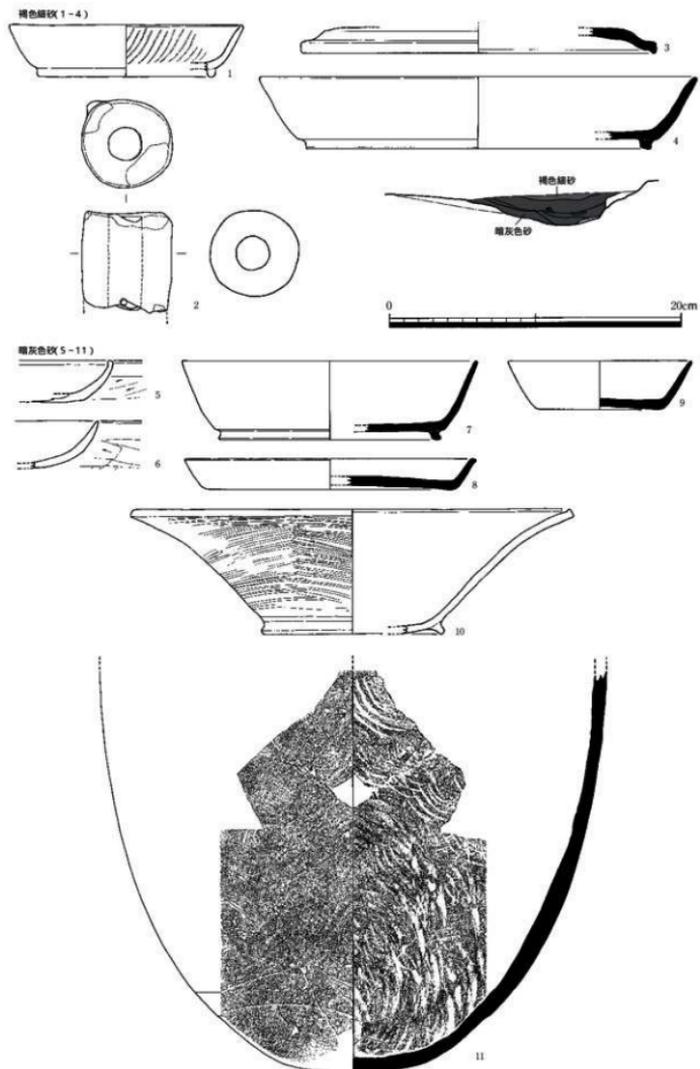


Fig.79 S K20039出土遺物 (1) (S = 1/3)

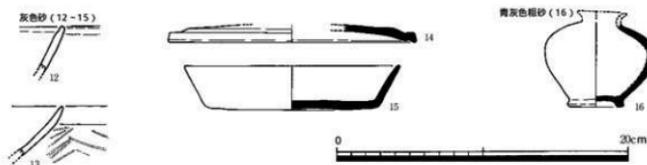


Fig.80 S K20039出土遺物(2)(S = 1/3)

湾曲する体部を有する。内面ナデ調整、外面横方向のヘラケズリを施す。胎土は赤褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

土師器盤 10は盤Bである。復元口径29.9cm、器高8.65cmを測り、外反しつづく体部と端部を上方向に摘み上げる口縁部を有する。内面ナデ調整、外面横方向の分割ミガキを施す。胎土は赤褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

須恵器杯 7は杯Bである。復元口径20.2cm、器高5.5cmを測り、外底面はヘラキリののち軽くナデ調整を施す。胎土は灰色で砂粒少ない。9は杯Aである。復元口径12.6cm、器高3.35cmを測り、外底面はヘラキリののち未調整である。内面には火禰がみられる。胎土は灰色で砂粒少ない。

須恵器皿 8は皿Cである。復元口径20.0cm、器高2.1cmを測り、口縁端部に面を持つ。外底面はヘラキリののち軽くナデ調整を施す。口縁部の一部には煤が付着する。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

須恵器椀 11は体部下半のみ残存する。外面並行タタキ痕を丁寧にナデ消し、内面には同心円状にあて具痕跡が残る。底部外面には底部成形時の台の痕跡とも考えられる沈線状の浅い圧痕が二条走る。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

これらの遺物群はいずれも南部I期古段階のもので、8世紀後半の年代が想定できる。

灰色砂出土遺物 出土遺物のうち土師器杯(12)・土師器椀(13)、須恵器蓋(14)・須恵器杯(15)について報告する。

土師器杯 12は杯Aである。口縁部に一条の沈線をもち、内外面ナデ調整を行う。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

土師器椀 13は椀Aである。緩やかに湾曲する体部を有し、内面ナデ調整、外面分割ミガキを施す。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

須恵器蓋 14は杯B蓋である。復元口径16.8cmを測り、口縁部の屈曲は弱い。胎土は灰色で砂粒は少ない。

須恵器杯 15は杯Aである。口径14.7cm、器高3.05cmを測り、底部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。2次焼成を受け、詳細は不明である。

これらの遺物群は出土量が少なく詳細な時期決定が困難であるが、およそ奈良時代後半の年代が想定できる。

青灰色粗砂出土遺物 出土遺物のうち須恵器壺(16)について報告する。

須恵器壺 16は壺Mである。底径3.9cmを測る。肩部には降灰がかかり、高台接地面には板状の圧痕がみられる。

S K 20340 調査区北西隅Q・R37区で検出した幅130cm、深さ15cm前後を測り、溝状を呈する土坑。溝の可能性もある。隣接する全ての遺構に切られる。埋土内に亜角礫状の地山ブロックを多量に含む。
S K 20340出土遺物 (Fig.81) 出土遺物のうち土師器蓋 (1)・土師器皿 (2・3)・土師器杯 (4)・須恵器蓋 (5) について報告する。

土師器蓋 1は杯B蓋である。外面分割ミガキ、内面ナデ調整を施し、胎土は橙褐色で精良である。

土師器皿 2は皿Aである。僅かに外反気味の口縁部を有し、内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施す。胎土は灰白色で精良である。

3は皿Cである。復元口径10.4cm、器高1.8cmを測り、内外面ナデ調整を施す。胎土は灰白色で精良である。

土師器杯 4は杯Aである。復元口径17.2cmを測り、内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施す。胎土は橙褐色を呈し、長石粒をやや多く含む。

須恵器蓋 5は口縁部の屈曲弱く、端部を直に折り曲げる。内外面ヨコナデ調整し、胎土は灰色で精良である。

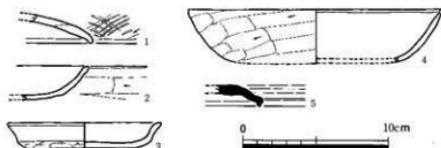


Fig.81 S K 20340出土遺物 (S = 1/3)

建物・柵列

S B 20033 (Fig.82) 調査区中央部A E・A F 28・29区で検出した桁行き三間、梁行き二間の建物。各柱間の平均距離は160.1cmを測る。北側桁行き512cm、東側梁行き338cm、南側桁行き458cm、西側梁行き330cmを測り、建物桁行き主軸はW-3°7'-Nである。

各柱穴は長軸約80cm、短軸約60cmの長方形、もしくは一辺約70cmの正方形を呈し、柱痕跡からは径約30cmの柱が使用されていたと考えられる。柱は抜き取りもしくは切り取りが行われており、最終的に丁寧に埋め戻していた。柱掘り方、柱痕跡いずれからも奈良時代半ばの土器が出土した。

S B 20033出土遺物 (Fig.84) 柱掘りおよび柱抜き取り跡より出土した遺物について報告する。

柱掘り方出土遺物 出土遺物のうち土師器杯 (3・4) について報告する。

土師器杯 3・4はともに柱穴aより出土した杯Bで、同一固体であると考えられる。細片のため詳細は不明であるが、断面四角形の貼り付け高台を有し、内面に連結輪状暗文を有する。胎土は橙褐色で精良である。

柱抜き取り跡出土遺物 出土遺物のうち須恵器杯蓋 (1・2) について報告する。

須恵器蓋 1は柱穴iから、2は柱穴dから出土した杯B蓋である。ともに口縁部の屈曲弱く、端部を小さく下方に揃み出す。胎土は1は灰色で砂粒少なく、2は灰色で長石粒をやや多く含む。

これらの遺物群は掘り方・抜き取りともに平城Ⅲに相当し、8世紀ごろの年代が想定される。

S B 20045 (Fig.82) 調査区中央部A D ~ A G 29 ~ 31区で検出した桁行き五間以上、梁行き二間の建物。

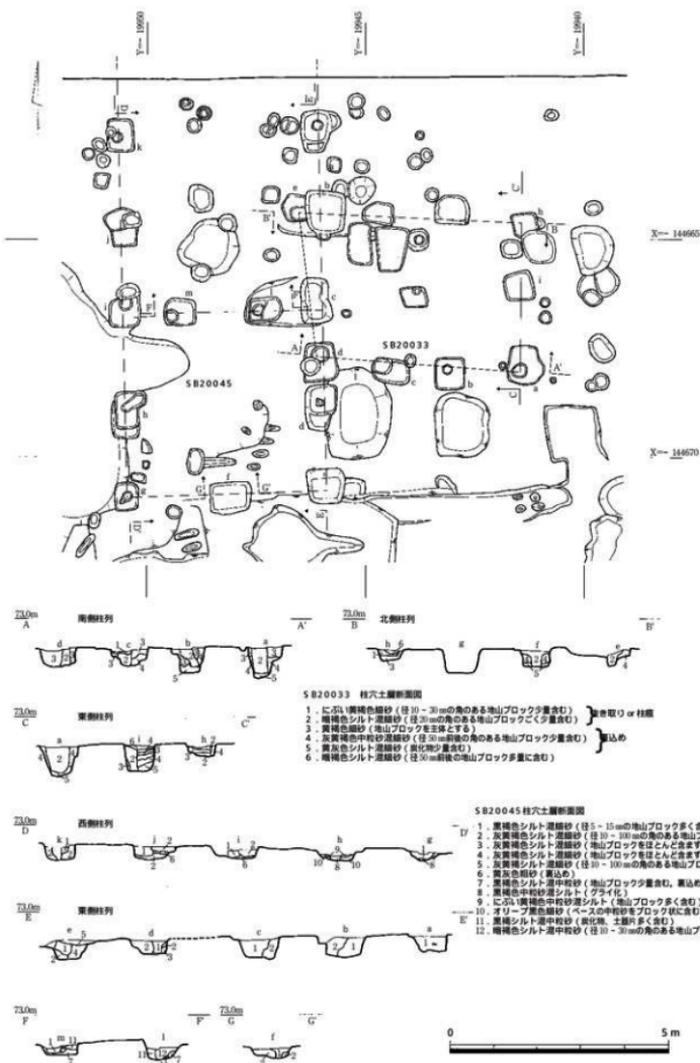


Fig.82 SB20033・20045平面・柱穴土層断面図 (S = 1/100)

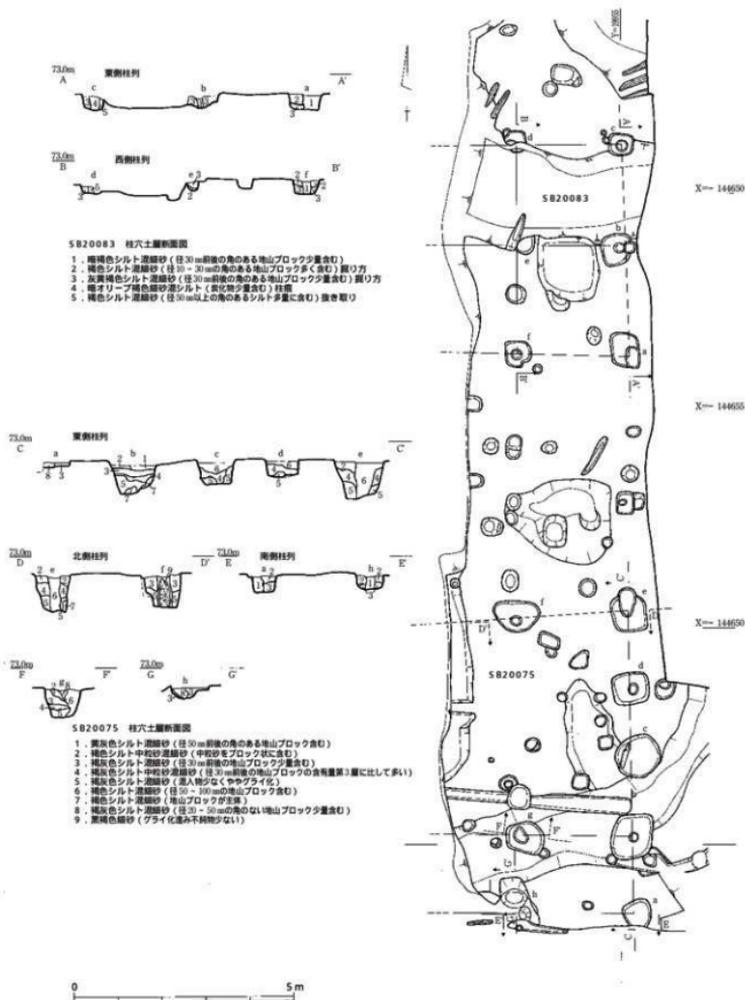


Fig.83 SB20075・20083平面・柱穴土層断面図 (S = 1/100)

中間部に仕切りを有すると考えられる。各柱間の平均距離は211.5cmを測る。西側残存桁行き834cm、東側残存桁行き835cm、南側梁行き455cmを測り、建物桁行き主軸はN-1°26'29"-Eである。

各柱穴は長軸約75cm、短軸約60cmの長方形、もしくは一辺約70cmの正方形を呈し、柱痕跡からは径約20cmの柱が使用されていたと考えられる。柱は抜き取りもしくは切り取りが行われており、最終的に丁寧に埋め戻していた。また、柱穴dには木製礎板が敷かれていた。柱掘り方からは8世紀後半の土器が出土した。

S B 20045出土遺物 (Fig.84) 堀方および柱抜き取り跡から出土した遺物について報告する。

柱掘り方出土遺物 出土遺物のうち須恵器杯(5・6・9)・須恵器蓋(7)について報告する。

須恵器杯 5は杯Bである。柱穴iより出土した。復元底径12.1cmを測り、高台はやや内側に貼り付ける。底部外面ヘラキリののち軽くナデ調整を行う。胎土は灰色で砂粒と黒色粒子をやや多く含む。6は杯Aである。柱穴iより出土した。復元口径18.2cm、器高3.85cmを測る。底部外面はヘラキリののち未調整である。胎土は灰白色で砂粒少ない。9は杯Bである。柱穴iより出土した。復元口径28.5cm、器高4.7cmを測る。底部外面はヘラキリののちヘラケズリを行い、胎土は灰白色で長石粒をやや多く含む。

須恵器蓋 7は杯B蓋である。柱穴iより出土した。復元口径22.6cmを測る。口縁部の屈曲は強く、全体的に扁平である。天井部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。胎土は灰色で砂粒少ない。

これらの遺物群は南部I期古段階に相当し、8世紀後半頃の年代が想定できる。

柱抜き取り跡出土遺物 出土遺物のうち須恵器蓋(8)について報告する。

須恵器蓋 8は杯B蓋である。柱穴jより出土した。復元口径23.2cmを測り、口縁部の屈曲せず端部を下方に揃い出す。天井部外面はヘラキリののちナデ調整を施す。胎土は灰白色で長石を少量含む。

S B 20075 (Fig.83) 調査区西側A C - A F 32・33区で検出した桁行き二間以上、梁行き三間で、南面に廂を有する建物。各柱間の平均距離は桁行き128cm、梁行き90.3cmを測る。東側梁行き264cmを測り、建物梁行き主軸はN-1°48'0"-Wである。

各柱穴は建物本体柱穴では長軸約50cm、短軸約35cmの長方形、もしくは一辺約50cmの正方形を呈し、廂柱は径約30cmの円形を呈する。柱痕跡からは径約20cmの柱が使用されていたと考えられる。柱は抜き

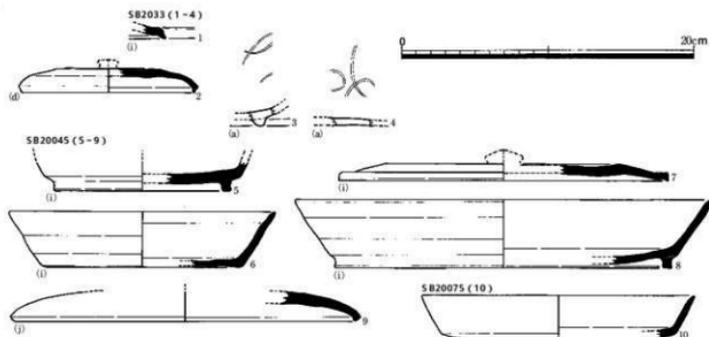


Fig.84 S B 20033・20045・20075出土遺物 (S = 1/3)

取りもしくは切り取りが行われていたと考えられる。柱穴fには直径20cmの柱が残存し、柱穴cには根固めの加工木材が敷設されていた。

S B 20075出土遺物 (Fig.84) 柱抜き取り跡より出土した遺物について報告する。

柱抜き取り跡出土遺物 出土遺物のうち須恵器杯(10)について報告する。

須恵器杯 10は杯Aである。柱穴c出土のものd出土のものが接合した。復元口径18.7cmを測り、全体的に磨滅が著しい。胎土は灰色で砂粒多く、口縁部にはイブシがかかる。

S B 20083 (Fig.83) 調査区西側Y-A A32・33区で検出した梁行き二間を測り、中間部に東柱を有する建物。各柱間の平均距離は123.1cmを測る。東側梁行き245cmを測り、建物桁行き主軸はN-2°24'42"-Wである。

各柱穴は長軸約40cm、短軸約32cmの長方形、もしくは一辺約27cmの正方形を呈し、柱痕跡からは径約10cmの柱が使用されていたと考えられる。柱は抜き取りもしくは切り取りが行われている。柱抜き取り痕からは8世紀後半～9世紀初頭の土器が出土した。

S B 20190 (Fig.86) 調査区北端P・Q32・33区で検出した南面に廂を有する建物である。大半が調査区外のため桁行き、梁行き等は不明である。建物桁行き主軸はN-4°36'38"-Wである。

建物本体柱穴および廂柱穴は14～30cmの円形を呈する。遺物は細片のみの出土のため時期等不明であるが、切り合い等から8世紀末～9世紀代のものと考えられる。

S B 20190出土遺物 (Fig.85) 柱抜き取り跡より出土した遺物について報告する。

柱抜き取り跡出土遺物 出土遺物のうち土師器甕について報告する。

土師器甕 柱穴dより出土した。「く」字状に外反させたのち端部を玉縁状に折り返す口縁部を有し、内外面板状工具によるナデ調整を施す。胎土は橙褐色で砂粒を多く含む。

S B 20210 (Fig.86) 調査区北側P・Q32・33区で検出した建物桁行き三間以上、梁行き二間を測る。各柱間の平均距離は90.7cmを測る。建物桁行き主軸

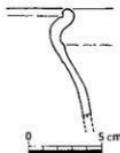
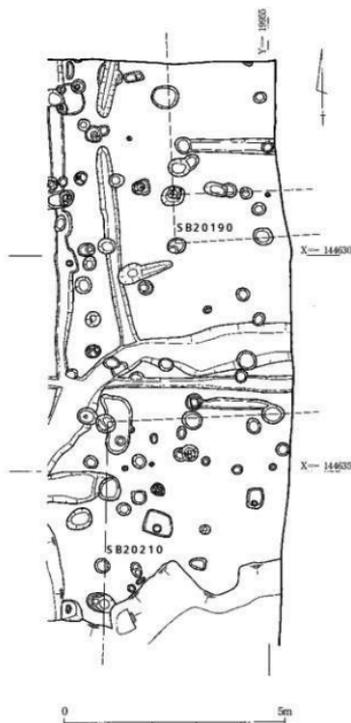


Fig.85 S B 20190d出土



遺物 (S = 1/3) Fig.86 S B 20190・20210平面図 (S = 1/100)

はN-4°7'5"-Eである。各柱穴は長軸24~17cmの円形を呈する。柱抜き取り痕からは8世紀後半~9世紀前半の土器が出土した。S B 20210出土遺物 (Fig.87) 柱抜き取り跡から出土した遺物について報告する。

柱抜き取り跡出土遺物 出土遺物のうち製塩土器(1) 土師器椀(2) について報告する。

製塩土器 1は柱穴dより出土した。復元口径12.4cmを測り、全面ユビオサエ成形を行う。胎土は淡褐色で砂粒を多量に含む。

土師器椀 2は柱穴dより出土した。椀Aである。復元口径14.4cmを測り、内面ナデ調整、外面ヘラケズリのちへらミガキを行う。胎土は淡橙褐色で精良である。

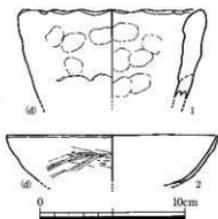


Fig.87 S B 20210出土遺物 (S = 1/3)

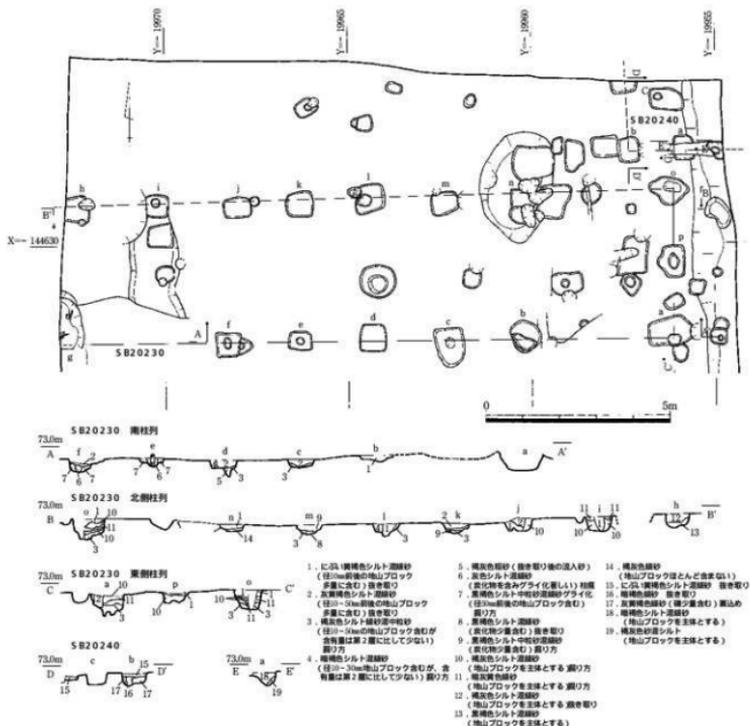


Fig.88 S B 20230・20240平面図・土層断面図 (S = 1/20)

これらの遺物は出土量が少なく年代決定が困難であるが、おおよそ南部1期に相当するものと考えられ、8世紀後半～9世紀前半の年代が想定できる。

S B 20230 (Fig.88) 調査区北半R・T33～38区で検出した桁行き七間以上、梁行き二間を測る建物。各柱間の平均距離は桁行き103.1cm、梁行き104cmを測り、桁行き東一間のみ平均205cmを測る。北側残存桁行き818cm、東側残存桁行き820cm、東側梁行き208cmを測り、建物桁行き主軸はW-0°42'1"～Nである。

各柱穴は長軸35cm、短軸約25cmの長方形、もしくは一辺約35cmの正方形を呈し、柱痕跡からは径約15～20cmの柱が使用されていたと考えられる。柱は抜き取りもしくは切り取りが行われている。柱抜き取り痕からは8世紀後半の土器が出土している。

S B 20230出土遺物 (Fig.89) 掘り方および柱抜き取り跡から出土した遺物について報告する。柱抜き取り跡出土遺物 出土遺物のうち土師器皿(1・3)・土師器碗(2) 須恵器杯(4・6)・須恵器蓋(5)・墨書土器(7)について報告する。

土師器皿 1は柱穴gより出土した皿Aである。体部はナデによって屈曲し、口縁端部を玉縁に成形する。内面には放射状暗文を有し、胎土は暗褐色で精良である。3は柱穴hより出土した皿である。復元口径15.6cmを測り、口縁部はナデにより屈曲する。胎土は褐色を呈し雲母を少量含む。

土師器碗 2は柱穴g出土の碗Aである。口径14.7cm、器高4.7cmを測り、内面ナデ調整、外面ヘラケズリののち粗い分割ミガキを施す。胎土は橙褐色で精良である。

須恵器杯 4は柱穴e出土の杯Aである。外底面はヘラキリののち軽いナデ調整を施す。胎土は灰白色で、長石粒をやや多く含む。6は柱穴g出土の杯Bである。復元口径10.4cm、器高3.4cm、復元底径7.4cmを測り、外底面はヘラキリののち軽いナデ調整を行う。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

須恵器蓋 5は柱穴e出土の杯B蓋である。細片のため詳細不明である。胎土は灰色で砂粒は少ない。

墨書土器 7は柱穴g出土のもので、須恵器杯A転用のものである。外底面に文字を記すが、判読は困難である。胎土は灰色で砂粒は少ない。

掘り方出土遺物 出土遺物のうち土師器杯(8) 須恵器杯(9)について報告する。

土師器杯 8は柱穴fより出土した細片である。外面ヘラケズリ、内面放射状暗文を有する。胎土は橙褐色で精良である。

須恵器杯 9は杯Bである。高台は若干内側に貼り付ける。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

これらの遺物群は3の土師器皿のように9世紀後半の特徴を持つものもみられるが、これは混入と考えられ、柱穴抜き取り後に埋置されたと考えられる土師器碗(2)が南部1期古段階のものであることから、建物の廃絶時期を8世紀後半に推定することができる。

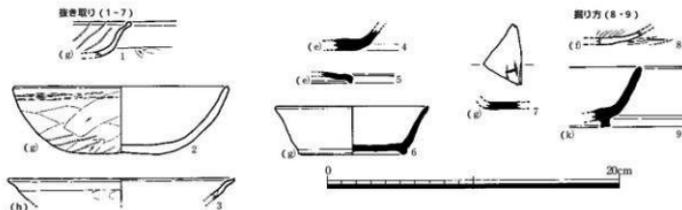


Fig.89 S B 20230出土遺物 (S = 1/3)

S B 20240 (Fig.88) 調査区北端P・Q32・33区に位置する建物である。大半が調査区外のため詳細は不明である。

各柱穴は長軸35cm、短軸30cmの長方形を呈する。柱抜き取りのち丁寧に埋め戻している。柱抜き取り痕より8世紀後半の遺物が出土している。

S B 20240出土遺物 (Fig.90) 掘り方および抜き取り痕より出土した遺物について報告する。

柱掘り方出土遺物 出土物のうち土師器杯(3)・土師器襖(4) 須恵器杯(5)について報告する。

土師器杯 3は柱穴bより出土した杯Bである。底部の細片のみで詳細は不明である。表面劣化のため調整等は不明である。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

土師器襖 4は柱穴bより出土した。口縁端部のみの破片で、内面横方向のハケをナゲ消す。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒を少量含む。

須恵器杯 5は柱穴bより出土した杯Bである。高台はや

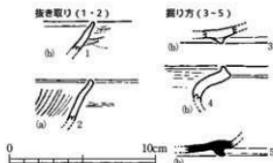


Fig.90 S B 20240出土遺物 (S = 1/3)

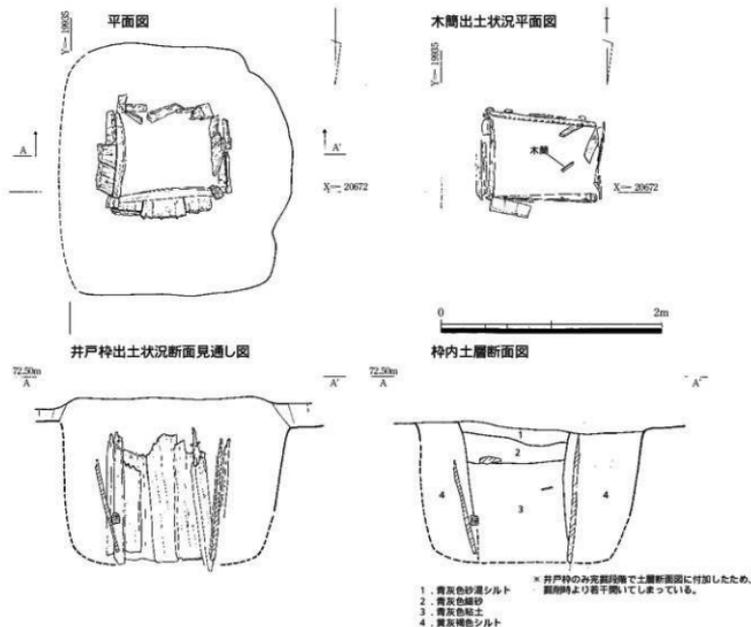


Fig.91 S E 20016平面・土層断面・断面見通し図 (S = 1A0)

や内側に貼り付ける。底部外面はヘラキリののち未調整であり、胎土は灰色で精良である。

柱抜き取り跡 出土遺物のうち土師器碗(1)・土師器杯(2)について報告する。

土師器碗 1は柱穴bより出土した碗Aである。外面にはヘラミガキが残る。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を少量含む。

土師器杯 2は柱穴a出土の杯Aである。口縁端部を玉縁状に成形し、内面には放射状暗文を施す。胎土は橙褐色で雲母をやや多く含む。

これらの遺物群は、いずれも細片で時期決定が困難である。ただ、抜き取り跡より出土した碗(1)は南都I期古段階の特徴を有しており、建物廃絶時期の上限を示す。

井戸

S E 20016 (Fig.91) A G - A H 26区で検出した井戸である。坪内道路 S F 20399上に位置し、攪乱により上部を削平される。掘り方は一辺約200cm程度の隅丸方形を呈し、枠は一辺約98cmの正方形を呈する。縦板横棧組の構造を持ち、3枚の縦板を5cm角の横棧が固定する。底部に砂利等は敷かない。上部

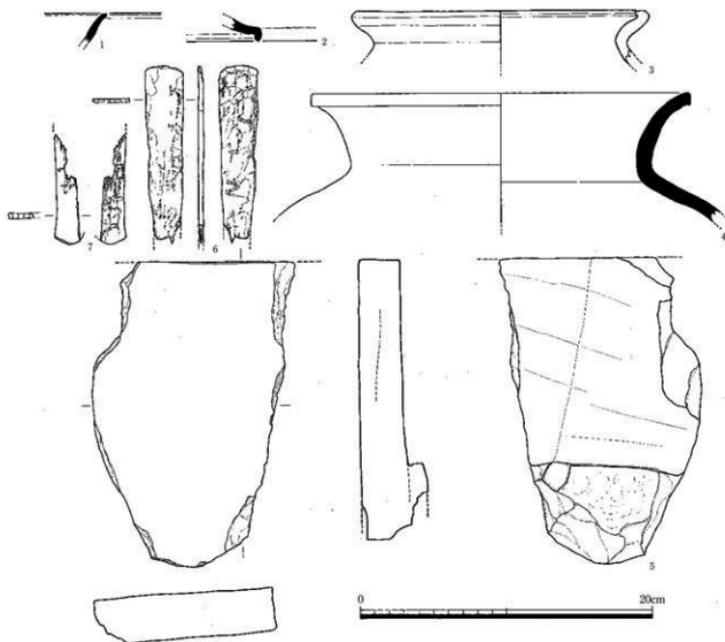


Fig.92 S E 20016出土遺物(1)(S = 1/3)

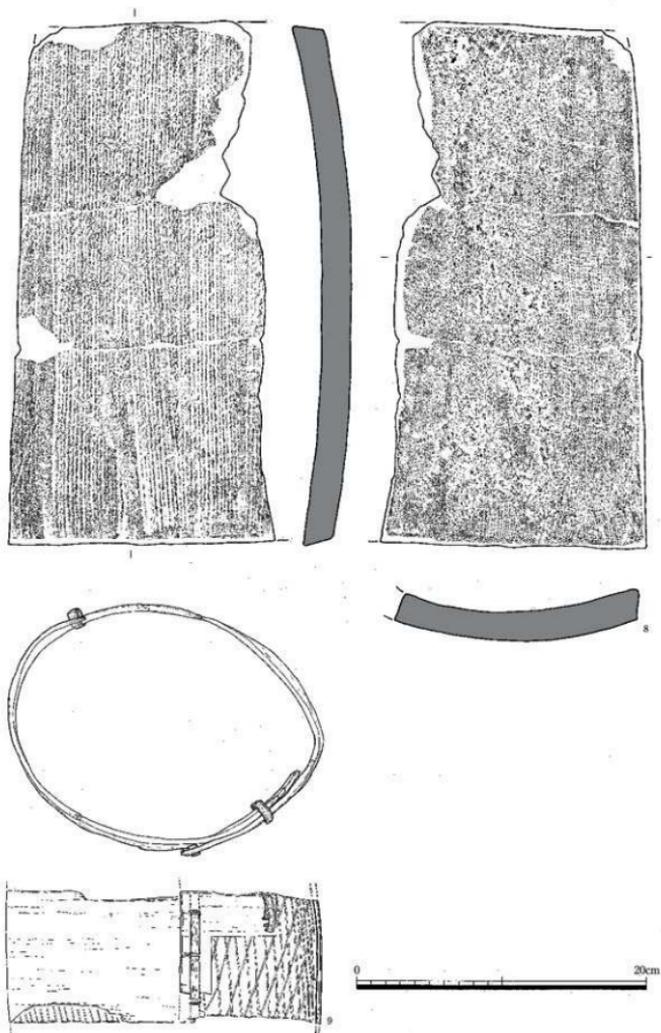


Fig.93 SE 20016出土遺物 (2) (S = 1 / 3)

付近には裏込め部分に平瓦が置かれていた。椀内の埋土は概ね2層で、上層より青灰色細砂（図中第1・2層）青灰色粘土（図中第3層）である。遺物はほとんどみられないが、青灰色粘土上部より木簡が出土した。

S E 20016出土遺物（Fig.92・93） 椀内出土遺物および椀材について報告する。

椀内出土遺物 出土遺物のうち須恵器杯（1）・須恵器蓋（2）・須恵器甕（4）・土師器甕（3）・不明土製品（5）木簡（6・7）曲物（9）について報告する。

須恵器杯 1は破片のため詳細不明であるが、口縁端部には斜行する面を持つ。胎土は灰白色で精良である。

須恵器蓋 2は杯B蓋である。細片のため口径等は不明である。胎土は灰白色で精良である。

須恵器甕 4は復元口径26.0cmを測り、口縁端部は僅かに垂下した面を持つ。外面タタキ痕を、内面同心円文をそれぞれ丁寧にナデ消す。胎土は灰色で黒色粒子を多く含む。

土師器甕 3は復元口径20.4cmを測り、「く」字状に外反させ、端部を小さく折り返す口縁部を有する。胎土は長石・石英をやや多く含む。

不明土製品 5は厚さ3.2cmを測る板状の製品である。図上下端に1段の段差を有し、段を有する面の片側には煤が付着する。胎土は淡褐色を呈し、雲母と石英を少量含む。陶棺や道具瓦などの可能性が考えられるが、用途は不明である。

木簡 6・7は本来同一の木簡であったと考えられる。6は残存長12.3cm、頂部幅2.6cm、厚さ4mmを測る。7は残存長7.6cm、厚さ4mmを測る。下端部分に両側から浅い切り込みを施し、撥状の形状を呈する。上端はへら状に丸く削り出す。上端の削りは二次的なもので、木簡としての用途を失ったのち何らかの土製品に再加工されたものと考えられる。文字は重複が多く判読が非常に困難である。僅かに「郷」と思われる文字が存在することなどから荷札木簡などの可能性も考えられる。

曲物 9は長径21.6cm、短径16.8cmを測る。厚さ3mmの板材に斜格子状の切り込みを入れ、輪状に曲げたのち樹皮で綴じる。底板は残っていない。当初より底板を抜いていた可能性もある。現在は高さ9.2cm分が残存するが、本来はもう少し残存していたと考えられる。

椀材 椀材に使用していた平瓦（8）について報告する。

平瓦 8は縦半分を欠損するため幅は不明であるが、長さは36.4cm、厚さ2.2cmを測る。凸面縞目タタキ痕、凹面布目痕を残す。端面はいずれもへらケズリを施し、凹面には著しく煤が付着する。

S E 20348（Fig.94） 調査区北半R35区で検出した井戸である。掘り方は直径約100cmの円形を呈し、椀と掘り方の間にはほとんど隙間がない。薄板を曲げた曲げ物椀の外側に幅20cm前後、厚さ5mmの縦板を巡らせ椀材とする。椀内埋土は概ね3層で、上層より暗褐色砂質土、暗褐色粘質土、灰色粘土である。底部に砂利等は敷かない。底部曲げ物内からは上下にわたって遺物が出土した。埋土内からは各種食器類のほか、瓦などが多数出土した。椀内出土遺物はいずれも8世紀後半のものである。

S E 20348出土遺物（Fig.95・96） 椀内埋土から出土した遺物について報告する。

暗褐色土砂質土出土遺物 出土遺物のうち土師器椀（1）・土師器皿（2）・須恵器杯（3）・須恵器杯蓋（4）・須恵器壺（5）奈良三彩杯（P.L.55）について報告する。

土師器椀 1は椀Aである。復元口径12.6cm、器高3.7cmを測り、内面ナデ調整を施す。表面劣化の為外面調整は不明である。胎土は橙褐色で長石粒を少量含む。

土師器皿 2は皿Aである。復元口径15.4cm、器高2.2cmを測り、内面ナデ調整、外面へらケズリを施す。胎土は淡橙褐色を呈し、精良である。

須恵器杯 3は杯Aである。復元口径10.3cm、器高2.9cm、復元底径7.5cmを測り、内外面ヨコナデ調整を施す。底部外面はヘラキリののち未調整である。

須恵器蓋 4は杯B蓋である。復元口径13.5cm、器高2.05cmを測り、内外面ヨコナデ調整を施す。胎土は灰白色で精良である。

須恵器壺 5は壺Mである。復元底径3.6cmを測り、高台には初痕がみられる。胎土は灰色で長石粒をやや多く含み、肩部には降灰がかかる。

奈良三彩杯 細片のため写真のみ掲載した。器形の全体像は不明であるが、内外面に緑釉と淡緑釉を施す。胎土は白色で精良である。

これらの遺物はいずれも南都I期古段階に相当し、8世紀後半の年代が考えられる。

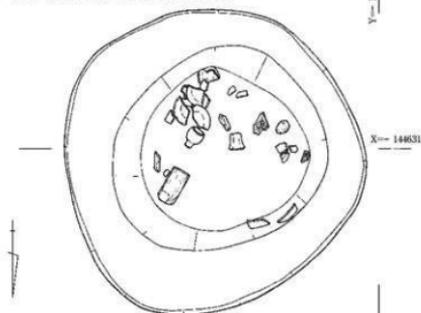
暗褐色粘質土出土遺物 出土遺物のうち土師器碗(6)・土師器皿(7~9)・土師器壺(10~13)、須恵器杯(14~17)・須恵器壺(18~20)について報告する。

土師器碗 6は碗Aである。復元口径13.2cmを測り、内面ナデ調整、外面ユビオサエとナデ調整ののち分割ヘラミガキを施す。胎土は褐色で金雲母を含む。

土師器皿 いずれも皿Aである。やや器高が高く、口縁端部を玉縁に仕上げたもの(7)と、なだらかに立ち上がる体部と丸く納める口縁端部を有するもの(8・9)がある。いずれも内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施す。7は復元口径17.9cm、器高3.5cm、8は復元口径18.2cm、器高3.0cm、9は口径18.7cm、器高3.0cmを測り、9の底部外面には「天」の墨書がある。

土師器壺 いずれも壺Bである。大型で胎土、調整の粗いもの(10)と、小型で精良な胎土と丁寧な調整を施す

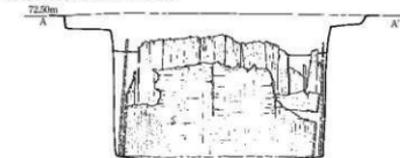
暗褐色砂質土層遺物出土状況平面図



暗褐色粘質土層遺物出土状況平面図



杵核検出状況見直し断面図



土層断面図

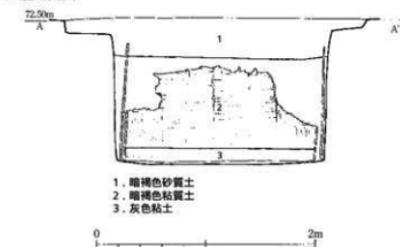


Fig.94 SE20348平面・見直し断面図 (S = 1/40)

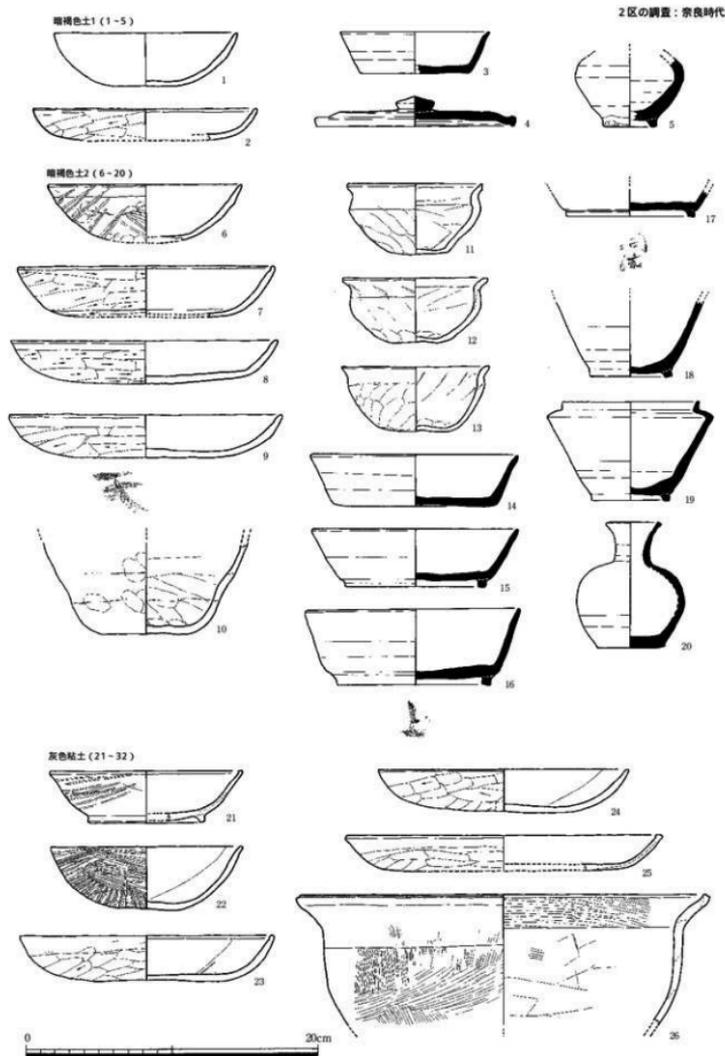


Fig.95 SE 20348出土遺物(1)(S = 1/3)

もの(11~13)がある。10はコビオサエで成形し、内面ナデ調整を施す。体部には粘土紐の接合痕を明瞭に残す。胎土は淡褐色を呈し長石・石英・チャート粒を多量に含む。11~13はいずれも外面コビオサエ、内面板状工具によるナデを施す。11は口径9.2cm、器高4.9cm、12は復元口径9.8cm、器高4.5cm、13は口径10.0cm、器高4.5cmを測り、いずれも褐色で精良な胎土を有する。

須恵器杯 14は杯Bである。口径14.0cm、器高3.6cm、底径11.2cmを測り、底部外面は粘土紐巻上げ痕をナデ消す。底部外面には火禰がみられる。胎土は灰色で精良である。15~17は杯Aである。15は復元口径14.0cm、器高4.0cm、復元高台径9.6cm、16は口径14.8cm、器高5.3cm、高台径10.6cm、17は復元高台径8.8cmを測る。底部外面の調整は15・17がヘラキリののち軽いナデ調整、16はヘラキリののち未調整である。胎土はいずれも灰色で長石粒をやや多く含む。16の底部外面には「上」、17の底部外面には「同法」の墨書を有する。

須恵器壺 18は壺Mである。高台径5.6cmを測り、底部外面ヘラキリののち板状圧痕がつく。胎土は灰白色で精良である。19は壺Eである。復元口径9.3cm、器高6.9cm、高台径5.3cmを測り、底部外面ヘラキリを行う。胎土は灰色で精良である。20は壺Lである。口径3.2cm、器高8.8cm、底径4.6cmを測り、底部外面はヘラキリののちオサエを施す。肩部には降灰がみられる。胎土は灰色で長石粒をやや多く含む。

これらの遺物はいずれも南部Ⅰ期古段階に相当し、8世紀後半の年代が考えられる。
灰色粘土出土遺物 出土遺物のうち土師器杯(21)・土師器碗(22)・土師器皿(23~25)・土師器鍋(26)・須恵器蓋(27)・須恵器平瓶(28)・木製品(29~32)について報告する。

土師器杯 21は杯Bである。復元口径13.0cm、器高3.6cmを測り、口縁端部を玉縁に成形する。内面ナデ調整、外面ナデ調整ののち分割ミガキを施す。胎土は淡褐色で精良である。

土師器碗 22は碗Aである。口径13.0cm、器高4.4cmを測り、内面ナデ調整、外面コビオサエののちヘラケズリを施し、その後3分割の分割ミガキを施す。胎土は褐色で長石粒を少量含む。

土師器皿 23は皿Aである。23・25は口縁端部を玉縁に成形し、24は丸く納める。いずれも内面ナデ調整、外面ヘラケズリを施し、23は底部内面に「×」のヘラ記号を有する。23は口径17.2cm、器高3.2cm、24は口径17.2cm、器高3.0cm、25は復元口径21.6cm、器高1.5cmを測る。胎土については、23・24は橙褐色、25は灰白色を呈し、いずれも精良である。

土師器鍋 26は鍋Aである。復元口径27.8cmを測り、緩やかに屈曲する口縁部を有する。内面はハケ調整ののち頸部以下を板状工具でナデ消す。外面は縦方向ののち斜め方向のハケ調整を施す。胎土は淡褐色で長石、石英、赤色酸化土粒をやや多く含む。

須恵器蓋 27は杯B蓋である。口径9.0cm、器高1.5cmを測り、内面ヨコナデ調整、外面ヘラキリののちナデ調整を施す。天井部外面には降灰がみられる。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

須恵器平瓶 28は把手と口縁

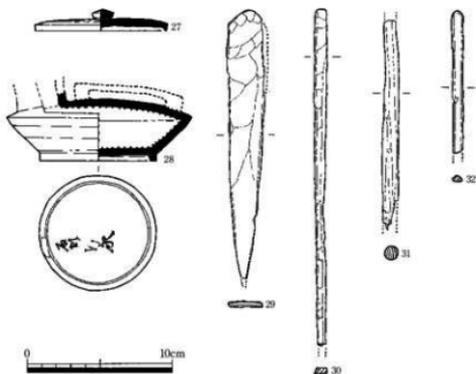


Fig.96 S E 20348出土遺物(2)(S=1/3)

部を欠損する。破断部の観察から意図的な打ち欠きの可能性が看取できる。底径8.0cm、胴部最大径12.8cmを測る。胎土は灰色で黒色粒子を少量含む。底部外面には「石川□□」の墨書がみられる。「石川」の文字と残り2文字は筆跡が異なる。

木製品 29は箭串と考えられる。残存長18.6cm、厚さ0.4cmを測り、下端を尖らせる。墨書等はみられない。30～32は用途不明の棒状木製品である。30は残存長23.3cm、幅0.8cmを測り、全体的に粗い加工痕を有する。31は残存長14.5cm、直径1.1cmを測り、表面を研磨する。輪の可能性もある。32は残存長9.9cm、幅6mm前後を測り、角部分を面取りする。

これらの遺物はいずれも南部Ⅰ期古段階に相当し、8世紀後半の年代が考えられる。

S E 20364 (Fig.97) 調査区北隅Q34区で検出した井戸である。S K 20381を切る。掘り方は長軸135cm、短軸105cmの楕円形を呈する。枠は一辺約70cm、幅約20cmの横板を組み合わせた正方形枠と、縦板を合わせた形態を呈する。最下層には径45cmの曲げ物を設置して水溜めとする。埋土は概ね3層で、上層から黒褐色細砂、褐灰色細砂、黒褐色シルトである。底部には砂利を敷く。井戸枠は下半部分のみ残存し、

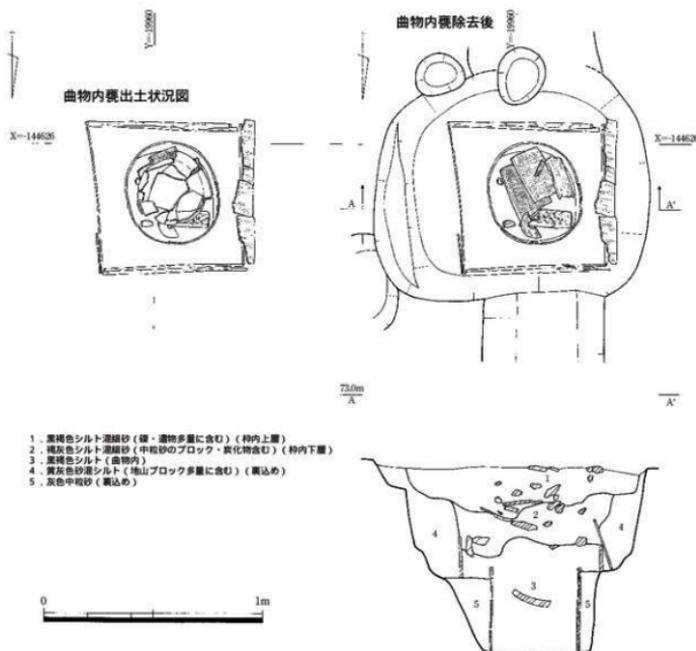


Fig.97 S E 20364平面・土層断面図 (S = 1/20)

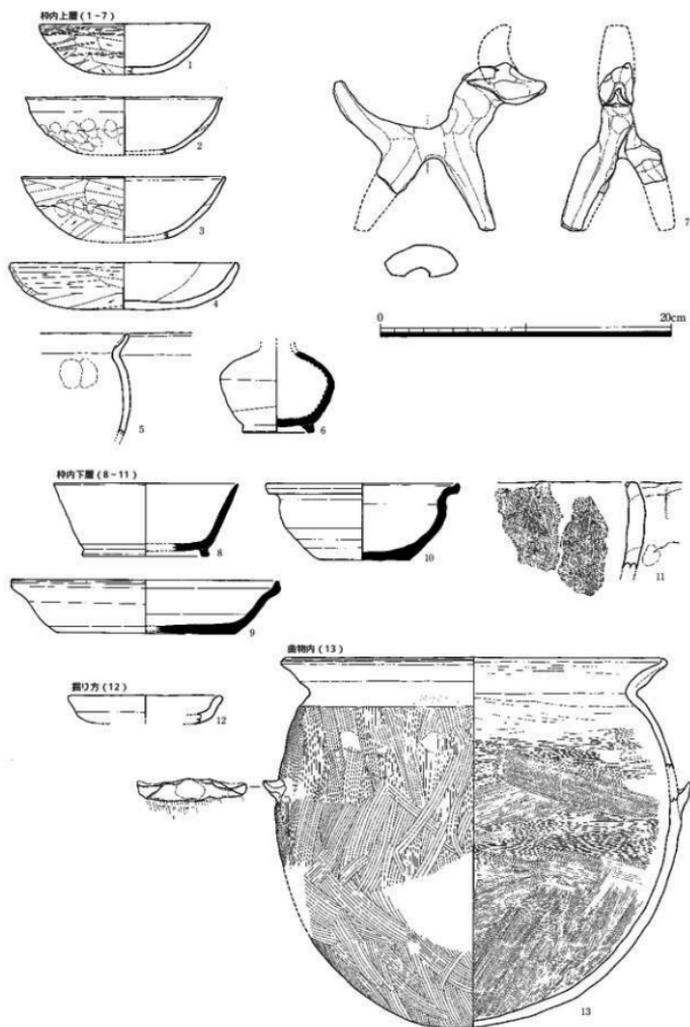


Fig.98 S E 20364出土遺物 (1) (S = 1/3)

上半は抜き取られている。断面観察からは井戸杵抜き取りののち人為的に埋め戻されたと考えられる。底部曲物内には多数の瓦と、大型の甕が投棄されていた。椀内上層より8世紀末～9世紀初頭の遺物が出土した。

S E 20364出土遺物 (Fig.98～100) 椀内および裏込めから出土した遺物について報告する。

黒褐色細砂出土遺物 出土遺物のうち土師器椀(1～3)・土師器皿(4)・土師器甕(5)・須恵器壺(6)・土馬(7)について報告する

土師器椀 1は椀Aである。復元口径11.6cm、器高3.5cmを測り、内面ナデ調整、外面ナデ調整のちヘラケズリ、分割ミガキを施す。胎土は橙褐色で精良、表面には化粧土を塗布する。2は椀Cである。復元口径13.5cmを測り、外面ユビオサエ、内面ナデ調整を行う。体部外面には粘土紐の接合痕を有する。胎土は橙褐色で雲母をやや多く含み、表面には化粧土を塗布する。3は椀Aである。復元口径14.0cmを測る。内面ナデ調整、外面ヘラケズリを行い、ヘラミガキはみられない。胎土は褐色で長石粒を少量含む。

土師器皿 4は皿Aである。口径15.8cm、器高3.2cmを測り、内面ナデ調整、外面丁寧なヘラケズリを行う。内面のナデは右回転でナデ上げを行い、体部2箇所に煤が付着する。胎土は褐色で雲母やや多い。

土師器甕 5は比較的小型のものである。内外面ナデ調整を行い、口縁部内面は粘土貼付部分で剥離する。胎土は褐色で精良である。

須恵器壺 6は壺Mである。底径4.0cmを測り、体部下半に粘土接合痕を有する。胎土は暗灰色で長石粒をやや多く含む。

土馬 7は体部断面「へ」字状に開くいわゆる都城型土馬である。前肢1本と後肢2本、鬣部分を欠損する。顔面は粘土板を貼り付けて成形し、胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を多く含む。

これらの遺物群は南都I期中段階の様相を示し、8世紀末～9世紀初頭の年代が想定できる。

褐色細砂出土遺物 出土遺物のうち須恵器杯(8・9)・須恵器壺(10)、製塩土器(11)について報告する。

須恵器杯 8は杯Bである。復元口径12.6cm、器高5.1cm、復元底径10.6cmを測る。底部外面はヘラキリのち軽くナデ調整を行い、高台臺付は強く磨滅する。体部には煤が付着し、胎土は灰色で砂粒少ない。9は杯Cである。口径18.4cm、器高3.8cmを測り、底部外面はヘラキリのち軽くナデ調整を行う。外面全面に煤が付着する。胎土は灰白色で長石、石英粒を多量に含む。

須恵器壺 10は鉢形のものである。復元口径13.2cm、器高5.3cmを測り、底部外面には粘土紐の痕跡が明瞭に残る。内外面ヨコナデ調整のち体部下半を回転ヘラケズリする。胎土は灰白色で長石粒少量含む。口縁部のみイブシがかかる。

製塩土器 11は口縁部の破片である。外面ユビオサエで成形し、内面にはA類の布目痕が残る。胎土は橙褐色で5mm程度の長石粒を多く含む。

黒褐色シルト出土遺物 出土遺物のうち土師器甕(13)、曲物(15)について報告する。

土師器甕 13は甕Bである。口径26.0cm、器高25.8cmを測り、球形の体部と一対の把手を有する。口縁端部は上方に積み

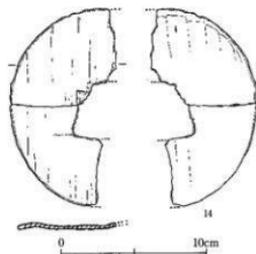


Fig.99 S E 20364出土遺物(2)
(S = 1/3)

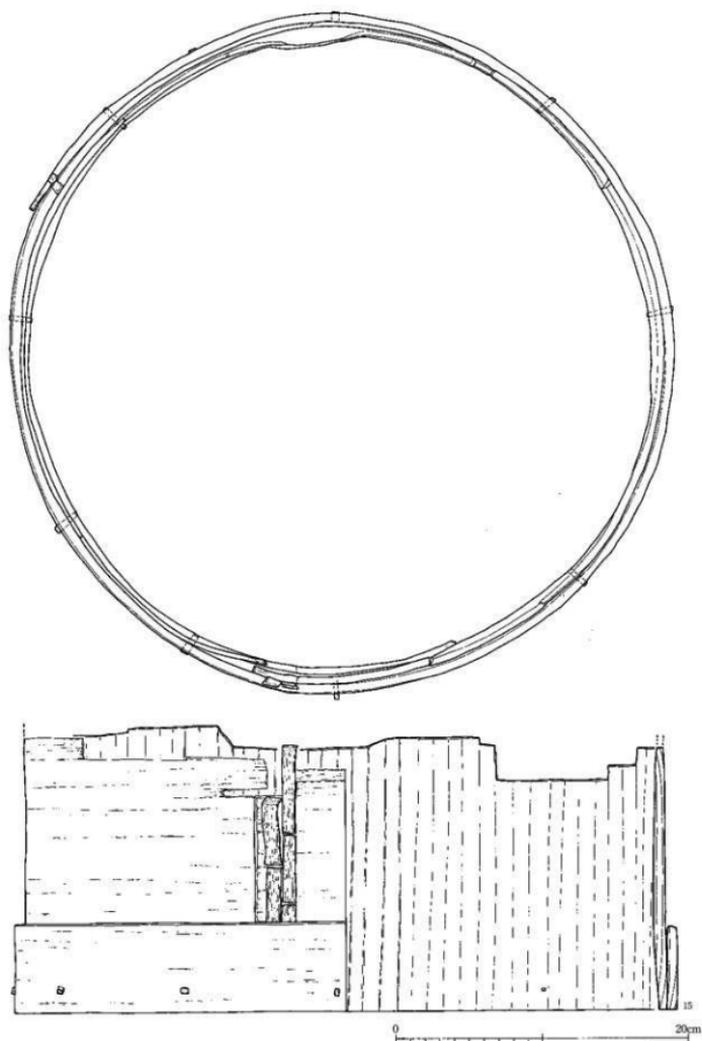


Fig.100 S E 20364出土遺物 (3) (S = 1 / 3)

上げ、端部外面に沈線状の窪みを有する。内面目の細かいハケ調整ののちナデ、外面縦方向のハケののち不規則な粗いハケ調整を施す。外面下半には煤が付着する。胎土は淡褐色で長石粒を少量含む。

曲物 15は底部に水溜りとして設置されていたものである。長軸45.5cm、短軸42.9cmを測り、底板を除去する。下端推板は9方向から木釘で固定する。

その他の埴内埋土出土遺物 その他枠取り上げ時に出土したものの、帰属層位が不明確な物のうち不明木製品(14)について報告する。

木製品 14は復元径13.6cm、厚さ約3mmを測り、中心には一辺約4.0cmの方形の穴を穿つ。加工痕は明瞭でない。

掘り方出土遺物 出土遺物のうち土師器皿(12)について報告する。

土師器皿 12は皿Cである。復元口径10.4cmを測り、厚手である。内外面ナデ調整を行い、底部外面にはユビオサ工痕が残る。胎土は灰褐色で精良である。

その他の遺構及び出土遺物

S X 20324 調査区西端U-X37-38区で検出した深さ10cm程度を測り、不定形を呈する落ち込みである。埋土は褐色の砂質シルトを主体とし、歪角礫のブロック構造を有する。人為的な整地痕跡と考えられる。調査区南A F-A I 31区に位置するS X 20134も同様の遺構と考えられる。

S X 20324出土遺物 (Fig.101) 出土遺物のうち土師器釜もしくは土師器甕について報告する。

土師器釜もしくは土師器甕 厚さ1.3cm程度の体部に長さ2cm程度の鐳を貼り付ける。摂津地域にみられる釜かと思われるが、細片のため移動式甕の一部の可能性もある。胎土は赤褐色で長石・チャート粒を含む。

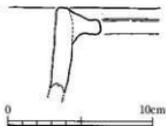


Fig.101 S X 20324出土遺物 (S = 1/3)

第3節 平安時代以降の遺構・遺物

溝

S D 20094 調査区北側T32-33区で検出した溝である。幅25cm、検出長250cmを測り、断面「U」字形を呈する。S B 20210を切る。

S D 20094出土遺物 (Fig.103) 出土遺物のうち須恵器壺(1)について報告する。

須恵器壺 1は復元口径18.1cmを測り、内面ナデ

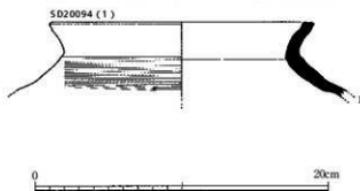
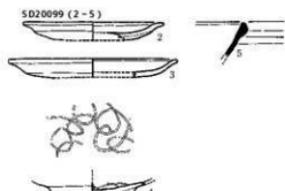


Fig.103 S D 20094・20099出土遺物 (S = 1/3)



Fig.102 S D 20099・20100土師器断面図 (S = 1/60)



調整、外面平行タタキをナデ消す。胎土は灰色で長石粒を多く含む。

S D 20099 (Fig.102) R・T32～34区で検出した溝である。幅50～160cm、深さ10～25cmを測り、断面浅い「U」字形を呈する。緩やかに湾曲して存在し、S B 20099、S D 20100を切る。底部は起伏が少なく、東北から南東に向かって傾斜しており約20cmの高低差がある。埋土は砂を主体とし、葉理を形成するなど流水の痕跡が残る。埋土内から12世紀前半の遺物が出土した。

S D 20099出土遺物 (Fig.103) 出土遺物のうち土師器皿(2・3)、瓦器椀(4)、白磁椀(5)について報告する。

土師器皿 2・3ともに口縁端部をナデによりわずかに外反させるものである。2は復元口径9.8cm、器高1.2cm、3は復元口径11.6cm、器高1.3cmを測る。ともに胎土は灰白色を呈し、長石粒をやや多く含む。

瓦器椀 4は高台径5.6cmを測り、断面三角形の貼り付け高台を有する。内面見込み部には5回転以上の連結輪状暗文を施し、暗文を切って焼成後に施された「×」字状の細い線刻がみられる。Ⅱ段階A型式のものである。

白磁椀 5はⅣ類のものである。軸はやや薄く、胎土中に黒色粒子を含む。

これらの遺物群は瓦器椀の型式から12世紀前半の年代が考えられる。

S D 20100 (Fig.102) Q・R33区で検出した溝である。幅30～40cm、深さ約10cmを測り、断面浅い「U」字形を呈する。S D 20099に切られる。埋土は黒褐色中粒砂を主体とし、葉理等は観察できない。底部はほぼ水平である。埋土内から11世紀後半の遺物が出土した。

S D 20100出土遺物 (Fig.104) 出土遺物のうち土師器皿(1・2)、瓦器椀(3・4)、瓦器皿(5)について報告する。

土師器皿 1・2ともにナデによりわずかに外反する口縁部を有する。1は復元口径10.0cm、器高1.7cm、2は復元口径10.2cm、器高2.0cmを測り、ともに胎土は淡褐色で長石粒を少量含む。

瓦器椀 3は復元口径15.2cmを測り、外面に密な分割ミガキを施す。4は高台径6.0cmを測り、断面四角形の貼付け高台を有する。内面見込み部には7往復程度のジグザク状暗文を有し、胎土は灰白色で精良である。Ⅰ段階D型式のものである。

瓦器皿 5は復元口径9.6cm、器高1.8cmを測り、内面見込み部に18往復程度の密なジグザク状暗文を施す。胎土は灰白色で精良である。

これらの遺物群は瓦器椀の形式から11世紀後半の年代が考えられる。

S D 20200 調査区北側P～T34区で検出した、南北に直線的に走る溝である。幅約30cm、深さ約15cmを測り、断面浅い「U」字形を呈する。

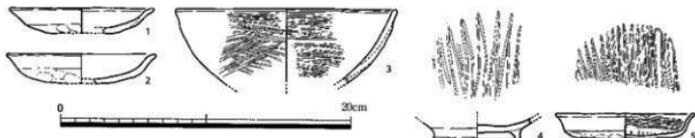


Fig.104 S D 20100出土遺物 (S = 1/3)

S D 20200出土遺物 (Fig.105) 出土遺物のうち瓦器碗(1・2)・瓦器皿(3)について報告する。

瓦器碗 1は厚手で内外面密なヘラミガキを行う。胎土は灰白で精良である。2は復元底径5.8cmを測り、断面三角形の厚い貼り付け高台を有する。内面見込み部にはやや粗いジグザグ状暗文を施す。胎土は灰白色で精良である。

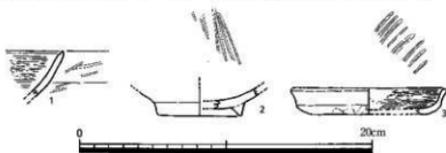


Fig.105 S D 20200出土遺物 (S = 1/3)

瓦器皿 3は復元口径10.7cm、器高1.8cmを測る。外底面にはユビオサエの痕跡が密に残り、内底面にはジグザグ状暗文を施す。胎土は灰白色で精良である。

土坑

S K 20077 (Fig.106) 調査区東側、A B・A C 32・33区で検出した長軸235cm、短軸200cm、深さ30cmを測り、断面形態緩やかな逆台形を呈する土坑である。複数のピットを切る。埋土は褐色もしくは暗褐色のシルト混じり中粒砂を主体とし、垂角礫状の地山ブロックをやや多く含む。人為的な埋土と考えられる。埋土内より9世紀後半～10世紀初頭の遺物が出土した。

S K 20077出土遺物 (Fig.107) 出土遺物のうち土師器碗(1)、須恵器杯(2)について報告する。

土師器碗 1は器厚約2.5mmと薄く、断面三角形の低い高台を貼り付ける。表面劣化のため内外面調整等は不明である。胎土は淡褐色で雲母をやや多く含む。

須恵器杯 2は杯Bである。立ち上りの強い体部を有し、胎土は灰色で砂粒少ない。

遺物量が少なく、詳細な年代決定は困難だが、これらの遺物はおおむね南部Ⅱ期古～中段階のものであり、9世紀後半～10世紀初頭の年代が想定できる。

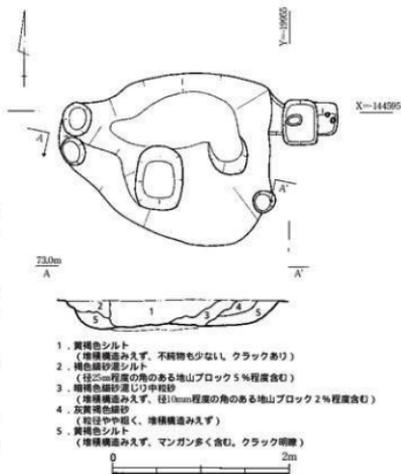


Fig.106 S K 20077平面・土層断面図 (S = 1/50)

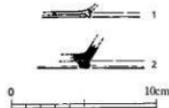


Fig.107 S K 20077出土遺物 (S = 1/3)

S K 20120 (Fig.108) R36・37で検出した長軸250cm、短軸104cm、深さ20cmを測り楕円形を呈する土坑である。底部は若干起伏を有する。S K 20160に切られ、S B 20394を切る。埋土は黒褐色細砂を主体とし、垂角礫状のブロック構造を有する。埋土内より12世紀前半の遺物が出土した。

S K 20120出土遺物 (Fig.109) 出土遺物のうち土師器皿(1・2)、白磁碗(3・4)、須恵器鉢(5)

瓦器椀（6・7）について報告する。

土師器皿 1・2ともに口縁端部をわずかに外反させるもので、1は口径10.0cm、器高2.0cm、2は口径10.7cm、器高2.0cmを測る。胎土はともに灰白色で長石粒をやや多く含み、2は外面に赤褐色の化粧土を塗布した痕跡がみられる。

白磁椀 3・4ともにⅣ類のものである。軸は比較的厚く、胎土中に黒色の微粒子を含む。

須恵器鉢 5は東播系須恵器鉢である。断面四角形でわずかに下方へ突出を持つ口縁を有し、胎土は灰色で黒色粒子を含む。第Ⅰ期第1段階のものである。

瓦器椀 6は口径15.2cm、器高5.6cm、高台径6.2cmを測る。体部外面には崩れた分割ミガキを施し、内面見込み部には4回転の連結輪状暗文を施す。体部外面には粘土紐巻上げの痕跡が残る。Ⅱ段階B型式のものである。7は高台径6.6cmを測り、断面四角形の貼り付け高台を有する。内面見込み部には平行暗文を施す。Ⅰ段階のものである。

これらの遺物群は6の瓦器椀が、Ⅱ段階B様式の基準資料となっている当麻寺曼荼羅堂創建時（1160年）の資料よりも器厚等において古い様相を持つことから12世紀第2四半期の年代が想定できる。

S K 20140 (Fig.110) 調査区北西隅P・Q37～38区で検出した検出長軸245cm、短軸220cmを測る不整形な隅丸方形を呈する大型の土坑である。壁面の立ち上がりは若干急である。断面形態が浅い逆台形を呈し、底部は起伏を持つ。埋土は垂角礫状の地山ブロックを含む層を主体とし、埋土内に径10～40cmの川原石を多量に含む。川原石の配置に意図的なものはみられない。出土遺物は12世紀後半のもので、中には小型瓦器椀なども含まれる。

S K 20140出土遺物 (Fig.111) 出土遺物のうち土師器皿（1）、瓦器椀（2～4）・瓦器皿（5）、陶器壺（6）・陶器椀（7）について報告する。

土師器皿 1は口径10.0cm、器高2.0cmを測り、緩やかに内湾する体部と外面をオサエにより窪ませる底部を有する。表面劣化の為調整等は不明であるが、体部外面には粘土紐の接合痕がみられる。胎土は褐色を呈し、赤色酸化土粒を多く含む。

瓦器椀 2は小椀である。復元口径

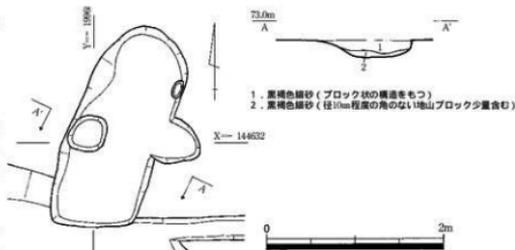


Fig.108 S K 20120平面・土層断面図 (S = 1/50)

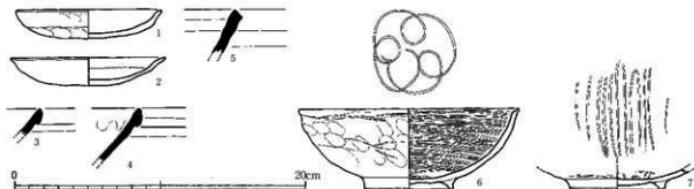


Fig.109 S K 20120出土遺物 (S = 1/3)

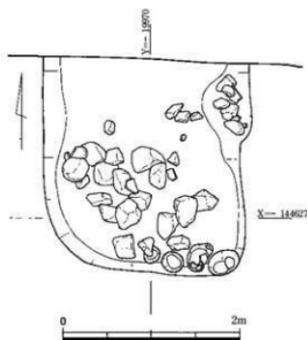


Fig.110 S K 20140平面図 (S = 1/60)

8.0cm、器高2.8cm、復元底径3.4cmを測り、内面見込み部に2～3回転程度の連結輪状暗文を施す。3は復元底径5.0cmを測り、断面四角形の低い高台を貼り付ける。内面見込み部には2～3回転程度の連結輪状暗文を施す。4は復元口径14.0cmを測り、内外表面劣化が著しい。いずれも胎土は灰白色で精良である。

瓦器皿 口径9.6cm、器高1.85cmを測り、口縁部はやや強く外反する。内面見込み部には10往復程度のジグザグ状暗文を施す。胎土は灰白色で精良である。

陶器壺 6は常滑窯産広口壺である。復元口径14.8cmを測り、口縁部「L」字状の受け口を呈する。内外面ヨコナデ調整を施す。胎土は灰色で砂粒少ない。

陶器甕 7は東播系須恵器である。復元口径22.0cmを測り、口縁部は若干上方へ摘み出して面を持つ。口縁部左上がりの平行タタキをナデ消し、体部には右上がりの平行タタキを施す。内面ナデ調整を行う。

これらの遺物群は、瓦器椀がⅢ段階A型式のもので、12世紀後半～末の年代が考えられる。土師器皿・東播系須恵器は瓦器椀と大きな時期差はみられないが、常滑広口壺は第5型式のもので、瓦器椀と不整合をきたしている。あるいは常滑広口壺が混入である可能性も考えられる。

S K 20160 (Fig.112) 調査区西側R・T36～38区で検出した検出長軸550cm、短軸300～410cmを測り、不整形な楕円形を呈する大型の土坑である。S K 20120・S B 20395を切り、S K 20198に切られる。壁面の立ち上がりは比較的緩やかである。断面形態浅い「U」字形を呈し、底部の起伏は少ない。埋土は概ね2層で、上層から菓理を形成する暗褐色の細砂、垂角礫状の地山ブロックを含む層である。上層には植物遺体を含み、滞水性の堆積が想定できる。埋土より12世紀半ば～末頃の遺物が出土した。

S K 20160出土遺物 (Fig.113) 出土遺物のうち土師器皿(1～8)・瓦器椀(9～17)・瓦器小椀(18)・瓦器皿(19)・白磁椀(20・21)・白磁皿(22)・陶器鉢(23)・陶器壺(24)・磁石(25)について報告する。

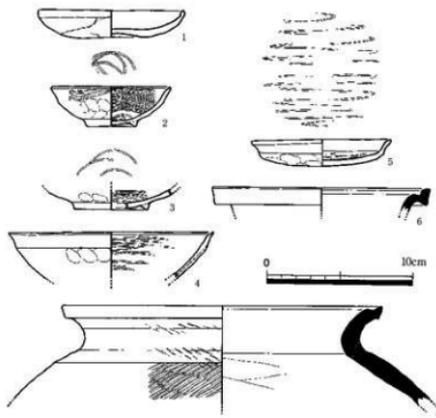


Fig.111 S K 20140出土遺物 (S = 1/3)

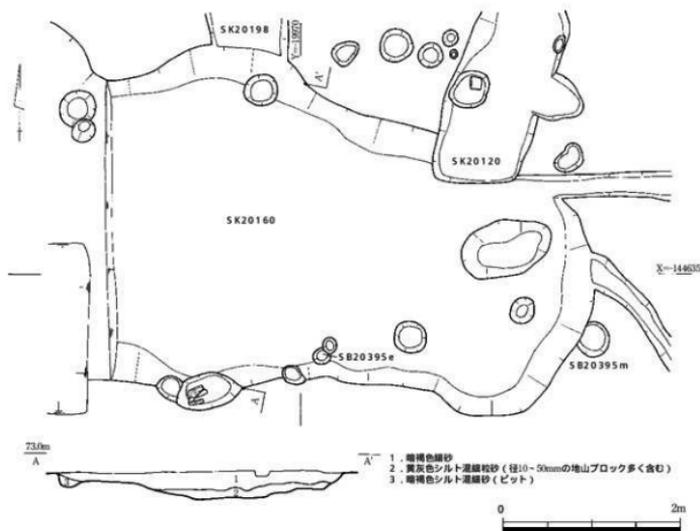


Fig.112 S K20160平面・土層断面図 (S = 1/50)

土師器皿 皿は口径9.2~10.4cmの小皿(1~7)と、口径13.2cmの中皿(8)がある。小皿は口縁端部を丸く納めるものが大半であるが、僅かに外反させるもの(2)、上方へ摘み上げるもの(7)もみられる。胎土は大半が褐色で赤色酸化土粒を多く含むが、2・3は白色で長石粒を若干含む。中皿(8)は若干外反させる口縁部を有し、胎土は橙褐色で石英・長石粒を多量に含む。

瓦器椀 9・12は復元口径14.0cm、10は復元口径14.6cm、11は復元口径15.0cmを測る。10・12・13は外面に崩れた分割ミガキを施すが、11はミガキ少なく、9は表面劣化の為調整不明である。9・11・13は器壁薄く、ユビオサエによる凸凹が顕著である。13は内面の圏線状ヘラミガキに隙間が多くみられる。14は6回転前後の連結輪状暗文を施し、断面四角形の貼付け高台を持つ。15・16は2~3回転の連結輪状暗文を持ち、断面三角形の貼付け高台を有する。16の内面には板状工具によるナデ調整を施す。17は器壁薄く、高台も低い断面三角形の貼付け高台である。13・17がⅢ段階A型式である他はⅡ段階B型式のものである。

瓦器小椀 18は復元口径9.0cm、器高3.5cmを測り、強く外反する口縁部を有する。内面見込み部には3回転前後の連結輪状暗文を有し、高台は断面四角の貼付け高台である。

瓦器皿 19は復元口径9.6cm、器高1.7cmを測り、ヘラミガキは内面見込み部のみジグザグ状暗文を施す。

白磁椀 20は復元口径15.0cmを測り、厚い玉縁状口縁を有する。内面下半には圏線を一条有し、釉垂がみられる。釉は内面全面と外面口縁部のみ施釉する。体部外面はヘラケズリが顕著に残る。21は厚い玉縁を有し、内面と外面口縁部のみ施釉する。20と同一個体の可能性がある。ともにⅣ類のものである。

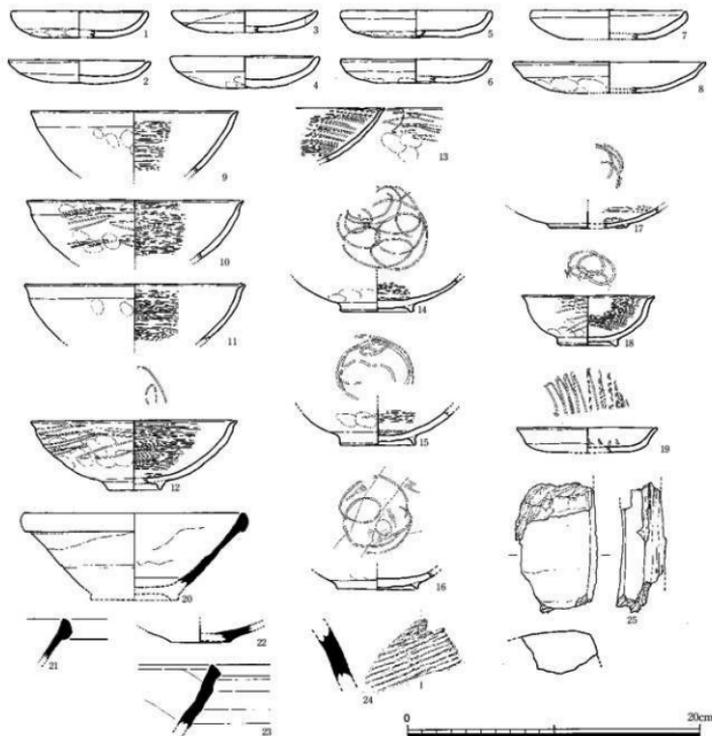


Fig.113 S K 20160出土遺物 (S = 1/3)

白磁皿 22は復元底径4.0cmを測り、底部と体部の境界にはケズリによる強い稜を有する。釉は内面のみ施釉する。Ⅶ類もしくはⅧ類のものである。

陶器鉢 23は須恵質の鉢である。口縁端部を四角く納め、外面は強いヨコナデによる凹凸が著しい。内面にはナデ調整が明瞭に残り使用の痕跡は明瞭ではない。胎土は淡灰色で砂粒少ない。東播系須恵器鉢Ⅰ期のもと考えられる。

陶器壺 24は須恵質で右上がりの長格子状タタキを施すものである。胎土は白色の粒子を少量含み、焼成はやや軟質である。細片のため詳細は不明であるが、十瓶山産広口壺の肩部にあたると思われる。

砥石 25は泥岩製のものである。2面に使用面がみられるほかは素材面を残す。裏面、側面には磨減痕がみられ、素材面を残した状態で使用していたと考えられる。

これらの遺物群は若干の時期差を持って存在しており、おおよそ12世紀半ば～13世紀初頭のものであ

る。

S K 20197・20198 調査区北西隅Q・R37・38区で検出した土坑である。S K 20197は長軸110cm、短軸45cm、S K 20198は検出長軸180cm、検出短軸約100cmを測り、深さは共に約5cmである。S K 20197がS K 20198を切る。S K 20198はS E 20130に切られ、S K 20160を切る。共に埋土内より土師器・瓦器が出土した。

S K 20197出土遺物 (Fig.114) 出土遺物のうち土師器皿 (1) について報告する。

土師器皿 1は口径10.2cm、器高2.1cmを測り、体部中央付近にはコビオサエ痕が顕著に残る。胎土は淡褐色で長石、石英粒を多く含む。

S K 20198出土遺物 (Fig.114) 出土遺物のうち瓦器皿 (2) について報告する。

瓦器皿 2は復元口径10.0cm、器高1.9cmを測り、内面見込み部には密なジグザグ状暗文を施す。胎土は灰白色で精良である。

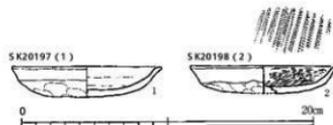


Fig.114 S K 20197・20198出土遺物 (S = 1/3)

建物・櫛列

S A 20396 (Fig.116) R32～37区で検出した櫛列。柱間距離平均264cmを測るが、若干不ぞろいである。柱列方位はW-0°13'1"-Nである。柱穴は径28～50cmの円形を呈する。柱は抜き取られている。

S A 20396出土遺物 (Fig.115) 出土遺物のうち柱抜き取り跡から出土した古式土師器について報告する。

古式土師器 柱穴 e 抜き取り跡より出土した。断面「S」字状に屈曲する東海系のものである。復元口径12.2cmを測り、内面ナデ調整、外面縦方向のハケ調整を施す。胎土は淡褐色で精良である。



Fig.115 S A 20396 e (抜き取り) 出土遺物 (S = 1/3)

S B 20394 (Fig.116) 調査区北半P～R34～37区で検出した桁行き四間、梁行き四間以上を測る建物である。各柱間の平均距離は桁行き230cm、梁行き157cmを測り、若干ばらつきがある。南側桁行き920cm、西側残存桁行き615cm、東側残存梁行き645cmを測り、建物桁行き主軸はW-2°44'17"-Sである。S K 20120に切られる。

各柱穴は径約12～45cmの円形を呈する。柱穴 d には径約17cmの柱根が残存するほか、柱穴 a には根固めのための板材が投入されていた。柱抜き取り痕からは11世紀後半の土器が出土した。

S B 20394出土遺物 (Fig.118) 出土遺物のうち柱抜き取り跡から出土した土師器皿 (1)・製塩土器 (3) 瓦器皿 (2)・瓦器椀 (4・5) について報告する。

土師器皿 1は柱穴 a 出土のもので、復元口径10.2cmを測る。ナデにより弱く外反する口縁部を有し、底部は連続するコビオサエが顕著に残る。体部には粘土紐巻上げ痕が残る。胎土は淡褐色で長石粒をやや多く含む。

製塩土器 3は体部の細片である。外面コビオサエ、内面B類の布目が残る。胎土は褐色で長石粒を少量含む。

瓦器皿 2は柱穴 a 出土のもので、口径10.1cm、器高2.0cmを測る。内面には15往復程度のジグザグ状

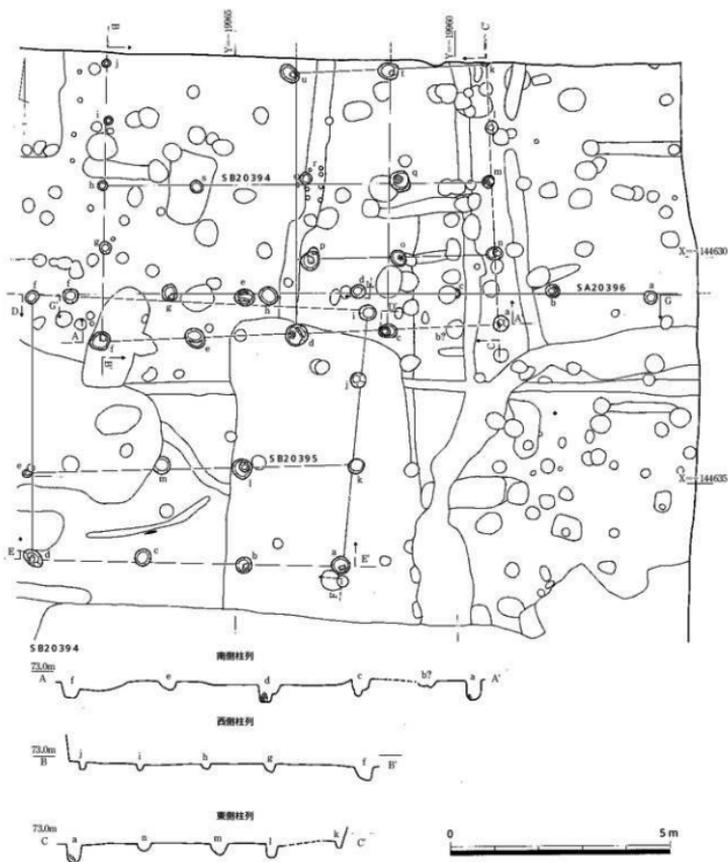


Fig.116 S B20394・20395、S A20396平面図、S B20394柱穴断面図 (S = 1/100)

暗文を施す。胎土は灰白色でやや砂粒を多く含む。

瓦器 4 は柱穴 a 出土のもので、復元底径5.6cmを測り、断面四角形の高台を貼り付ける。内面にはジグザグ状暗文を施し、外面下半にはヘラミガキを施さない。胎土は灰白色で精良である。5 は柱穴 e 出土のものである。復元口径13.3cmを測り、内面密なヘラミガキ、外面やや隙間の多い分割ミガキを施す。胎土は灰白色で精良である。

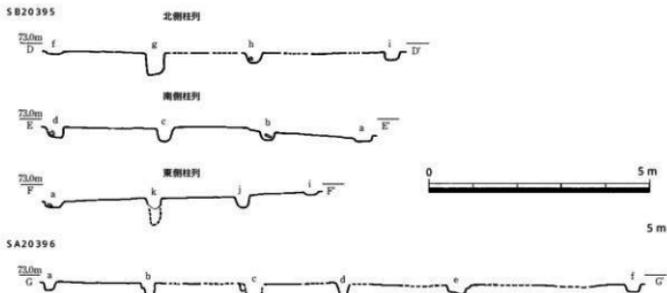


Fig.117 S B 20395, S A 20396柱穴断面図 (S = 1/100)

これらの遺物群は瓦器椀の型式がⅠ段階Ⅱ型式であり、土師器皿とも矛盾がないことから、11世紀末ごろの年代が想定できる。

S B 20395 (Fig.116) 調査区北半 R - U 34 - 37区で検出した桁行き三間、梁行き三間を測る建物である。各柱間の平均距離は桁行き244.1cm、梁行き193cmを測り、若干ばらつきがある。北側桁行き765cm、南側桁行き700cm、東側梁行き580cmを測り、建物桁行き主軸は $W-1^{\circ}31'55''-N$ である。

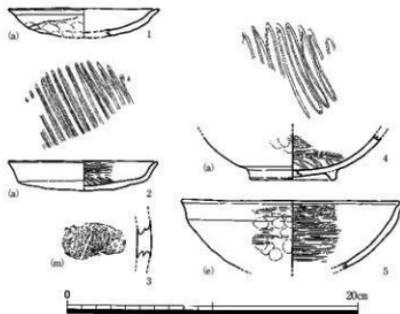


Fig.118 S B 20394 (抜き取り) 出土遺物 (S = 1/3)

各柱穴は径約30～45cmの円形を呈する。柱穴 a・d・hには根固めの川原石が残存する。柱抜き取り痕からは10世紀初頭の土器が出土した。

S B 20395出土遺物 (Fig.119) 出土遺物のうち柱抜き取り跡から出土した土師器皿 (1・2) について報告する。

土師器皿 1が柱穴g出土、2が柱穴k出土である。ともに薄手で口縁部を屈曲させ、端部を玉縁状に成形する。胎土はともに橙褐色で雲母をやや多く含む。

これらの遺物群は南部Ⅱ期新段階の様相を有し、10世紀初頭の年代が想定できる。

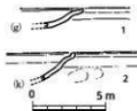


Fig.119 S B 20395 (抜き取り) 出土遺物 (S = 1/3)

石材検出状況



井戸

S E 20130 (Fig.120)

調査区西側Q37・38区で検出した井戸である。掘り方の直径125cm、検出面からの深さ100cmを測る。井戸枠の内径は45～50cmを測り、3段構成となっている。上段は直径20～30cmの川原石を2～3段積み上げ、中段は瓦を円形に積み上げている。下段は木製の曲物を設置し、水溜めとしている。中段を構成する瓦はいずれも罫目タキ痕を持つ平瓦である。下段の曲げ物内部には直径約30cmの川原石を投入している。井戸枠内の埋土は、概ねオリブ黒色粘土である。掘り方の埋土には礫を多く含んでいる。

掘り方からは12世紀末～13世紀初頭の土器が、枠内から13世紀第2四半期の土器が出土した。

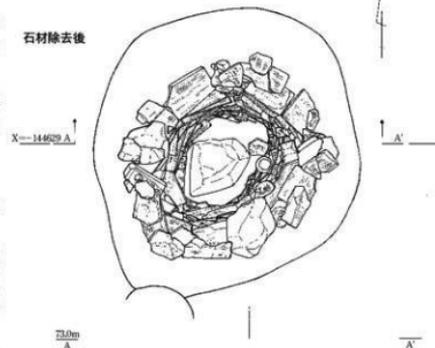
S E 20130出土遺物 (Fig.121・122) 掘り方および枠内から出土した遺物について報告する。

掘り方出土遺物 出土遺物のうち土師器皿(1～4)、瓦器椀(5～8)、白磁碗(9)、刻印瓦(10)について報告する。

土師器皿 いずれも口縁部のみの破片である。1は口縁端部を外反させるタイプ、2は口縁端部を上方に積み上げるタイプ、3は2段ナデのタイプ、4は厚手で口縁部をわずかに屈曲させ、端部をわずかに積み上げるタイプである。胎土は1が灰白色で砂粒少なく、2・3は淡褐色で砂粒少ない。4は淡橙褐色で長石粒と雲母を少量含む。

瓦器椀 5は復元口径5.0cmを測り、断面三角形の貼付け高台を有する。内面見込み部には1回転程度の輪状障文を施す。6は復元口径14.0cmを測る。

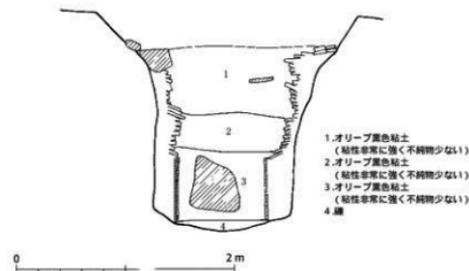
石材除去後



250m

A

A'



- 1.オリブ黒色粘土
(粘性非常に強く不純物少ない)
- 2.オリブ黒色粘土
(粘性非常に強く不純物少ない)
- 3.オリブ黒色粘土
(粘性非常に強く不純物少ない)
4. 礎

Fig.120 S E 20130平面・土層断面図 (S = 1/40)

6～8はいずれも外面に崩れた分割ミガキを体部中央付近まで施す。

白磁碗 9は口縁部から体部下半が残存する。口縁端部を強く外反させ、外面にヘラ描き文を、内面上位に圈線と、圈線以下に櫛目文を施す。V類のものである。

刻印瓦 10は枠材に使用されていた平瓦である。内面布目、外面縄叩き痕と離れ砂を有する。刻印は内面に「大」を刻む。焼成は須恵質である。

これらの遺物群は瓦器碗がいずれもⅢ段階A型式の新相を示すことから12世紀末～13世紀初頭の年代が想定される。

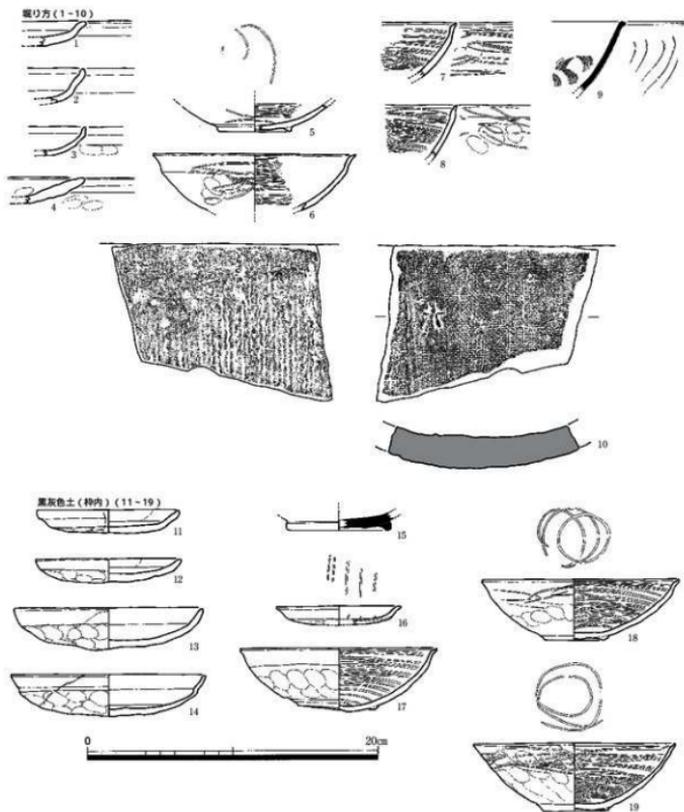


Fig.121 S E 20130出土遺物 (1) (S = 1/3)

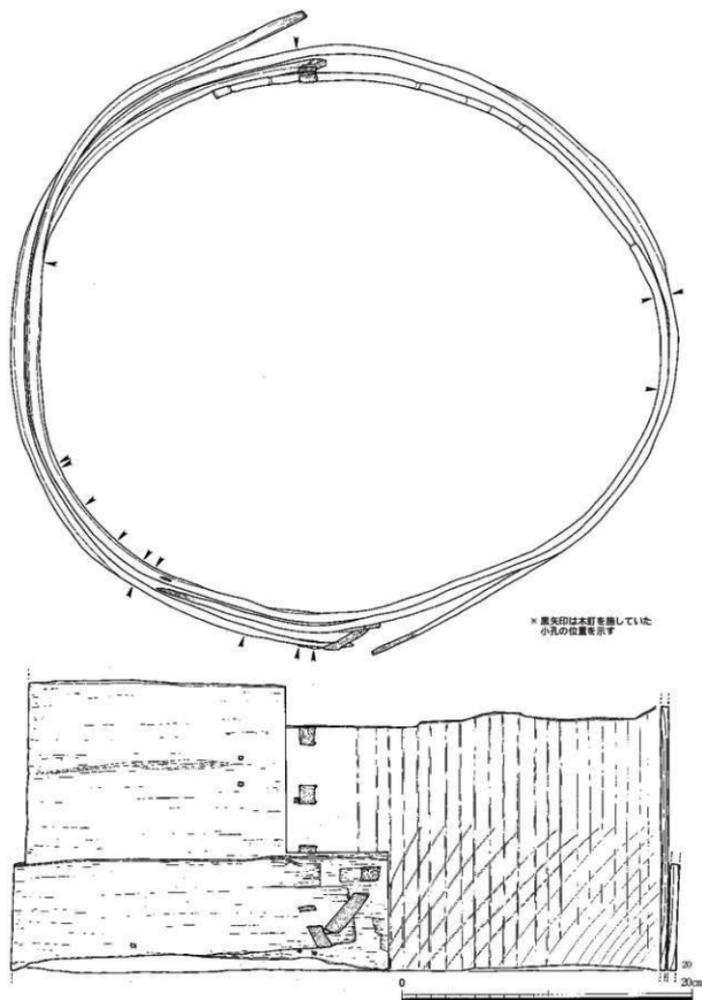


Fig.122 S E 20130出土遺物(2)(S = 1/3)

井戸枠内出土遺物 出土遺物のうち土師器皿(11~14)、灰釉陶器皿(15)、瓦器皿(16)・瓦器椀(17~19)・曲物(20)について報告する。

土師器皿 11は口径9.8cm、器高1.1cmを測る。口縁部のナデ調整により体部と底部の境界付近に弱い稜を形成する。口縁部の一部にハケ状工具の痕跡が残る。胎土は褐色で赤色酸化土粒を少量含む。12は口径10.0cm、器高1.7cmを測る。体部と底部の境界付近に稜はみられず、底部付近には粘土紐の接合痕が残る。胎土は赤褐色で赤色酸化土粒を多く含み、表面には化粧土を塗布する。13は口径13.0cm、器高2.4cmを測る。口縁部のナデ調整は弱く稜を形成しない。底部から口縁部の一部にかけて煤が付着する。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒を少量含む。14は復元口径13.4cm、器高2.9cmを測る。口縁部のナデ調整により体部と底部の境界付近に稜を形成し、口縁部の一部には煤が付着する。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒を少量含む。

灰釉陶器皿 15は復元口径6.8cmを測り、外底面には回転糸切りの痕跡が残る。胎土は灰色で砂粒少ない。

瓦器皿 16は復元口径8.6cm、器高1.3cmを測る。口縁部はナデ調整により外反する。内底面には平行暗文を施す。

瓦器椀 17は口径13.6cm、器高4.4cm、18は復元口径13.6cm、器高4.2cm、19は口径14.0cm、器高4.7cmを測る。いずれも外面口縁部のみ粗いヘラミガキを施し、内面見込み部には1~2回転の螺旋状暗文を施す。器壁は3mm前後と薄く、外面には掌による圧痕が顕著である。高台は断面三角形の粗雑な貼付け高台である。17は2次焼成を受ける。

曲物 20は長軸45.5cm、短軸42.9cmの楕円形を呈する。底板は取り外される。箆板には木釘が抜け落ちた孔が連行しており、複数の木釘を用いて固定していたことが窺える。側板は一連の樹皮により2箇所固定する。

これらの遺物群は瓦器椀がいずれもⅢ段階B型式のものであり、13世紀第2四半期の年代が想定できる。

その他の遺構

S P20012・20013 (Fig.165に位置記載) 調査区東側A H22・23区で検出したビットである。S P20012は径55cm、S P20013は径約50cmの円形を呈し、ともに深さ5~7cmを測る。S D20010が廃絶したのち掘られたものと考えられる。

S P20012出土遺物 (Fig.123) 出土遺物のうち黒色土器椀(1・2)・黒色土器皿(4)・黒色土器鉢(5)・土師器皿(3)について報告する。

黒色土器椀 1・2ともにA類椀である。1は底径7.6cmを測り、内面密な一定方向のヘラミガキを施す。底部外面には板状圧痕が残る。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒を少量含む。2は底径10.6cmを測り、内外面表面劣化のため調整等不明である。胎土は淡褐色で精良である。

黒色土器皿 4はA類皿である。復元口径15.5cmを測り、内外面ヘラミガキを施す。内面には一部直立した輪状暗文を施す。

黒色土器鉢 5はA類鉢である。短く外反する口縁部を持つものである。2次焼成のため調整等の詳細は不明である。胎土は赤色酸化土粒を含み精良である。

土師器皿 3は復元口径14.0cm、器高1.7cmを測り、口縁部はわずかに外反したのち小さく玉縁を形成する。内面ナデ調整、外面ユビオサエを施す。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を多く含む。

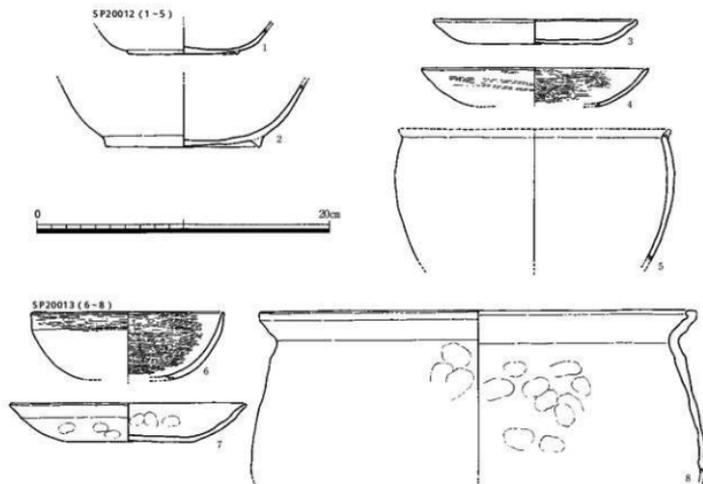


Fig.123 S P20012・20013出土遺物 (S = 1/3)

これらの遺物群は南部Ⅱ期中段階の様相を示し、9世紀末～10世紀初頭の年代が想定できる。

S P20013出土遺物 (Fig.123) 出土遺物のうち黒色土器碗 (6)、土師器皿 (7)・土師器甕 (8) について報告する。

黒色土器碗 6 はA類碗である。復元口径13.3cmを測り、内面および外面口縁部にヘラミガキを施す。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

土師器皿 7 は復元口径16.2cm、器高2.65cmを測り、口縁端部はわずかに外反したのち玉縁に成形する。胎土は褐色で、雲母、長石粒を多く含む。

土師器甕 8 は「く」字状に外反したのち端部を折りかえす口縁部を持ち、体部内外面著しいオサエ痕を有する。胎土は橙褐色で赤色酸化土粒を多く含む。

これらの遺物群は南部Ⅱ期中段階の様相を示し、9世紀末～10世紀初頭の年代が考えられる。

S P20110 調査区北端O34・35区で検出した長軸63cm、短軸42cm、深さ約40cmを測り、楕円形を呈するピットである。柱は抜き取られていた。

S P20110出土遺物 (Fig.124)

銭貨が出土した。直径1.9cm、厚さ2mmを測り、中央に一辺4.5mmの方形孔を有する。銭文は不明瞭で、X線写真によると、「延喜通宝」である可能性が高い。ケイ光X線分析の結果、鉛を主体とするものであることが判明した。

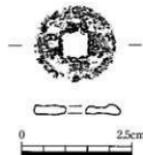
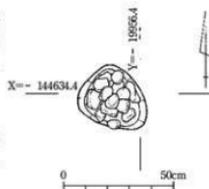


Fig.124 S P20110出土遺物 (S = 1/1)

S P 20150 (Fig.125) 調査区北半T33区で検出した長軸33cm、短軸25cmを測り、楕円形を呈するピット。内部には径7cm程度の白色の円礫が充填されていた。地鎮に関連する遺構である可能性があるが、詳細は不明である。



S P 20180 調査区北端O34区で検出した長軸71cm、短軸40cmを測り、楕円形を呈するピットである。西半分には柱抜き取りの痕跡と考えられる段差を有する。

S P 20180出土遺物 (Fig.126) 出土遺物のうち土師器皿 (1-3)、瓦器皿 (4)、瓦器椀 (5-7)、白磁椀 (8)、石鍋 (9) について報告する。

Fig.125 S P 20150 礫出土状況図 (S = 1/20)

土師器皿 ともに口縁部をナデによって外反気味に成形し、底部はユビオサエが顕著である。1は口径10.0cm、2は口径10.25cm、3は復元口径10.8cmを測る。胎土は1・2が灰白色で砂粒が多く、3は淡橙褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

瓦器皿 4は復元口径10.2cm、器高2.0cmを測り、内面見込み部にジグザグ状暗文を直行する2方向に施す。胎土は灰白色で精良である。

瓦器椀 いずれも体部内面に密なヘラミガキ、外面に分割ミガキを施すもので、5は外面のヘラミガキを底部付近まで施すのに対し、6・7は体部外面上半1/3ほどの範囲にヘラミガキを施す。7は内面見込み部に粗いジグザグ状暗文を施す。5は復元口径15.0cm、6は復元口径14.6cm、7は復元口径15.4cm、器高5.6cm、復元底径4.6cmを施す。胎土はいずれも灰白色で精良である。

白磁椀 8は口縁部だけの破片である。口縁端部をナデにより外反させ、内面口縁部直下には一条の圈線を施す。胎土は白色で黒色粒子を少量含む。V類のものである。

石鍋 9は滑石裂石鍋である。復元底径19.6cmを測り、外面には幅3cm程度のケズリの単位が明瞭に遺存する。内面には不規則な鑿痕を有し、外面は全面煤が付着する。

これらの遺物群は瓦器椀6・7がいずれもI段階D型式に相当し、土師器皿に12世紀に増加する口縁部を引き上げるものがみられないことなどから11世紀末頃の年代が想定される。

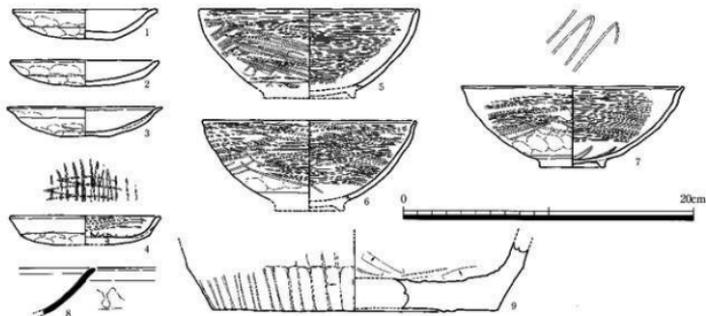


Fig.126 S P 20180出土遺物 (S = 1/3)

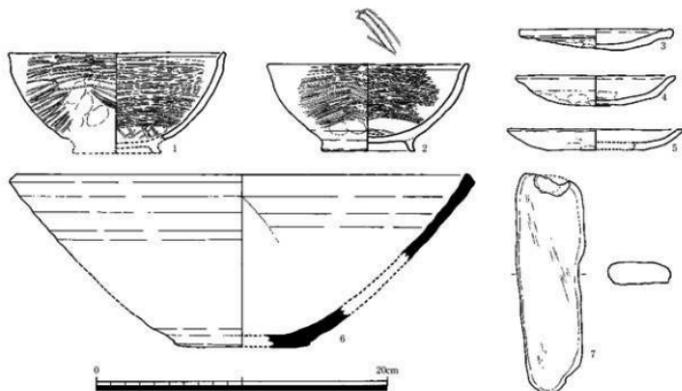


Fig.127 S P 20192出土遺物(1)(S = 1/3)

S P 20192 調査区北端O34区で検出した長軸46cm、短軸40cmを測り、楕円形を呈するビットである。柱は抜き取られていた。

S P 20192出土遺物 (Fig.127) 出土遺物のうち瓦器碗(1・2)、土師器皿(3~5)、須恵器鉢(6)、砥石(7)について報告する。

瓦器碗 1は復元口径14.8cmを測り、内外面密なヘラミガキを施す。内面見込み部には格子状暗文を施す。I段階B型式に相当する。2は復元口径13.6cm、器高6.0cm、復元高台径6.2cmを測り、見込み部には崩れた平行暗文を施す。I段階D型式に相当する。いずれも胎土は灰白色で精良である。

土師器皿 3はいわゆる「て」字状口縁を有する皿である。口径10.4cm、器高1.5cmを測り、厚手である。4・5はいずれも口縁端部をナデによりわずかに外反させる。4は内面に板状工具の痕跡が残る。25は口径10.8cm、器高2.1cmを、5は復元口径12.0cm、器高1.4cmを測る。胎土は24・26が灰白色、25は橙褐色を呈し、長石・石英粒をやや多く含む。

須恵器鉢 6は東播系須恵器鉢である。復元底径9.4cm、底径をもとに推定した口径31.0cmを測り、断面四角形の口縁部を有する。底部内面および外面の一部は使用により摩滅し、底部外面には糸切り痕が残る。胎土は灰色で黒色粒子をやや多く含む。第1期第1段階に相当するものと考えられる。

砥石 7は長さ15.3cm、幅4.8cm、重量222gを測る。破断面以外はほぼ全面に使用の痕跡と考えられる研磨痕を残す。

これらの遺物は瓦器碗・東播系須恵器鉢の型式および、厚手の「て」字状口縁土師器皿の存在から11世紀末の年代が想定できる。

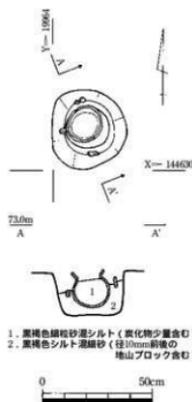


Fig.128 S P 20236平面・土層断面図(S = 1/20)

S P 20236 (Fig.128) 調査区北側Q35区で検出した径35cm、深さ23cmを測

り、円形を呈するピットである。内部に土師器甕を正位置で据え、甕を押さえるように径5cm程度の自然石を四方に配置する。また甕外からは鉄釘も出土している。甕及び自然石はピット底部より若干浮いた位置に存在し、ピット埋土には地山ブロックが含まれることから、ピットを埋めながら甕などを配置していったことが窺える。何らかの地鎮の痕跡と考えられる。土師器甕は10世紀前半頃の年代が考えられる。

S P 20236出土遺物 (Fig.129) 出土遺物のうち土師器甕 (1)、鉄釘 (2) について報告する。

土師器甕 1は口径16.2cm、器高15.3cmを測り、若干下膨れの形状を有する。内外面ユビオサエを施し、外面はオサエのちナデ調整を施す。外面の一部にはハケ状工具の痕跡が残るが、ごく一部のみでハケ調整が全面に施されていたとは考えられない。

鉄釘 2は方頭形のもので、頭部は一辺1.3cm程度を測る。先端部は欠損する。

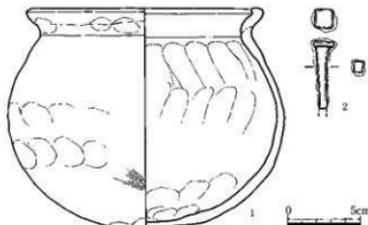


Fig.129 S P 20236・20330出土遺物 (S = 1/3)

S P 20380 調査区北東隅O32・33で検出した長軸約80cm、短軸約40cmを測り、隅丸長方形を呈するピットである。周辺に同時期の大型柱穴は見られない。埋土内より10世紀初頭の遺物が出土した。

S P 20380出土遺物 (Fig.130) 柱掘り方および柱抜き取り跡から出土した遺物について報告する。

掘り方出土遺物 出土遺物のうち土師器杯 (1・2)、黒色土器碗 (3・4)、灰釉陶器碗 (5) について報告する。

土師器杯 1・2はともにユビオサエ成形し、薄手で外反させたのち玉縁を形成する口縁部を有する。1は復元口径16.8cm、2は復元口径17.4cmを測り、ともに胎土は褐色で精良である。

黒色土器碗 3・4はともにA類のものである。3は復元底径8.6cmを測り、胎土は暗褐色で精良である。4は器高4.5cmを測り、外面下半をヘラケズりする。胎土は淡褐色で雲母を少量含む。

灰釉陶器碗 5は復元口径14.0cmを測り、端部を肥厚させる口縁部を有する。釉は口縁部内外面にハ

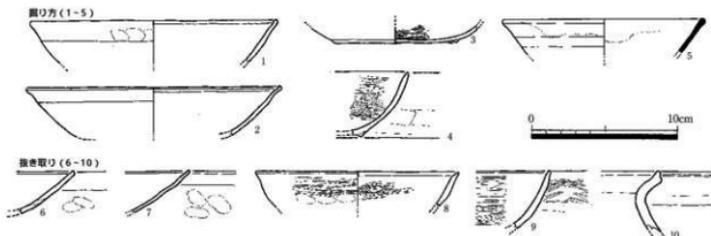


Fig.130 S P 20380出土遺物 (S = 1/3)

ケ塗りする。K90窯式のものである。

これらの遺物群は南都Ⅱ期新段階に相当し、10世紀初頭の年代が考えられる。

柱抜き取り跡出土遺物 出土遺物のうち土師器杯（6・7）・土師器甕（10）・黒色土器碗（8・9）について報告する。

土師器杯 6・7はともにコビオサエ成形し、口縁部をわずかに玉縁に成形する。胎土は共に褐色で精良である。

土師器甕 10は湾曲しつづ「く」字状に外反する口縁部を有し、口縁端部には一条の沈線を施す。胎土は褐色で砂粒を多量に含む。釜の可能性もある。

黒色土器碗 8・9はともにA類のものである。8は復元口径14.0cmを測り、口縁端部をわずかに外反させる。胎土はともに淡褐色で精良である。

これらの遺物は南都Ⅱ期新段階のものと考えられるが、黒色土器A類碗に若干厚手のものがみられるなど、新しい要素も看取できる。

S X 20196 調査区北側 S D 20250上で検出した浅い落ち込み。平安時代以降の遺構全てに切られており、古代の遺構を切る。埋土は暗褐色の地山ブロックを多数含む層によって構成され、整地によって埋められた自然地形と考えられる。埋土内より10世紀初頭の遺物が出土している。

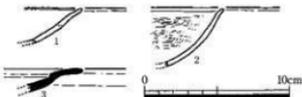


Fig.131 S X 20196出土遺物 (S = 1/3)

S X 20196出土遺物 (Fig.131) 出土遺物のうち土師器皿（1）、黒色土器碗（2）、灰釉陶器皿（3）について報告する。

土師器皿 1は口縁部をやや強く外反させ、端部に小さな玉縁を形成する。器厚は3mm前後を測り、胎土は橙褐色で長石粒をやや多く含む。

黒色土器碗 2はA類のものである。口縁端部には一条の沈線が巡り、内面密にヘラミガキする。胎土は灰褐色で雲母を多く含む。

灰釉陶器皿 3は段皿である。強く外反する口縁部を有し、内面の段は明瞭である。外面全面と内面口縁部直下までハケ塗りで灰釉を施す。K90窯式のものである。

これらの遺物群は南都Ⅱ期新段階の様相を有し、10世紀初頭の年代が想定される。

表土・包含層出土遺物 (Fig.132)

出土遺物のうち古式土師器壺（1）・甕（2）・須恵器内面硯（3）・須恵器蓋（4）・須恵器杯（5）・瓦器碗（6～9）・土師器釜（10）・白磁碗（11）・不明須恵器皿（12）・不明須恵器碗（13）・灰釉陶器碗（14）・灰釉陶器皿（15）・緑釉陶器壺（16）・緑釉陶器碗（17）・緑釉陶器皿（18）・磁石（19）・軒丸瓦（20）・軒平瓦（21・22）について報告する。

古式土師器壺 1は小型丸底壺である。復元口径11.5cmを測り、口縁部内面にはわずかにヘラミガキが残る。体部は焼成後に打ち欠く。

古式土師器甕 2は復元口径15.4cmを測り、口縁部「S」字状に屈曲させる東海系のものである。外面縦方向のハケ調整、内面縦方向の板状工具によるナデ調整を施す。

須恵器内面硯 3は破損が著しく、最大径や器高等詳細は不明である。陸部は使用により磨滅する。

須恵器蓋 4は復元口径11.1cmを測り、口縁部は短く折り曲げる。天井部外面はヘラケズリのもの

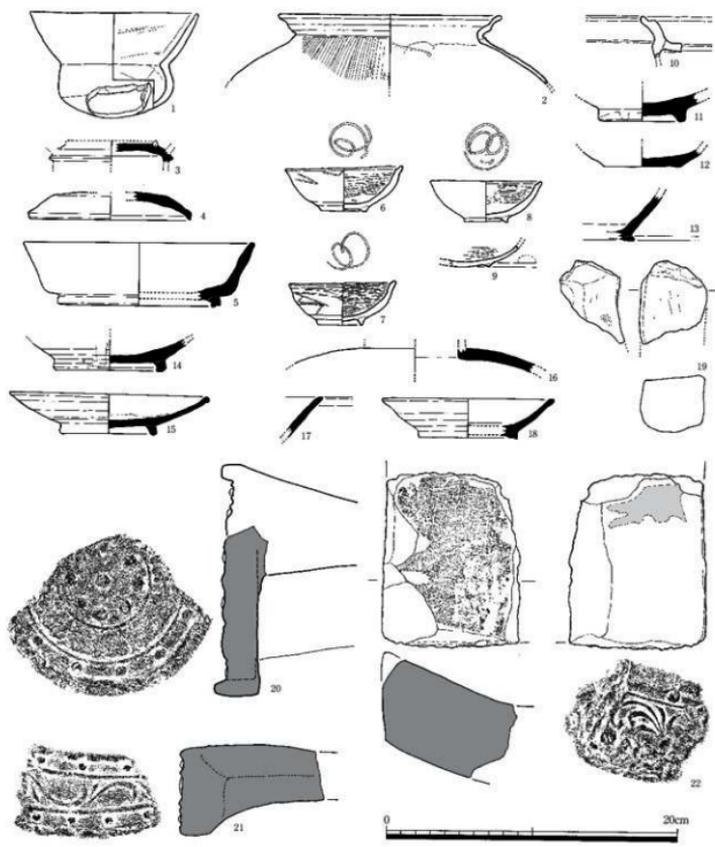


Fig.132 表土・包含層出土遺物 (S = 1/3)

テ調整を施す。

須恵器杯 5は復元口径17.1cm、器高4.4cmを測り、高台は底部やや内側に貼り付ける。

瓦器椀 6～8は小型瓦器椀、9は通常の瓦器椀である。6は口径8.0cm、器高3.15cm、7は口径7.3cm、器高3.1cm、8は復元口径7.6cm、器高2.8cmを測る。6～8は内面見込み部に1～2回転の連結輪状暗文を施す。9は圏線状暗文を有する。

土師器釜 10は口縁部を内側に折り返すもので、胎土は灰白色で砂粒をやや多く含む。

白磁椀 11は復元高台径6.0cmを測り、やや高い逆台形高台を有するものである。

不明須恵器皿 12は復元底径5.3cmを測る。底部外面には糸切痕を有する。東海系山皿の可能性もあるが、胎土が暗灰色を呈する点など検討の余地がある。

不明須恵器椀 13は糸切底の円盤状高台を有するものである。内面見込み部はナデにより若干窪む。東播系のものの可能性がある。

灰釉陶器椀 14は椀の底部である。底部外面はヘラキリののちナデを施す。釉は内面に薄く施される。

緑釉陶器壺 16は壺の肩部である。内外面施釉する。肩部の破片のみのため全体像は不明である。

緑釉陶器椀 17は直線的な体部を有する。釉は薄く、焼成は堅緻である。

緑釉陶器皿 18は復元口径11.8cm、器高2.7cmを測り、有段輪状高台を有する。釉は濃緑色で、胎土は暗灰色である。

砥石 19は破片である。大半を欠損するが、端面を除くほぼ全面を使用する。

軒丸瓦 20は6236 I 型式で、同種のもは西大寺で出土している。

軒平瓦 21・22はともに均等唐草文軒平瓦である。中心飾り等は不明で、型式についても不明である。22は凸面に朱が付着する。

第3節 確認トレンチの調査

第1項 確認トレンチ1の遺構・遺物

1区北側、北辺坊推定地で水路工事が行なわれた際、工事を中断して行った調査である。西二坊大路東側溝の確認を目的として緊急に行なった調査のため、遺構の確認は行ったものの、遺構掘削は行っていない。

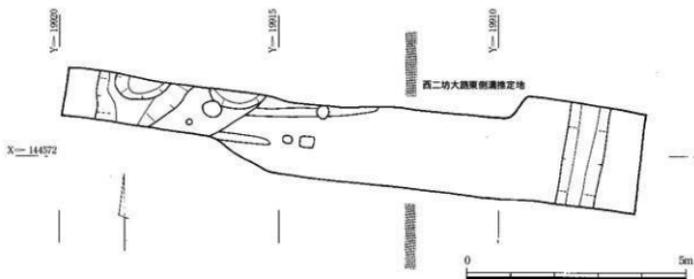


Fig.133 確認トレンチ1平面図 (S = 1/100)

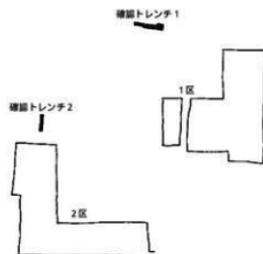


Fig.134 確認トレンチ位置図

いない。

調査の結果数基のビットや土坑、溝状の落ち込みを確認したが、西二坊大路東側溝は確認できなかった。トレンチ東側に斜行する溝状の遺構が存在するが、これは非常に浅い落ち込み状のもので、西二坊大路東側溝とは位置も方位も、埋土も異なる。また、推定路面上には複数のビットと土坑が検出された。土坑については埋土の状況から古代以前のものの可能性がある。

確認トレンチ1出土遺物 (Fig.136) 包含層出土物について報告する。

包含層出土遺物 出土物のうち須恵器杯(1・2)・須恵器蓋(3・4)・土師器椀(5)・土師器碗(6)について報告する。

須恵器杯 1は杯Aである。復元口径16.0cm、器高2.8cmを測り、底部外面へラキリののち軽いナデ調整を施す。胎土灰褐色を呈し、長石粒と黒色粒子を少量含む。口縁部のみイブシがかかる。2は復元口径17.0cmを測り、底部を欠損するためAかBかは判然としない。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

須恵器蓋 3・4はともに杯B蓋である。いずれも復元口径20.8cmで、口縁部の屈曲などが酷似し、あるいは同一個体の可能性もある。胎土は灰色で長石粒を少量含む。

土師器椀 5は復元口径20.2cmを測り、端部を上方へ引き上げる口縁部を有する。内面オサエののちナデ調整、外面ナデ調整を施し、頸部付近は強いナデにより稜を形成する。胎土は淡褐色で赤色酸化土粒をやや多く含む。

土師器碗 6は碗Aの破片である。内面ナデ調整、外面へラケズリを行い、胎土は橙褐色で精良である。

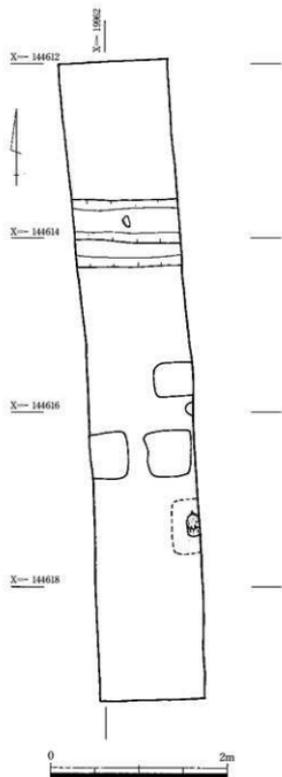


Fig.135 確認トレンチ2平面図 (S = 1/50)

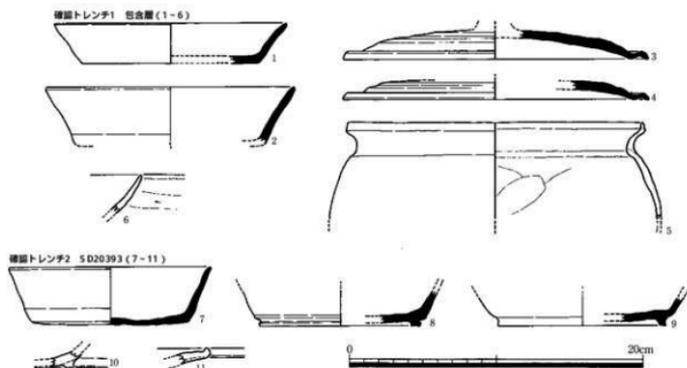


Fig.136 確認トレンチ出土遺物 (S = 1/3)

第2項 確認トレンチ2の遺構・遺物

2区北側で侵入路および擁壁工事に伴って、工事を中断して行なった調査である。一条北大路南側溝の検出を目的として設定した。確認トレンチ1と同様緊急に行った調査のため、S D 20393（一条北大路南側溝）S D 20393以外の遺構は掘削していない。

調査の結果 S D 20393（一条北大路南側溝）と複数の大型柱穴を検出した。S D 20393は幅80cm前後、深さ33cm前後を測り、埋土は暗灰褐色の砂質シルトを主体とする。葉理の形成がみられ、水性堆積の痕跡は確認できるが、粗砂を運ぶような多量の流水痕は確認できない。奈良時代半ばには機能していたと考えられる。

柱穴は一辺55cmの隅丸方形を呈し、一部に径20cmの柱が残存する。削平を考慮に入れずとも現状で一条北大路南側溝との間隔は1m程度しかなく、大路と建物間に築地のような大型の遺構物は想定しがたい。

S D 20393（一条北大路南側溝）出土遺物（Fig.136） 出土遺物のうち須恵器杯（7-9）土師器杯（10）・土師器甕（11）について報告する。

須恵器杯 7は復元口径13.8cm、器高4.0cmを測り、外底面はヘラキリののち未調整である。口縁部のみイブシがかかり、胎土は灰白色で精良である。8は復元高台径11.0cm、9は復元高台径11.4cmを測り、ともに高台はやや内側に貼り付ける。底部外面は8がヘラキリののちナデ調整、9はヘラキリののち未調整である。ともに胎土は灰色で砂粒少ない。

土師器杯 10は杯Bである。底部の破片のため詳細は不明である。胎土は赤褐色で精良である。

土師器甕 11は口縁部の破片である。短く上方へ摘み上げる口縁端部を有し、胎土は橙褐色で精良である。

これらの遺物群は、詳細な年代決定ができないが、8・9の須恵器の高台が比較的内側に貼り付ける事や、10の土師器杯Bの形態から、奈良時代中頃の年代が推定される。

第4章 調査のまとめ

第1節 遺構変遷について

古墳時代の遺構 (Fig.137)

当遺跡で最も古い遺構は古墳時代前期に遡る。遺構としては小規模な土坑・溝が主体であるが、2区SD20250は旧河道を利用した大規模な溝である。出土遺物は古墳時代前期全般にわたるが、最終的には人為的に埋め戻される。埋め戻しの時期については須恵器甕の体部片が出土していることから、須恵器出現以降であるとするのみで、詳細な時期決定はできない。

古墳時代後期には1区において斜行する小型の溝SD10323、10711、11082が存在する。また、2区SD20400も時期不明であるが、遺構の切り合い等から古墳時代に遡る可能性を持つ。これらはいずれも幅約30cm、深さ15cmの小規模なものである。約45.5mの間隔をもって存在し、方位は座標北から約15度西偏する。後述するように周辺の調査からは同様の規模、規格を持つ溝が検出されており、広域に及

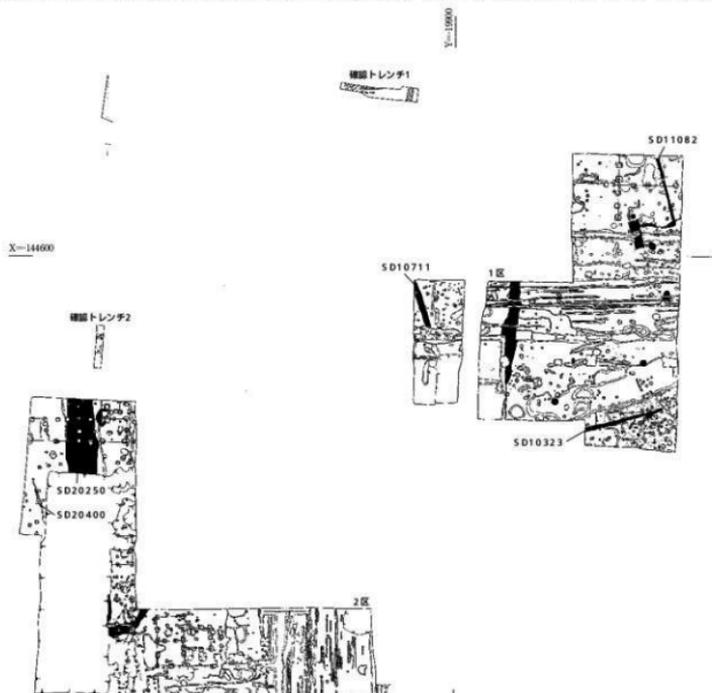


Fig.137 古墳時代の遺構 (S = 1/800)

ぶ開発の痕跡である可能性がある。埋土内からは須恵器の細片が出土しており、6世紀半ば以降のものと考えられる。

奈良時代前・中期（西隆寺創建以前）の遺構（Fig.138）

この時期の遺構は非常に希薄である。ただ、一条北大路南北側溝、西二坊大路東西側溝はこの時期に設置されているものと考えられる。さらに、この段階では2区の三坊側に坪内道路 S F 20399 が設置され、坪内を分割して使用していたようである。

このほか、1区では西隆寺創建以前の遺構が複数見つかっている。S X 10349 は奈良時代中期の整地痕跡と考えられ、自然地形を人為的に埋設している。同様の時期に属する遺構は S E 10358 などの他、S K 11081 は西隆寺創建に伴って廃絶した井戸と考えられる。

今回の調査では茶坊側溝以外に奈良時代前期に遡る遺構は確認できず、調査区周辺が奈良時代中期に開発の画期を迎えることが指摘できる。

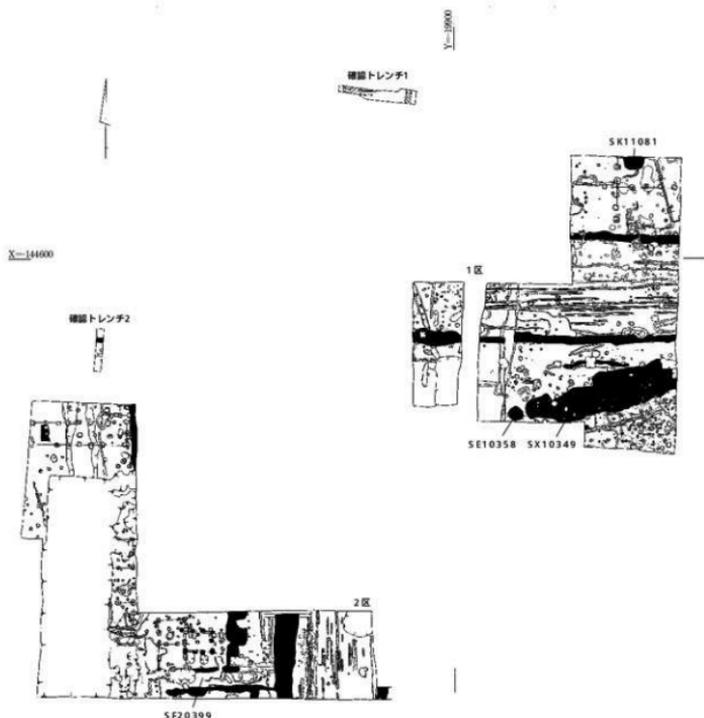


Fig.138 奈良時代前・中期（西隆寺創建以前）の遺構（S = 1/800）

奈良時代後期（西隆寺創建以降）の遺構（Fig.139）

最も遺構が増加する時期である。変化が顕著なのは2区の三坊側で、前段階に存在した坪内道路S F 20399が廃絶し、規模の大きな建物S B 20045・20075・20083・20230や、井戸S E 20016・20348・20364などを設置する。S E 20016以外の井戸は比較的小規模である。1区北辺坊側でもこの時期に遺構が増加する。しかし、1区では明確な建物はみられず、遺構は2区に比べて比較的希薄である。ただし、1区では西隆寺に関連すると考えられる遺構群が多く出現する。S D 10371は西二坊大路西側溝を流れていたと考えられる水を二坊側へ引き込み、水溜め状の土坑へ流し込む。この遺構の最終埋没段階には大量の瓦が東側から投棄され、何らかの片づけ行為が行われたことが窺える。瓦に供伴する土器は9世紀末～10世紀初頭のもので、同時期の瓦溜まりは1区内でも複数みられる。この9世紀末～10世紀初頭は遺構変遷における大きな画期と思われ、西二坊大路西側溝は奈良時代に幅を広げ浚渫が繰り返されたのち、当該期に埋没、耕地化する。

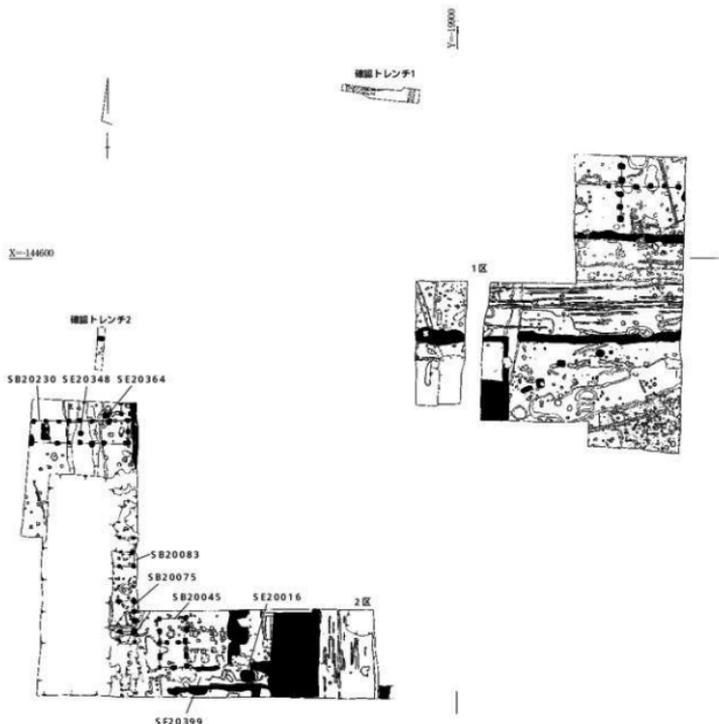


Fig.139 奈良時代後期（西隆寺創建以降）の遺構（S = 1/600）

平安時代以降の遺構 (Fig.140)

中世の遺構は主に2区北端付近に展開する。最も遺構が密にみられるのは11世紀後半～13世紀半ばにかけてである。10世紀前半頃は一条北大路が路面幅13～14mに規模を縮小しながら機能しており、1区に建物S B 10080、欄列S A 10198、井戸S E 10009、2区にS B 20395などが建てられ、一条北大路を中心とした集落が展開していたと考えられる。その後しばらく遺構が途絶えたのち、11世紀後半には2区建物S B 20394とS D 20099・20100などの区画溝などが出現する。12世紀にはS K 20120・20140・20160など多数の土坑群が展開する。S K 20160は後述するように、農業関係の遺構と考えられ、建物背面の索掘り小溝とともに当遺跡が農村の一形態であった事を示す。

これらの遺構群が廃絶するのは、S E 20130廃絶に伴い廃棄された土器の年代から13世紀第2四半期頃が推定できる。その後近代に至るまで顕著な遺構はみられない。

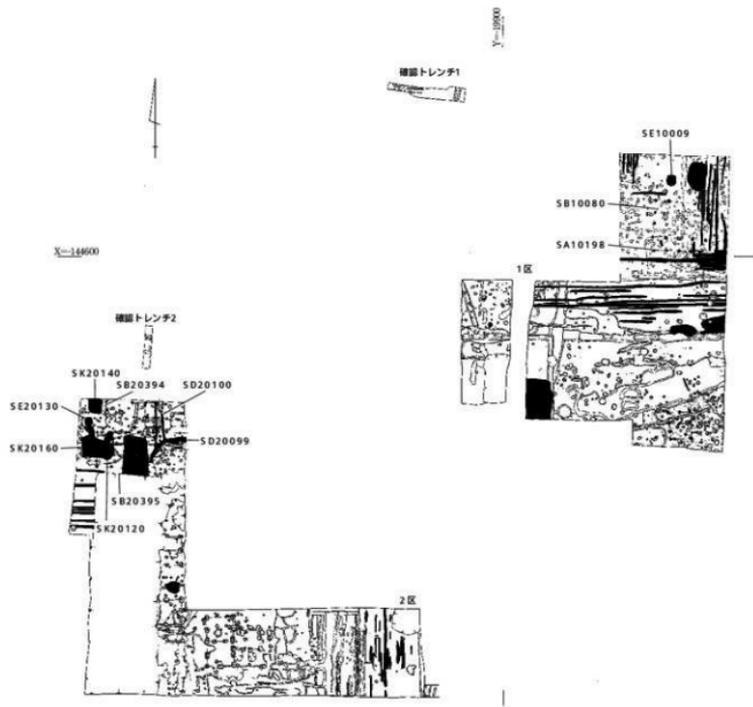


Fig.140 平安時代以降の遺構 (S = 1/800)

第2節 SX10420出土瓦の検討

当該遺構からまとまって出土した瓦は、総箱数109箱（丸瓦29箱、平瓦73箱、判別不能7箱、軒丸瓦2点）を数え、重量にすると1377.08kg（軒丸瓦を除く）にも及ぶ。もちろんこれだけで全体ではなく、遺構は調査区の南側に伸びており、資料も当然のことながら連続して、埋没したままのものも多く残されていると思われる。しかし、一括して投棄されたような状況やその投棄以降の埋没が短期間で終わっていると予想されたことから、何らかの形で不要になった瓦群をある時期に一括して整理した一群であると理解し、西隆寺の瓦研究に何らかの寄与が出来る可能性があるという判断から簡単に数値的な検討を行ってみた。検討内容は奈良国立文化財研究所が前回の報告⁽¹⁾中で行った方法をそのまま援用したものである（当該報告は以下先報と略す）。

さてその箱数からも分かるとおり、一見して平瓦が多く2倍以上存在していることは明らかである。これを数値的に理解するために重量による比較を行うと、当該遺構出土丸瓦の総重量は351.07kg、これに対して平瓦の総重量は946.49kg、判別不能分は79.52kgであった。判別不能分を除いた丸瓦1に対する平瓦の重量比は2.70である。ただし両者には個体時の重量差があるため、個体数を推定して比較することで瓦の実数に近い数値での比較になる（重量比換算個体数）。各個体の重量は先報にあり、平瓦で3.20kg/枚、丸瓦で2.50kg/枚とされており、この数値を直接当てはめて計算すると、平瓦で295.78枚、丸瓦で140.43枚という数値を得ることができた。これを元に丸瓦：平瓦の比率を計算すると、1：2.11となる。この数値は先報に比べると著しく低い数値と言える。つまり丸瓦に対して平瓦が少な目ということであり、このことは平瓦の葺足が広がっているということを示している。

そこで先報にしたがって平瓦の葺足を計算すると、丸瓦の胴部平均長が32.2cmであるから、 $32.2 \div 2.11 = 15.26$ cmが平瓦の平均葺足となる。西隆寺出土平瓦の平均全長33.2cmの約46%（ $15.26 \div 33.2 = 0.4596$ ）ということになる。先報が示す境内地出土瓦のデータでは37%、平城宮第二次大極殿院では38～40%である⁽²⁾。これらと比較すると当該遺構のデータとは大きな開きがあり、今次のものが明らかに平瓦の重複が少ないことがわかる。

この数値を考えるために現代の瓦の葺き方⁽³⁾を参考にすると、本瓦葺では平瓦の葺足の最小限度は（平瓦の全長-60mm） \div 2で表され、西隆寺出土の平瓦で計算すると13.6cm以下が妥当なものとなる。先報のデータでは丸・平瓦の比率が2.60と考えられており、その場合の葺足は12.4cmとなり十分対応していることになる。つまり今次のデータは通常の屋根には相応しくない瓦の葺き方を行っていたということになる。葺足が広いと瓦の破損率が高くなるようであり、また雨漏りの原因にも繋がると思われる。しかし、今次の出土状況のみを限り井戸などに二次的に利用されたものに廃棄されたものとは考えられず、おそらく何らかの建物が倒壊し、それを単純に整理（投棄）しただけのもので問題なからう。

そこでこの遺構の検出位置を考えると、西隆寺の北辺もしくは西辺築地に近接していることがわかり、その所用瓦の可能性を考えたい。今次の調査では寺域北辺が北一条大路に面していると考えたと、大路南側溝（SD10821）とその南側約3mの位置にあるSD10342が注意され、後者はその残存状況に不満も残るが、寺側に設けられた雨落溝の可能性を十分考えさせるものである。

これを肯定し、北側の雨落溝は北一条大路南側溝が兼ねていたとすると、築地軒先の北辺と南辺間の距離は約3m、片側では単純に1.5m以下ということになる。この数値を基礎とすると片側の屋根に葺かれる丸瓦は、西隆寺出土丸瓦胴部平均長が32.2cmという先報のデータを用いると、一列当たり4本で128.8cmの数値となり、棟の厚みや屋根の傾斜を考慮すると、ほぼこの数値に近い数値が築地片面の長さともみていじらう。この長さを先に見た平瓦葺足の長さで割ると、平瓦の数は一列当たり8.4枚という

ことになる。この程度の枚数なら平瓦にかかる重量は、軒先に近い部分でも大したことはなく破損の心配は少ないと思われ、しかも築地という性格上雨漏りの心配は必要ないと言える。

このことから、今回出土した瓦の一群は西隆寺の築地に用いられた瓦群である可能性が出てきたと言える。ただこのS X10420からは軒丸瓦が2点出土しているだけであることは注意を要する。単純に倒壊し、整理されたものであるなら通常は軒先瓦が幾分かは混在していてもよさそうなものである。

例えば倒壊前にすでに軒先瓦のすべてが失われていたとすればどうだろうか。これは丸・平瓦の比率に影響してくるはずである。ここに推定した程度の屋根の場合だと、軒先を失うと丸瓦で3枚、平瓦で7枚程度という数になる。この場合、丸瓦と平瓦の比率はおよそ2.33となり、西隆寺における通常の屋根の比率2.60には近づくものの中途半端な数値と言わざるを得ない。これに対してもっと大きな屋根の場合だと先端の1枚が転落し失われたくらいなら、比率はそれほど大きく変わらないだろう。したがって、この瓦群を推定のとおり築地とした場合、軒先の瓦は当初から存在していなかったと考えるのが妥当だろう。これは先報においても北辺築地地区で軒瓦の出土量がきわめて僅少であることから推定されていたが、今回も同様の結果を得たと言えるであろう。

簡単な整理しか行っていないが、S X10420出土瓦群は西隆寺北辺（西辺）築地の一部に使用されていた瓦群が倒壊後に整理、廃棄されたものと認識し、しかも使用段階で軒瓦が使われていなかった可能性が高いという所見でまとめておきたい。

- (1) 小澤純「西隆寺創建期の軒瓦」『西隆寺発掘調査報告書』(奈良国立文化財研究所40周年記念学報 第52冊)1993年 奈良国立文化財研究所
 (2) 佐川正教「第Ⅱ期遺構の遺産瓦とその年代」『平城宮発掘調査報告書 XVI』(奈良国立文化財研究所40周年記念学報 第51冊)1993年 奈良国立文化財研究所
 (3) 坪井利弘「日本の瓦屋根」1976年 理工学社

第3節 S E 20130・S K 20120・S K 20160の遺物組成

今回の調査では多量の遺物が出土した。近年、中・近世土器の破片数を元にした遺物組成を使用した研究が盛んになっており⁽¹⁾、奈良県内においても基礎データが蓄積され始めている⁽²⁾。本節では当遺跡の中で比較的良好な一括性をもつ中世の遺構を対象として種別に破片数をカウントし、今後の検討に備えたい。

検討対象としてはS E 20130（掘り方64片、枠内157片）、S K 20120（140片）・20160（864片）、破片総数1225片である。全体的に数が少なく、あまり良好なデータは得られなかったが、全体的な傾向として以下の点が指摘できる。

- ・土師器皿の比率は約40%である。
- ・瓦器椀の比率は約40%である。
- ・輸入陶磁器の比率は約1%である。
- ・東播系須恵器の比率は約1%である。
- ・瓦器椀に対して瓦器皿が圧倒的に少ない。

これらのうち遺物総数に対する輸入陶磁器と東播系須恵器の比率は他地域で指摘されている数値に近く、当遺跡が特に卓越した輸入陶磁器を有する遺跡ではないことがわかる。さらに、遺物総数に対する瓦器椀・瓦器皿・土師器皿の比率は合計で90%近くに達しており、在地産椀皿類の卓越が目立つ。データの蓄積が浅い現状では指摘できる事は少ないが、今後の研究に向けた足がかりとしたい。

- (1) 松本和彦2003『中世前半期の瀬について- 高松城跡(西の丸町地区)下層遺構-』、『続文化財学論叢』文化財学論叢刊行会、佐藤至聖2004『西日本における土器流通- 12-13世紀の瀬鏡を中心として-』、『中近世土器の基礎研究』XIII 日本中世土器研究会
- (2) 三好美穂・中島和彦1999『正暦寺旧境内の調査 第1・2次』、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 平成10年度』奈良市教育委員会

Tab.2 S E 20130・S K 20120・20160出土遺物組成表

SE20130(掘り方)

土師器皿	土師器釜	瓦器椀	瓦器皿	輸入陶磁器	東播系須恵器	合計
19	11	28	5	1		64

SE20130(枠内)

土師器皿	土師器釜	瓦器椀	瓦器皿	輸入陶磁器	東播系須恵器	合計
69	17	65	4		2	157

SK20120

土師器皿	土師器釜	瓦器椀	瓦器皿	輸入陶磁器	東播系須恵器	合計
63	47	26	1	2	1	140

SK20160

土師器皿	土師器釜	瓦器椀	瓦器皿	輸入陶磁器	東播系須恵器	合計
384	83	370	16	8	3	864

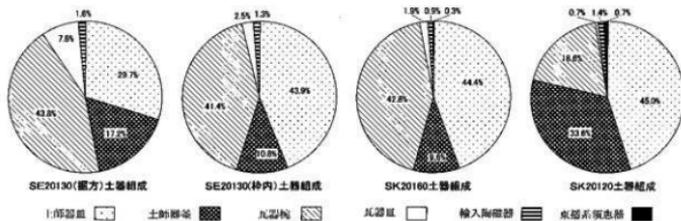


Fig.141 S E 20130・S K 20120・20160出土遺物組成グラフ

第5章 検討会の記録

報告書作成作業に伴い、調査が喚起する問題点及び調査で判明した事項を、平城京研究の現状の中で的確に位置づけるため「平城京研究の最先端と北辺坊」というタイトルで研究会を行ない、平城京研究に関して造詣の深い先生方のご発表を頂いた。本章では研究会の概要を記すとともに、当日の発表内容のテープ起こしを行いこれを掲載する。なお、岡本発表については本文内容と重なるため割愛、武田・佐藤発表については文章形式で新たに書き起こしたものを掲載する。

検討会の概要

主 催：財団法人元興寺文化財研究所

開催日時：2005年1月8日（土）

開催場所：元興寺文化財研究所3階会議室

プログラム

13：00 趣旨説明

13：10～13：40 「平城京右京北辺の調査の概要」岡本広義（元興寺文化財研究所）

13：40～14：10 「平城京研究史と今後の展望」武田和哉（奈良市教育委員会）

14：10～14：40 「古代土器研究の現状と問題点」三好美穂（奈良市教育委員会）

14：40～14：50 休息

14：50～15：20 「考古学から見た平城京北辺坊について」井上和人（奈良文化財研究所）

15：20～15：50 「平安時代以降の右京北辺および調査の位置づけ」佐藤亜聖（元興寺文化財研究所）

15：50～16：00 休息

16：00～17：00 討論（司会：狭川真一（元興寺文化財研究所））

17：00 閉会

参加者（太字は発表者）：井上和人（奈良文化財研究所）、今尾文昭、清水康二、廣岡孝信、土居規美、大西貴夫（以上奈良県立橿原考古学研究所）三好美穂、武田和哉（以上奈良市教育委員会）、山川均（大和郡山市教育委員会）、岡本智子（財）大阪府文化財センター、狭川真一、岡本広義、佐藤亜聖、小野亜由美、仲井光代（以上（財）元興寺文化財研究所）、下高大輔（奈良大学大学院生）、須田史、井戸竜太（以上奈良大学学生）

はじめに

平城京に関する本格的な研究は、江戸時代末期の北浦定政を嚆矢として見なすことができ、日本の古代都城の中でもとりわけ早くからその存在と重要性が認識されて研究が行われてきた経緯がある。また、条坊跡が遺存地割に反映されて良好に残存しているという極めて貴重なフィールドでもあり、周辺の条里制との関係などについても、従来から研究の対象として扱われてきた。加えて、最近は発掘調査件数の増加に伴い、条坊関連遺構の検出・確認や、宅地内遺構の様相の把握が進み、そこから出土する遺物の詳細な検討を通じて、土地利用状況や時代的変遷等についても研究の対象となりつつある。

本稿では、平城京研究史についてあらためて確認・検証をしつつ、今後の研究の展望や方向性について探ってみたいと考える。

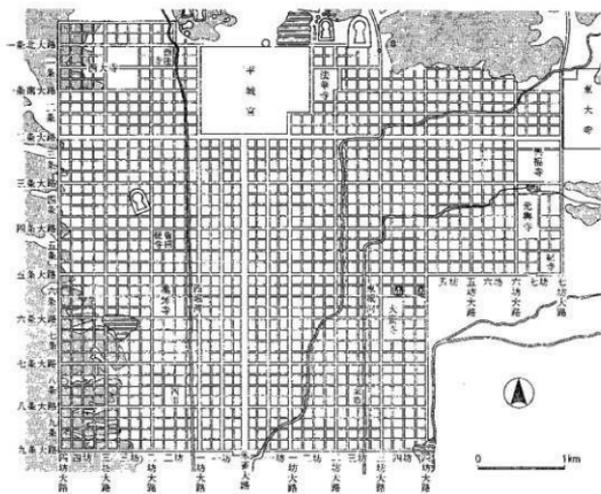


Fig.142 平城京条坊概念図 (田中琢編『平城京』(古代日本を発掘する3)岩波書店1988より)

1. 平城京研究史 1 - 1945年以前の研究史-

平城京の研究を振り返る際に、まずは先学の業績や思想についてまとめておきたい。本章では、主として近代以降の動向について述べてゆきたい。

北浦定政 江戸時代末期の国学者である。1817（文化十四）年に大和国添上郡古市村に生まれ、長じて津藩に出仕して同藩士となった。その後国学を学び、陵墓や条里、宮跡の研究を行うようになった。彼は自身で考案した測量車を使用して平城京跡内の各地を計測し、多くの成果を残している。また西大寺に伝わる古図や様々な古文書を渉猟して1852（嘉永五）年には『平城宮内裏跡坪割之図』をまとめている。彼の復原によると、朱雀大路の両側に東西幅4坊分を想定し、京の南限は北之庄村の池の堤と郡山植機筋を結ぶ線とし、ここを起点に北へ9条分の街区を想定するというものであった。さらにその北側に南北2坪分の「北辺」を想定する。ただし、現在「外京」として想定される地域は、洛外として京域には含まなかった。彼の復原案は、地形等から条坊道路を想定しているため、かならずしも各条坊街区の寸法は一致していない。このほか、条坊道路の幅員の問題は明確な考察対象として扱っていない。1871（明治四）年に没す。

関野貞^{せいの} 建築史研究者で、1867（慶應三）年に越後高田藩士の子として生まれる。帝国工科大学を卒業後に、古社寺保存のために奈良県に赴任して1897（明治三十）年に奈良県技師となり、1901（明治三十四）年には東京帝国工科大学助教授となって、その後は終生日本の古建築の研究・保存に尽くした。克（建築史）・雄（考古学）は子息である。関野は建築を専門とするところから、当時としては精度の高い地形測量図等を作成し、特に平城京域については「平城京及大内裏考」（東京帝国大学紀要工科3 1907）としてまとめ、更に唐の都城との比較検討を通じて所見を述べた。関野の条坊復原は北浦定政のそれと一致する点が多い。ただし、左京の二条から五条までを東に延長して「外京」として仮称し想定した点、平城京内の寺院において現存する遺構を地図上に落として図上で条坊の距離を測定し、それらをもとに造営寸法や造営単位尺について初めて詳細な検討を行った点などが、彼の独自の指摘とあらたな試みであるとして注目されるであろう。また、後述する喜田貞吉との論争を経て、北浦が「北辺」と称した部分を右京域に閉じるとのみ認めている。

喜田貞吉^{せいの} 1871（明治四）年に阿波国那賀郡（現在の徳島県小松島市）に生まれる。1896（明治二十九）年に帝国大学文科大学国史学科を卒業し、大学院を経た後文部省に入り、図書審査官として国定教科書の編修にあたる。その後京都帝国大学に転じ、退官後は東北帝国大学で教鞭を執った。古代史の研究者ではあったが、遺物や遺跡の考古学的研究や地理学、民俗学などの研究も採り入れ、当時では先説的とも言える手法で研究を行った。平城京に関する研究では『帝都』（日本学術普及会 1915）を著し、参謀本部陸地測量部作製の二万分の一の地図を使って平城京の規模を計測し、東西曲尺1400丈、南北曲尺1584丈との値を得た。これを東西8坊、南北9条に等分するならば1坊が曲尺176丈四方ということになり、仮に大室小尺1尺を曲尺の0.978倍として換算するなら、1坊が小尺180丈（大尺150丈=1里）となる点を指摘している。そして、このような試算等を経て、最終的には平城京は東西8里、南北9里の規模で設計されたという結論を導く。なお、前掲の関野貞とは平城京に関する問題と法隆寺再建に係る問題で論争を行ったことで有名である。

上記の研究者による平城京研究は、先駆的な位置を占めており、現代の図面や測量精度の基準とした観点からみるとどうしても不完全である点は否めないであろうが、限られた手段の中で平城京のほぼ全体の規模を想定している点や、地名や地形、遺存地割等に着目して条坊復原を行い今日においても使用

されている研究手法の根幹の多くを創出している点では、極めて貴重な成果と言えよう。また、造営尺や寸法の問題に言及したり、北辺坊や外京の想定など、重要な問題の提示もなされている点には注目をしなければならぬ。

2. 平城京研究史 2 - 1946~1970年代に至るまでの研究史-

戦前の研究を受け継いで、戦後もいくつかの重要な研究が発表されている。本章では、概ね1980年より以前の研究史について概観するものである。

大井重二 1908(明治四十一年)年に奈良県に生まれる。京都帝国大学文学部国史学科を経て、京都第二商業学校教員、陸軍教授、京都府立鴨沂高校副校長などを歴任した。国文学研究が専門で、平城京研究においても多くの研究を残しており、それらの成果をまとめた『平城京と条坊制度の研究』(初音書房 1966)を刊行し、いくつかの重要な指摘をしている。京城に関する問題では、「北辺坊」の存在には否定的であり、平城宮北辺のラインを北京種と想定した。また、「外京」については平城京の造営当初からの計画ではなくのちに拡張したものとしてみている。大井の研究手法の特徴は、古代から中世を中心とした時期に係る膨大な史料・古文書の渉猟に基づく条坊関係記述の収集と、それらより精納される事実の指摘である。更に、平安京遷都以降の廃絶過程について言及した点は先駆的である。更には、条里と都城との問題、造営寸法や道路幅員の問題についても考察しており、都城に係わる様々な現象を総合的に理解を目指す志向は、現在の研究につながるものとして評価できる。

奈良国立文化財研究所による調査研究 第二次大戦後に奈良県内に設置された奈良国立文化財研究所は、主として平城京や藤原京、飛鳥京および古代寺院に関する調査研究を手掛けてきた。平城宮・京に関していえば、『平城宮発掘調査報告』などをはじめ多くの発掘調査報告書、史料、その他膨大な成果物を刊行して、現在も日本における都城研究の一大拠点としての役割を果たしている。中でも1962(昭和三十七)年に刊行された『平城宮発掘調査報告Ⅱ』において、平城京の造営規模について詳細な研究成果が報告されており、注目される見解が示されている。すなわち、条坊計画については、一坊を1800小尺であるとする見解を踏襲しつつも、発掘調査で検出した条坊道路の幅員に広狭の差があることに着目し、平城京の条坊設定方式は1800小尺方格の基準線を設定したのちに、両側に条坊幅員の半分ずつの距離を条坊道路用地として取り込んだと推定した。その結果、「坪」とよばれる宅地部分は接する条坊道路の幅員の広狭によって面積が異なることを指摘している。その上で、京内寺院の伽藍中心線的位置関係についても考察し、これらが周辺の条坊の位置と合致していると見なして、造営尺の問題にも言及する。ただ、この考察の中で、興福寺の伽藍中心線だけが周辺の条坊想定位置と大きく隔たるとし、遺存地割の考察とも併せて、外京の東西幅が狭かったと指摘し、その原因を造営尺の違いにあるいは造営寸法の違いと見なして、造営の時期が当初よりも遅れた可能性をも指摘するものである。

大岡實 1925(大正十五年)年に東京帝国大学工学部建築学科を卒業した大岡は、その後大学院を経て、文部省技師として古建築の保存に携わり、戦後は横浜国立大学教授として建築史の研究に大きな足跡を残した。大岡は、興福寺などをはじめとする南都諸寺院の伽藍配置の研究を長年に渡り手掛け、1966(昭和四十一年)年には、『南都七大寺の研究』(中央公論美術出版 1966)を刊行したが、その中では、興福寺と周辺の条坊との関連について、外京が興福寺を取り込むために設けられたものであり、設定時期は平城京造営当初とした。

その後、1975(昭和五十)年には『興福寺飯金堂発掘調査報告書』(興福寺)において興福寺の伽藍

復原の問題をあらためて論じ、また太田博太郎が前述の奈良国立文化財研究所の見解を示しつつ、外京の問題と興福寺の造営の問題を一体の問題として考え、条坊寸法の違いが興福寺や外京の造営時期の手かがりであるとする見解を提示したのを受けて、規模が異なるのは地勢などの関係からであって、条坊施工の実施年代の差とみなくてもよいと主張してもいる。

岸俊男 奈良県文化財技師であった岸熊吉の子息として生まれた岸俊男は京都大学卒業後に母校の教授となり、奈良県立権原考古学研究所の所長も歴任したが、日本古代の宮および都城の研究について多くの研究を残した。その成果は、『日本古代宮都の研究』（岩波書店 1988）など多くの著書に結実している。平城京の研究において、特に触れなければならないのは、遺存地割の研究であろう。1974（昭和五十九）年に刊行された『平城京朱雀大路発掘調査報告』（奈良市）に所収の「遺存地割・地名による平城京の条坊復原調査」がそれである。この研究は、奈良国立文化財研究所が作製した1000分の1の地図などを利用して、当時まで平城京跡の域内に良好に残存していた地割の様相を把握し、条坊の位置や幅員などを想定した。更には、字名などの地名や古文書の記述などを手がかりに、平城京内の各所の諸問題についても提起している。精緻な作業を積み重ねた結果、詳細な遺存地割図が作製されており、現在の平城京の調査・研究に多大な寄与をしたと言わねばならない。ただし、最新の発掘調査事例による限りでは、遺存地割で想定した幅員と実際に発掘調査で検出された条坊遺構の幅員とは差があり、遺存地割よりも想定した幅員の方が広い傾向にある。これについては、後述の館野和己による研究があるが、遺存地割とは、平城京の廃絶段階を大きく反映したものであるため、どうしても条坊遺構そのものの規模を示すものではないことが、近年の調査・研究の成果から見えつつある。よって、当研究で岸が想定した条坊道路の幅員は、実際よりは大きい数値となっている点は否めない。ただし、遺存地割の研究自体が無意味であるということではなく、廃絶過程や廃絶後の土地利用等を研究する上では極めて貴重な出掛かりであることは言を待たない。

以上、戦後の平城京に関する研究状況について、主要なものを概観した。上記以外にも田村吉永、太田博太郎、坪井清足、鈴木嘉吉、田中琢など多くの諸先学による数多くの研究や貢献、更には奈良国立文化財研究所、奈良県教育委員会、奈良県立権原考古学研究所、奈良市教育委員会、大和郡山市教育委員会、奈良大学、奈良女子大学などによる発掘調査報告があるが、紙幅と時間の関係上割愛させて頂いたことを、ここでお断りしておきたい。

3. 平城京研究史 3 - 1980年代以降の研究史 -

奈良県を含めた日本国内の埋蔵文化財行政は、概ね1980年前後には各都道府県および主要な市町村では調査体制が整いはじめ、その後には景気の高揚に伴う都市開発等の盛行時期を迎え、発掘調査の件数が増加してゆく。

そもそも日本の古代都城遺跡の大半は、現代における都市またはその近郊に位置しており、近年の都市化と開発の増大によって、緊急発掘調査の件数が飛躍的に増大している。こうした調査は、開発に伴う遺跡破壊を前提としたものが殆どであるため、遺跡保護の観点からみれば手放しで喜べる状態ではない。しかしながら、そうしたかけがえのない代償と引き替えのような形で多く実施されてきている発掘調査により確認された成果・新知見によって、都城遺跡の様相把握が一段と進んだという皮肉な面も否定できないであろう。本章では、最近の主要な研究成果について紹介するが、紙幅と時間の関係もあるので主要なものに留めることとし、すべてを網羅できないことを予めお断りしておきたい。

町田章 奈良国立文化財研究所入所以来、平城宮・京の調査に長く携わり、平城宮跡発掘調査部長を経て、後身の独立行政法人奈良文化財研究所長に就任した。1986（昭和六十一）年に刊行された『平城京』（ニュー・サイエンス社）は、平城京の研究史、諸問題、調査の成果を平易かつコンパクトにまとめており、研究者や調査関係者のみならず一般者も多く利用する図書である。近年は、殊に発掘調査成果の社会還元や普及啓発活動の重要性が認識されつつあり、様々な概説書や入門書が刊行されているが、本書はまさに平城京に関しての嚆矢に該当しよう。本書では、平城京の概要について述べ、当時の最新の調査成果を多く採り入れ、図面を多く駆使して研究の現状を解説する。

また、従来より論争のたそわっていた外京の規模については、前述の奈良国立文化財研究所による『平城宮跡発掘調査報告Ⅱ』における見解を採用せず、距離的に問題がないと述べている。ただし、その根拠は本書の中では詳細には示されていない。

井上和人 奈良国立文化財研究所に入所後、藤原宮・京や平城宮・京の調査を長年にわたり手掛ける傍ら、条里制や都城制に関する諸問題について多くの研究を発表してきている。特に1984（昭和五十九）年に発表された「古代都城制地割再考」〔『奈良国立文化財研究所研究論集』Ⅶ〕や、1994（平成六年）年の「条里制地割施工年代考」〔『条里制研究の一視点 - 奈良盆地における条里制地割施工年代について - 』私家本〕は、極めて精緻な分析と計算に裏打ちされた研究であり、現在の古代都城制・条里制研究に与えた影響は大きく、前者は発表後二十余年を経た今日でも、調査研究に携わる者が必読すべき研究と言えるであろう。この他にも数多くの研究を発表しており、2004（平成十六）年に「古代都城制条里制の実証的研究」〔学生社〕という論集となって集められた。研究方法は、遺構の検討や位置の計算のみならず、文献の検討や地形図等の分析などに至るまで多くの視点から検討を積み重ねて結論を導くもので、説得力に富んでいる。北辺坊に関しては、2003年に「平城京右京北辺坊考」が発表され、北辺坊と西大寺寺域のふたつの大きな問題について、体系的に分析を行い、奈良時代後半に右京北域に西隆寺・西大寺を造営するのに関係して拡張・造営されたという結論を説く。

山中章 向日市において長岡宮・京の調査研究に長年従事し、その後三重大学に転じた。都城制を遺構だけでなく、遺物分析の観点からみた分析・研究を積み重ねている。また、長岡京のみならず、藤原京や平城京、平安京といった他の古代都城との比較検討を通じて、多くの重要な指摘があり、近年『日本古代都城制の研究』〔柏書房 1997〕および『長岡京研究序説』〔塙書房 2001〕を刊行した。平城京に関しては「古代条坊制論」〔『考古学研究』38- 4 1993〕でいくつか注目される指摘をしており、条坊道路の設定方法について、前掲の奈良国立文化財研究所が指摘したような条坊計画線から両側に等距離幅を設定する方式の他に、条坊計画線から片側のみ条坊用地を設定する方式の存在についてもその可能性を主張する。ただし、この指摘については、のちに前掲の井上和人により反論が提出されている。鏡野和己 奈良国立文化財研究所にて史料調査と発掘調査を長年手掛け、その後は奈良女子大学に転じた。古代史研究全般において多くの著作をもつほか、前述の岸俊男の遺存地割の研究を受け継いで、遺存地割の特徴や傾向等について検討を行い、平城京の廃絶過程やその後の様相を知る重要な手掛かりとして再評価した（『古代都城制廃絶後の変遷過程』科報報告書 2000）。現在、発掘調査で検出される条坊遺構は、遺存地割に比べて大きい傾向にあるが、これは条坊道路とその両側に存在していたであろう側溝部分や築地等の部分が含まれているからであると指摘した。すなわち、平安時代におこった平城京の廃絶と田畑化は、まず築地や条坊関連施設に囲まれた宅地の内部から発生し、移動空間として比較的遅い時期まで機能していたとみられる条坊道路や側溝等や付随する空間は、その後の段階で田畑化したとみられ、そうした経緯が遺存地割に反映されていると指摘している。また、北辺坊に関しては、文献

史料の分析を通じてその造営時期を想定し、史料的にのみ限りでは、少なくとも奈良時代には北辺坊が存在した形跡はみられないとする見解を提示した。

その他 1980年以降に発表された平城京に関する研究は多くあり、さまざまな視点からの研究がなされている。本章では紙幅と時間の制約上、主要なものについてのみ以下に記しておくので、適宜参照されたい。下記以外にも多くの研究があることも附言しておく。

- 坪井清足 『古代を考える 宮部発掘』 吉川弘文館 1987
- 田辺征夫 『平城京を語る』 吉川弘文館 1982
- 金子裕之 『平城京の精神文化』〔角川選書282〕 角川書店 1997
- 武田和雄 『平城京外京条坊制考』『奈良古代史論集』3 真蹟社 1997
- 小澤 毅 『都城としての平城京』『奈良歴史8 建築』 名著出版 1998
- 藤野和巳 『古代都市平城京の世界』〔日本史ブレット7〕 山川出版社 2001
- 武田和雄 『日本古代都の条坊施工の側面 - 幅員の变化する条坊道路の存在-』『立命館大学考古学論集Ⅱ』 立命館大学考古学論集刊行会 2001
- 武田和雄 『平城京跡発掘調査の成果と条坊制研究の課題 - 附 平城京関係発掘調査報告書一覧（稿）』『条里制・古代都市研究』18 2002
- 狭川真一 『元興寺の設計と外京』『続文化財学論集』 奈良大学文化財学論集刊行会 2003
- 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所 『東アジアの古代都城』〔研究論集 XIV〕 2003
- 佐藤信博が『古代荘園絵図による歴史景観の複元的研究』〔科研報告書〕2003〔佐藤信博2005『西大寺古絵図の世界』東大出版会として刊行〕

4. 平城京の新知見 - 最近の成果の概要-

本章では、主として1990年頃以降の調査で新たに確認された成果などをもとに、平城京の遺跡の様相について概観する。

条坊道路 近年の調査の進展によって、平城京内の条坊遺構の検出事例は数多く追加され、それによって新たな様相が判明してきた。条坊道路について言えば、従来の研究における想定を超えて、規模や幅員についてはかなりバリエーションがあることが判明しつつある。主要な検出事例はTab.3の如くであるが、これをもとと判るように、朱雀大路を除くと、大路、条・坊間路、小路という各カテゴリーの中でも、幅員が様々であることが判るであろう。更には、同じ条坊道路でありながら、場所によっては幅員が異なっている例も散見されている。大まかな傾向ではあるが、宮に近い場所の条坊道路の幅員に比べ、宮から遠隔の場所にある条坊道路の幅員の方が狭くなる傾向にあるようにも見えるが、必ずしもそうしたことが完全に貫徹されている状況でもない。

このように、条坊道路が大路、条・坊間路、小路というカテゴリーはあっても、その中の幅員規模にはかなりの差があるということ、そして同じ条坊道路でも幅員が変化するなどの事態が予測されるといことになる、平城京の条坊施工はかなり複雑な様相であったとみななければならない。これは、藤原京の事例に比べるとかなり目立つ特徴と言える。藤原京の場合は、幅員のバリエーションがない訳ではないが、規格性がかなり貫徹されている印象がある。そして、平城京におけるこのような複雑な条坊施工は、その施工方法からすると、当然にして条坊道路設定後に残る部分となる宅地の面積や形状の不均衡という事態を招いていたことにもなる。

条坊設定 それでは、条坊計画自体も複雑な体系であったのかというと、実はそうではない。上記のような複雑な様相を示す各条坊道路の幅員ではあるが、両側溝心々間の中心位置を計算して、それが京内

Tab.3 古代都城の条坊道路の幅員例
(武田和哉『平城京跡発掘調査の成果と条坊制研究の課題』『奈良制・古代都市研究』18 より)

各都城の条坊道路幅員の検出事例					
都城名	条坊大跡	大路クラス	全線跡・坊間跡クラス	小路クラス	備考
藤原京	100尺大 (原形跡) 40尺大 (埋込跡)	70尺大、二条大路 (32.1m)・宮内大路 40尺大、二条大路北側 (真直大路)	25尺大、一帯大路跡 (公家大路)	20尺大、一帯大路跡 (公家、官路跡)	北条宮『藤原京跡発掘調査報告書』1989年
平城京	170尺大 (74.4m) 74.0m・五 200尺大 (74.0m) 条坊大跡	100尺大、二条大路 (32.2m)・宮内大路 70尺大、西一帯大路 (24.0m)・宮内大路 80尺大、東一帯大路 (23.7m)・宮内大路 80尺大、二条大路 (22.7m)・右第一帯 80尺大、西三坊大路 (23.3m)・右第一帯 40尺大、二条大路 (22.7m)・宮内大路 40尺大、東三坊大路 (23.6m)・西第一帯 40尺大、西二坊大路 (15.6m)・二条 40尺大、六条大路 (約14.6m)・東第一帯	70尺大、西一帯坊間跡 (24.0m)・八条 40尺大、東一帯坊間跡 (24.0m)・八条 50尺 (50.0) 尺、東一帯坊間跡 (19.2m)・宮内 40尺大、二条大路跡 (約16m)・右第一帯 30尺大、西三坊大路 (15.7m)・西第一帯 20～30尺大、西二坊大路跡 (約10m)・二条 25尺大、二条大路跡 (15.6m) 20尺大、一帯大路跡 (15.0m)・西第一帯	20尺大、西一帯坊間跡 (15.6m)・八条 20尺大、一帯大路跡 (15.6m)・八条 15～20尺大、五条大路北側小路跡 15尺大、二条大路北側小路跡 10尺大、東一帯坊間跡 (約7.0m)・五条	条坊制跡 西三坊大路 ほか
近江京	170尺大 (74.4m) (複製)	130尺大、二条大路 60尺大、西一帯大路跡 (15.6m) 80尺大、二条大路北側小路 80尺大、西二坊大路	45尺大、二条大路跡 (15.6m) 50～60尺大、西三坊大路 跡、北、東 45尺大、西三坊大路 跡 (北～西) 30尺大、東二坊大路跡 (15.6m) 30尺大、一帯大路跡 (北～西) 25尺大、西三坊大路跡 (北～西)等、西一帯坊間跡	30尺大、一帯大路跡 (15.6m)・北、東 25尺大、二条大路跡 (15.6m)・北、東	注跡、(1)長岡京跡特偵 隊における「発掘」 『発掘調査』菅原由樹 2004、発掘調査1) 菅原 謙次ほか
平安京 (参考)	25尺 (埋込跡)	17尺、二条大路 12尺、大宮大路 (15.6m) 跡 8尺、二条大路北側小路 8尺、二条大路北側小路 (複製)		8尺、坊間小路跡 (15.6m) 4尺、坊間小路跡 (15.6m)	『平安京』 菅原由樹

※ 1) 条坊制跡 (埋込) は、条坊制跡の埋込跡を示している。
2) 参考として挙げた平安京の条坊制跡は、調査の検出結果でなく、『平安京』の図説から採録している。

においてどのような位置関係を示しているのか計算してみると、意外にも多くの部分においてほぼ375大尺 (450小尺=約133m) の間隔で存在していることがほぼ確認される。逆に考えると、すべての条坊道路がそうであるという確認はまだ出来ないもの、かなりの割合で条坊道路の中心部分は、375大尺という間隔を保って規則的に割り付けられているということが判る。このことは条坊施工の第一段階であったと推定される条坊計画線の設定が、375大尺間隔の方格体系という、極めて素朴な骨格であったということを示していよう。一見して複雑な様相を示す条坊道路施工も、その基本的な骨格である条坊計画線の段階では、実は基本的にシンプルなプランであったことには留意しておく必要がある。

ただし、平城京内でも、場所によっては条坊計画線の体系に若干異なった様相もないわけではない。大まかな傾向としては、平城京の南部や右京域については、ほんの僅かではあるが間隔が広くなる傾向が見て取れる。また、最近の井上和人の指摘によれば、今回の検討対象となっている平城京右京北辺坊の隣接地付近では、若干のスレが認められるという。こうした現象がなぜ起こったのかについては、まだ詳細は判明していない。今後の調査の蓄積などを待って検討していく必要がある。

宅地内の遺構の様相 条坊道路に囲まれた宅地内の様相についても、近年の調査件数の増加に伴い、多くの坪においてさまざまな様相が確認されている。まず、平城京内の坪は、いずれも同様な利用や時期的変遷を辿っていたのではなく、場所によって様々な利用環境であったことが判明している。例えば、平城京右京二条三坊付近の調査では、坪内をいくつかの細かに区画に分割して利用していることが判っている (Fig.143)。各区画に併せて井戸が掘られている形跡があることから、おそらく細分化した宅地であったものとみられる。また、ここでは奈良時代前半と思しき遺構が少ないのに対して、奈良時代後半から平安時代前半にかけては、複製数時代の遺構変遷がみられる。このように、平城京内の調査では、奈良時代前半に該当する遺構が見つかる例は少ないが、紫雲宮より遠部して以降の時代の遺構はかなり見つかっており、それは長阿京遺跡後も同様であって、平安時代前半頃のものも相当検出されている。

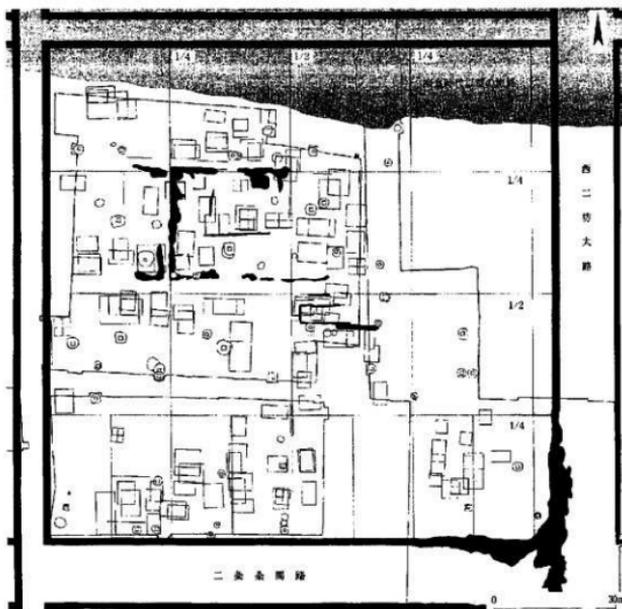


Fig.143 平城京右京二条三坊一坪の遺構の様相

（奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成11年度』 2001 年より）

こうした傾向を受けて、当然ながら出土遺物についても同様の傾向があり、例えば土器の出土量の大きな傾向をみても、奈良時代後半を中心として平安時代初期までの遺物が特に多い様相となっている。

この奈良時代から平安時代初期にかけての時期においては、土器の使用方法や形態、あるいは流通に関しては、極端な変革などの事態がなかったと考えられるし、また使用後の廃棄方法についても同様に大きな変化が無かったと仮定するならば、こうした出土量の傾向とは概ね当該時期の平城京内の人口の推移・動向をある程度反映していると考えて良いのではないかとと思われるのである。

宅地内の土地利用の意外な側面 ところで、発掘調査では奈良時代や平安時代の遺構が殆どみつからなかった坪もある。これは、左京四条五坊一坪がそうであるが（Fig.144）ここで注意しなければならないことは、遺構が見つからなかったことが直ちに遺構が存在しなかったということの根拠とはならないという点である。現在の平城京内における奈良時代から平安時代にかけての遺構面は、その後の都の廃絶に伴う田畑化によってある程度の削平をされていることが多いからである。また、中世以降の時期には粘土探掘を行っている場合も多くある。実際この左京四条五坊一坪はそうした粘土探掘が多くみられる場所でもある。ただし、これらの削平については極端な場合でも1mを超えるような例はそれほど多

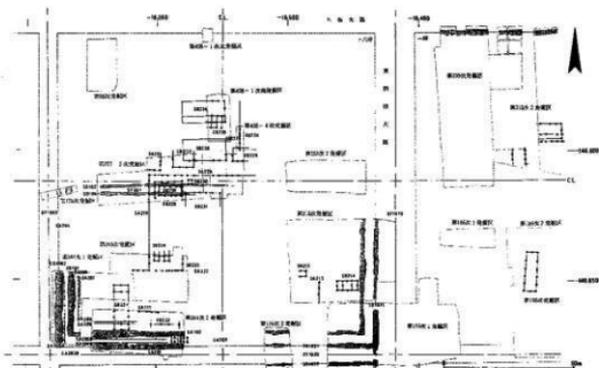


Fig.144 平城京左京四条四坊十六坪と四条五坊一坪の遺構の様相

(奈良市教育委員会 『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書平成7年度』 1996 年より)

くは考えられないから、掘立柱穴のような遺構は消滅する可能性があるとしても、井戸のような深い遺構までを消滅せしめることにはならない。そうした点に着目すると、やはり左京四条五坊一坪は坪の約三分の二を発掘調査したものの当該時期の井戸が僅かに1基しか見つからないのはやはり不自然である。その様相は、隣接する左京四条四坊十六坪の調査状況とも比較してみると一目瞭然である。この坪も左京四条五坊一坪と同様に、中世以降の粘土探掘坑が分布しているのではあるが、それらの下層からいくつかの掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。両坪の間には、極端な地形変化や高低差は見出しにくいことを考慮すると、左京四条五坊一坪の様相が特異であることがより一層明らかとなるであろう。

このように、奈良時代を通じて土地利用の痕跡が少ない宅地は、部分的なものを含めると、平城京内ではいくつかみられるようである。こうしたことは、一見整備されている条坊街区の中には意外に空地が存在していたという実態を垣間見せるものとして注目されよう。空地がいかなる利用実態であったのかを確かめるまではなかなか見当たらないが、耕作地のような状態であった可能性も否定できない。平城京の廃絶 従来の研究では、主として平城京の構造や適宜規模などに大きな関心がおかれ、平安時代以降に平城京域が如何にして廃絶して田畑化していったかという研究はむしろ盛んではなかったようにも思われる。かつて遺存地割に関する体系的な考察・分析を行った岸俊男の研究を継承した舘野和己は、遺存地割が平城京が廃絶していく過程を反映したものと評価して、その様相を発掘調査の成果と比較することで、廃絶の過程を探ろうとした。例えば、左京七条一坊六坪での事例をみると、遺存地割とされる田畑の規模に対して、実際の発掘調査で検出された条坊道路の幅員は狭いことが明確である (Fig.145)。これについては前項で舘野の見解を紹介したが、平城京域が田畑化していくには二段階あり、まず誰も住まなくなった宅地部分がまず田畑化して、その次の段階では移動・閉塞・排水の空間であった条坊道路や側溝、築地などの部分が田畑化した結果、こうした田畑の畦畔の様相となったのではないかと考察しており、極めて興味深い指摘であると言えよう。

また、平城京内における発掘調査で、中世以降の遺構が検出されることはよくみられることであるが、そうした遺構の分布についてもある程度の傾向がみられるようである。例えば、薬師寺・唐招提寺の周辺や、東市跡が想定されている辰市地区の付近などでは、他の地区に比べて中世以降の時期の遺構の密度が高い傾向にある。今回の調査で見つかった中世以降の遺構群についても、その様相には興味深い状況がみられ、これらの成果は平城京が廃絶したのちの様相を考察する上では極めて重要な手がかりとなろう。今後の調査の進展と共に、京域周辺部での様相とも併せての全体的な把握と考察が期待されている。

5. 今後の展望 - まとめにかえて-

平城京の研究は、これまでの諸先学による膨大な研究蓄積に加えて、近年の調査の増大に伴う多くの発掘調査成果の追加という事情もあって、新たな段階を迎えたと考えてよい。今後もバブル期ほどの件数ではないにしても、発掘調査件数・面積は高水準で推移するであろう。こうしたことを踏まえて、今後の研究の展望について私見を述べさせていただきます。

まず、調査・研究環境の整備という基本的な面については、調査を実施した機関による迅速かつ充実した内容の成果報告・公開の一言につきるであろう。現在、いずれの調査機関とも予算・人員・時間的制約の中で苦闘しているのが実態であるが、調査成果の報告・公開についてはより一層努力する必要性を、関係者の一人として痛感している。

ところで、これまでの都城研究のうち、特に都城の遺構・遺物の研究に関しては、調査関係者の主導によってなされてきた感がある。それ自体は特別悪しきことではないが、より広い研究者層への拡がりがあり芳しくない状況であるということは、様々な視点を持った研究者の参加による研究の発展・推進が望めない環境になりつつあることを示唆しているようにも見える。かかる一種の閉塞感のある状況の改善は、今後の調査関係者の成果報告の促進や公開手段の検討等の地道な努力などに大きくかかっているのかもしれない。

以上のようなことを踏まえて、今後の重要課題として以下の諸点を指摘したい。

調査の進展と成果の分析 平城京をはじめとする都城遺跡は、一般的に傾向としては規模が大きく面積が膨大である。つまり都城における発掘調査とは、広大な遺跡範囲内に孤立した調査地点が散在しており、それらが長い時間を経て徐々に増加していくような調査経緯を辿ることになると言える。よって、短期間で全貌を把握することはなかなか困難な面がある。ただし、毎年複数の機関で調査を実施しているのだから、時間の経過と共に何がしかの進展・成果は必ずあるはずであり、一定の期間ごとにそれらの成果をまとめて再検討・再評価をしていく必要がある。

調査成果の情報共有と公開 発掘調査の事実や、その後の経過、所見などについて、現在では各調査機関の間で交換する会議は一応存在しているが、行政的な調整の意味合いが大きいと言える。既に本章で前述のように、それとは別個に、各機関の調査担当者や外部の研究者が参加でき、実際の調査とも並行する形で遺跡・遺物に関する詳細な検討などを行ったり、調査・研究に密着した情報を検討し合い、共有が出来るようなシステムの必要性を痛感している。



Fig.145 平城京左京七条一坊十六坪の遺存地割と検出した条坊遺構の様相

(奈良国立文化財研究所『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』1997より)

また、調査の事実やその結果の報告の実態を詳細に把握し、そうした情報を提供する手段が見当たらないのも大きな問題点である。最近、異なる調査機関が隣接地を調査するという事態が決して稀ではなく、調査関係者ですら他機関の調査成果の検索に手間取ることもある。ましてや、調査に直接携わる立場でない研究者にとっては、かなりの手間と忍耐を強いていることが想像される。こうしたことについても、今後はデータベースの構築や公開手段の検討が必要であると考え、

平城京に関する研究課題 上記のような基盤整備も重要であるが、平城京の条坊制に関する研究についても、まだまだ課題が多く残っている。従来の研究では主として条坊の実態などに主眼が置かれてきた感がある。もちろん、条坊遺構の実態も未解明な点は多いのであるが、これまでの多くの調査によって蓄積されてきた宅地内の土地利用や遺構の変遷などの様相把握にも今後は留意しつつ、条坊遺構・宅地内の遺構の双方ともに分析・検討を行っていく必要がある。その際には遺物の整理・分析を通しての遺構年代の把握という作業が必要不可欠となってくることは言うまでもない。

古代都城遺跡間の比較研究 平城京の中で確認されている様相については、今後は他の都城の調査・研究動向も顧慮しつつ、比較検討を積極的に行っていくことも重要であろう。同じ古代都城遺跡の範疇とはいえ、時代や環境についてはそれぞれ異なるのであるから、比較・検討に際しては留意すべき点もいくつかあろうが、遺構の規模や、変遷過程、出土遺物の様相など多くの点についての比較研究を通じて、日本の古代都城が辿った歴史の変遷過程に迫ることができるのではないかと考える。

平城京北辺坊の問題 今回の検討テーマとなった平城京右京北辺坊域は、周辺に西大寺や西陸寺、さらには秋篠寺といった寺院が密集して存在する一帯であり、中世以降の時期においても比較的土地利用の度合いが高かったとみられる地域である。こうしたことから、この地域の調査研究に際しては、多くの視点からの検討が必要となってくることは言を待たない。

現時点では北辺坊域内では調査件数・面積が比較的小さいという事情もあって、条坊遺構や宅地内遺構の実態解明が何よりも期待されているが、宅地内の様相や遺構の時期変遷の検討に際しては、平城京の前後における時代の遺構様相についても視野に入れつつ、都城という枠を超えた総合的評価が必要であると考えている。

おわりに

平城宮・京跡は、都城遺跡として極めて重要な遺跡であり、また周囲の奈良制施工の年代や実態との関係などの諸問題についても検討しうるべき素材を包含している。更には都城の廃絶過程や中世都市の形成などを考察する上でも極めて示唆に富み、研究の可能性を多く含んだフィールドであるとも言えるであろう。そうした意味において、今後は単なる都城研究の枠を超えて、様々な視点からの考察・研究が期待されているであろう。

なお、今回の報告に際しては、多くの方から様々なご教示やご便宜を頂戴したが、特に下記の方からはとりわけ有益なご指導を賜ったことを、文末ながら記して謝意を表する次第である。

井上和人〔独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所〕 館野和己〔奈良女子大学文学部〕
狭川真一・岡本広義・佐藤聖聖〔(財)元興寺文化財研究所〕 三好美穂〔奈良市教育委員会〕

〔附記〕 本稿は、平成17年1月8日に、財団法人元興寺文化財研究所(奈良市中預町)において開催された公開シンポジウム「平城京右京北辺遺跡検討会-平城京研究の最先端と北辺坊-」の際に使用した報告用ハンドアウトを基本に、一部を訂正して再構成したものである。

2 本文中の氏名については、原則として敬称は省略した。

【たけだ かずや=奈良市教育委員会】

古代土器研究の現状と問題点

三好美穂

奈良市教育委員会の三好と申します。どうぞ宜しくお願いします。

私に与えられた課題は「平城京土器研究の現状と問題点」ということです。平城京の土器の研究をやりだしてから二十数年たってしまいましたが、その時々によって土器の問題とか現状とか変わってきます。とりあえず今回は2004年の段階での問題点ということで話をさせていただきたいと思います。平城京の土器研究の現状ということですが、やはり土器研究の現状を語るときにまず編年の話、土器様相の話という二つを踏まえてそれぞれお話しさせていただくのがいいのかなと思いますので、二つにわけてお話しさせていただきます。その二つのお話をしたのちにそれを受けた形で問題点を提起するといったような方向で話を進めて行きたいと思います。

まず編年ですが、平城京の編年はみなさんもご存知のように奈良国立文化財研究所の今はおこくなりになりました西弘海先生の編年案が提示されて以来、ほぼ現在に至るまで編年案というのは変わっていません⁽¹⁾。今、平城の編年には奈良文化財研究所が出された平城編年と私が奈良時代後半から平安時代前半を対象にした南都土器編年とがあります⁽²⁾。とりあえず奈良時代から平安時代前半の編年について提示しているものは今の所その二つであることを認識していただきたいと思います。ただ、奈良国立文化財研究所が提示された平城宮土器編年の方が主流となっているという状態です。

平城宮土器編年についてあまり詳しく言っても30分という短い時間では語りつくせないで、概要をちょっと説明させていただくに留めます。平城宮土器編年というのは平城宮が都として遷都されてから9世紀前半くらいまでの間、紀年木簡が伴う土器群と遺構の変遷を根拠にしてⅠからⅥに区分された編年でございます。

ところがですね、この土器編年というのは土器の型式による編年ではないということ、ここがポイントですのでこの辺はよく覚えておいていただきたいのです。ではどういったことが基準となって編年されているかと申しますと、紀年銘のある木簡が含まれた土器群に、それぞれにその木簡に書かれた実年代を基準に土器を並べていった、というところから由来している編年です。文章に書いておきましたが、紀年木簡が伴う土器群をそれぞれTab.4に資料として記させていただきました。

ところでその土器群をその木簡を根拠に7つに区分してみますと、土器型式による編年ではないものの、その土器群に法量縮小ですか、径高指数の変化、土師器の陶文の省略化ですか、それから調整技法の変化といった、いわゆる型式の特徴に相違があるということも土器を概観すればわかることですから、型式変化があるということが指摘されております。

さらに長屋王の発掘調査ではかなり奈良時代の土器が出土して、それをもとにもっと細分化できるということで、平城宮土器Ⅲの土器群は新たに古相・中相・新相に細分できるのではないかと指摘が数年前になされております。現在、文化庁にいる玉田さんが指摘されたのですけれども⁽³⁾、そういった形で今も平城の土器編年というのはⅠからⅥ、平城のⅢに至りましては古相・中相・新相の3段階に分けるというかたちで、西さんが提示されて以来、玉田さん、巽さん⁽⁴⁾がそれぞれ肉付けしてずっと行われてきているというふうなわけです。

Tab.4に平城ⅠからⅥの資料を付けております。平城宮発掘調査報告ⅩⅢに掲載されているものです。最近では資料の例も増えてきていて、最新の情報では各Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ、に比定されてい

Tab.4 平城宮土器の大別

時期	主要遺構	略年代	年代推定の根拠	備考
I	SD1900	710	『過所』木簡 大宝元年～和銅3年 (701)	『報告Ⅰ』
	SD3765下層 SD8600(104次)	715	木簡 和銅2年～8年 (709) (715)	未報告
II	SD3035	716	木簡 靈龜2年～神龜2年 (716) (725)	未報告
	薬師寺井戸SE47		木簡 靈龜2年 (716)	『薬師寺報告』
	平城京SD485		木簡 神龜6年～天平元年 (728) (729)	『報告Ⅵ』
	SK12965(177次)		木簡 養老2～4年・6年 (718～720, 722)	『61年度概報』
	SK2102		木簡 神龜5年～天平元年 (728) (729)	『報告Ⅶ』
	SD1250(122次)		木簡 神龜4年・天平3・4・6年 (734)	未報告
III	長良島宮木簡出土 井戸SE4699		木簡 養老元年 (717)	『長屋平邸宅と木簡』
	長良郷皇木簡出土 溝SD4750		木簡 和銅4年～靈龜2年 (711) (716)	『同上』
	東二坊坊間路西側溝 SD4699(左三・二・七坪)	730	木簡 天平2年 (730)	未報告
	東西大溝SD1500		木簡 天平6～8・10年 (734) (738)	未報告
	東西大溝SD5300		墨書土器天平13年 (741)	
	前川酒肆 SK820		木簡 天平17・18年 (746)	奈良市『朱雀大路報告書』 『報告Ⅷ』
SK2102	750	木簡 天平18年 天平勝宝2年 (750)	『同上』	
IV	SB7802柱抜取穴		木簡 天平勝宝5年 (753)	『報告ⅩⅠ』
	SK219	760	木簡 天平宝字6年 (762)	『報告Ⅳ』
V	SD3236C(104次)		木簡 天平神護2年・宝龜5・6年 (766) (775)	未報告
	SK2113		木簡 『左衛土府』天平宝字2年以降 (766) (776)	『報告Ⅷ』
	SK870			『同上』
	SE6166	784	墨書土器「主馬」 天応元年～延暦3年	『報告ⅩⅡ』

※『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』1991奈良国立文化財研究所 P375掲載より抜粋

る土器群が本表よりも少し増えてきているというような状況です。奈良文化財研究所の各報告に書いてございますので、土器の概要につきましては概報若しくは年報を参考にさせていただきたいと思います。年代の推定根拠になるのは、木簡で中央欄に列記しています。平城の土器というのは木簡が、紀年が伴う木簡が伴出するというので全国的にもすごく注目されておりまして、人間って不思議だなと思っているのですけれども紀年銘のある木簡がどっと一緒に出てくると、なんの検討もなしにその土器群もそのぐらゐの時期で良いのではないかとということで考えなくなってしまう。そして、なんの検討もせずに紀年銘が伴った木簡と一緒に土器と出ているからこの土器群はこの時期のものだろうというように短絡的に位置づけてしまうというのは手法としてはまちがっているんで、そのへんは非常に気を付けなければい

けないとは思っています。

ただ紀年銘が伴う資料が一緒に出てくるというのはある意味すごいことでもあります。そのへんは資料をきちんと十分に検討できる方法論を土器の研究者は持っていなければいけないということで大変なことである、ということもいつも考えております。

一番やって欲しくないと思うことは、平城京の土器の編年観をそのまま他地域の所にスライドさせてしまって、「この土器ちょっと似ているからうちの土器も平城と同じ年代なんだわ」というやり方が全国的にメジャーな方法で行われていることです。そうしますと全国同じように平城と同じような動きで遺跡が動いているという結果になってしまいますよね。それはそれで十分な検討を重ねてそういった動きがみられるのであれば、それはそうでしょうでしょうけれども、ただ十分な地に根ざした研究なしに平城と似ているからうちもこの年代といったやり方、これはもうまったく考古学的にまちがっている、そのへんはよく考えて使わなければいけないのだということを考えています。

それから先ほど申しましたように平城の編年だけでなく南都の編年がありますよということで紹介させていただいたのですが、南都の土器編年というのは奈良時代後半から平安時代の土器群（これはさきも武田さんの方からお話がありました）、平城京ではこのあたりの時期の遺物が結構多いんですね。そうしますとやっぱり形式的に基づいた土器編年ではないと、なかなか詳細な遺構変遷が追えないということもございまして、奈良時代後半から平安時代前半を中心にいたしまして南都土器編年というのを作りました¹⁹。これは大量に出土する土師器を軸に捉えた型式編年というかたちでやらせていただきました。ですから平城宮土器編年との相違点はあくまでも形式的な特徴で土器群の変遷を捉えまして、その結果なし得たものというわけです。奈良時代に関していいますと平城のⅣとⅤというところが南都土器編年のⅠ期の古段階と中間段階に当たるわけですけれども、形式的だけで追ってみますと、なかなか平城の編年と考え方が合っていない部分が出てきました。それはどういったことかといいますと平城宮土器はⅣとⅤというところでⅣはⅣ、ⅤはⅤと区分されているのですけれども、土器の型式を考えますとⅣとⅤの土器の型式は区分することが出来ないのではないだろうかと考えています。ですから南都土器編年ではこれは同じ段階のものであるということで認識しています。それから平城Ⅵは長岡京期のものということで想定されていますが、時間枠で捉えた場合に長岡京期だけの時間枠の中だけではこの土器群は収まらないだろうと、おそらく平安京初頭、9世紀初頭ぐらいまで同じ型式群が続くだろうということが考えられますので、平城宮土器編年案との年代幅とはちょっとずれが生じてくるのではないかと考えています。

えらうなことを言っても私は奈良時代の前半から後半、たった70年の土器の型式編年もいまだなしえていないので、えらうなことを言えないのですけれども、ただ形式的に捉えた土器編年の再編が必要ではないかと考えて、少しずつ作業を進めているところです。レジュメに方向性を書いておきました、再編の方向といたしまして、今平城編年では、奈良時代は5段階に分かれているんですけども、おそらく5つには分らないのではないかと、先ほど岡本さんとも話をしていたんですけども、奈良時代の土器はせいぜい3つ、3段階にしか分らないんじゃないかと、というふうに考えています。

玉田さんが示された平城宮土器Ⅲは古相・中相・新相の3段階がありますよ、細分が出来ますよというお話なんですけれども、確かに長屋王邸跡の宅地の中で考えた場合3つの変遷が迎えられると思います。今日、長屋王の土器資料のレジュメを持ってきませんでしたので、みなさんお帰りにになりましたら長屋王の本をみていただいたらわかると思うんですけども、確かに土器群の中には時間的な動きがあるのではないかなと思われれます。ただそれを平城京全体にあてはめると混乱してしまいます。古相・中相・新相というのは長屋王邸跡内だけの中でのみ通用するものと考えられます。ですから平城宮土器

Ⅲの実年代が与えられていますので、平城京の中全体で考えますと必ずしもこのような年代や土器群の動きが与えられるとは限らないので、古相・中相・新相というのは長屋王だけの話だけで止めて置くレベルの問題じゃないかなという感じがいたします。

平城の編年につきましては、一刻も早く型式編年による型式の特徴を捉えた編年によるものを構築していかないと今回の北辺坊の様相とか、他の遺跡を考えるとときに詳細な検討ができないと思います。最後のところで問題点をお話させていただきますが、実年代が伴う土器群があるというのは都城遺跡だと、素晴らしいことだと思えますが、木簡だけに左右されるやり方というのはそろそろ限界かなと思います。編年の話はこのくらいにしておきます。

次に土器様相についてですが、土器様相の研究というのは飛躍的に進んでいると思います。平城京が本格的に発掘調査されたしてから21年と書きましたけれども、実際は25・6年になると思います。土器様相の研究が進んだ源になりましたのは、諸先輩方の研究、国・県・市それから最近では元興寺さんも調査していただいておりますけれども、発掘調査の公表、なによりもやはり大きかったのは藤原京、平城京、長岡京、平安京初め各都城遺跡をフィールドとする土器研究者によって構成された「古代の土器研究会」という活動が（もう12・3年前にできた研究会ですけれども）この研究会による活動が非常に大きいと思います。先ほど武田さんのほうから発表があったと思いますけれども、各フィールドの枠を越えて共同研究するということが非常に大きなことだったと思います。

私たち平城にいと、平安京のことはよくわからない、藤原京のこともよくわからない、まして長岡京のこともよくわからないといった状況がよくありました。ところがフィールドの枠を越えて皆と土器を見て、いろんな議論を交わすことによって、共同研究する場をもつことによって今までわからなかった不透明であった部分の土器様相がだんだんわかってきた。わかってきたということが研究の突破口となってきたように考えています。これまでの成果を大きくまとめてみますと、まず一つは西先生が律令的土器様式ということを提示されたことに端を発しています。結局のところ、律令的土器様式というのは一体何だろうというのが各都城研究者、土器の研究者は実はわからなかったんです。古代の土器研究会が立ち上がった時、西さんはまだご健在でして、二回目くらいまで西先生とご一緒に研究させていただいたんですけれども、その後残念な結果になりまして、基本的に律令的土器様式とは一体なんなのかということをお西先生から聞くことができずじまいで終わっています。

その後、私たちはフィールドの枠を越えて、西さんの律令的土器様式というのは一体何かということをお基にして活動を始めていった訳です。その結果いくつかのことが徐々にわかってきました。簡単に説明させていただきますと、まず各都城遺跡で大量に出土するのはやっぱり土師器の食器類ですね。その土師器の食器類は各都城域を越えてみんな同じような形をしているということに気がついたのです。それが一体どうして似ているのであろうかとか、調整手法も同じであろうかという細かい研究も皆で進めてきました。その結果藤原京から平安京という地域を異にしながらも型式的に連続して発展してきたものであるとか、それが都城で主流となっている土師器であるということに気がはじめました。それをずっと追いかけて結局のところ都城形土師器の概念を提示することができました⁽⁴⁾。これは各都城のフィールドを越えないと絶対わからなかった、非常に画期的な研究の一つだったのだらうと思います。

それから都城形土師器という概念ですけれども、これを説明いたしますと残り時間では全部説明できないので今回は割愛いたしますが、要するに都で主流となった形の土器があるのだということになりますね。その中でも誰が作っていたのだらうかということになってくるんですけども、おそらく平城京

に関していえば、大和の工人集団に加えて河内の工人集団がかなり関わっていた可能性も見出すことが出来ました。延喜式にも大和、河内が土師器の貢納国であったことが記されています。文献からうかがうことは出来るのですけれども、考古学的にはこれが大和の土器でこれが河内の土器であるという指摘はできていませんでした。ところが研究会を通じて、これが、この土器が河内の土器である、この土器が大和の土器であるといった見通しがつくことができたということで、大和産土師器、河内産土師器と摂津産土師器、初めて聞く名称の方もいらっしゃるかと思いますが、このような概念及び名称も提示できるようになりました⁽⁷⁾。

最近では南山城の南辺部、木津あたりですか。このあたりも土師器の生産地があったのではないかとしようなことも考えています。南山城産の土師器がかなり平城京に入ってきているということが最近ようやく人の前で言うようになってきたかなという状況であります。私も時間さえあれば平城の土器を見ているのですが、やっぱり河内の土器とか摂津の土器とかとは大きく違う特徴を持っている土器群がある一定量入っているというのに気付いておりました。それが南山城でよくみられるような形で技法を持ったものがかなり平城に入ってきているので、もうこれもそろそろ南山城産土師器と提示できるのではないかとこのころまでできています。

それから土師器の食器類だけでなく煮沸態にも都城形というものがあるということがわかりました。それは都城形覆という概念の提示、名称の提示をしています。それにつきましては、土師器の覆のシンポジウムで（井上さんは来ていただきましたけれども）、数年前に奈文研でやったシンポジウムの中で都城形覆という概念を提示させていただきました⁽⁸⁾。やっぱり都城の形をした、都城の形をしたというのは非常に曖昧ですけれども（都城が主流となる覆はですね、端形で丸型の小型の覆ですけれども）、そういった覆が各都城遺跡から出ておまして、それが都城が動くたびに覆も同じようなかたちをして動いているところまでわかっています。

もうひとつ、この研究会を通して得た成果の大きな一つですけれども地域が移動して都城が造営されますよね。藤原、平城、長岡、平安京といった地域に移動して都城が造営される。都城が造営されることによって都城の周辺地域もおおきな影響を受けたということが最近またわかってきています。どういったことかといいますと、要するに在地の工人が作っていた土器がありますね。都城が来る前は在地の色をしていただけでも、それが都城が例えば平城京に来る、そうすると今まで在地で作っていた覆や食器類が都城の色に変わってしまうわけですね。だからそれまでの在地の色がなくなってしまう。それは長岡京においてもそうだし、平安京においてもそうです。そのことについて、考古学的に実証できる可能性ももてるようになってきています⁽⁹⁾。これもやはり都城のフィールドの枠を越えた研究者が集まって研究した成果の大きな一つだと思って話をさせていただいております。

研究はもちろん年代観を提示する、要するに編年するということですが、編年を提示するだけではなくて出土遺物から当時のそういった歴史像を語れる手がかりになるような研究が出来るということ、土器は年代だけを引き出すのではなく歴史像にも迫れるような研究の一つであることをみなさんにお伝えしておきたいと思えます。

時間も無くなってきてしまいましたが、次に土器研究の問題点ということで（どうしても説教めいたことになってしまっただけで申し訳ないんですが、都城遺跡のように大量に土器が出てくるところの研究をしている人間の誰もが思っていることですが、現在の都城の土器研究にとって最大の問題というのは、土器の全体像を把握することができない、認識する方法を確立できないというのがかなり問題として残されていると思えます。土器の量が少なければ全体に目を通して全部チェックできるというよう

なことが出来ると思うのですが、平城だけに限らず都城遺跡、都市遺跡の場合、100㎡掘っただけでも2～30箱、1000㎡まで掘らなくても、ものすごく遺物が出土する所では1000箱、2000箱くらい出してしまうのです。そういう大量な土器を目の前にしたときに整理する方法が確立できていないため、全体に目を遣すことができないわけです。方法論を持たないとどうなるかという、少し書いて置きましたけれども、たとえば報告書に掲載するときに形が悪い、体裁が悪いというだけで公表されない、要するにレイアウト上の問題でこれはちょっと格好悪いからやめようということ公表されなかった土器があったり、また口縁部片が全体の1/8以下であることを理由に報告されなかったりします。それから破片だけでは情報が引き出せないということを前提条件にしてしまって、最初からその土器を見ない、それから先学が示された土器型式と年代観が合致しないものが出てきてしまった場合、例えば平城Ⅱにはこんな土器があつてはいけないのに出土した場合、これは「混入だよ」ということで何の検討もなしに「混入」の二文字で外され続けてきた土器もある。これは実際上あつてはいけないことだと思いますが、こういった状況を見かけることもあります。要するに、大量の土器群の全体像を把握しないまま体裁だけが良い図版が組まれてしまって報告書に掲載されるということが、全部とはいわないですけどかなりあると思います。そうすると、せっかく1で挙げたような研究成果を育んできたにもかかわらず、結局のところ土器の研究というのは進むどころか、そのようなやり方を進める限り退化してしまって、意図的な操作が原因で、意図的な操作で自分たちを自分たちで導めるようなことをしてしまっているのだから研究の進展なんてないですね。研究は遅れるばかりなのです。だから基礎的な整理方法の欠落ということによる弊害というのは研究の進展を遅らす、全体の歴史像をみることを拒否するような形をとってしまっている。こういったところで端的にあらわれてきて、基礎的な整理方法がないと実年代の検討ですとか土器群の実態云々といって口先だけで検討した議論というのは何の役にも立ってこないだろうというふうに考えております。これはもちろん平城京だけの問題だけではないのですけれども、要するに土器の全体像を把握する、認識するという方法をまず土器の研究者が認識をもって、それに取り組むということが今の土器研究において一番の必要なことである。それをしないということが一番の問題点であると思うのです。

ですから平城の土器編年や南部土器編年のこの部分がおかしいということを議論するよりもまず基礎的な資料の整理の方法の確立が先決であろうと考えています。

奈良市も平城京から出土した大量の遺物を抱えております。なかなか遺物整理ができなくて人の前こんな説教めいたことを私が話すのも心苦しいのですが、奈良市のセンターの目標といたしましては、遺物の全体を鑑賞し、それを的確に記録するといった作業をやろうということで進めています。一見遠回りでもんどうくさいような研究作業ですけども、正確な型式とか土器群の実態とか、遺跡・遺物の年代を確立していくためには非常に大切であるということで進めているわけですけれども、非常に時間がかかります。だから途中で嫌になって挫折してしまいがちになることも多々あるのですけれども、でもこれが無い限り今回の研究テーマになっているような遺跡の解明は難しい。今回元興寺文化財研究所が北辺坊の発掘調査を大規模におこなっており、かなり成果を挙げられています。その遺跡を解釈するための土器研究が、このような状態であつては、せっかくの調査も無駄になってしまうということになりますので、土器群の実態を追求する視点をもう一度確立しようということ土器研究の問題点として私は考えております。

私が日頃考えていることをみなさんに聞いていただくという形になって申し訳ないですが、私が入られた課題というのは以上のようなことで終わらせていただきます。

- (1) 西 弘海 1976『平城宮出土土器の晩年とその性格』『平城宮発掘調査報告Ⅵ』奈良国立文化財研究所
- (2) 三好美穂 1995『南都における平安時代前半期の土器様相』『奈良市埋蔵文化財センター紀要』1995 奈良市埋蔵文化財センター
- (3) 玉田秀英 1995『第Ⅴ章考察 3土器』『平城宮左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告-長屋王部・藤原麻呂部の調査-本文編』奈良県教育委員会
- (4) 眞渾一郎 1982『第Ⅴ章考察 5土器』『平城宮発掘調査報告Ⅲ』奈良国立文化財研究所
眞渾一郎 1985『3土器-旧平城宮域における平安時代の土器とその変容-』『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
眞渾一郎 1991『第Ⅵ章考察 2土器』『平城宮発掘調査報告Ⅷ』奈良国立文化財研究所
- (5) 註2文献
- (6) 小森俊寛 1992『概説』『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会編
小森俊寛 1993『概要』『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会編
- (7) 三好美穂 1999『土師器食器類の形態』『瓦衣千年 森部夫先生遺贈記念論文集』森部夫先生遺贈記念論文集刊行会
小森俊寛 1996『都城出土の河内産の可能性のある土器について』第67回古代の土器研究会報告
堀川富貴子 1997『第Ⅵ章考察 第5節周濠内遺物堆積層出土土器の様相』『史跡大安寺旧境内1-杉山古墳地区の発掘調査・整備事業報告-』奈良市教育委員会
- (9) 小森俊寛 1996『概説』『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会編
三好美穂 1996『大和』『古代の土器4 煮炊具（近畿編）』古代の土器研究会編
三好美穂 2003『都城形覆』『続文化財学論集』文化財学論集刊行会三好美穂

【みよし みほ = 奈良市教育委員会】

考古学からみた平城京北辺坊について

井上和人

奈良文化財研究所の井上和人です。

私に与えられた課題は、「考古学からみた平城京北辺坊について」ということです。あまり考古学的な話に及べないかもしれませんが、その点はご容赦ください。先ほど奈良市埋蔵文化財センターの武田さんからの話を伺って、あれほど明解な平城京の研究史は聞いたことがありません。見事なものだと思いました。その中で私に対するコメントもありましたが、その部分だけは少しほめすぎだと思います。これまでの諸研究の評価につきましては、武田さんと私とで受け止め方が微妙に異なる部分もあります。あとの討論の場で議論できればと思います。

三好さんのお話によりますと、最近、土器研究も随分深いレベルにまで進んでいること、また同時にたいへん難しい問題もあるということがよくわかりました。私もこの頃、木簡という出土遺物を考古学的にどのように扱うべきかということについて、方法的な疑義を抱いています。このことについても後でお話できればと思います。

今回の北辺坊の発掘調査の現場は、何度か拝見いたしました。検出された条坊遺構については厳密に検討してみたいと思いつつも、いろんなことに紛れて今日に至ってしまいました。それでも先程、岡本さんのお話を伺いながら、配布していただいた図面を見ていて、特に一条北大路の設定規格についておもしろいことに気づきました。これも後で聞いていただきたいと思います。

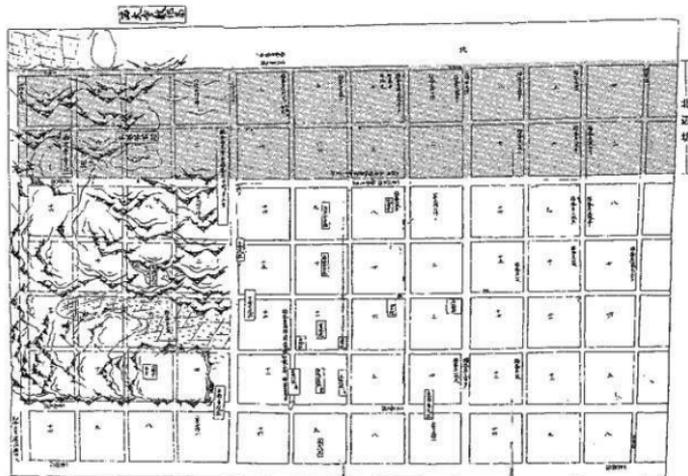


Fig.146 『大和国西大寺敷地之図一（弘安三年）』(井上による摹写図)

先ほどご紹介がありましたが、私は数年前に平城京の北辺坊について考える機会が与えられて、その時の考えを共同研究の報告書の中にまとめました⁽¹⁾。これは入手しにくいものですが、近々きちんとした出版物として刊行することになっています⁽²⁾。この共同研究は西大寺関係の荘園絵図を対象としたものです。西大寺それに秋篠寺に関わる絵図は、いくつかが西大寺に所蔵されており、また一部は東京大学史料編纂所にあります。東京大学文学部の佐藤 信さんが中心になって、古代史、中世史、建築史、仏教史、史科学、歴史地理、国語学などの専門家が糾合されたのですが、考古学も加えるべきだということであつたらしく、私も末席に名をつらねることになりました。4年間の共同研究活動の最後に、2002年の7月と9月に、東京大学と西大寺で成果報告のシンポジウムを開催しました。その折に北辺坊についての私なりの考えの一部を西大寺興正殿での会場で発表しました。

私は平城京の研究を30年近く、途中少しのブランクはありますが続けてきました。門前の小僧なりに平城京のいくつかのことを考えてきたといいますが、いろんな作業を続けてきましたが、北辺坊についてもかなり以前から関心を持っていました。要するに、まだよくわかっていない、というイメージがありました。いくつかはきちんとした形で追究してみたいとは思っていたのです。そんな時に共同研究の誘いがありまして、すこし腰を入れて考えてみました。結論は、先程武田さんに適切な要約をしていただきましたが、平城京右京北辺坊の設定は奈良時代の後半、西暦760代に右京の北城で新たに造営された西大寺、西隆寺の造営に関わるものであるということになります。このことを論証するにはいろんな視点、論点がありますが、限られた時間の中ですべてを聞いていただくことは難しいので、特に遺存地割に焦点を合わせて話すことにします。

Fig.146は「大和国西大寺敷地之図 弘安三年」です。かなり薄れていたり判読しにくい部分がありましたが、赤外線写真を利用してトレースしてみたのがこの図です。スクリーントーンで網になっている部分が、この絵図に示された北辺坊の区画です。13世紀に西大寺に寄進された田畠を書き上げた田園目録に、例えば右京北辺二坊七坪などという表記があります。そうした史料をありのままに受け止めれば、平城京右京三坊と四坊の北側に2坪（町）幅分の区画があったというのは当然のことと思われるのですが、しかし、武田さんの紹介にもありましたように、これまでは必ずしもそう考えられてきたわけではありませんでした。

明治時代、関野 貞⁽³⁾、喜田貞吉⁽⁴⁾にはじまる平城京研究のあゆみの中では、むしろ平城京北辺坊は存在していなかった、ないしは絵図や史料上だけの虚構であるなどという説明が繰返されてきました。

関野さんが『平城京及大内裏考』を刊行したのが1907年ですから、ほぼ100年を経過したことになります。その間、平城京に関しては細部ではきわめて多くの知見が加えられてきましたが、私は最近、結局大筋のところは関野 貞の示した見解に回帰しているのではないかと感強くしています。けれどもこと北辺坊については、素直に従うわけにはいきません。関野さんは北辺坊の地割はあったかもしれないが、それは平城京とは関わりのないものだという主旨のことを記述しています。また喜田さんも同様に北辺坊はあった、ただそれは平城京とは関係ないんだ、とよくわかりにくい説明をしています。さらに、昭和41年に出版された大井重二朗さんの『平城京と条坊制度の研究』⁽⁵⁾、この本は、私は平城京研究のバイブルの一つであると思っているのですが、この中で、北辺坊はなかつたと言断できると強調してしまっていて、その後、工藤圭章さんが『奈良市史 建築編』⁽⁶⁾で書いているような、北辺坊は鎌倉時代頃に、その当時確かに存在していた平安京の北辺坊のありようを田勞などに書類のまだけで便宜的に表現したものであり、実体ではなかつた、というような説明のバックボーンとなつたと考えています。ただ、2002年の西大寺でのシンポジウムの折りに、私どもの研究所の大先輩である岩本次郎さんにうかがったところでは、大井先生は晩年には北辺坊はやはり存在していたのだという考えをお持ちになって

いたということです。できることならばその根拠なりをなんらかの形で遺しておいて欲しかったと思います。そうすれば、その後の研究上の混乱が少しでも解消されたのではないかと思います。

吾在説を含めて、北辺坊がどうであったかについては、これまでにいろんな考え方が提示されています。このことは同時に西大寺の寺域についての見解の相違とも深く関わっています。Fig.147に示しましたように、これだけでもイからホまで五つの異なった説があります。これ以外にもあるのですが、この

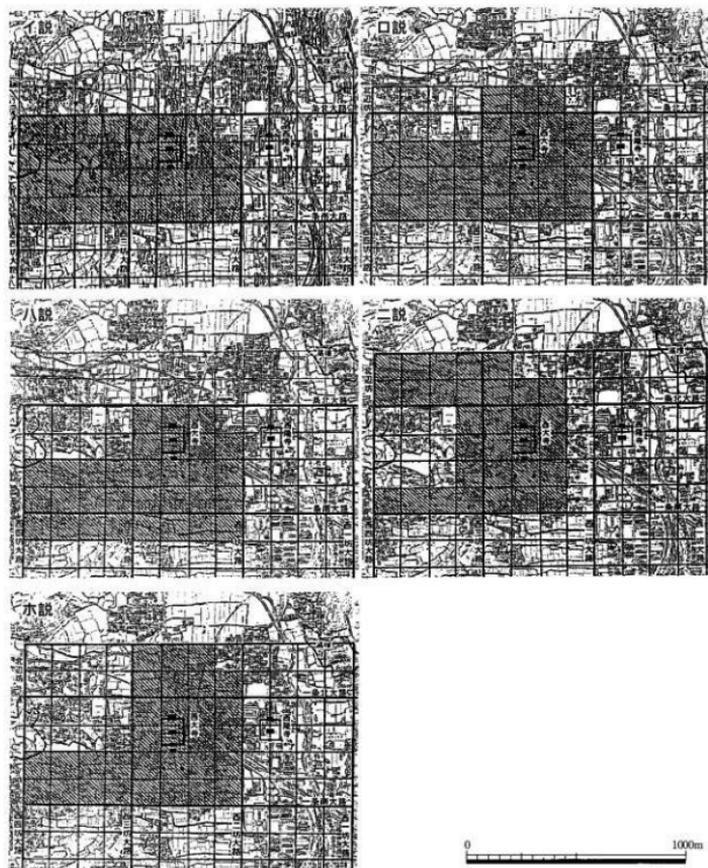


Fig.147 西大寺寺域諸説

大きな違いのもとになりますのが、西大寺の造営がほぼ完成した宝龜11（780）年につくられた西大寺資財流記帳に記された西大寺の四至、とくに北側をどう理解するかという点にあります。「北限 京極路」とあります。また寺域は31町で寺域の東北角に喪儀寮があるという、この事実関係の理解のしかたの相違がありまして、様々な寺域説、ひいては北辺坊説が生じてきたわけです。



Fig.148 『遺存地割・地名による平城京復原図』より



Fig.149 『大和国奈良復原図』より

文字通り諸説紛々とした状況であり、北辺坊についてはその存在を疑問視する説が有力でありました。ところが、1970年代に岸俊男先生を中心にして平城京の遺存地割・地名の調査が進められてきて⁽⁷⁾、遺存地割による平城京復原図が作成されました。その中で北辺坊に該当する部分に条坊の遺存地割が確認されることが指摘されました（Fig.148）。この図による限りでは、南北2町幅のうち、南側の1町幅の部分に条坊地割が認められ、その北側には京北条里の条里地割が残されているように表現されています。従いまして、少なくとも南側の1町幅には北辺坊が実体として確かに存在していたといえます。

同じようなことは橿原考古学研究所が作成した『大和国奈良復原図』⁽⁸⁾でもわかります（Fig.149）。

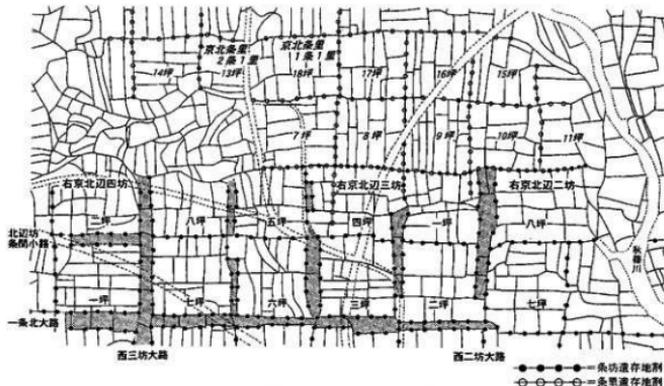


Fig.150 右京二・三・四坊周辺地割復原図

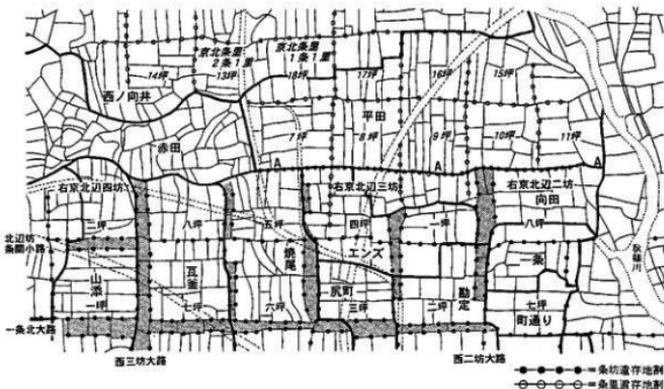


Fig.151 右京北辺坊周辺の小字境界線

この図で北辺坊周辺を見ますと、やはり南半の1町幅部分では条坊の遺存地割が認められます。しかし北側はあまりはっきりと認められないという状況です。この北辺坊の辺りは、戦後まもなくころから宅地や工場の敷地としての開発が進んでいて、この2種類の地図のもとになっている地形図のつくられた昭和40年代前後には、もうかなり地割が崩れていたり、無くなっていたりしています。で、もう復元的検討は不可能だと思いましたが、あるきっかけから大正7年に作成された地籍図に巡り合いました。正しくは「字限図」といいます。地図としては厳密ではありませんが、その地割状況を1000分の1の地形図に書きこんでみますと、Fig.150のようになりました。この図から読みとることができますように、北辺坊の北半部にも、確かに条坊の遺存地割が残っています。つまり13、14世紀の絵図や史料に記されている北辺坊南北2町幅の条坊域は実在していたと判断できるのです。

さらにFig.151には、小字の境界線を太く示しましたが、北辺坊の範囲内では条坊の地割と小字界線の一致する場所が多いことが分かります。比率でいいますと6割から7割の部分で一致しています。いっぽう、図の中心にAと示した東西に連続する地割線があります。これより北側は条里域になります。条里の1区画の規格は約109mです。奈良盆地全体の平均では109.3mですが、この京北条里では、もう少し短い傾向があります。いずれにしても、一辺が130m前後である条坊地割とは全く異なる規格でして、そのことがこの地割図からも鮮明に読みとることができます。注意したいのは、条里域になりますと、条里地割と小字界線とが一致する部分があきわけて限られるということです。条坊域での一致率が高いという状況は、西大寺の南側に当たる右京三条三坊でみますと、条坊地割と小字界線の一致率は62.6%あります。北辺坊とほぼ同じ割合です。つまり、北辺坊での小字界線は条坊の区画を反映しているということができるといえるようになります。

また先ほどのAの東西地割ですが、この位置はかつて北側の秋篠村と南側の伏見村の村界線であったところで、さらには生駒郡と添上郡の郡界線でもありました。こうした行政区画の境界線でもあるということは、ここを境にして土地の性格が大きく異なっていた、つまり、条坊域と条里域の境界線であった、そして京域の縁辺にあたる位置であったということの傍証とみなすこともできると判断し

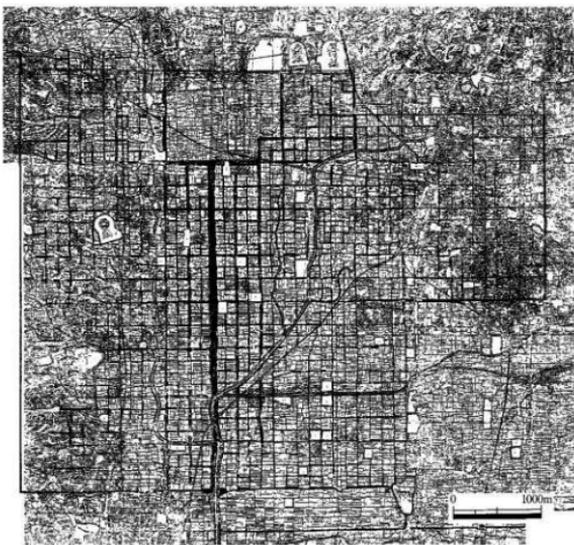


Fig.152 平城京域の条坊遺存地割

ました。

北辺坊が実在したということになりますと、ではいったいどのような理由あるいは契機で造営されたのかを考えてみました。詳しくは先のシンポジウムの報告書で述べましたので、結論を言いますと、奈良時代の後半に称徳天皇の発願によって、右京一条三坊に西大寺という大寺院が造営されます。また西大寺僧寺と対になる西隆尼寺も隣接して4町の寺域の中に造営されました。合わせて35町（1町の大きさはおよそ1.8haですので、35町は62haになります）という広大な敷地を、しかも大半は本来京域内で、当然そこには平城京造営以来半世紀以上の間、住宅や様々な施設があったでしょうから、その広大な敷地を確保するため、そして立ち退かなければならぬ代替地を確保するために、それまで京外であった部分に新たに条坊域を設定することになったと考えられるのです。その施工全般を担当した役所は、これを契機に新たに整備された「修理司」であった可能性が高いということも論じました。

与えられた時間が迫ってきましたが、私が今お話しするような考えを発表しました後に、奈良文化財研究所の私の同僚である山本 崇さんから批判的なご意見をいただきました。近いうちに公表されることになるとは思いますが、私が検討に際して、古代、中世それに近現代という多様な時代の絵図なり地図史料をなймаげにして使っていることに対して、きちんとした史料批判がなされていない、という主旨の意見です⁽⁹⁾。平城京廃絶後1000年以上もの経過の中で、土地地割がどのような変遷をたどったのであるか、様々な社会経済的な要因が介在して変化していることもあるのではないかと、ということだろうと私は理解しています。たいへんもったいな意見としますが、私にはそのことを追究する力が欠けていることは自覚しています。ただし、他方で岸俊男先生達が作成した平城京の遺存地割に基づいて、平城京の条

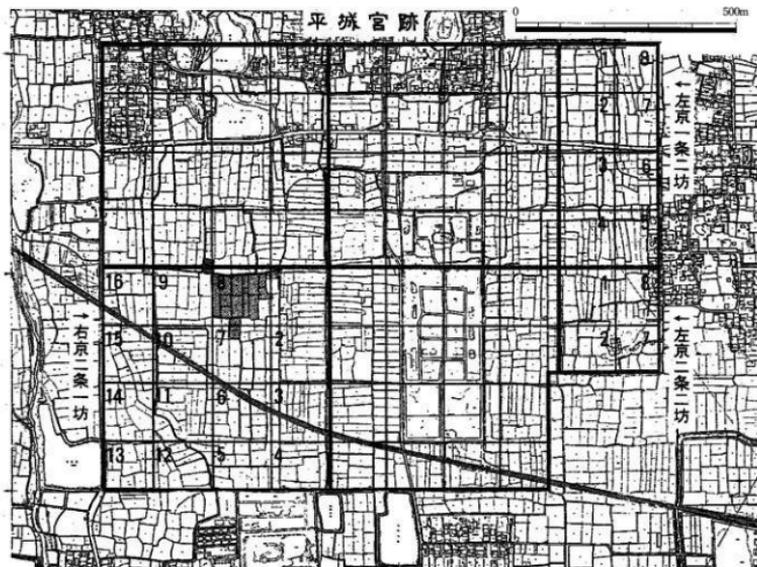


Fig.153 平城宮跡の遺存地割と条坊区画想定図

坊の状況が完明に復元されています。Fig.152は、私なりに1000分の1の地形図、これは平城京城全体では50葉以上の数になりますが、自分なりに遺存地割を再検証して作成したものです。発掘調査で確認される条坊遺構とは、若干のずれの認められる部分はありますが、遺存地割はおおむね正確に条坊区画を反映していると判断してよからうと考えています。ところが、2000年に、以前私どもの同僚で、今は奈良女子大学にいます館野和己さんが、平城宮内の遺存地割について従来の理解に反する考えを提示なさいました。従来は、Fig.154にみられるような平城宮域の遺存地割、これも昭和30年代、40年代の航空写真にもとづいて作成した1000分の1地形図を基本図としていますが、ここにみられる整然とした遺存地割は奈良時代の平城宮の、おそらく廃絶時の様々な区画や宮内道路の位置を反映したものであると、当然のように理解していましたが、館野さんはそうではない、というのです⁽¹⁰⁾。もちろんそれなりに根拠とみなしている史料はあるのですが、館野さんに従えば、平城宮内の遺存地割は、基本的に、平城京、宮廃絶後に、宮外の条坊道路を宮内に延伸施工した結果形成された土地地割であり、それは田島経営の所産であり平城宮とは無縁のものであるということになります。そうであるとしますと、まさに山本さんの批判にあったように、現存する地割を古代の状況を反映したものとしての検討が意味をなさなくなります。が、しかし、私は館野さんの考え、つまり平城宮内の遺存地割は平城宮廃絶後にあらたに形成されたものであるとの判断は100%間違っていると断言せざるを得ません。このことも近刊予定の平城宮の発掘調査報告書⁽¹¹⁾で詳しく述べましたが、Fig.154に示しましたように、平城宮内の遺存地割は、これまで発掘調査で判明した官衙区画や基幹排水路、宮内道路などの位置、規模をきわめて忠実に反映

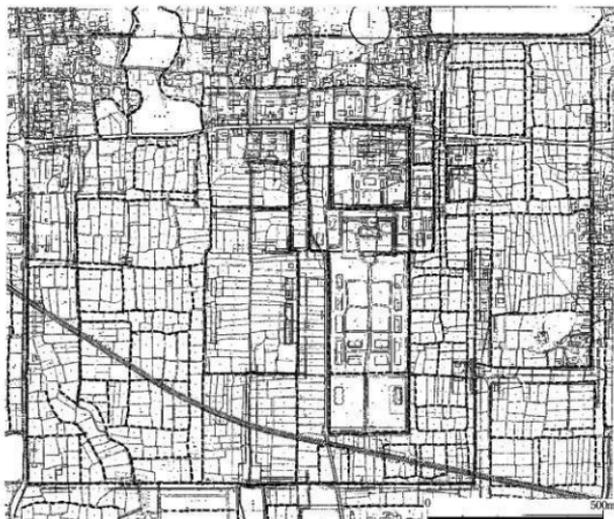


Fig.154 平城宮域の遺存地割による区画復原図

していることがわかります。さらに、そうした観点から遺存地割を追及しますと、まだ発掘されていない道路や官衛区画や排水路の状況をかなり詳細に推定復元することも可能になってきました。つまり平城京、平城宮に残されている地割を、8世紀の都城に関わる遺存地割とみなすことが妥当であると判断できるのです。

北辺坊に関しては、まだいくつかの問題や論点が残されていますが、のちの討論の機会にお話できればと思います。長い時間お聞きいただきまして、ありがとうございました。

- (1) 井上和人ほか 2003 『古代荘園絵図群による歴史景観の復元的研究(1999年度～2002年度科学研究費補助金基礎研究A2研究成果報告書)』。
- (2) 佐藤 信 編 2005 『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会
- (3) 関野 貞 1907 『平城京及大内裏考』東京帝國大学紀要工料第3冊
- (4) 喜田貞吉 1908～1909 『平城京及大内裏考』評論、『歴史地理』12- 4 - 13- 5
- (5) 大井重二郎 1966 『平城京と条坊制度の研究』初音書房
- (6) 工藤圭章 1974 『奈良市史 建築編』
- (7) 岸 俊男 1974 『遺存地割・地名による平城京の復原調査』平城京朱雀大路発掘調査報告。奈良市
- (8) 権原考古学研究所 編 1980 『大和国奈良復原図』奈良県教育委員会
- (9) 山本 肇 2005 『總評 井上和人著『古代都城制系里制の实证的研究』』『条里制・古代都市研究』第21号
- (10) 藤野和己 2000 『古代都城廃絶後の変遷過程』平成9年度～平成11年度科学研究費補助金【基礎研究C2】研究成果報告書
- (11) 井上和人 2005 『平城宮の平面構造』平城宮発掘調査報告XVI 兵部省地区の調査。奈良文化財研究所

【いのうえ かずと＝独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所】

平城京右京北辺の調査成果と北辺坊

佐藤 亜聖

はじめに

今回の調査では、古墳時代から中世に至る多数の遺構を検出した。本稿では今回の調査が喚起する問題を整理し、周辺地域の調査事例も視野において検討を行う。なお、検討会当日発表できなかった内容も本稿には含まれるが、論旨に大きな変更はない事をお断りしておく。

1. 古墳時代の遺構

まず1区の古墳時代後期には斜行する小型の溝 S D 10323、10711、11082が存在する。また、2区 S D 20400も時期不明であるが、遺構の切り合い等から古墳時代に遡る可能性を持つ。これらはいずれも幅30cm前後、深さ15cmの小規模なものである。規格化された区割りのものかどうかは不明であるが、45.5m前後の間隔をもって存在し、15度程度西へ振れる方位を持つ。埋土内からは須恵器の細片が出土しており、古墳時代後期以降のものと考えられる。

今回検出したものと同様の溝類はこれまで調査が行われた西陸寺周辺調査区でも多数検出されている。これらを抜き出したものがFig.155である。これを見ると、西陸寺の遺構、西陸寺以前の平城京関係遺構に切られながらも小規模な古墳時代の溝が多数残っており、その多くが直線を志向して全体として方形区画を形成していることが看取しうる。方形区画はおおよそ30～50m区画の規模を有すると考えられるが、遺存状態が悪く正確な規模の推定は困難である。209次調査区を横切る溝（S D 350：奈文研1993『西陸寺』）は検出幅2～3m、深さ45cm、埋土は粘土質と砂質の土が互層を成しており、水田の灌漑用水路と考えられている。埋土内からは6世紀代の土器が出土しており、今回の調査検出の溝と近似する時期のものである。このS D 350より北側は新位的に方位を東に振り、S D 350付近での方位はN-40°-W、299次調査付近ではN-32°-Wである。秋篠川西岸に張り出す微高地の形態に規制された結果であると考えられるが、微地形の制約を受けながらも方形区画は広範囲に展開している。これに対し、当該期の居住域は柱穴などが223-1次・228次・299次に集中し、溝群の広がりは居住域のそれを大きく凌駕している。このことから溝群が居住空間の区画といった集落に伴うものでない事は明らかであり、209次調査 S D 350の埋土観察をもとにした推定と同様、方形区画は耕作地に伴う遺構であると考えることが自然である。もちろんのちの条里型水田のような区画内が溝作化した耕地景観ではなかったと考えるが、大規模な方形区画の存在は効率の良い水廻りを生み出し、高い生産性を創出する。おそらく当該域は6世紀後半段階でかなり開発の進んだ地域であったと考えられる。また、その経営主体については当地を本貫地とし、後に秋篠・菅原氏に分化した土師氏の存在も十分に想定しうる。

現在のところ、このような耕地景観が平城京建設直前まで継続していたという確証は得られていないが、周辺地域で検出されている遺構の中に平城京建設以前の条里地割の痕跡を示す遺構は抽出できず、古墳時代の遺構の遺存状況を見ると条里遺構のみ削平される可能性も考えにくい事から、平城京建設段階までこのような斜行した方形区画が当該地域の耕地景観であったと考えられる。平城京の建設はこのような長期にわたる開発の到達点とも言える土地区画を完全に否定して出現するものといえる。

ところで、遷都の詮議が命ぜられた慶雲4（707）年を皮切りに、平城京の造営は急ピッチで進んだ

事が『続日本記』の記録から読み取れる。同書を紐解くと、元明天皇の行動として和銅元(708)年9月14日に、菅原へ行幸、同20日には平城の地に巡幸し地形を観ている。さらに、11月7日には菅原の地の民90余家を遷し、布穀を与えているほか、翌和銅2(709)年8月28日には車駕を平城宮へ進め、駕に従える京畿兵衛の雑遣を免除、9月2日には車駕を巡らし新京の百姓を慰撫している。これら一連の行動は、新京により耕地を失い、移動を余儀なくされた住民連への配慮と考えられる。和銅2年10月28日には、「近年都を遷し邑を替えることで百姓に動揺が広がっている。度々鎮撫を加えているが一向に安堵しない。朕はこの事を甚だ哀れむのであり、この度今年の調祖を悉く免除するものである」という意の詔が出ている。

これら一連の記録からは、平城京造営にあたり多数の邑の移動、耕地の消失があり、これらの慰撫のために天皇自らが車駕を巡らす事態となっていたことが窺える。言い換えるとこのような新京の造営に伴って失われた耕地は、その補償が天皇の行幸を必要とするほどの面積・生産力であった事を窺わせるが、西隆寺周辺で検出された大規模方形区画は、平城京造営により失われた生産力を償わせる構構であるといえよう。

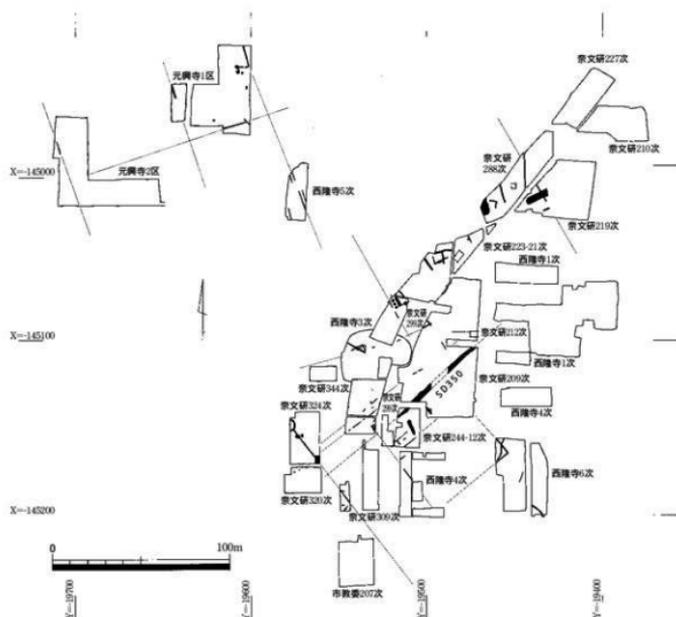


Fig.155 西隆寺周辺の古墳時代の遺構 (S = 1/2500)

2. 奈良時代前～中期（西隆寺造営以前）の遺構

今回の調査値におけるこの時期の遺構は非常に希薄である。ただ、一条北大路南北側溝、西二坊大路東西側溝はこの時期に設置されているものと考えられる。一条北大路南北側溝は比較的小規模で、中世に削平を受けているものの、幅60～80cm、深さ10～50cm程度が残存する。埋土内には水流の痕跡等は希薄で、特に南側溝において起伏が著しい。南北側溝心々間の距離は17.0mを測る。西二坊大路は西側溝が幅3.8～4.7m、深さ1.3m前後を測り、大量の流水痕があるのに対し、東側溝は幅1.7m、深さ20cm程度を測るのみで、流水の痕跡はあるものの水量は多くなかったようである。側溝心々距離は17.9mを測る。さらに、この段階では三坊側に坪内道路が設置され、坪内を分割して使用していたようである。

周辺に目を転じて、既往の調査において検出されている西隆寺創建以前の遺構を抜き出したのがFig.156である。まず条坊関連遺構としては一条条間路、一条条間北小路、西二坊坊間西小路が検出されており、条坊構造が明確になりつつある。この点については後節で詳述するが、これら条坊関連遺構に加え、西隆寺造営以前に存在した多数の遺構が検出されている。建物は調査面積の小さい十六坪を除き

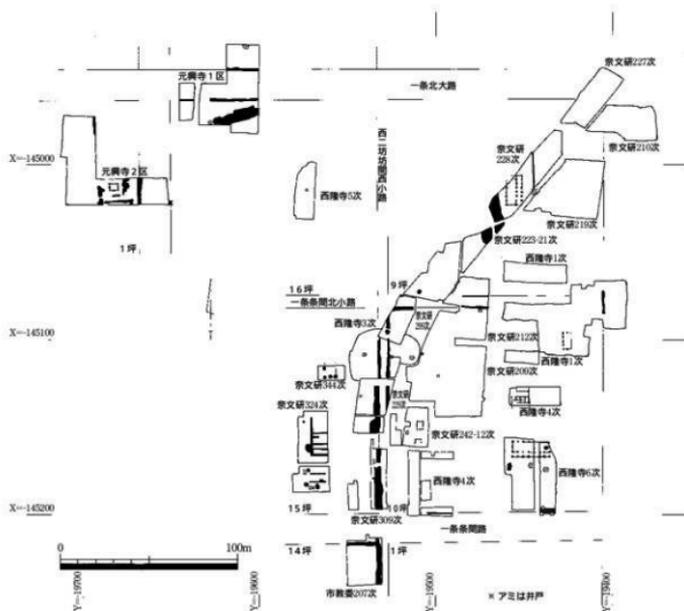


Fig.156 西隆寺周辺の奈良時代前期～中期の遺構（S = 1/2500）

全ての坪で検出されており、228次や西隆寺6次では廂を有する大型の建物も検出されている。井戸は最もよく残る遺構であるが、井戸の分布は各坪に複数存在しており、特に十坪・十五坪において密度が高い。このほか、223-21次・228次では今回の調査で検出したもの（1区S X 10349）と同様の規模の大きな落ち込み状遺構も検出されている。

これらの遺構分布から、西隆寺造営以前の当地が、条坊施工を持ち、宅地班給の行われていた土地であったことが明らかになった。具体的な建物構成までは不明であるが、特に十坪・十五坪においては密な井戸の分布にみられるような比較的纏まった土地利用が想定でき、西隆寺の造営は当該地居住者の生活保障が伴ったものと考えられる。

3. 奈良時代後期～平安時代の遺構

この段階は当地域の大きな画期であると考えられる。最も変化が顕著なのは三坊側で、前段階に存在した坪内道路を埋め、新たに規模の大きな建物を複数設置する。2区北端では小型の井戸が集中して設置される。1区北辺坊側では明確な建物はみられず、遺構は比較的希薄である。さらに、二坊側では西隆寺に関連すると考える遺構群が多く出現する。1区S D 10371は西二坊大路西側溝を流れていたと考えられる水を二坊側へ引き込み、水溜め状の土坑へ流し込む。この遺構の最終埋没段階には大量の瓦が東側から投棄されるが、瓦は軒瓦がほとんどみられず、何らかの片づけ行為の痕跡と思われる。瓦に伴う土器は9世紀末～10世紀初頭のものであるが、この9世紀末～10世紀初頭は遺構変遷における大きな画期と思われ、この段階に遺構群の大半が消滅する。条坊遺構についても、西二坊大路東側溝は奈良時代のうちに埋没するが、西側溝は奈良時代に幅を広げ浚渫が繰り返された後、9世紀末～10世紀初頭前後に埋没する。その後西二坊大路は壁面の観察から西側溝の埋没と同時に耕作地となったと考えられる。

西隆寺の伽藍形態に関する検討は先行研究に譲り、本稿ではその後の西隆寺境内の変遷を追いたい。平安時代になると西隆寺は著しい衰退をみる事になる。今回の調査で確認されたものと同様の瓦溜まりが、金堂周辺や回廊周辺でもみられるようになり、堂舎の改変が行われたようであるが、これは建て替えというのではなく、堂舎の規模縮小に伴う造作であろうと考えられる。『日本三大実録』元慶4（880）年5月19日には西大寺をして西隆寺を摂領せしむるという記述がみられ、寺勢の衰退を窺わせるが、『弘仁式』、『延喜式』には越後国出挙本福として西隆寺料一万束という記述がみられ、10世紀まで寺が存続していた事は確実である。しかしこれまで出土している瓦の中には当該期のもはみられず、堂舎修理などの維持管理がほとんど行われていなかったか、行われていたとしても新たな瓦の生産を行うほどの規模ではなかったと考えられる。

9世紀後半から10世紀前半の遺構は今回の調査区周辺が最も遺構密度が高い。出土物には緑釉・灰釉陶器が多数みられ、越州窯系青磁もみられるなど通常集落とは異なる器種組成を有する。この頃西隆寺北側に寺院と関連を持つ集団の居住地が存在したものと考えられる。

4. 中世の遺構

中世の遺構は2区北端付近に展開する。最も遺構が密にみられるのは11世紀後半～13世紀半ばにかけてである。一条北大路の廃絶時期は明確にはできなかったが、10世紀前半までは13.5～14m前後の規模を維持して機能していたと考えられる。

集落は道路を中心として、中規模の独立柱建物数棟が比較的広範囲する。2区SK20160は埋土の断面観察からは葦理が多数存在することが確認でき、緩やかな水の移動のある滞水状況であったと考えられる。現在水路の下になっている西半分は水路がとりついていた可能性が高い。同様に水路がとりつく大型土坑は平城京右京二条三坊の調査（327-1・351-2）でも検出されており、この時期多くみられる補助的水利施設であると考えられる。さらに、建物背面には耕作関連の素掘り溝が面的に広がっており、また出土遺物に特殊なものはほとんどみられない。しかし仏具としての使用が考えられる小型瓦器碗の出土や、古代瓦を積み上げた井戸の存在など寺院との関係も想定できる。このことから中世の当地の居住者は、農業生産に基盤を置き、寺院（西隆寺なきあとの当地域最大の寺院であった西大寺が想定できる）と関係を有した寺辺の農民であったと言える。

これらの遺構群が廃絶するのは、S E 21130廃絶に伴い廃棄された土器の年代から13世紀第2四半期頃が推定できる。その後近代に至るまで顕著な遺構はみられない。

5. 調査の成果

以上、調査の概要を述べてきたが、今回の調査で判明したことについて、整理する。

a. 平城京条坊区画について

今回検出した条坊区画は、一条北大路と西二坊大路である。

一条北大路はこれまで103-16次調査（宗文研昭和52年度概報）第112-7次調査（宗文研昭和53年度概報）第131-27次調査（宗文研昭和56年度概報、103次調査の延長）奈良市教育委員会第430次調査（市教委平成11年度概報）において北側溝とされるものが検出されているが、いずれも若干の振れがあり、一条北大路を決定するに至っていない。今回の調査では確実な一条北大路を検出したことによりこれら一条北大路の各側溝について評価を行うことが可能となった。詳細は別表するが、座標値の明確なものについて各溝の振れを計算してみると、今回見つかった（以下今回調査地）一条北大路北側溝と112-7次調査SD02A Bとの関係は東に428mでE-0°18'28"-Sである。一条北大路は本来東で北



Fig.157 調査区の位置と周辺調査・一条北大路遺存地跡位置図（S = 1/1800）

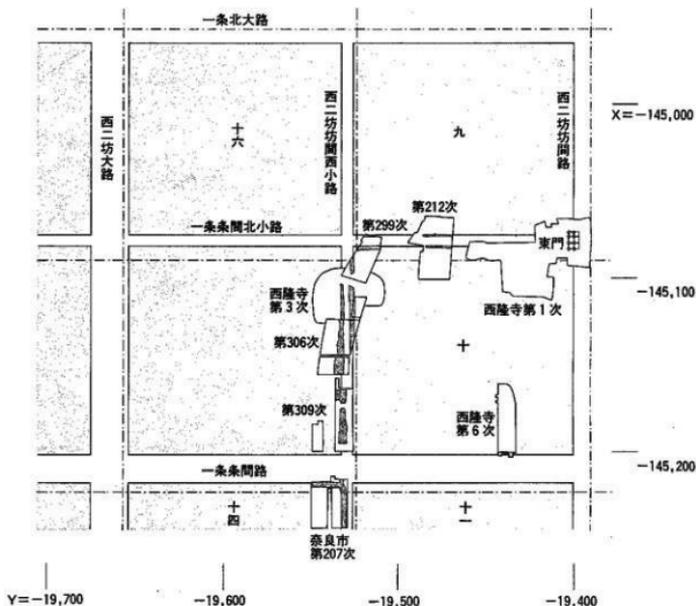


Fig.158 調査区周辺条坊復元図（一点破線は推定条坊計画線）（ $S = 1/2500$ ）
（奈良市教育委員会『西隆寺跡発掘調査報告書』より）

に振れるはずであり、SD02ABでは推定ラインと約3mのずれが生じる。このずれについては今後の調査の進展を待ちたい。これに対し、奈良市430次調査との関係を計算してみると西へ571mで $W-0^{\circ}8'8''-S$ という数字が導かれる。この数字は武田和哉氏が算出した平城京東西条坊の方位平均値 $W-0^{\circ}9'16''-S$ に近似する⁽¹⁾。すでに井上和人が指摘するように一条北大路と推定される遺存地割はこの推定線と一致し、その規模も同一である⁽²⁾。遺存地割との整合性からも一条北大路についてはほぼその規模、位置を特定できたといえよう。

次に西二坊坊間大路であるが、この道の良好な検出例として奈良市教育委員会による第276次調査がある（奈良市平成5年度概報）。ここでは側溝心々距離16mの道路遺構が検出されており、西側溝心の振れは $N-0^{\circ}15'59''-W$ を測る。この数字は平城京の計画基線である朱雀大路の造営方位 $N-0^{\circ}15'39''-W$ と大差ない範囲でおさまる。

右京西隆寺旧境内の条坊構造については南北 $N-0^{\circ}19'50''-W$ 、東西 $W-0^{\circ}18'58''-S$ を設計基準と仮定し、議論が行われている⁽³⁾。西隆寺計画基線の一つになった一条桑間北小路は、南北側溝が見つかっており、これを元にした設計基線が想定されているが、これが従来の算出方法から得られる推定値

よりも約11m前後北に寄っている。これについて中島義晴氏は「奈良時代初期の条坊設定の段階から何らかの理由で坪境小路の位置が北側にずれていることを示す」とされている⁽⁴²⁾（Fig.158）。今回一条北大路が確定したことから今一度周辺条坊の企画について検討してみる。過去の調査から導かれる一条条間北小路と西二坊坊間西小路との交差点のX座標はおおよそ-145,078.800であり⁽⁴³⁾。今回の調査成果から導かれる一条北大路と西二坊坊間西小路交差点X座標-144,948.319との距離は座標距離がおおよそ130.5mとなる。一条北大路の角度偏差 $0^{\circ}8'8''$ を考慮しても2.5m程度寸詰まりである。

次に一条条間路は西隆寺四次で北側溝が、奈良市207次で南側溝が検出されている。西二坊坊間西小路交差点付近の座標はおおよそ $X = -145,209.6$ を測り、一条条間北小路との距離は約130.8mとやはりやや寸詰まりで、一条北大路との距離は5m近く寸詰まりになる。これに対し次に良好な東西道路検出地点として奈良市283次調査において検出された、西二坊大路・二条条間路交差点では、推定線に一致する位置に道路遺構が検出されている（奈良市平成5年度概報）ほか、一条南大路は推定線と遺存地割が概ね一致しており、一条南大路以南は推定線と大きなずれのない可能性がある。つまり平城京右京は一条南大路から一条条間路の間において南北距離が間延びしており、一条条間路から一条北大路の間が寸詰まりになっている可能性がある。このずれの原因については今後の課題としたい。

さらに道路幅について簡単に触れておく。今回検出した道路は大尺=0.3545cm、小尺=0.2955cmとして⁽⁴⁴⁾、一条北大路側溝心々距離1700cm（大尺47.95、小尺57.52）、西二坊大路は1790cm（大尺50.49、小尺60.57）を測る。どちらも微妙な数字であるが、どちらもおおよそ50大尺を基準として設計されていると考えられる。

b. 「喪儀寮」推定地付近の土地利用変遷

『西大寺資材流記帳』には西大寺寺地として以下の記載がある⁽⁴⁵⁾。

厩地参拾壹町

在右京一條三四坊東限佐貴路<除東北角/喪儀寮>南

限一條南路西限京極道<除山陵/八町>北限京極路

これまでの研究では、この表記内にある、「山陵/八町」の範囲をどう推定するかによって西大寺の寺地が北辺坊におよぶかどうか議論されてきた。もし喪儀寮の位置が確認できれば、西大寺寺地の範囲が決定でき、「山陵/八町」の範囲も確定することとなる。これは同時に奈良時代における北辺坊の条坊呼称有無の確認と、北辺坊が京の条坊と認識されていたかどうかを決定することとなる。残念ながら今回の調査では喪儀寮そのものを特定するには至らなかった。しかし、当地が西大寺・西隆寺造営を前後する時期に土地区画の変更を伴う大規模な改変を受けていることが判明した。これは当地が西大寺・西隆寺の造営に強い影響を受けたものであったことを意味している。喪儀寮の性格については不明な点が多く、文献史劇の研究にも期待したい。

c. 北辺坊地域における土地利用と条坊区画の確認

今ひとつ大きな問題は北辺坊の問題である。先述のように北辺坊については諸説があり、発掘調査による積極的な検証が急務となっている。今回の調査では残念ながら調査区が北辺坊に関する条坊道路からはずれてしまった。しかし、調査に並行して行われた水路工事に伴い、2箇所の確認トレンチをあけることができた。いずれも工事途中で作業を止めての緊急調査であったため不備な点も多いが、まずはっきりしたことは、確認トレンチ1において西二坊大路東側溝を検出できなかったことである。遺構検出面は1区遺構検出面より20cm程度高く、またビット等は残存していたため、道路側溝が完全に削平される可能性は考えにくい。トレンチ東端に溝状の遺構が存在したが、浅い落ち込みのような形状で、形

態・埋土・方位全てにおいて西二坊大路東側溝とは異なる。やはり西二坊大路東側溝は北辺坊側には存在しない可能性が高い。

さらに2区北側の確認トレンチ2では今後の調査に向けた問題提起を行うデータが得られた。2区北側の確認トレンチ2では一条北大路南側溝を検出した。この溝は幅100cm、深さ30cm程度の小規模なものである。ここで問題となるのは、規模が大きく、大量の流水を有した西二坊大路西側溝の水がどこから供給されたのかという点である。確認トレンチ1で北辺坊側に西二坊大路東側溝がないことを、確認トレンチ2で一条北大路南側溝に水流の痕跡がみられないことを確認したことにより、大量の水の供給先は一条北大路北側溝もしくは北辺坊側の西二坊大路西側溝に限定されることとなる。今後一条北大路北側溝が近辺で1箇所でも検出され、そこに流水が無いとなると、北辺坊側に流水を伴う西二坊大路西側溝が存在し、奈坊区画が奈良時代から存在した可能性が濃厚となる。

以上調査結果から今後の調査への問題提起を行ったが、ここで現在までに判明していることを元に、平城京北辺坊について現段階で考えられる可能性を指摘したい。

まず、今回の調査で一条北大路の規模が判明したことにより、一条北大路とこれまで推定されていた遺存地割との整合性が保障された。これに伴って、一条北大路遺存地割りを基準として推定されていた北辺坊遺存地割が妥当性を持ったものである可能性が出てきた。しかし、今回の調査では西二坊大路東側溝が検出されなかった事から、北辺坊は大路すら痕跡が確認できない事も判明した。以上のように現状では北辺坊を肯定する情報と、否定する情報が並立しており、水掛け論の繰り返しを余儀なくされている。このような状況は現状のデータでは解消が困難であることを認めつつ、先の相矛盾する事実を説明する一案を提示してみたい。

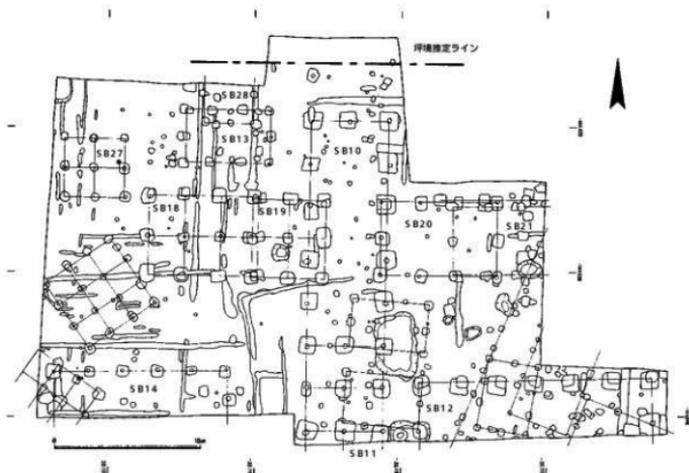


Fig.159 奈良市第322次調査全体図(報文より一部改変)(S = 1/600)

Fig.159は右京一条北辺三坊七坪で行われた第322次調査である（奈良市平成7年度概報）。この調査は北辺三坊七・八坪坪境の検出が予想されたが、調査の結果明確な条坊遺構は見つからない。遺構は主に奈良時代後期から平安時代前期にかけての、鑄造遺構を伴う建物群であり、井上和入氏は秋篠寺造営に伴う施設という考えを提示している⁽⁹⁾。この遺構群に一条北大路から推定される坪境ラインを投影すると、推定道路中心部が一点破線部分にかかる。報告書の記述からは他の遺構の遺存状況からこの部分はそれほど削平を受けていないとの事で、道路側溝は存在していなかったと思われる。注目すべきは調査区全域に広がる遺構の密集度にもかかわらず、この推定ライン周辺には遺構がみられない事である。SB28は建物北半分がこの空閑地にかかる可能性があるが、この建物は時期が不明で、全ての遺構を切っている事から新しいものである可能性が考えられる。これらの事から、七・八坪坪境付近には、側溝など道路施設はみられないが、建物際から少なくとも5m以上の幅を持つ、帯状の空閑地が存在していた事が考えられる。建物群はこの空閑地に妻と側を合わせて存在しており、空閑地と建物群は有機的な関係にあったことが想定できる。この部分が坪境という性格上、何らかの移動空間であった可能性は高い。これが道路であるという種々の根拠は今のところ見出せないが、西二坊大路で側溝が見つからないこと、322次調査でも道路側溝が見出せないこと、しかし遺存地割りには北辺坊の痕跡が残ること、遺存地割が一条北大路以南の京内に比べ不明瞭なことなどを説明するひとつの可能性として、北辺坊の条坊遺構において、通常の平城京とは異なる設計の条坊区割りが存在していた可能性も想定しておきたい。ただ、その設置年代や、こういった条坊区画が北辺坊全域に通用するものであるかは今しばらくの吟味が必要である。

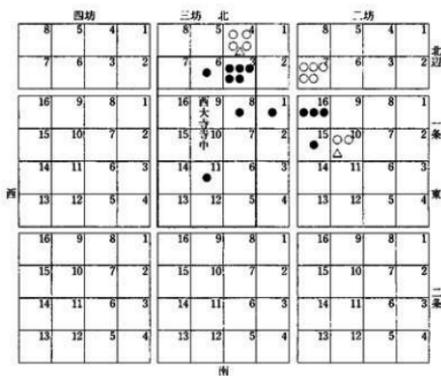
現在のところ側溝をもたない条坊道路遺構で確実なものは類例を見出せない。しかしこれまで詳細な検討を行うことなく「削平」の二文字で片付けていた条坊側溝の有無について、改めて検討する必要があること、北辺坊の条坊設計が、通常の平城京内とは異なっていた可能性を視野に入つつ今後調査が行われることを望む。

6. 平城京以降の土地利用

次に平城京京都以降の土地利用であるが、まず9世紀末～10世紀初頭が大きな画期である。1区で検出された瓦溜りは、西隆寺の北側築地の廃絶に伴うものと考えられる。西隆寺では当該期の瓦廢棄土坑が他にも各地で見られ、同様の片付けの痕跡と思われる。『日本三代実録』元慶4（880）年5月19日条には西隆尼寺を西大寺に摂領させる記事がみられ、やはりこの時期の寺院再編が考えられる。注目すべきは同時期に西二坊大路西側溝も埋没している事実である。西二坊大路は西隆寺に隣接しているため、西隆寺の改変に伴って西二坊大路が改変されたという見方もできるが、先述の通り西二坊大路は側溝埋没と同時に耕地化しており、側溝の埋没は道路の廃絶を意味している。大路クラスの道の廃絶が寺院の寺域再編という理由のみで行われるとは考えにくい。平城京内の条坊遺構の多くは平安時代前半までに埋没し、維持管理が放棄されているが⁽⁹⁾、東三坊大路西側溝、朱雀大路東側溝、東堀河、七条条間路北側溝などの条坊側溝は9世紀後半～10世紀前半にかけて埋没する。しかしこの時期廃絶するのは条坊遺構だけでなく、下つ道側溝などの基幹道路側溝、藤原宮西南外濠や同北西外濠に取り付く溝も同時期に埋没し、近年大規模な死池が公つた飛鳥京苑池遺跡も池の埋没が9世紀より開始するなど⁽¹⁰⁾、公的な権力によって維持管理されていた施設が同時期に維持管理を放棄されている⁽¹¹⁾。おそらくこれら古代的な施設の維持管理を担っていた組織の改変がその背景にあると考えられ、西二坊大路の廃絶もその一環であったと考えたい。西隆寺の再編も同様の理由かも知れないが、現段階では判断を保留したい。

その後、当遺跡では11世紀以降急激に遺物・遺構が増加する。先述の通り当遺跡の集落は背面に農耕地を持ち、またおそらく畠作用の水溜めと考えられる大形の土坑を有しており、農村としての性格が色濃く見られる。これらの集落は13世紀第2四半期に消滅する。ではこの集落消滅の背景はどういうものであろうか。

当地に居住した農民については西大寺の存在を抜きにしては考えられない。この時期の西大寺は遠方所領の大半を喪失して、寺辺所領を整備し寺辺の農民を寺僧として取り込むことによって寺を維持していたと考えられている⁽¹²⁾。長承3(1134)年『西大寺・西隆寺敷地等注文案』(平安遺文二三〇二)は13世紀の写本であると考えられているが、これには西大寺が確保に取り組んでいた寺域周辺の所領が記載されており、そこには当遺跡所在地が「西大寺勸免地」として把握されている。当遺跡における12世紀代の居住者が、西大寺領の作人であったことは疑いない。さらに西大寺には建長3(1251)年の西大寺の所領を書き上げた『西大寺本検注並目錄取帳』(鎌倉遺文七三九八、以下『検注帳』と略)が残されている。これにはその土地の利用種類、作人、面積が書き上げられているが、調査地に該当する右京一条三坊一坪には「林覚房」「円信房」「剛慶房」「龍円房」「定忍房」「聖意房」「大夫」「末次」「祇善房」「行林房」「六郎」という名がみられる。法名を有する者が大半で、西大寺との強い関係を有した寺辺農民とみることができる。実際、これらの人物のうち円信房・祇善房は西大寺四王金堂六口浄行衆の役料である供田を与えられており、寺僧から選抜される浄行衆であったことがわかる。石上英一氏は他の人物の供田についても建長三年段階の西大寺四王金堂六口浄行衆の役料である可能性を指摘されている⁽¹³⁾。西大寺には他に弘安5(1282)の浄行衆の役料面積・所在地を記録した『西大寺四王金堂供田配分案』(西大寺文書101函25番5、以下『配分状』と略)が残されている。先の『検注帳』記載の供田の分布と弘安5年『配分状』にみられる供田の分布をみると、前者が西大寺領内に広く分布しているのに対し、後者は右京一条二坊十坪、右京北辺二坊七坪、右京北辺三坊四坪に集約されている(Fig.160)。両者の間には31年の開きがあり、作人等がすっかり入れ替わったためこのような変化が起きたという見方もできるが、『配分状』に見える「僧実算(明善坊)」は『西大寺当行衆交名注文案』(西大寺文書101函25番3)によると建長3年『検注帳』において供田を給された「祇善坊」の子息であり、作人の系譜に大きな断絶、改変は考えにくい。さらに、23年後の嘉元3(1305)年に僧覚性を浄行衆に補任職した『西大寺四王金堂六口浄行職補任状』(西大寺文書101函25番11)には、覚性がやはり一条二坊十坪、北辺三坊四坪に供田を与えられて



- 建長3年(1251)の浄行衆供田
- 弘安5年(1282)の浄行衆供田
- △ 嘉元3年(1305)の浄行衆供田

Fig.160 西大寺四王金堂六口浄行衆供田の位置変遷

おり、弘安年間に供田地として定められた坪が寛元年間でも継続して供田とされていることがわかる。整理してみると、建長年間に散在していた供田が、弘安年間には3箇所にまとめられ、その後この3箇所が固定されて四王金堂六口浄行衆の供田として使用されているのである。おそらく建長3年から弘安5年の間に西大寺周辺の土地利用に変化が生じたものと考えられ、そしてこれは、発掘調査の結果集落の移動や耕地の再整備と一連の事業であったことが指摘できる⁽¹⁾。

こういった耕地整備の背景として宝治元（1247）年それまで西大寺が得分権を持っていた福益領が本家の謀反に伴って没収された事、寺中郭内における耕作を禁じた弘長3（1263）年の太政官牒による寺内耕地の喪失など諸権益の喪失があったことが考えられる。しかし他にも発掘調査の結果からは、水溜め状の補助水源の利用による農業経営など、13世紀前半に耕作地の安定した水田化への志向が進んでおり、寺辺耕作地の再編はすでに必要不可欠な状況にあったと考えられる。実際建長3年『検法帳』にみられる田畠比率をみると、調査地周辺の右京一条一・二・三坪は畠比率が最も高い部分であり、水田開発が急務であった。このような情勢を踏まえた上で、永仁5（1297）年の福益名回復、13世紀後半の西大寺と秋篠寺が互いの周辺に散在していた相手方の所領を交換し、自らの寺辺に所領を集約させる相補活動などが行われ、西大寺主導の開発活動が進められたと理解できる。そしてその主体とは当時西大寺の経営主体であり、四王金堂六口浄行衆に免をも力を及ぼした叡尊教団、西大寺流律宗であった。

以上のことから、13世紀後半当道跡で起こった変化は、当時西大寺を中心とした地域で広く行われた耕地開発を伴う所領整備の一環であったと言える。

おわりに

以上今回の調査で得られた成果を述べてきた。当地域では数少ない広範囲の調査で、得られた成果も小さくはないものと思われる。ただ、北辺坊のように、かえって問題が複雑化した点も存在する。今回は見通しのみを提示したが、今後さまざまな可能性を念頭に置いて、多角的な視野での調査が行なわれる事を期待してやまない。なお、冒頭でも述べたように本稿は討論会で発表した内容に、西陣寺伽藍地区の情報を加えて修正を行なったものである。当日の発表論旨と大きな変化はないが、のちの討論会で頂いたご教示を反映させた部分もある。ご教示に感謝申し上げますとともに本末転倒になってしまった点をお詫び申し上げる。また、調査終了段階において『奈良制古代都市研究』に掲載させていただいた筆者の論文中に図版スケール等の誤りが複数あることが判明した。本報告書をもって訂正させていただく。

成稿にあたり以下の方々のご協力を得た。記して感謝したい。(50音順、敬称略)

井上和人 今尾文昭 武田和哉 館野和己 馬場基 三好美穂 山川均 山本崇 渡辺晃宏

- (1) 武田和哉 2002 『平城京跡発掘調査の成果と条坊制研究の課題』、『奈良制古代都市研究』第18号 奈良制古代都市研究会
- (2) 井上和人 2003 『平城京右京北辺坊考』、『古代在園地図解による歴史景観の復元的研究』1999（平成11）年度～2002（平成14）年度科学研究費補助金基盤研究A研究成果報告書（佐藤 信雄 2005 『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会に一部改変して再録）
- (3) 小野健吉 1990 『条坊遺構及び東西両塔・四王堂の配置』、『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』西大寺
小野健吉 1993 『条坊遺構と西陣寺』、『西陣寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所
- (4) 中島義晴 2001 『西陣寺伽藍』、『西陣寺跡発掘調査報告書』奈良市教育委員会
- (5) 本稿中の座標表記は日本測地系第IV系である。なお、今回の調査地座標については国土地理院配布の座標変換プログラム tky2 jg を使

用して産種変換を行った。

- (6) 武田和雄氏算出の数字による(註1文献)
- (7) 『古代荘園絵図群による歴史景観の復元的研究』1999(平成11)年度～2002(平成14)年度科学研究費補助金基盤研究A研究成果報告書に所収。
- (8) 註2文献
- (9) 道路側溝の興絶を道路の興絶と直接的に考えることはできないが、少なくとも排水施設の維持放棄は道路管理方法の大きな転換を意味すると考える。
- (10) ト部行弘 2002『飛鳥京跡』『奈良県道跡調査概報2001年度(第3分冊)』奈良県立橿原考古学研究所
- (11) これについては以前も同様の指摘を行っている(佐藤聖聖 2000『律宗集団と耕地開発』『叢書・忍性と律宗系集団』シンポジウム『叢書・忍性と律宗系集団』実行委員会)
- (12) 大石雅章 1979『中世大和の寺院と在地勢力-西大寺を中心として-』『ヒストリア』第85号 大和歴史学会
- (13) 石上英一 1997『古代荘園史料の基礎的研究 下』講義集
- (14) 石上英一氏は同様の見解の上、建長3年『検注帳』記載の供田の田数が比較的きりのいい数字になっていることから、『検注帳』記載の供田の位置はそれ以前から固定されていたものであった可能性を指摘されている(註13文献)

【さとう あせい=財団法人 元興寺文化財研究所】

討論

(狭川) 今日お話をいただいた内容はかなり幅が広いと思います。基本的には主たるテーマの北辺坊、それと北辺坊に関わる条坊道路の問題について検討していきたいなと思っております。それと北辺坊を考える上で非常に重要になってくる中世の問題についても触れていきたいと考えております。

このような小さな検討会ですので、話し手と聞き手には仕切りも壁もなにもありません。同じだという前提で、私が質問を投げかけなくても手を挙げるなり大きな声でしゃべっていったらいいので参加いただければ結構かと思えます。どうぞよろしく願います。

それではまず三好さんに伺いたいと思います。土器の問題の中で先ほど出てこなかったかと思うのですが、京内と宮内では土器様相の違いはあるのかということ、また京内の中で例えば七条、八条のような京の南端のような所の状況と、中心部分、あるいは北辺に近い所とで違いがあるのかないのか、あるのであればもう一度教えていただけたら、我々が整理をしていく中で視点が絞れるのではないかと思います。

(三好) まず宮と京の違いはすけれども、宮と京も基本的には食器のしめる割合は、土器が主体であるということと同じ状況にあると思うのです。京内の場合は、須恵器だけが沢山出るとい状況があります。私は宮の中は発掘したことがないので報告を聞いて感じたことなんですけれども、宮の中でも須恵器の蓋だけが大量に出土するという話を川越さんから聞いて⁽¹⁾、何か不思議な出土例もあるのだと思いました。まあそういうのは置いときまして、食器の出土率というのは、やはりどちらとも土器の類が主体だという傾向が読み取れるのではないかと思います。ただ例外も存在します。そのことを十分に注意しておいたほうが良いかと思えます。

平城京の北と南で大きくわけて考えてみると、平城京の特に二条大路界限は、奈良時代前半の土器が結構集中して出てくる所が多い。二条大路の長屋王邸のすぐ北側、二条大路南を見てもみすと食器類の大きい物が大量に出土する傾向があるという気がします⁽²⁾。宮に近い所では法量の大きいものが目立つ。京内に目を移すと、皿等でこんなに大きいものが大量に出土するという例は余りないですから、平城宮の土器を見せていただきますと、法量の大きさに圧倒されます。長屋王邸跡の出土土器のときもそうでした。結構ポリウムがあるのが多い。

それから土器の形で注意しておくべきことは、これはどこにも発表したことないのですが、土器の皿Bってありますよね。高台が付く皿です。平城宮とか長屋王とか結構皿Bが比較的良好目につくのですが、平城京内の一般宅地内での発掘調査では、土器皿Bは出土量がすごく少ないのです。このあたりは皆さんが今後の調査を行う時に、少し気をつけて見ておいていただきたいなと思います。出土量の少ない高台付き土器皿は、何かの儀式的時に必要な形態の一つであった可能性も否定できないので、調査するときに注意して見ていただきたいなと思います。

一般的に土器の形を見比べると、宮と京の違いはそれほどないと思いますが、土器の色については、注意するべきかもしれません。平城の土器は、1群と2群に分かれているんですよ。1群は胎土が白くて胎土が精選されている土器で、2群が赤いオレンジ系色の土器です。平城宮の周辺の出土土器を見ますと、白い1群の土器が結構目立ちます。ところが、平城京内の土器は一般的に、1群の白よりもオレンジ色の2群土器の方が結構目立ちます。ここがポイントなんです。ここをポイントなんです。よくよく観察してみると、白い1群土器に見えるものでも、土器の割れ口をみると中はオレンジ色や茶褐色になっていたりするん

ですね。これが宮内儀式に絡んでいるかどうかということはわからないのですが、平城の住人は白いものにあこがれているというか、白色にこだわって何かをしている可能性があるんです。

土師器の白は、白い粘土（ドベ）を塗って白く仕上げています。そういったものが平城宮の土器にかなりみられる。かといって宮の中にオレンジ色の土器がないというわけではないのですが、比率的にみると京よりも白っぽいものがよくあるのではないかと。その白い土器の割れ口をみると、中がオレンジ色だったりします。だから結構、都城の土器を研究対象としている運中は、色にも注目しているのですが、ただ埋まっている過程で色の変化を受けてしまう事もあります。表面が白いから全部白いドベを塗っているのではと思うのですが、必ずしもそうではないみたいです。

例えば、東市跡推定地跡の調査で見つかった井戸は、井戸枠の上の方はぬきとられていて、下の方だけが残っていました。抜き取られた部分で出土した土器はオレンジ色の土器が多く、井戸の枠の中から出土した土器は白いものが多かったんです。だから、埋まっている過程の中で状況が違っていると、色の変化も起こってしまうので、確かに色を塗った痕跡というのを見つけないと、基本的に色の差ですくには語れないと思います。でも、確かに塗っている例を現在いくつか確認していますので、赤い土器を白く塗りあげて使うという意識があったのではないかと考えています。二条大路付近では、このような例がみられるので、宮と京の土器についても、色の差があるかも知れないという気がします。

それから、須恵器の点から申しますと、宮内では壺が出ないということではないですが、京に比べると器形というかバリエーションが乏しいのではないかと思います。京内はずいぶんですからね。いろんなものが出てきますから、いまだに初めてお目にかかるような壺も出土しますし、壺に関しては京のほう結構いろいろな産地のものが流通しているというか、いろんなものを使っているという気がします。

(狭川) バリエーションがあるということですが、生産地というか、そういったものの絡みといったものはどうでしょうか。

(三好) 大半が搬入品でしょうね。平城京の中では須恵器の窯はないでしょうけれども、生駒の東麓ですかね。橿原考古学研究所とか、生駒市でも調査されていたでしょうかね。結構昔に⁽¹⁾。生駒東麓には奈良時代の後半から末、平安時代初頭にかけての須恵器の窯があります。平城京にも生駒窯の製品は入ってきているんでしょうけれども、大半は恐らく陶邑とか播磨とか猿投のものだと思います。多分奈良時代の後半以降は、壺類に関しては猿投産のものが多いと思います。もちろん北陸のものが入ってきたり、全国から色々な壺が入っているのですが、食器の産地同定は難しいのですが、恐らく杯Bとか杯Aというのは大半が陶邑のだと思います。奈良時代後半から長岡京、平安にかかるとの時代は、尾張の猿投のものっていうのがかなり入ってきていると考えています。この間、京文研での古代の土器研究会に参加したときに発見した須恵器は、大半のものが猿投のものでした。あれは珍しいですね。宮の中で尾張のものがたよって出土したというのは。

ちなみに今日の発表にもありましたけれども、奈良市が近鉄西大寺の南側で再開発事業に伴って発掘調査をしています。そこは奈良時代後半から9世紀はじめくらいまでの遺物がかかり出土します。ここに住んでいた住人は、尾張産の須恵器が好きみたいで、かなり出てきます。壺とか甕、結構立派な杯Bとか相当量出てきます。

(狭川) そうしますといろんなものが京内、宮内にかなり入っているというわけですね。三好さんがやろうとなさっている仕事はものすごく大変だということですね。

(三好) そうです。いろんな所からいろんなものが入ってくる訳ですから。だから、在地というか奈良盆地だけで作った製品だけだったら型式変遷というのは追いつきやすいのですけれども、奈良以外に東海、

播磨、河内、摂津、最近では山城南部、大和でももう少しと南の方から来ているものとか、いろんな所から来ているので、それを見分けて型式変化を追うことだけでも、もう何世代に渡ってやらなければいけない仕事です。

(狭川) ありがとうございます。いろんな問題点を踏まえて、すでに今回の調査につきましてはある程度まで整理はすすんでおりますが、もう一度また見直して見たいと思います。

(井上) 木簡の紀年銘の扱いについてひとこと述べたいと思います。三好さんの資料にありますように、紀年銘を持つ木簡と共存した土器群があり、その年記から土器群の実年代が付与されることがあります。例えば、平城京ⅢのS K 820。この遺構は一辺が4 m、深さが2 mもあるという、かなり大きな土坑です。おびただしい量の土器、瓦や木片、自然遺物などとともに1843点の木簡が出土しています。その中に天平17年や18年と書かれたものが含まれていました。問題は、これらの木簡が何者であるかということです。結論からいいますと、篝火だと判断しています。つまり、排便の後にお尻を拭う道具として再利用されたと考えられるのです。

1843点の木簡のうち、ほぼ半数は腰節のような削り屑です。あとの残りのうち177点は完形の木簡です。そして残りの8割ほどは、割られたり折られたりして削り箸のように細くなった木簡の断片です。また重要な事実として、割られて新たに生じた側面に、ほぼ例外なく削りが施されています。

奈良文化財研究所の渡辺宏宏さんは、昨年、長屋王邸跡から出土した木簡を分析したときに、なぜ割られているのかについて考察を巡らせています⁽⁴⁾。渡辺さんは、木簡は公的な書類であるから、内容を残さないようにするために削り裂いて廃棄するのだと考えています。しかしそれでは、削り裂き側面にことさらに削りを施したり、あるいは習書の木簡も削り裂かれていることの説明がつかえません。同じく土器層年の平城京Ⅳに位置づけられている、平城宮内の土坑S K 219からは、先年国の重要文化財に指定された39点の木簡がまとめて出土しています。そのうちの記念すべき平城宮第1号木簡は、孝謙上皇が法華寺滞在中に宮に対して食料を請求した内容を持つものですが、この木簡も半分は割られたものでありまして、一端をナイフの刃先状に片面側から削りこんでいます。重要なことに、40数点の共存した木簡の中に、この第1号木簡の片割れはありません。こうした状況から、平城宮や平城京から出土する木簡は、削り屑を別にしますと、ほぼすべて篝火として転用されて、使用後にまとめて廃棄されたものであると考えています。このことは藤原京で検出された便槽遺構、あるいは福岡市鴻巣館跡で発掘された便槽遺構からの出土木簡や篝火を観察しますと、いっそう確かなことと理解されます。

廃棄木簡が篝火として転用されたものであるとしますと、従来は出土地の性格や出土木簡の記載内用から判断してきているのですが、そう簡単には言えないのではないかと、という問題が生じてきます。つまり、木簡は軽量なものですから、篝火として再使用するために、場合によってはかなり速く穴も含めて、あちこちから回収し、それを排便時に使用し、使用後ある程度まとめておいて、ゴミ捨て穴に廃棄するという順序が考えられます。そのゴミ穴も、場合によってはかなり離れた場所にあった可能性もあります。従いまして、ある土坑に紀年銘木簡や官銜の名前を記した木簡が投棄されていたからといって、即座にその場所の性格や埋没年代が分かるわけではなく、2歩も3歩も控えて考えなければならないと思うのです。だからといって、不可知論に陥ってはいけなしいと思います。こうした出土木簡を正しく意義づけるためには、より多くの調査事例を蓄積し、その中から事実を見極めていかなければならない、後ろ向きの議論と見なされかねませんが、その意味からも、これからも思の長い、継続的な調査研究が必要とされると思います。この点につきましても、さきほど紹介しました近刊予定の『平城宮発掘調査報告ⅩⅦ』で論じていますので、ご参照ください。

(狭川) 生々しいお話をありがとうございました。いろいろご教示いただいたのをふまえて、もう一度我々も今回出土した土器を見直して、いい成果にできるようがんばりたいと思います。

では直接我々が掘りました遺構をふまえて聞いていきたいと思えます。武田さんのレジュメを見せていただいて、条坊の大路の寸法が書いてあります。大路の寸法を踏まえまして、その上で今回出ている北辺坊との一番結びつきが多い一条北大路の道路幅、17mと報告させていただきましたが、その評価をしていただければと思います。

(井上) 私の答えを申し上げます。私は、この一条北大路の道路規模は、たいへん興味深いと考えます。まず17mであるというふうに、m単位での数値を限定してしまうことはよくありません。今手元に渡されています図面は縮尺が400分の1で、それ以上の厳密な検討はここではできませんが、すくなくともこの図面に掲げる限り、私は南北両側溝の側溝心間距離は17.5~17.6mと計測しようとみます。この規模は小尺で60尺、大尺つまり高麗尺で50尺の寸法となるとみてよいと思います。場所によっては17m、18mにも計測できる部分もあります。時折調査報告書で、側溝心間距離がcmないしmmの単位までの細かい数値としてあらわされているのを目にしますが、余り意味のある数値ではないと考えます。大事なことは、客観的な遺構図から、道路の設定規格をどう読みとるかということです。ともあれ、この調査地での一条北大路の設定規模は側溝心間距離で50大尺ないしは60小尺であったと判断されます。また西二坊大路は側溝心間で17.9mとされています。平城京にあって、大路の幅は一貫して同規模で設定されていたと考えています。小路の場合は、坊を違えれば幅員に変化のある場合もあるようです。武田さんは大路でも三条大路は幅に変化があるかもしれないと考えていますが、私はその点については、もう少し検討を重ねてみたいと思っています。

さて、今回の調査区で確認した西二坊大路は側溝心間距離で17.9mであったとさきほど報告がありました。西二坊大路については、西大寺駅南側の再開発に伴う区画整理事業で、奈良市教委の調査が行われています。そこでは側溝心間で15.6mとあります。これは45大尺の規格とみます。平城宮の造営当初の造営尺長は、今のところ1小尺=0.2957m従って1大尺=0.3548mとして検討することにしていきますので、45大尺は15.97m、四捨五入して16.0mと復元できます。この45大尺という数値はやや中途半端ですが、遺存状況のいい遺構の場合、側溝幅が5大尺である事例があります。そうしますと、その場合、路面幅が40大尺、側溝外岸間距離が50大尺であったことになり、整った数値による規格設定であったことがわかります。とくに、藤原京の大路では45大尺の例がほとんどをしめていきますし、平城京でも東四坊大路が45大尺です。ところが今回調査した右京一条では17.9m、おそらく一条北大路と同じ側溝心間距離で50大尺の規格であったと考えられます。おなじ西二坊大路であって、南の三条付近とは幅員が異なっていたという異例のありかたを呈している事例となります。

一条北大路の規格が50大尺であるということ、例えば六条大路が40大尺、さきほど言いました東四坊大路が45大尺であることに比べると、広く設定されていることが分かります。平城京の条坊道路は、その占める位置、あるいは果たした機能の重要性によって、規模に序列化がおこなわれていたとみられます。とすれば、一条北大路の規模が一般の大路よりも大きいという事実は、この道路が少なくとも平城京造営当時に北の京極大路として設定されたことを裏付けるものと考えてよからうと思います。

その判断の傍証となりますのが、藤原京での状況です。去年(2004年)の夏、お盆前ですが、橿原市教育委員会が新ノ口駅の西側で、従来の呼び方で北六条大路にあたる場所で発掘調査を行いまして、東西道路の南北両側溝が同じトレンチの中で検出されました。連絡をいただきまして私も見学にいきましたが、側溝心間で17~18mだという説明を受けました。報道発表用の簡単な遺構図をいただきまして、

物差をあてましたところ、心間で17.5mから18m弱と測ることができました。まさに50大尺の設定寸法でした。何人かの新聞記者さんから、どうだろうと電話で聞かれました、その都度、「これはたいへん重要です。藤原京の北京極大路とみておきましょう」と言葉尽くして説明しました。ところが、新聞記事には、その北六条大路は藤原京の大路クラスの道路であるとの内容に終始してまして、すこし残念に思った記憶があります。先ほども言いましたように、藤原京の大路は45大尺規模が標準です。この北六条大路は特に大きく設定されているのですから、特別な意味をもっていたと考えるべきなのです。つまり、1996年以来、藤原京は10条、10坊の正方形の都城形態をとっていることが明らかになりつつありますが、いっぽうではより大きな京域説や、不定形の京域説なども根強く主張されているところです。しかし、この調査例はここが北京極大路であった可能性の高いことを示しているのでもして、藤原京の北の限りの存在を裏付ける意味で、たいへん重要な調査成果であると評価しなければなりません。ともあれ、藤原京の北京極大路が50大尺道路であったということは、今回調査した北一条大路もまた50大尺規模であり、共通した状況を呈していると言えます。

(狭川) ということは、今回調査した遺構については、京極大路としての評価を十分に与えることができると認識してよいということですね。

(井上) ご承知のように、平城京の左京では、岩本次郎さんの説に従いますと、一条北大路の想定される場所は京域の外に当たります⁽⁴⁾。岸俊男先生は、そうではなく、京域の中に含めて考えています。私は岩本説が妥当だと考えていますが、いずれにしても、地形的にみて左京には一条北大路が施工された可能性はありません。従いまして、一条北大路は右京の、今回の調査地周辺にしかないこととなります。そこにこのように一般の大路よりも大規模な大路が設定されているということになりますが、ここが本来、京極大路であった可能性は高いと判断できます。

(狭川) 少なくとも設定段階では京極だということですね。

(井上) そうです。しかし、私の考えでは、この一条北大路は平城京造営当初の京極大路であって、のちに北辺坊が付加されますと、その北辺坊の北辺路が「京極路」となるのだと思います。

(三好) 左京で北郊と言われている地域ですが、「これまで京として考えていない」と言われましたけど、調査例を見ますと道路の北と南では同じような状況としてみることが出来ると思うのですが、調査成果からみてもあれは京の中ではないと言い切れるかどうか。

(井上) それは難しいことですね。左京の一条南大路、ふつう一条大路と呼んでいますが、奈良市法蓮町の現在の一条通に重なる位置ですが、その北側でのいくつかの発掘調査で奈良時代の建物群が見つかっています。しかし条坊道路など、条坊制が施行されていたことを示す遺構は確認されていません。いずれ発掘されるかもしれませんが、しかし、なぜ今のところ一条南大路以北が京域外であると判断しているかと言いますと、そこに聖武天皇陵、光明皇后陵があります。また丘陵地の中になりますが、条屋の坪付け呼称が東大寺関係の史料の中に認められます。ここが京域内であるとしたら、陵墓の存在は、皇都及び道路の近辺で埋葬することを禁じた喪葬令の規定に反することになります。

ただし、先ほどの佐藤さんの報告にもありましたが、奈良文化財研究所の第103-16次調査、これはジャスコの駐車場予定地の調査で、一条北大路想定地のすぐ北側に当たります。昭和53年、私もこの調査に携った記憶がありますが、ここで確実に奈良時代前半に属する掘立柱建物群が見つかっています⁽⁵⁾。1段階のちに南北方向の小路が閉鎖されることもわかりましたが、北辺坊が奈良時代後半に設定されたものと考えますと、それ以前は京域外である場所にも、確かに建物群が存在していることとなります。その事実をどう理解するべきかということですが、まだ妙案はないのですが、建物群があるからと

いって、京域内であることの必要十分条件とは限らないと思っています。そのほかのいろんな要素を合わせ考えて判断しなければならぬだろうと思います。

(狭川) そうしますと、京を囲む外郭ラインの問題ということになるんですが、今回の発掘の状況で岡本さん、佐藤さんどちらでもいいのですが、築地塼という一条北大路の南側もしくは北側に築地なり何なりの遮蔽のための施設を検出できているのでしょうか。

(佐藤) 1区第2遺構面全体図 (Fig.2) を見てください。一条北大路南側溝南側に2m前後の空地があります。以前の宗文研による調査でも西隆寺北側の築地が推定されているラインが出ています⁽¹⁾。今回の調査でもあれと同じような幅で空間が続いていることがわかり、やはり希薄なピットがきちんと並ばないという状況を確認しています。それから瓦溜りですね。平瓦、丸瓦だけで軒先のものがない状態なんですけども、ガサッと引き倒されたような形で瓦が出て、堂舎の瓦の可能性もあるんですけど、築地の瓦と言ってもいいんじゃないかと。この築地ラインに並ぶかたで瓦が投棄されているという状況から、西隆寺の部分に関しては一条北大路との間に築地を想定していいんじゃないかと思っていますですね。

ただ、これが西隆寺だけでなく、ずっと西に、二坊側まで延びていたのかということ、2区北側の確認トレンチ2、一条北大路の南側溝を検出したのですが、このトレンチでは一条北大路南側溝のすぐ際から柱穴がでていいます。柱穴は掘ってないんですけど、こうした際から平面形態が隅丸方形の非常にしっかりした柱穴が出ていますので、僕はこの部分には築地が無かったのではないかと思っています。

(井上) 築地塼が無かったとみること、大変問題があると思います。これまでの調査でも、築地などの区画施設の遺構がなくてそのまま宅地に移行する事例はあります。もちろん雨落溝も残っていない。その場合でも、築地基壇も雨落溝も削平されたというのがまず妥当だと考えます。大路に付随する部分で築地塼が明かに存在していなかったとみられるのは、平城宮朱雀門前の左京三条二坊一坪に限られます。それ以外は大路の両側には築地塼を設けるのが原則であったと考えています。ですから、この一条北大路の南側溝の南側のすぐ南際に柱穴があったということですが、一つにはこの柱穴をきちんと断ち割って状況を確認する必要があるかと思っています。また掘立柱が局部的な状況であるのかどうかということも知りたいたところ。凝灰岩製の暗渠もありますし、築地塼があったとみるのが妥当ではないでしょうか。

一方、一条北大路の北側溝の北側にも、区画施設の形跡は見つかっていませんね。平城京の京極大路は、まだ他では確実な調査例がありません。ただし、私が京南面羅城であると判断した遺構は、遺存地割からみますと、確かに南京極大路である九条大路の南辺に位置しています。この羅城である築地塼遺構からみますと、高さはおよそ5mと復元できます。また両側に3.5m幅の溝を伴っています。平城京は、唐の長安城をきわめて強く意識して都市計画がなされていると、最近いっそう強く考えるようになりましたが、かつては平城京の大きな特徴の一つとして、長安城などの大陸式都城に連なる羅城、つまり城壁がつくられていないことが常に指摘されてきました。しかし、私は少なくとも京域の南面には全面に羅城が設定されていたと判断しています⁽²⁾。そのことからみますと、一条北大路の北側に築地塼があったとしてもおかしくない。遺構として残ってはいいませんが、想定する空間的余地はあるのではないかと思います。

(佐藤) 奈良市さんの調査でこの間、一条北大路南側溝の延長を掘られたんではないかと思うのですが、そこでは如何でしたでしょうか？

(三好) 佐藤聖さんの図 (Fig.157) ですが、「一条北大路遺存地割」って書いてありますね。その遺

存の「存」という字の下に網掛けがあります。その下に細長い南北の土地があります（Fig.157中の☆印）。この網の南側を掘っているのですが、その時、南北のトレンチを入れたのですが敷地の北寄りに1本入れているのです。その時に14世紀の溝1本と16世紀ぐらいの溝、要するに2本見つかったのですが、この地図でいくとこのトレンチの北側にあった13世紀ぐらいに埋まったであろう溝が、位置的に一条北大路の北側溝にあつてくるような気がします。

（井上）この地図（当日のレジュメ資料）で調査地として黒く塗っている部分は、位置が間違っていますね。この地図のもとにされたのは、私どもが作成した『平城京条坊総合地図』ですが、この地図には条坊道路の遺存地割を示しています。それに加えて、条坊道路の復元想定位置を直線で示しました。しかし、この復元は『地図』の例言にも書いていますが、問題が多く、慎重に扱う必要があります。つまり、この復元想定は、平城京条坊の造営方位のふれを $N0^{\circ}15'41''-W$ 、造営基準尺を1尺=0.296cmと仮定して、朱雀門を基準位置にして行われていますので、条坊の実態とかなり乖離することが考えられます⁽⁹⁾。

（三好）位置的にこのラインがあっているか、あっていないかというはひとまずとしても、敷地の北側で溝があっているんですよ。それでラインに関係なく沿っていくと、こちらの南側の側溝のラインで……。要するに何が言いたいかと言いますと、今言いました敷地のところで、13世紀の溝と15-16世紀ぐらいに埋まったとみられる溝が、敷地の北端と3-4mぐらいおいて2本見ついています。位置的にみると北側で見つけた溝が北側溝とあつてくるみたいですが、ただ座標の計算ではちょっと北にずれるという話を聞いてます。

（佐藤）一条北大路の推定方位を $W-0^{\circ}15'N$ で計算されると北に寄るのですが、今回決定した $W-0^{\circ}8'8''-N$ という数値で計算しなすと恐らくびつたり合ってくると思います。

（井上）あの調査では、調査区の北寄りの場所で二つの東西溝のあいだに高まりがありましたね。それを築地塀の形跡だと判断してもおかしくない状況でした。

（狭川）一条北大路の南側は、もちろん西隆寺なり別の宅地の築地塀の存在があります。北側は今の報告では確認できていないということです。ただ、これまでのご意見では、少なくとも京極大路としての評価は大丈夫だろうと思います。これを踏まえてまた、私たちがいろいろと考えていきたいなと思っております。

そういうことで、ここが平城京設計段階の右京の北辺であると認識いたしましたが、さきほどから再三話かかっているように、さらに建物群はそれよりも北側に延びていっているという問題があるわけなんです。そこで北辺坊の存在について、建物がある、あるいは同時に同時代のものがどんどん広がってきたということは、私などは始めから巨大な遮蔽物が北辺には存在しなかった。つまり邪魔物がなかったのでもともと宅地が広がってきたのかなと勝手に思っていた部分があるのですが、先ほどの井上さんの話、途中時間の関係もありましたので北辺坊の核心の部分の話が止まっていたと思います。ここでもう少しその部分についてのお話をさせていただいたらありがたいなと思います。

（井上）できるだけ要点を絞ってお話しましょう。佐藤さんの図（Fig.159）。これは奈良市教委の第322次調査の遺構図です⁽¹⁰⁾。この建物群の北側に若干の空地があります。この空地の意味については、あとで佐藤さんからの報告があるでしょうから、それを楽しみにいたしましょう。建物群のほうですが、奈良時代の後半に長大な竪立柱建物を立てられます。それが平安時代になりますと、铸造遺構をともなった建物群が営まれます。論証は省略しますが、奈良時代後半期の遺構群は、西大寺の造営に伴って建設されたものであろうと考えています。一般の宅地の建物の様相ではないと思います。平安時代

の遺構群は、がらりと様相が変わります。西大寺の変遷をみますと、宝亀元年、770年に称徳天皇が没しますと、造営はそれなりに続けられて完成に至るのですが、寺院は衰微の傾向をたどります。道鏡さんも下野薬師寺に流されて、ほどなく亡くなります。その後、桓武天皇の時代になると、造営の国家的基盤は次第に失われてしまいます。そうした状況の中で、史上に現れてきますのが秋篠寺です。今は、西大寺の北方にひっそりとした伽藍のたたずまいを見えています。奈良時代末から平安時代初頭の頃、つまり桓武天皇の頃に、秋篠安人という有力な政治家が頭角を現してきます。最後は参議、従三位まで昇進した人物ですが、桓武天皇のブレーンの一人です。その秋篠氏が氏寺として造営したのが秋篠寺でした。秋篠寺の造営過程については、今ひとつはっきりしないところがありますが、ともかく桓武天皇の全面的なバックアップを受けて大々的に造営が進められたと考えられます⁽¹⁾。

寺院を造営するときには、仏像を作ったり建築金具を作ったりするために、きまって周辺のいづこかに鑄造工場の施設が設けられます。各地の寺院関連遺跡で鑄造遺構が確認されていますが、この第322次調査でみつかった鑄造遺構群は秋篠寺に関わるものではないかと考えるのです。そのことを裏付けるのが、次の絵図 (Fig.161) です。『西大寺と秋篠寺埜相論絵図 (東京大学本)』と名付けられていますが、14世紀の初め頃に西大寺と秋篠寺が周辺の領地をめぐる争いがおこり、西大寺は秋篠寺の狼藉を幕府に訴え、後宇多天皇の院庁で審理が行われました。その際に秋篠寺が提出したのがこの図面です。この図

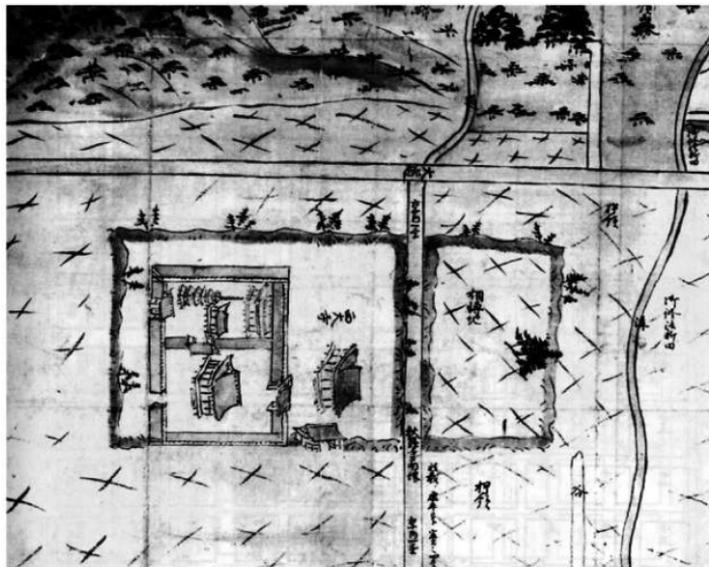


Fig.161 西大寺と秋篠寺埜相論絵図 (部分) (東京大学本)
(佐藤 信備 2005 『西大寺古絵図の世界』東京大学出版会より)

によると、一条北大路の北側の一画が「相博地」と書かれています。そして、この一条北大路を秋篠寺の寺域の南限と主張しています。ここには付箋が貼り付けられていて、西大寺側の主張が記されています。そこには、この場所は以前から西大寺の領地であるという趣旨のことが書かれています。西大寺絵図群の研究の第一人者である石上英一さんは、西大寺の主張が正しいのだといっています⁽¹³⁾。相博というのは土地と土地を交換することですが、石上さんは相博の地はここではないといっています。しかし平安時代の初め頃に、造営工事の用地として、この一画に秋篠寺が建出してきたと考えらるならば、秋篠寺のこの絵図による主張のほうが正しいということになると考えます。この領地相論（裁判）は、結局西大寺側が勝訴した形で終わります。それゆえに、以後、西大寺側の主張が正当化されてしまったのではないかと思います。私からみますと、発掘調査の成果が、はからずも秋篠寺の長い間の不名誉を晴らすことになったといえるのです。

次に、右京北城の条坊が全体的に北にずれていることについて述べましょう。佐藤さんが提示した図面（Fig.162）ですが、遺存地割と条坊想定位置図をみて分かりますように、一条北大路の遺存地割は本来の想定位置からかなりずれています。そのために、奈良市教育委員会が行った第430次調査の折に幅が2、3mのしっかりした東西溝が見つかったのですが、報告書では、この溝は一条北大路の復元位置よりもかなり北にあるので、道路北側の宅地内の築地塀の雨落溝であると評価しています⁽¹⁴⁾。築地塀の南側か北側かは明記していませんが、そうしますと遺存地割の妥当性を疑っていることとなります。しかし、遺存地割を是としますと、この東西溝は一条北大路の北側溝としてちょうどふさわしい位置にあります。私は遺存地割に依拠すべきと考え、この東西溝を一条北大路の北側溝と判断しました。今回の調査でも、まさにこの北側溝の東への延長線上で大路北側溝が確認されましたので、遺存地割の妥当性が裏付けられたと思います。

しかし、ここで一種の混乱を招いているように、例えば二条大路の条坊計画線、これは朱雀門心の南70大尺の位置にあります。そこから等間隔で割り付けますと、一条北大路は遺存地割の示す位置よりも16mほど南に想定できることとなります。確かに、この近辺の他の発掘調査、例えば西隆寺の東門跡や、西隆寺寺域の南側を通る一条条間大路の調査でも、若干北にずれた位置で遺構が確認されています。この原因について、いまのところ私は見出し得ないのですが、あるいは関係するかもしれない、もう一つの異例の地割状況があります。

平城京右京の北側には条里地割域が展開しています。京北条里です。関野貞さんは平城京の南方に展開する京南条里と京北条里は一連の地割体系であると説きました。その後、そうではなく、それぞれ独立した地割であるという異論もありましたが、私は関野説が正しいと判断しています。また、平城京周囲の条里地割は平城京よりも古いという考えも、関野説に始まります。異説がありますが、私はこの点においても関野説が妥当であると考えています。平城京は路東条里つまり下道よりも東側では、その北端ラインを基準に設定されていると見ています。その位置は平城宮の北辺、今の水上池の南側の土堤あたりになります。もちろん平城京の設定により、京域内には条里地割は残っていませんが、右京では京南条里に連続する京北条里の南端東西ラインは一条北大路から北に（条里）町の位置にあるという理解が、関野貞以来ずっと踏襲されてきていました。理屈の上では、当然そのように理解すべきなのですが、ところが地図上で計測してみますと、実はそうなってはいないことが明らかになりました。京北条里の地割は北辺のすぐ北側の一帯では、かなり良好な状態で遺存しています。この付近での条里1町の規模は108mほどですので、明確な条里東西地割線から108mずつ南にとってきますと、これまでの理解では一条北大路の中軸線と一致するはずなのですが、それよりも北36mの位置に条里東西線がくるこ

とになる。話はかなりこみいっていますので、井上報告図面（Fig.148・149）で理解していただければと思いますが、ともかく一条北大路のある場所では、平城京造営以前にはここに存在していたと考えている条里地割は36mばかり本来の位置から北にずれていたということになります。路東つまり左京側ではずれていなかったとみられますので、すなわち平城京造営前の条里地割施工の時点ですべてに路東と路西の条里地割線に大きなずれが存在していたということになるのです。条里地割の、こうした変則的な状況は、実はこの周辺だけではなく、奈良盆地の中でも、例えば馬見丘陵の東と西では半町の食い違いがあることが秋山日出雄先生が指摘されていますし、懸安寺のある額田丘陵の東西や富雄川の両岸でも50m前後の齟齬のあることが岩本次郎さん、千田稔さんにより指摘されています。また私もこの点について別に論じたことがあります。このように、丘陵や河川などを挟んだ場所では条里地割のずれが生じる現象がありがちであったと言えます。これは地割測量のありかたに関わるものだと考えていますが、この右京北域での食い違いは、秋篠川がその原因であろうと判断しています。ともあれ、この周辺の条坊地割設定に際しての変則的な状況の実態とその理由を追究する上でも、今次の調査で一条北大路の遺構の全容が明らかにされた意義は大きいと思っています。

（狭川）井上さんのお話は、遺存地割の賛否両論をずっと繰り返してきた中で、遺存地割の再評価というふうに考えいいかと思っています。平城宮域の中をみる限り、遺存地割は十分評価できるということです。井上さんの案でいきますと、北辺坊の中に残される遺存地割も十分評価できるということで理解してよろしいかと思えます。それと今回の調査結果というものについて合わせてみますと、佐藤さんが作ったこの図ですね（Fig.157）。それと井上さんのおっしゃった遺存地割というのは、今回一条北大路が従来推定線より北へ少しあがったということで、遺存地割と合致したと認識しています。

（井上）今回の調査に関して、もう一つ興味深い観点は、佐藤さんから是非お話しただきたいのですが、北辺坊域で道路遺構がみつからないことをどう考えればよいのかということです。その点、いかがでしょう。

（佐藤）僕もまだ思いつきの範囲を出ていないんですけど、端的にいうと一条北大路の位置・規模が明確にわかったことを踏まえますと、京北条里に残っている北辺坊遺存地割は評価できると考えます。評価できるのですが、大路の側溝がでないとか、明確な道路を形成しないとかの問題が出てくると思うんです。これを素直に解釈するならば、北辺坊域は通常の平城京域とはちがった条坊制度のされ方をしている。つまり、北辺坊部分については、平城京の条坊道路とは異なった道路側溝をもたない空間で区画された街路が存在していた可能性がある、という評価になってくると思えます。まだまだ詰めないといけないところがありますが、僕はその可能性を考えています。

（狭川）次に空間地という問題がでてくるわけで、北だけでなく京内に空間地が唐突に出てくるというような事例はあるのでしょうか。

（武田）さきほどちょっとご紹介した事例もありますし、密度が低いという事例はいくつかあります。ただそれは難しい問題もあって、例えば削平という問題は平城京内の調査では避けて通れない問題だと思えます。そこは冷静になって考えなければならぬ問題なんです、非常に使用密度が低い、あっても遺構が一時期しか見つからないという例はあります。

（井上）本来、道路が通っていると推定される場所で、ということですか。

（武田）いえ、そうじゃなくて、宅地の利用という点で先ほどの道路の部分でいいますと、条坊側溝が検出されなかったという事実は大変大きい事実だし、これは深く受け止めなければいけないんですけども、そこに移動空間がなかったと、我々調査研究に携わる者は逆に決めることはできない。で、削平をされ

たとか、そういう安易な方向に持っていくつもりはないのですが、われわれも調査をやっていてよく思うのですが、京内のかなり離れたところで検出した溝を、ただ計算上合うからということだけで、それを条坊側溝として見なすかということになると、なかなか難しいですね。

単に小さなトレンチなどで東西あるいは南北方向の溝が一条検出された時に、奈良時代から平安時代にかけての遺物が入っていたとかだけではどうも決められない。そもそも条坊側溝かも知れないと遺構の性格を想定するというのは、その遺構が計算上しかるべき位置に存在しているからそう想定している例もかなり多いんですね。そういう目で見ていくと、ここに条坊側溝は見つからなかったということは、それで大きな意味を持つことなんでしょうけれども、でも違う意味では移動空間が全くなかったということにはならない。

(井上) 佐藤さんが提起したアイデアは、非常に興味深いと思います。一条北大路よりも北側の西二坊大路の延長部分で道路遺構が見つからなかったわけですが、しかしそこには西二坊大路の遺存地割がみとめられるのですね。このことをどのように捉えるべきかと考えあぐねていたのですが、北辺坊が平城京造営当初の設定になるものではなく、奈良時代の後半に付加工事で設定されたことを前提にして、佐藤さんの言うように、側溝を伴わない条坊道路があったことを考える余地はあるかもしれないと、今思いはじめました。ただ、側溝は伴っていないくても、築地塀あるいは土塀のような区画施設はあったと考える必要があるのではないかと思います。その場合、塀の雨落ち溝は当然あったと考えられますが、浅いものであれば削平されて遺構としては残らない。

先ほど取り上げました鋳造遺構が検出された奈良市教委第322次調査区でも、調査区の北よりかなり広い空地があります。その場所のすぐ西側には、北辺坊の条間小路の遺存地割がはっきりと残っていて、位置的にみて、この調査区内に道路の南側溝がなければおかしい。にもかわらず、調査ではそれらしき遺構が見つからない。この点については、以前から私も不審に思っていました、積極的に論じますと訳が分からなくなってしまいそうで、議論を避けざるを得なかったことを告白しておきます。しかし、ここでも側溝を伴わない条坊道路という考え方を採用しますと、もっと幅広い考察が可能になるかもしれないと思います。

榎原考古学研究所が平成の初めに奈良ファミリーの北側で実施した発掘調査で、北辺坊の北辺路とみなす大溝を伴う遺構が検出されています⁽¹⁴⁾。その報告の中で当時の地表面は1mほど削平されているという所見が示されていますが、それでもなお深さ1mあまりの溝が遺存している。この遺構群について、私は条坊に関わる道路だという評価に対しては否定的なのですが、1m削平されたとすれば、深さが1mよりも浅い溝は遺構として残らないことになります。今回の調査地での削平の度合いがどの程度であったかを十分考慮する必要がありますが、その点も含めて、さらに検討を深める必要があるように思います。

(清水) すいません。その場合、西二坊大路とか、こういう大路に関しても側溝を伴わない道路ということ想定されているんですか。その場合はやっぱり削平されていると考えるほかないと思うんですけど。

(井上) おっしゃる通り、大路にも側溝がなかったと考えることは、かなり勇気が必要になってきます。北辺坊全体でみますと、先ほど話の対象になった宗文研第103-16次調査では、奈良時代のある時点で南北方向の、側溝心間距離6mの小路が開削されています。ですから、北辺坊で条坊道路がどこどこ側溝を伴っていないかという議論はできないわけです。

(武田) 私が移動空間って言ったのは、必ずしも条坊云々というのではないので、ないものをそこに僅測をたくましくして無理に想定しようという話ではないんです。ちょっとうる覚えなんですけど、藤原

京の南のほうの調査報告をされたのを聞いたことがあるのですが、南の方へいくと条坊道路の痕跡が必ずしもあるというわけでは無く、建物とかはたくさんある。遺構はあるんですけども条坊道路の痕跡がないという例があるのをちょっと聞いたことがありまして⁽¹⁵⁾、遺構としての建物は東西方位をもったものが確かにいくつか出ていたと思うのですが、側溝という形で痕跡が見えない。でもそこが空き地として使われているとなれば、どういふふうにかわかりませんが、当然そこらへんで移動していた、出入りしていたわけですね。ですから同様のことを今回の事例に関してモチラッと思ったんですけど、ちょっと雑駁な考えですが。

(佐藤) 近年、平安京の話ですが、山本雅和さんが縁辺部に関して条坊側溝が出ない例が非常に多いと指摘されておられます⁽¹⁶⁾。

(武田) それは削平をされているということですか？

(佐藤) というか、縁辺部に関してはかなり多くの部分で道路遺構がみられないので、条坊側溝を持つ道路が、きちんと敷設されてないのではないかということですね。

(武田) 建物とかは結構あるのですかね。平安京は。

(井上) 都城縁辺部の条坊造営の状況については、長岡京で、かなり掘り下げた分析がおこなわれているようです。長岡京の京域や条坊制は、平安京のような方形のきちんとした復元図がありますが、発掘調査の成果を総合すると、縁辺部には条坊は施工されていなかったようで、完成度は、たしが6割か7割であったという所見があります。

(狭川) その割には藤原京は縁辺部がよく出ていると思うんですけど。

(井上) ええ、そうです。林部さんの議論⁽¹⁷⁾は朱雀大路に関してのもので、藤原京の京域の南よりの場所では朱雀大路は造営されていなかったということで、都城として不完全なものであったことを示すものとされています。

(狭川) さて、空間地の調査に関しては当然慎重にならざるを得ませんし、今すぐそれが道路という認識で当初から空間地として放置されたかどうかというのはまだ、この部分だけでは当然評価できない。

(武田) あともう一つ。羅城の話が先ほど出ていましたけれども、井上さんにしても佐藤さんにしても奈良時代のある時期が、奈良時代を通してかわかりませんが、ある程度の時期、この北一条大路というのが北京極になるといふふうにお考えだということですね。そうならば羅城の問題についても、想定というものもいろいろと考慮されたのではと思うのですが、今までの調査事例でいくと、例えば、奈良市でも調査をいくつか行っているんですが、南辺について言えば、羅城門の近所は確かに井上さんがおっしゃったように、堀状のものが見つかったと思うのですが、東の方へいきましたら、何箇所かトレンチを入れたのですが、そのトレンチでは九条大路の南側にはそれらしきものが見つからなかった。それから京の東辺についても大安寺の交差点からちょっと南に行った所、桂木団地の入り口の西方で試掘をしたことがあるんですが、やっぱり東四坊大路が一番外側になっているはずなんですが、そこでもやっぱり羅城の痕跡が見つからない。ここは東四坊大路の外側に当たるのですが、大規模な堀のようなものはなかったんです。

(井上) そこでは東四坊大路の東側溝は検出されていますか。

(武田) いや、それは出てない。

(井上) 出ていないのですか。道路自体も検出されていないということですね。

(武田) まあその辺をどう考えるかということなんです。で、まあ、羅城が日本の都城にあったかどうかということを含めて今後、議論があると思うんです。今、結論が出るということではないと思う

のですが、仮にあったとしても、中華帝国における羅城、狭義での羅城というのは日本にはなかったと思っています。それは中国の都城の例を見ればよくわかると思うのですが、巨大な堀と城壁を巡らすような中華帝国というところの羅城はなくて、あるとすれば日本的な羅城があるかという議論になるかと思います。ちょっと話が広がりましたが、今回の調査地について言えば、北一条大路の北側溝がわかったんだけれども、その外側に巨大な堀などはないんじゃないかというのは、むしろここで羅城を見つけなきゃいけないという意味じゃなくて、逆に言えばこうした遺構の様相を冷静に考えなくちゃいけないんじゃないかと思いました。

(井上) 平城京の羅城についてですが、私が羅城であると考えた築地塀遺構は左京四坊の東端近くに位置しますので、当然のこととして京域南面のすべてにこの羅城としての築地塀が設定されていたと考えています。両側に10大尺(約3.55m)幅の溝をとまなびになっていて、その内岸間の間隔10大尺の中央部分に築地積み土の一部が確認されています。平安京の南面羅城の規模を『延喜式』京程でみますと、平面規模の寸法が大尺、小尺の違いはあるものの、数値上は一致しています。そのことから平城京の南面羅城の高さは5mほどと復元できます。唐長安城の南面城壁つまり羅城の高さは1丈8尺、つまり5.4mであったとされています。構造的には彼我の違いはありますが、外観上は平城京羅城は長安城のそれに比べて遜色のないものであったということも可能かと思えます。

この南面羅城は九条大路の南側区画施設という意味もあります。とすれば、そのほかの京極大路、例えば東四坊大路の外側にも築地塀があってもおかしくはない。とすれば、平城京では少なくとも原則として都城の四周を羅城で囲繞するということであったと考えてもいいのではないかと思っています。その意味でも、東四坊大路の遺構説明は非常に重要な意味をもっているのではないのでしょうか。

(武田) 先ほど申しましたように、私も奈良市で3つほどトレンチを入れたのが、おそらく井上さんが東端でご覧になった所と羅城門との間に当たるという所です。南北に長く、九条大路想定地よりもかなり南までトレンチを入れたのですけれども、そこでは見つかっていないんです。

(井上) 九条大路は、造営方位のふれが異常に大きいのですが、その点を考慮にいれなければならないと思います。

(武田) ええ、ただ景観論からいくと、平城京の南辺一面にあったかどうかというのはちょっと...。そのへんの事実を踏まえよう少し...。あとはやはり削平の問題もありますけど。

(井上) 今度、その調査区の位置を教えてください。

(武田) はい、判りました

(井上) 1980年代に宗文研が五徳池の近くで築地塀遺構を検出した調査の折にも、遺存地割のことは考慮せずに、通常の造営方位を基準にして遺構の位置の検討をしたものですから、これが九条大路南辺の区画施設であるということがまったく認識されなかったという前轍があります⁽²⁾。今おっしゃっている調査場所も、遺存地割との位置関係を正しくふまえて検討しているかどうかですね。

(武田) 平城京南辺で実施した調査のうちのいくつかは、かなり南北に長くは掘ったんですけどね。

(井上) それでも確認されていないというのであれば、南面羅城のありようについて再度検討しなければならないと考えます。

(武田) まあ、検討の余地があるということで。

(狭川) 本当はここで話をまとめないといけないのでしょうかけれども、話が非常に多岐に渡りまして、そこに私の不勉強も重なって。会場にはもっとご意見をいただきたい方も多数お越しなんですけど、6時を過ぎましたので、ここで一応終わっておきたいと思います。中途半端で終わってしまつて申し訳

ないと思います。非常にたくさんのご示唆いただいたと思っております。で、これをすべて報告書に反映しろと言われると、これはもう無理です。到底すぐにはできません。ただこういう機会を与えていただきましたので、今後も当方の課題の一つとしてやっていきたいと思っております。

本日は本当にありがとうございました。これで検討会を終わります。

- (1) 奈良国立文化財研究所 1999「馬場東方地史の調査―第386次」『奈良国立文化財研究所年報1999』Ⅱ
- (2) 奈良国立文化財研究所 1995
- (3) 奈良県立歴史考古学研究所 2002「関西学術研究都市関連(高山3号窟)(第5次発掘調査概要報告)」、『奈良県遺跡調査概報2001年度(第1分冊)』
生駒市教育委員会 1989「生駒山北方塚跡分布調査」、『生駒市文化財調査報告書第9集』
- (4) 渡辺良宏 2001「木簡商業の二つの方法」『平城京木簡二- 長屋王家木簡二- (解説)』奈良国立文化財研究所
- (5) 岩本次郎 1988「平城京と京東系屋」『古代史論叢(上)』真木孝次朗先生古希記念会
- (6) 奈良国立文化財研究所 1978「北辺坊の調査」、『昭和52年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- (7) 奈良国立文化財研究所 1993「西園寺発掘調査報告書」。
- (8) 井上和人 1998「平城京羅城門再考」、『系皇制・古代都市研究』第14号 系皇制・古代都市研究会
- (9) 井上和人 2002「平城京の条坊設定方式」、『奈良文化財研究所紀要2002』奈良文化財研究所
- (10) 奈良市教育委員会 1992「平城京右京一条北辺三坊七坪の調査 第322次」、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成7年度
- (11) 長岡 篤 1987「草創期の秋篠寺をめぐって」、『民衆史の課題と方向』民衆史研究会編
- (12) 石上英一 1987「西大寺狂瀧園群の研究」、『系皇制研究』第3号 系皇制研究会
- (13) 奈良市教育委員会 2000「平城京右京一条北大路・西三坊大路の調査 第430次」、『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書』平成11年度
- (14) 奈良県立歴史考古学研究所 1994「平城京右京一条北辺二坊三坪・四坪」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第67冊])
- (15) 林部 均 2004「藤原京の「朱雀大路」と京域」、『系皇制・古代都市研究』第20号 系皇制・古代都市研究会
- (16) 山本雅和 1997「平安京の路について」、『立命館大学考古学論叢』Ⅰ 立命館大学考古学論叢刊行会
- (17) 註15文献
- (18) 奈良市教育委員会 1983『市道九条線関係遺跡発掘調査概報(Ⅰ)』

Tab. 5 平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(1)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
10001		竪溝小溝	10040→10001	B-7	
10002		竪溝小溝	10048→10002	A-B-7	
10003		竪溝小溝	10055→10003	A-B-7	
10004		竪溝小溝	10018-10055→10004	A-7	
10005		竪溝小溝	10007-10018-10019-10038→10005	A-B-6	
10006		竪溝小溝		B-6	
10007		竪溝小溝	10007→10005	B-6-7	
10008		竪溝小溝	10024→10008	A-6	
10009	SE10009	井戸	平安時代 10009→10135-10136	B-C-4-5	
10010		竪溝小溝	多くのビットを切る	A-E-3-4	
10011		ビット		A-5	
10012		ビット		A-5	
10013		ビット		B-6	
10014		ビット		A-4	
10015		ビット		A-7	
10016		ビット		A-7	
10017		ビット	10072→10017	A-7	
10018		ビット	10018→10004-10005	A-6-7	
10019		ビット	10039→10019→10005	B-7	
10020	SF10020	遺跡	一帯北大路。遺構当初はS D10197を北側溝、S D10821を南側溝とする	E-E-1-16	
10021		ビット	10021→10010	A-3-4	
10022	SP10022	ビット	10022→10010	A-3-4	
10023		ビット		A-3	
10024		ビット	10024→10008	A-6	
10025		ビット		B-6	
10026		ビット		B-6	
10027		ビット	10067→10027	C-5	
10028		ビット		C-6	
10029		ビット	10067→10029	C-5-6	
10030		ビット		A-1	
10031		ビット		A-1	
10032		ビット		A-1	
10033		ビット		A-5	
10034		ビット		A-6	
10035	SP10035	ビット		B-6	
10036		ビット		B-6	
10037		ビット		B-6	
10038		ビット	10038→10005	B-6-7	
10039		ビット	10039→10019	A-B-7	
10040		ビット	10040→10001	B-7	
10041		竪溝小溝	多くのビットを切る	A-F-2	
10042		竪溝小溝	多くのビットを切る	A-C-1	
10043		竪溝小溝	多くのビットを切る	A-D-2	
10044		ビット		C-6	
10045		ビット		C-6	
10046		ビット		C-7	
10047		ビット		C-7	
10048		ビット	10048→10002	A-7	
10049	欠番				
10050		ビット	10053→10050	D-7	

Tab. 6 平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(2)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
10051		ビット	10051→10191	A-1	
10052		ビット		D-7	
10053		ビット	11023→10053	D-7	
10054		ビット		B-6	
10055		ビット	10055→10003-10004	A-7	
10056		欠番			
10057		ビット		C-7	
10058		ビット		C-7	
10059		ビット		B-7	
10060		ビット		A-6	
10061		ビット		B-7	
10062		ビット		B-7	
10063		ビット		B-7	
10064		ビット		C-5	
10065		ビット	10065→10283	C-5	
10066		ビット		B-6	
10067		ビット	10067→10027-10029	C-5	
10068		ビット	10069→10068	B-5	
10069		ビット	10069→10068	B-5	
10070		ビット		B-5	
10071		ビット		B-5	
10072		ビット	10072→10017	B-7	
10073		敷層小溝	多くのビットを切る	A-D-2	
10074		ビット		D-7	
10075		ビット		D-7	
10076		ビット		D-7	
10077		ビット		E-7	
10078		ビット		D-7	
10079		ビット		D-7	
10080	S B10080a	柱穴	10080-10081-10082-10083-10084-10085-10086-10087-10088-10089-10090-10115-10142-10179-10196-10231-10232-10233-10234	C-5	
10081	S B10080b	柱穴		C-4	
10082	S B10080j	柱穴	10082→10010	C-4	
10083	S B10080k	柱穴	10129-10255→10083	C-3	
10084	S B10080c	柱穴		D-3	
10085	S B10080d	柱穴		E-3	
10086	S B10080p	柱穴		E-4	
10087	S B10080q	柱穴		E-5	
10088	S B10080f	柱穴		E-5	
10089	S B10080g	柱穴		D-5	
10090	S B10080v	柱穴		D-4	
10091		ビット		C-1	
10092		ビット		C-1	
10093		ビット	10099→10093→10041	A-2	
10094		ビット		E-3	
10095		ビット	10096→10095	C-2	
10096		ビット	10096→10095	C-2	
10097		ビット		C-2	
10098		ビット		B-2	
10099		土坑	10099→10093→10041	A-1-2	
10100		ビット		C-D-6	

Tab. 7 平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(3)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
10101		ピット		B-7	
10102		ピット		B-7	
10103		ピット	10103→10273	C-7	
10104		ピット		C-7	
10105		ピット		D-7	
10106		ピット		D-7	
10107		ピット		B-6	
10108		ピット	10275→10108	D-6	
10109		ピット		D-6	
10110		ピット		B-6	
10111		ピット		C-5	
10112		ピット		B-5	
10113		ピット		B-5	
10114		ピット		B-5	
10115	S B10080n	柱穴	10116→10115	E-2	
10116		ピット	10116→10115	E-2	
10117		ピット		C-3	
10118		ピット		C-3	
10119		ピット	10120→10119	C-3	
10120		ピット	10120→10119	C-3	
10121		ピット		C-3	
10122		ピット		C-3	
10123		ピット		C-3	
10124		ピット		C-7	
10125		ピット	10125→10073→10171	E-3	
10126	SK10126	土坑	11082→10126	A-2-3	
10127		ピット	10139→10127	A-2	
10128		ピット	10139→10128	A-3	
10129		ピット	10129→10083	C-3	
10130		ピット		B-7	
10131		ピット		A-1	
10132		ピット		A-1	
10133		ピット	10258→10259→10133	C-5	
10134		ピット		D-5	
10135		ピット	10009→10135	C-4	
10136		ピット	10009→10136	C-4	
10137		ピット	10137→10138	E-3	
10138		ピット	10137→10138	E-3	
10139	SK10139	土坑	平安時代以降、10139→10127→10128→10183	A-C-2-3	
10140		ピット		C-4	
10141		ピット	10150→10141→10142	D-2	
10142	S B10080i	柱穴	10141→10142→10043	C-2	
10143		ピット		C-5	
10144		ピット		C-1	
10145		ピット	10145→10043	C-2	
10146		ピット	10146→10043	B-2	
10147		ピット		B-7	
10148		ピット		B-7	
10149		ピット		D-5	
10150		ピット	10150→10141→10142	D-2	

Tab. 8 平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(4)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
10151		ビット		D-1	
10152		ビット		D-1	
10153		ビット	10153→10186	D-1	
10154		ビット	10042→10154	D-1	
10155		ビット		C-1	
10156		ビット	10157→10156	C-1	
10157		ビット	10158→10157	C-1	
10158		ビット	10158→10157	C-1	
10159		ビット		D-5	
10160		ビット	10161→10160	B-1	
10161		ビット	10161→10160	B-1	
10162		ビット		D-5	
10163		ビット		D-4	
10164		ビット		D-4	
10165		ビット		D-4	
10166		ビット		C-4	
10167		ビット		B-4	
10168		ビット		B-3	
10169		雑瓦		J-2-3	
10170		雑瓦		H-2	
10171		竪溝小溝	10125→10171→10277→10255	B-3-F-3	
10172		竪溝小溝	多くのビットを切る	F-3	
10173		竪溝小溝	多くのビットを切る	F-3	
10174		ビット		D-3	
10175		ビット		D-3	
10176		ビット		D-3	
10177		ビット		D-3	
10178		ビット		C-2	
10179	S B10080m	柱穴		D-2	
10180		ビット		B-1	
10181		ビット		B-1	
10182		ビット		B-1	
10183		竪溝小溝	10139→10183	A-3	
10184	S X10184	落ち込み	多くのビットに切られる	H-1-7	
10185	S K10185	土坑	10184→10185	H-6	
10186	S D10186	竪溝小溝	10153→10187→10186→10859→10860	F-1	
10187		ビット	10187→10186	F-1	
10188		ビット	11062-11066→10188	F-3	
10189		ビット		F-3	
10190		ビット		F-4	
10191		土坑	10051→10191	A-1	
10192		ビット		A-1	
10193		ビット		F-5	
10194		ビット		F-5	
10195		土坑		F-5	
10196	S B10080d	柱穴		F-5	
10197	S D10197	溝	一帯北大路北側溝。多くのビットに切られる	E-4	
10198	S A10198	礎石	a-eの柱穴で構成。平安時代	F-5	
10199		ビット		F-5	
10200		ビット		F-5	

Tab.9 平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(5)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
10201	SP10201	ビット		F-5	
10202		ビット		F-5-6	
10203		ビット		E-6	
10204		ビット		E-6	
10205	SP10205	ビット		E-F-7	
10206		ビット		F-7	
10207		ビット		G-7	
10208	SP10208	ビット		F-6	
10209		ビット		F-6	
10210	SD10210	竪溝小溝		G-1	
10211	SD10211	竪溝小溝		G-1-3	
10212	SD19212	竪溝小溝		G-1-3	
10213		竪溝小溝	11046→10213	G-H-1-3	
10214		竪溝小溝		H-1-3	
10215		竪溝小溝		H-1-3	
10216		ビット		C-5	
10217		ビット		D-6	
10218		ビット	10237→10218	D-6	
10219		ビット		B-4	
10220		ビット		B-4	
10221		ビット		B-4	
10222		ビット		C-3	
10223		ビット		G-4	
10224		ビット	10184→10224	G-5	
10225		ビット	10225→10891	F-5	
10226		ビット		H-6	
10227		ビット		H-6	
10228		ビット		E-7	
10229		ビット		B-7	
10230	SD10230	溝	一帯北大路北側溝。多くのビットに穿られる	G-1-7	
10231	SB10080a	柱穴		E-F-5	
10232	SB10080c	柱穴	11025-11026→10232	F-4	
10233	SB10080a	柱穴		F-2	
10234		ビット		D-3	
10235		ビット	10240→10235	E-6	
10236		ビット	10236→10237	D-5-6	
10237		ビット	10236→10237→10218	D-5-6	
10238		ビット		D-5-6	
10239	SD10197	溝	SD10197に重畳	E-5	
10240	SD10197	溝	SD10197に重畳	E-5-6	
10241	SB10080b	柱穴		F-3	
10242		ビット		G-4	
10243		ビット	10184→10243	H-5	
10244		ビット	10043→10244	D-2	
10245		ビット		A-4	
10246		ビット		A-5	
10247		ビット	10287→10247	A-6	
10248		ビット		A-6	
10249	穴蓋				
10250		ビット		B-7	

Tab.10平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(6)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
10251		ビット		B-7	
10252	SP10252	ビット		B-7	
10253		ビット		B-7	
10254		ビット	10254→10043	C-2	
10255		ビット	10255→10083・10293	D-3	
10256		ビット		C-4	
10257		ビット		C-4	
10258		ビット	10258→10259→10133	D-5	
10259		ビット	10258→10259→10133	D-5	
10260		ビット		D-5	
10261		ビット		C-5	
10262		ビット		C-6	
10263		ビット		D-6	
10264		ビット		C-5-6	
10265		ビット	10283→10265	C-5	
10266		ビット		B-5	
10267		ビット		C-6	
10268		ビット		C-6	
10269		ビット		C-6	
10270		ビット		B-6	
10271		ビット		D-6	
10272		ビット	10283→10272	C-6	
10273		ビット	10103→10273	C-7	
10274		ビット		D-7	
10275		ビット	10275→10108	D-6	
10276		ビット	10042→10276	D-2	
10277		ビット	10171→10277	D-3	
10278		ビット		D-3	
10279		ビット		D-3	
10280		ビット		D-4	
10281		ビット		D-4	
10282		ビット		D-7	
10283		溝	多数のビットに切られる	C-5-6	
10284		ビット	11024→10284	E-7	
10285		ビット		D-4	
10286		ビット		A-2	
10287		ビット	10287→10247	A-6	
10288		ビット		A-6	
10289		ビット		B-6	
10290		ビット		B-6	
10291		ビット	10292→10291	C-7	
10292		ビット	10292→10291	C-7	
10293		ビット	10171→10255→10293	E-3	
10294		ビット		E-2	
10295		ビット	南北家狭小溝を切る	E-3	
10296		ビット	11011→10296	E-3	
10297		ビット		E-3	
10298		ビット		E-1	
10299		ビット		E-1	
10300		ビット		E-2	

Tab.11平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(7)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
10301		雑乱	田正後字遺建物関係	L-2	
10302		雑乱	田正後字遺建物関係	L-2	
10303		雑乱	コンクリートブロック(土圍)	L-2	
10304		雑乱	田正後字遺建物関係	L-M-2	
10305		雑乱	田正後字遺建物関係	M-3-4	
10306		雑乱	田正後字遺建物関係	L-M-4	
10307		雑乱	田正後字遺建物関係	L-M-6	
10308		雑乱	田正後字遺建物関係	L-2-5	
10309		雑乱	田正後字遺建物関係	M-1-4	
10310		雑乱	田正後字遺建物関係	M-2-3	
10311	SD10311	雑乱	田正後字遺建物関係	N-O-P-1-3	
10312		雑乱	田正後字遺建物関係	O-1	
10313		雑乱	田正後字遺建物関係	O-2	
10314		雑乱	田正後字遺建物関係	N-O-2	
10315		ピット	10427→10315	O-3	
10316		ピット		Q-3	
10317		雑乱	田正後字遺建物関係	Q-1-2	
10318		雑乱	田正後字遺建物関係	Q-2	
10319		雑乱	コンクリートブロック(土圍)	M-2	
10320		穴墓			
10321	SD10321	雑乱	田正後字遺建物関係	M-3	
10322		雑乱	田正後字遺建物関係	O-1-4	
10323	SD10323	溝	古墳時代 10323→10340-10409-10411	O-P-2-6	
10324		雑乱		O-P-2	
10325		雑乱		P-Q-3	
10326	SD10323	溝	10323に変更	P-5-6	
10327		溝	10327→10481	Q-3	
10328		ピット		Q-2-3	
10329		雑乱		Q-3	
10330		雑乱	10330→10477	Q-2	
10331		ピット		P-Q-2	
10332		ピット		P-2	
10333		ピット	10333→10479	P-Q-2	
10334		ピット		Q-3	
10335		ピット		Q-2-3	
10336	SK10336	土坑	10336→10483→10485	Q-3	
10337		ピット		Q-4	
10338		ピット		P-2	
10339		溝		P-Q-2	
10340	SK10340	土坑	古墳時代 10323→10340	O-P-3	
10341		穴墓			
10342	SD10342	溝	一帯北大路南側阪地の雨落ち溝の可能性あり。	L-M-1-7	
10343		ピット		L-6	
10344		穴墓			
10345	SK10345	土坑		P-6	
10346		竪穴小溝		L-3-6	
10347	SK10347	土坑		L-5	
10348	SK10348	土坑		L-6	
10349	SX10349	溝跡込み		N-6-7	
10350		土坑		O-7	

Tab.12平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(8)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
10351		土坑		O-7-8	
10352	SK10352	土坑		L-M-8	
10353		雑乱	旧正徳寺遺構物関係	M-8	
10354		家跡小溝		M-9	
10355	SK10355	土坑	10355→10591	N-9	
10356	SK10356	土坑		N-10	
10357		溝		N-9-11	
10358	SE10358	井戸	奈良時代 10358→10590	O-P-10-11	
10359		土坑		M-10	
10360		雑乱		M-10	
10361		雑乱		M-10	
10362	ビット	杭孔		L-10	
10363	ビット	杭孔		M-10	
10364	ビット	杭孔		M-10	
10365		雑乱		M-11	
10366	ビット	杭孔		M-11	
10367		雑乱		L-10	
10368		雑乱		L-10	
10369		溝		H-N-10	
10370		雑乱		M-11	
10371	SD10371	溝	一帯北大路副地の陥没の可能性あり 10371→10594	L-P-11	
10372	穴番				
10373		土坑		M-N-2-3	
10374		雑乱		L-4	
10375		雑乱		L-5	
10376	SP10376	ビット		L-5	
10377		ビット		M-3	
10378		ビット		M-3	
10379		ビット		M-3	
10380		ビット	10380→10381	N-3	
10381		ビット	10380→10381	N-3	
10382		ビット		N-3	
10383		ビット	杭孔	N-3	
10384	SP10384	ビット		N-2	
10385		ビット		N-2	
10386	SP10386	ビット		N-2	
10387		ビット	10387→10388	N-2	
10388		ビット	10387→10388	N-2	
10389		ビット		N-2	
10390		ビット		N-1	
10391		ビット		N-O-1	
10392		ビット		O-1	
10393		ビット		N-2	
10394		ビット		N-2-3	
10395		ビット		N-2	
10396		ビット		N-2	
10397	穴番				
10398	穴番				
10399	穴番				
10400		ビット		O-2	

Tab.13平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(9)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
10401		ビット		D-2	
10402		ビット		D-2	
10403		ビット		D-2	
10404		ビット		D-2	
10405		ビット		D-2	
10406		ビット		D-2	
10407		ビット		D-2	
10408		ビット		D-2	
10409		ビット	10323→10409	D-2	
10410	SP10410	ビット		D-1	
10411		ビット	10323→10411	D-1	
10412		ビット		N-3	
10413		ビット	10413→10414	N-3	
10414		ビット	10413→10414	N-3	
10415		ビット	10417→10416→10415	N-3	
10416		ビット	10417→10416→10415	N-3	
10417		ビット	10417→10416→10415	N-3	
10418		ビット		N-3	
10419		ビット		N-3	
10420	SX10420	土坑等?	10420→10421・10422・10423・10424・10425・10426	N-O-11-12	
10421		ビット	10420→10421	O-3	
10422		ビット	10420→10422	O-3	
10423		ビット	10420→10423	O-3	
10424		ビット	10420→10424	O-3	
10425		ビット	10420→10425	O-3	
10426		ビット	10420→10426→10429→10315	O-3	
10427		ビット	10427→10315	O-3	
10428		ビット		O-3	
10429		ビット	10426→10429→10315	O-3	
10430		ビット	10430→10315	O-3	
10431		ビット		O-3	
10432		ビット	10433→10432	O-3	
10433	SB10433g	柱穴	10433・10435・10445・10471・10485・10503・10505・10508・10546・10555 ※倉庫跡→27柱穴文書庫跡 10433→10432	O-3	
10434		ビット		O-3	
10435	SB10433f	柱穴		O-3	
10436		ビット		D-2	
10437		ビット		D-2	
10438		ビット		P-2	
10439		ビット		P-2	
10440		ビット		P-3	
10441		ビット		O-3	
10442		ビット		P-3	
10443		ビット	10444→10443	P-3	
10444		ビット	10444→10443	P-3	
10445	SB10433h	柱穴	10447→10446→10445	P-3	
10446		ビット	10447→10446→10445	P-3	
10447		ビット	10447→10446→10445	P-3	
10448		ビット		P-4	
10449	穴蓋				
10450		ビット	10451→10450	P-4	

Tab.14平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(10)

S-番号	遺構番号	種別	所在	地区	その他
10451		ピット	10451→10450	P-4	
10452		ピット		P-4	
10453		ピット		P-4	
10454		ピット		P-3	
10455		ピット		P-3	
10456		ピット		P-3	
10457		ピット		P-3	
10458		ピット		P-3	
10459		ピット		P-3	
10460		ピット		P-3	
10461		ピット		P-2	
10462		ピット		P-2	
10463		ピット		P-2	
10464		ピット		P-2	
10465		攪乱		P-1-Q-2	
10466		ピット		Q-2	
10467		ピット		P-2	
10468		ピット		P-2	
10469		ピット		P-2	
10470		ピット	10470→10471	P-2	
10471	S B10433	ピット	10470→10471	P-2	
10472		ピット	10472→10473	P-1	
10473		ピット	10472→10473	P-1	
10474		ピット		Q-1	
10475		ピット		Q-1	
10476		ピット		Q-2	
10477		ピット	10330→10477	Q-2	
10478		ピット		Q-2	
10479		ピット	10333→10479	Q-2	
10480		ピット		Q-3	
10481		ピット	10327→10481	Q-3	
10482		ピット		Q-3	
10483		ピット	10336→10483→10485	Q-3	
10484		ピット		Q-3	
10485	S B10433a	ピット	10483→10485	Q-3	
10486		ピット		Q-3	
10487		ピット	10488→10487	Q-3	
10488		ピット	10488→10487	Q-3	
10489		ピット		Q-3	
10490		ピット		P-3	
10491		ピット		P-3	
10492		ピット		P-3	
10493		ピット		P-3	
10494		ピット		Q-4	
10495		ピット		Q-4	
10496		ピット		Q-4	
10497		ピット		Q-4	
10498		ピット		Q-4	
10499		ピット		Q-4	
10500		ピット		Q-4	

Tab.15平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(11)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
10501		ピット		Q-4	
10502		ピット		Q-4	
10503	S B10433b	ピット		Q-3	
10504		ピット		P-4	
10505	S B10433i	ピット		P-Q-3	
10506		ピット		Q-4	
10507		ピット	10508→10507	P-3	
10508	S B10433c	ピット	10508→10507	P-3	
10509		ピット		Q-5	
10510		ピット		Q-5	
10511		ピット		Q-5	
10512		ピット		Q-4	
10513		ピット		Q-5	
10514		ピット		Q-5	
10515		ピット		Q-5	
10516		ピット		Q-5	
10517		ピット		Q-5	
10518		ピット		Q-5	
10519		ピット	10520→10519	Q-5	
10520		ピット	10520→10519	Q-5	
10521		ピット		Q-5	
10522		ピット		Q-6	
10523		ピット		Q-6	
10524		ピット		Q-6	
10525		ピット	10525→10526	Q-6	
10526		ピット	10525→10526	Q-6	
10527		ピット		Q-6	
10528		ピット		Q-6	
10529		ピット		Q-6	
10530		ピット		Q-5	
10531		ピット		Q-6	
10532		ピット		Q-6	
10533		ピット		Q-6	
10534		ピット		Q-6	
10535		ピット		P-6	
10536		ピット		P-6	
10537		ピット		P-5	
10538		ピット		P-5	
10539		ピット		P-5	
10540		ピット		P-5	
10541		ピット		P-4	
10542		ピット		P-4	
10543		ピット		P-5	
10544		ピット		P-4	
10545		ピット	10545→10546→10547	P-4	
10546	S B10433d	ピット	10545→10546→10547	P-4	
10547		ピット	10545→10546→10547	P-4	
10548		ピット		P-5	
10549		ピット		P-5	
10550		ピット		P-5	

Tab.16平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(12)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
10551		ビット		P-5	
10552		ビット		P-4	
10553		ビット		P-4	
10554		ビット	10555→10554	O-4	
10555	S B10433a	ビット	10555→10554	O-4	
10556		ビット		O-5	
10557		ビット		P-5	
10558		ビット		P-5	
10559		ビット		P-5	
10560		ビット		P-5	
10561		ビット		P-5	
10562		ビット		P-5	
10563		ビット		P-5	
10564		ビット		P-6	
10565	S P10565	ビット		P-6	
10566		ビット		P-6	
10567		ビット		P-6	
10568		ビット		O-5	
10569		ビット		O-5	
10570		ビット		O-5	
10571		ビット		O-5	
10572		ビット		N-O-5	
10573		ビット		O-6	
10574		ビット		O-5	
10575		ビット		O-6	
10576		ビット		O-6	
10577		ビット		N-6	
10578		ビット		N-6	
10579		ビット		N-7	
10580		ビット		O-7	
10581	S K10581	土坑	古墳時代	O-8	
10582		ビット		N-O-9	
10583		ビット		O-9	
10584		ビット	10585→10584	N-9	
10585		ビット	10585→10584	N-9	
10586		ビット		O-10	
10587		ビット	10587→10588	N-O-10	
10588		ビット	10587→10588	N-10	
10589		ビット		N-10	
10590		ビット	10358→10590	O-10	
10591		ビット	10355→10591	N-9	
10592		溝		N-9	
10593		ビット		N-10	
10594		ビット	10371→10594	N-11	
10595		ビット		N-10	
10596		ビット		N-10	
10597		ビット	10597→10598	M-N-9-10	
10598		ビット	10597→10598	M-N-10	
10599		ビット		M-N-10	
10600		ビット		M-10	

Tab.17平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(13)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
10601		ビット		M-10	
10602		ビット		M-10-11	
10603		ビット		L-9	
10604		ビット		L-8	
10605		ビット		L-8	
10606		ビット		L-8	
10607		ビット		L-8	
10608		ビット		L-8	
10609		ビット		L-9	
10610		ビット		L-9-10	
10611	SX10611	整地土		L-M-10	
10612		ビット		M-12	
10613		ビット		M-12	
10614		土坑	10614→10649	H-18	
10615	SX10615	整地土		H-8-9	
10616		ビット		H-11	
10617	SX10617	整地土		H-19-10	
10618		土坑		H-11	
10619		竪溝小溝		H-10-12	
10620		穴蓋			
10621		竪溝小溝		I-10-12	
10622		穴蓋			
10623		竪溝小溝		I-10-12	
10624	SD10624	竪溝小溝	10655→10624	I-8-12	
10625		竪溝小溝		I-8	
10626		竪溝小溝	10654→10626	I-8	
10627		竪溝小溝		I-8	
10628		ビット		J-11	
10629		竪溝小溝		J-10-11	
10630	SX10630	整地土		J-K-11-12	
10631		竪溝小溝		J-11-12	
10632		残乱		J-K-12	
10633		ビット		K-12	
10634	SX10634	整地土		K-L-11-12	
10635		竪溝小溝		K-8-10	
10636		ビット		H-11	
10637		ビット		H-12	
10638		ビット		H-11-12	
10639		ビット		H-12	
10640		ビット		H-12	
10641		ビット		H-11	
10642		竪溝小溝		H-11	
10643		竪溝小溝	10643→10644	H-10	
10644		竪溝小溝	10643→10644	H-10	
10645		ビット		H-9	
10646		ビット		H-8	
10647		ビット		H-8	
10648		ビット		H-8	
10649		ビット	10614→10649	H-8	
10650		ビット		H-8	

Tab.18平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(14)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
10651		ビット		I-9	
10652		ビット	10653→10652	I-8	
10653		ビット	10653→10652	I-8	
10654		ビット	10654→10626	I-8	
10655		土坑	10655→10624	I-9	
10656		ビット		I-9	
10657		ビット	10657→10658	I-9	
10658		ビット	10657→10658	I-9	
10659		竪穴小溝		I-10-11	
10660		ビット		I-11	
10661		竪穴土?		H-I-11-12	
10662		竪穴土?		J-11-12	
10663		土坑	10663→10664	I-12	
10664		ビット	10663→10664	I-12	
10665		竪穴小溝	10624C変更	I-12	
10666		竪穴小溝	10666→10624	I-9	
10667		竪穴小溝	10624C変更	I-8	
10668		ビット	10668→10669	I-8	
10669		竪穴小溝		I-J-7-8	
10670		ビット		J-7-8	
10671		ビット		J-8	
10672		ビット		J-8	
10673		ビット		J-9	
10674		ビット		J-10	
10675		ビット		J-10	
10776		ビット		J-K-9	
10677		ビット		K-9	
10678	SX10678	竪穴土	10820→10678→10679	K-9-10	
10679		ビット	10820→10678→10679	K-9	
10680		竪穴小溝		K-9-10	
10681	SX10681	竪穴土		J-K-10	
10682		土坑		J-K-11	
10683		ビット		K-12	
10684		ビット		K-12	
10685		ビット		K-11	
10686		竪穴小溝		K-9-10	
10687		ビット		M-6	
10688		ビット		L-6	
10689		ビット		L-7	
10690		ビット		L-7	
10691	欠番				
10692		竪穴		L-M-6	
10693		土坑		L-M-7	
10694		竪穴小溝		I-3-6	
10695		竪穴小溝		J-3-6	
10696		竪穴小溝		J-4-6	
10697		竪穴小溝		J-4-6	
10698		ビット		K-5	
10699		竪穴		J-5	
10700		ビット		K-5	

Tab.19平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(15)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
10701		雑乱		H-13-14	
10702		雑乱		J-14	
10703		雑乱		H-14	
10704		雑乱		H-13-14	
10705		雑乱		H-13-15	
10706		雑乱		J-13-14	
10707		雑乱		J-14	
10708		ピット		K-15	
10709		雑乱		J-15	
10710		雑乱		H-J-15	
10711	S D10711	溝	10778-10779-10801-10803-10806-10711	H-K-15-16	
10712		ピット		H-14	
10713		ピット		H-13	
10714		ピット		H-14	
10715		ピット		H-14	
10716		雑乱		H-14	
10717		雑乱		H-14	
10718		雑乱		H-14	
10719		ピット		H-14	
10720		ピット		H-14	
10721		ピット		H-14	
10722		雑乱		H-14	
10723		雑乱		H-14	
10724		ピット		H-14	
10725		雑乱		H-14	
10726		ピット		J-14	
10727		雑乱		J-14	
10728		ピット		J-14	
10729		ピット		J-14	
10730		ピット		J-14	
10731		ピット		J-14	
10732		ピット		J-14	
10733		雑乱		J-14	
10734		雑乱		J-14	
10735		雑乱		J-14	
10736		ピット		J-14	
10737		ピット		J-14	
10738		ピット		J-14	
10739		ピット		J-14	
10740		ピット		J-14	
10741		ピット		J-14	
10742		ピット	10743-10742	J-14	
10743		ピット	10743-10742	J-14	
10744		雑乱		J-14	
10745		雑乱		J-14	
10746		ピット		J-14	
10747		ピット	10747-10748	H-15	
10748		ピット	10747-10748	H-15	
10749		ピット		H-16	
10750		ピット		J-15-16	

Tab.20平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(16)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
10751		ビット		J-15-16	
10752		ビット		M-14	
10753	欠番				
10754	欠番				
10755	SK10755	土坑		J-K-15	
10756		土坑		J-16	
10757		土坑		J-14	
10758		雑乱		L-14	
10759		ビット		J-16	
10760		ビット		J-16	
10761		ビット		J-16	
10762		ビット		J-14	
10763	欠番				
10764	欠番				
10765		ビット		J-14	
10766		ビット		J-14-15	
10767		ビット		J-14	
10768		ビット		J-14	
10769		ビット		J-14	
10770		ビット		K-14	
10771		ビット		K-14	
10772		ビット		K-14	
10773		ビット		K-14	
10774		ビット		K-14	
10775		ビット		K-14	
10776		ビット		L-14	
10777		ビット		L-14	
10778		ビット	10778→10711	J-16	
10779		ビット	10779→10711	J-16	
10780		ビット		K-16	
10781		ビット		K-15	
10782		ビット		K-15	
10783		ビット	10783→10711	J-16	
10784		ビット		H-14	
10785		雑乱		L-15-16	
10786		雑乱		M-15	
10787		雑乱		N-O-16	
10788		ビット	10821→10788	K-14	
10789		ビット		L-14	
10790		ビット		K-14	
10791		ビット	10821→10791	K-16	
10792		ビット	10821→10792	K-14	
10793		ビット		J-14	
10794	欠番				
10795	欠番				
10796		ビット		K-15	
10797		ビット		K-15	
10798		ビット		K-16	
10799		ビット	10799→10711	J-16	
10800		雑乱		K-16	

Tab.21平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(17)

S-番号	遺構番号	種類	所在	地区	その他
10801		ビット	10801→10711	J-16	
10802		雑乱		K-16	
10803		ビット	10803→10711	J-16	
10804		ビット		K-16	
10805		ビット	10821→10805	L-16	
10806		ビット	10806→10711	J-16	
10807		土坑		L-16	
10808		ビット		L-16	
10809		ビット		L-16	
10810		ビット		J-16	
10811		穴罫			
10812	SX10812	落ち込み		M-O-16	
10813		ビット		J-14	
10814		ビット		N-15	
10815	SX10815	竪地土	10822-10825→10815	M-N-15-16	
10816		ビット	積孔	J-13	
10817		ビット	10821→10817	K-14	
10818		ビット	10821→10818-10819	K-14	
10819		ビット	10821→10819	K-14	
10820		穴罫			
10821	SD10821	溝	一帯北大路南側溝、 10821→10788:10791-10792-10805-10817-10818:11116-11117	K-L-14-16	
10822		土坑	10822→10815	M-15	
10823		ビット		N-15	
10824		ビット		N-16	
10825		竪地土?	10825→10815	M-N-15-16	
10826		ビット		J-14	
10827		雑乱		K-16	
10828		ビット		J-15	
10829		ビット		J-15	
10830		ビット	積孔	J-15	
10831		ビット		J-15	
10832		ビット		J-15	
10833		ビット	10834→10833	J-15	
10834		土坑	10834→10833-10835	J-15	
10835		ビット	10834→10835	J-15	
10836-10853		穴罫			
10852		ビット		E-4	
10853		ビット		D-1	
10854		ビット		E-5	
10855		ビット		E-4	
10856		ビット		E-4	
10857	SP10857	ビット		E-2	
10858	SK10858	土坑	10858→11041	D-4	
10859		ビット	10186→10859	E-1	
10860		ビット	10186→10860	F-1	
10861		ビット		F-2-3	
10862		ビット		F-2	
10863		ビット		F-2	
10864		ビット		F-2-3	
10865		ビット		F-2-3	

Tab.22平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(18)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
10866		雑乱		F-3	
10867	欠番				
10868	ビット			F-3	
10869	ビット			F-3	
10870	ビット			F-3	
10871	ビット			F-3	
10872	ビット			F-3	
10873	ビット			F-3	
10874	ビット			F-4	
10875	ビット			F-4	
10876	ビット			F-3-4	
10877	ビット			F-3	
10878	ビット			G-3-4	
10879	ビット			G-4	
10880	ビット	10880→10881		F-4	
10881	ビット	10880→10881		F-4	
10882	ビット			G-4	
10883	ビット	10883→10884		F-4	
10884	ビット	10883→10884		F-4	
10885	ビット			F-4	
10886	ビット	10886→10887		F-4	
10887	ビット	10886→10887		F-4	
10888	ビット	10197→10888		E-4	
10889	SP10889	ビット		F-5	
10890	欠番				
10891	ビット	10225→10891		F-5	
10892	ビット	10197→10892		E-6	
10893	ビット	10197→10893		E-6	
10894	ビット	10197→10894		E-6	
10895	ビット			F-6	
10896	ビット	10197→10896		E-6	
10897	ビット	10197→10897		E-6	
10898	ビット			F-7	
10899	SP10899	ビット		F-7	
10900		敷石小溝	多くのビットを含む	A-F-2	
10901	SX10901	瓦葺り		J-K-1-4	
10902	SX10902	瓦葺り		M-N-4-9	
10903		瓦葺り		A-4-5	
10904		瓦葺り		C-7	
10905		瓦葺り		F-1	
10906		瓦葺り		F-7	
10907		瓦葺り		N-1	
10908		瓦葺り		O-2-3	
10909		瓦葺り		P-1-2	
10910		瓦葺り		P-7	
10911		瓦葺り		Q-1-2	
10912	SX10912	瓦葺り		G-14-7	
10913- 10920	欠番				
10921		ビット		D-7	
10922- 11000	欠番				

Tab.23平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(19)

S-番号	遺構番号	種類	所在	地区	その他
11001		土坑		F-7	
11002		ピット		F-7	
11003		ピット		E-7	
11004		ピット		E-7	
11005		ピット		E-7	
11006		ピット		E-6	
11007		ピット		E-7	
11008		ピット		F-6	
11009		ピット		F-6	
11010	欠番				
11011	SP11011	ピット	11011-10296	E-3	
11012		ピット		E-3	
11013		ピット	11013-10900	E-F-2	
11014		ピット		F-2	
11015		ピット		D-1	
11016	欠番				
11017		ピット		C-5	
11018		ピット		C-5	
11019		ピット		B-6	
11020		ピット	11020-10268	C-6	
11021		ピット		C-6	
11022		ピット		C-6	
11023		土坑	11023-10053	C-D-7	
11024	裏庭小溝		11024-10284	E-6	
11025		ピット	11025-10232	E-F-4	
11026		ピット	11026-10232	F-4	
11027		ピット		F-5	
11028		ピット		F-6	
11029		ピット		F-6	
11030		ピット		F-6	
11031		ピット		F-7	
11032		ピット		F-6	
11033		ピット		F-G-6	
11034		ピット		F-6	
11035		ピット		F-7	
11036		土坑	11037-11036	F-7	
11037		ピット	11037-11036	F-7	
11038		土坑	11038-11039	H-2	
11039		土坑	11038-11039-11064	D-7	
11040	欠番				
11041		ピット	10858-11041	D-4	
11042		土坑	11042-11043	H-3	
11043		土坑	11042-11043	H-3	
11044		ピット		G-H-3	
11045		ピット		G-3	
11046		ピット	11046-10213	G-3	
11047		ピット		G-3	
11048		ピット		H-4	
11049		ピット		H-4	
11050		ピット		H-5	

Tab.24平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(20)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
11051		ピット		H-4	
11052		ピット		G-4	
11053		ピット		G-2	
11054		ピット		G-2	
11055		ピット		H-5	
11056		ピット		H-6	
11057		ピット		G-6	
11058		ピット		H-6	
11059		土坑		H-2	
11060		ピット		F-G-3-4	
11061		土坑	11061→10230	G-3	
11062		ピット	11062→10188	F-G-3	
11063		ピット	11062-11066→10188	D-7	
11064		ピット	11039→11064	D-7	
11065	欠番				
11066		ピット	11066→10188	C-3	
11067		ピット		D-2	
11068		ピット	10900→11068	D-2	
11069		ピット		E-3	
11070		ピット	11070→10230	G-5	
11071		ピット	11071→10010	D-4	
11072	欠番				
11073		ピット		H-4	
11074		ピット		H-4-5	
11075		ピット		E-4	
11076		ピット		D-6	
11077		ピット		B-2	
11078		ピット		E-6	
11079		ピット		E-6	
11080		土坑		A-1	
11081	SK11081	土坑	奈良時代、井戸掘取り穴	A-B-3-4	
11082	SD11082	溝	11082→10126-11096	A-3-E-2-3	
11083		ピット		C-7	
11084		ピット		C-7	
11085		ピット		C-7	
11086		ピット		D-6	
11087		土坑		D-7	
11088	SA11088	横列	a-FD柱穴で構成。調査区外東側に続くかは不明。11089→11088	B-C-1-5	
11089	SA11089	横列	a-FD柱穴で構成。調査区外北側に続くかは不明。11089→11088	A-D-4-5	
11090		ピット	11091→11090	C-6	
11091		ピット	11091→11090	C-6	
11092		ピット		D-2	
11093		ピット		D-2	
11094	SK11094	土坑	11103→11094	F-3	
11095		ピット		D-2	
11096	SK11096	土坑	11082→11096	E-3-4	
11097		土坑		E-2	
11098		ピット	11099→11098	G-2	
11099		ピット	11102→11099	G-2	
11100		ピット	11101→11100	G-3	

Tab.25平城京右京北辺遺跡1区検出遺構一覧(21)

S-番号	遺構番号	種類	所見	地区	その他
11101		ピット	11101→11100	G-3	
11102	SD10230	溝	10230に変更, 11102→11099	G-1-3	
11103	SK11103	落ち込み	11103→10197-11094	F-2-4	
11104	SK11104	土坑		F-2	
11105		土坑		F-3	
11106		土坑	11106→11107	J-4	
11107		土坑	11106→11107	J-4	
11108	SK11108	土坑	11109→11108	I-2	
11109	SK11109	土坑	11109→11108	I-2	
11110		ピット		F-1	
11111		ピット		F-1	
11112		ピット		F-1	
11113		ピット		F-1	
11114		ピット		I-2-4	
11115		ピット		H-2-3	
11116		土坑	10821→11116	J-K-1-3	
11117		土坑	10821→11117	J-K-3-4	
11118		土坑		L-M-3	
11119		土坑	11119→10197	F-3-4	

Tab.26平城京右京北辺遺跡2区検出遺構一覧表(1)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
20001		竪穴小溝		AC-AF-21	
20002		竪穴小溝		AC-AD-21	
20003		ピット	埴山ブロックを埋土とし、瓦出土。竪穴小溝に切られる	AD-21	
20004		ピット	竪穴小溝を切る	AF-21	
20005		竪穴小溝	20006→20005	AF-AG-21	
20006		土坑	深さ2cm、整地土の一部か?	AG-21	
20007		竪穴小溝	20010→20007	AD-22	
20008		竪穴小溝	暗褐色砂泥の埋土で、深さ5cm	AE-22-23	
20009		竪穴小溝	暗褐色砂泥の埋土で、深さ5cm	AF-22-23	
20010	S D20010	溝	埋砂面の張り直し、西二坊大路西側溝	AC-AH-22-25	
20011		散乱	瓦部に土器がまとまって出土	AG-24-25	
20012	S P20012	ピット	整地土の残ったものか?土器集中 20010→20012	AG-22	
20013	S P20013	ピット	整地土の残ったものか?土器集中 20010→20013	AG-23	
20014		ピット		AF-25	
20015	S K20015	土坑	整地土の一部?埴山ブロック土を主体とし、深さ8cm	AG-AH-25-26	
20016	S E20016	井戸	木掘出土 20339→20016	AF-AG-26	
20017	S K20017	土坑	20018→20017	AF-26-27	
20018	S K20018	土坑	20018→20017	AF-27	
20019		ピット		AG-25	
20020	S K20020	土坑	整地土の一部か?深さ10cm 20020→20017・20018・20021・20023・20025	AE-AF-26	
20021	S K20021	土坑	整地土の一部か? 20020・20025→20021	AD-AE-26	
20022		土坑	整地土の一部か?	AE-26	
20023		ピット	整地土の一部か? 20020→20023	AE-26	
20024	S K20024	土坑	整地土の一部か? 20025→20024→20010	AC-25-26	
20025	S K20025	土坑	整地土の一部か? 20020→20025→20021・20024	AC-AE-26-27	
20026		ピット	20025→20026	AD-27	
20027		ピット		AD-27	
20028		土坑		AD-27	
20029		ピット		AE-27	
20030	S B20030	竪穴柱建物	a-eの柱穴で構成	AC-AE-27-28	
20031		ピット	散乱	AD-28	
20032		溝	灰・焼土を少量含む	AD-28	
20033	S B20033	竪穴柱建物	20033→20032	AD-28	
20034		ピット		AE-27	
20035		ピット	20010→20035	AD-24	
20036		ピット	20010→20036	AD-23	
20037		土坑		AE-27	
20038		ピット	20010→20038	AD-23	
20039	S K20039	土坑	上層は20010に切られるが下層は一体。20016とも一体か?	AF-24-26	
20040	S A20040	横列	a-hの柱穴で構成。20045→20040→20071	AD-28-31	
20041	S D20041	溝	埴内遺跡側溝	AF-27-28	
20042	S D20042	溝	埴内遺跡側溝	AF-28-29	
20043	S D20043	溝	埴内遺跡側溝 20044→20043→20015→20072	AG-25-30	
20044		土坑	深さ5cm程度。整地層か? 20044→20043	AH-25	
20045	S B20045	竪穴柱建物	a-hの柱穴で構成 20045→20040・20060・20074	AC-AF-29-31	
20046		ピット		AC-29	
20047		ピット		AD-29	
20048		ピット		AD-29	
20049		ピット		AD-29	
20050		ピット		AC-29	

Tab.27平城京右京北辺遺跡2区検出遺構一覧表(2)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
20051		ビット	20052→20051	AC-30	
20052		ビット	20052→20051	AC-30	
20053		ビット		AC-30	
20054		ビット		AC-30	
20055		ビット		AD-30	
20056		ビット		AD-30	
20057		ビット		AE-30	
20058		ビット		AD-31	
20059		ビット		AD-31	
20060		ビット	20045→20060	AC-31	
20061		ビット		AD-29	
20062		溝		AG-AH-33-34	
20063		ビット		AE-28	
20064		ビット	200451→20064	AE-30	
20065	S B20065	竪立柱建物	a-hの柱穴で構成。整地土上にあり	AF-AH-31-32	
20066	5A20066	欄干	木柱の痕跡あり。墓地か？	AC-AE-26	
20067		ビット	20067→20014・20039	AF-25	
20068		ビット		AF-31	
20069		ビット		AE-31	
20070		ビット		AE-31	
20071		溝	20040→20071	AD-30-31	
20072	5 P20072	ビット	20043→20072	AG-29	
20073		ビット		AF-31	
20074		土坑	20045→20074	AE-AF-31	
20075	S B20075	竪立柱建物	a-hの柱穴で構成	AB-AE-32-33	
20076	S B20397b	柱穴		AD-33	
20077	5 K20077	土坑	20142→20077	AA-AE-32-33	
20078	5 P20078	ビット		AE-30	
20079	5 D20079	溝	整地土の一部か？	AB-AC-33	
20080		不明遺構	砂の層？	AG-AH-21-22	
20081		ビット		AF-25	
20082	5 P20082	ビット	土葬墓坑を正位置にする	AA-33	
20083	S B20083	竪立柱建物	a-hの柱穴で構成	X-Y-32-33	
20084		ビット		AC-29	
20085		ビット		AC-32	
20086		ビット		T-33	
20087	S B20210d	柱穴	埋土は20084と同様の褐色細砂	T-33	
20088		ビット	埋土は20086と同様の褐色細砂	R-32	
20089		ビット		R-32	
20090	S B20210a	柱穴		R-32	
20091		雲根小溝	20099・20120・20158・20160・20225→20091	Q-32-38	
20092		ビット		R-33	
20093		ビット		R-33	
20094	5 D20094	溝	20090→20094	R-33-34	
20095	5 B20210c	柱穴	20211→20095	R-33	
20096	S B20210e	柱穴		T-33	
20097	5 P20097	ビット		T-33	
20098		ビット		T-34	
20099	5 D20099	溝	瓦葺出土 20095・20100→20099→20101・20211	Q-R-32-34	
20100	5 D20100	溝	瓦葺出土 20169→20100→20099	Q-Q-34	

Tab.28平城京右京北辺遺跡2区検出遺構一覧表(3)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
20101		ビット	20099→20101	Q-32	
20102	5A20396a	柱穴		Q-32	
20103		竪溝小溝		Q-32・33	
20104	5P20104	ビット		Q-33	
20105	5B20394a	柱穴		R-33	
20106		ビット		R-33	
20107		横風		Q-33	
20108	5B20190b	柱穴		P-33	
20109		ビット		Q-33	
20110	5P20110	ビット	埋土上層より出土	O-33	
20111		横風		P-Q-32	
20112	5B20190a	柱穴		P-32	
20113	5B20190e	柱穴		P-32	
20114	5B20190c	柱穴		P-33	
20115		ビット	20115→20116	P-33	
20116		ビット		P-33	
20117	5B20240b	柱穴	切り合い痕跡	P-33	
20118	5B20190d	柱穴		Q-33	
20119	5P20380	土坑	20380と同一。5P20380掘き取りで報告	Q-32・33	
20120	5K20120	土坑	20120→20160・20300	Q-36・37	
20121	5D20121	溝	20162・20163→20121(20117を切る)	P-32・33	
20122	5P20122	ビット		O-32	
20123	5B20240c	柱穴		O-33	
20124		溝	20100と同一と考えられる	O-33	
20125		ビット	20126→20125	P-33	
20126		ビット	20126→20125	P-33・34	
20127	5B20394f	柱穴		O-P-34	
20128	5B20394h	柱穴		P-33・34	
20129		ビット	20129→20200	P-34	
20130	5E20130	井戸	上段石積、下段瓦積、底層曲物 20198→20130	P-37・38	
20131	5P20131	ビット	20131→20200	P-34	
20132		ビット	20200→20132	P-34	
20133	5B20394m	柱穴		P-34	
20134	5K20134	溝	敷土で埋められる自然地形 20134→20065・20068・20069・20071	AD-AH-31	
20135	5B20397g	柱穴		AD-32	
20136	5P20136	土坑	20036→5B20045b 竪溝小溝に切られる	AD-28・29	
20137	5P20137	土坑	竪溝小溝に切られる	S-D-29	
20138		ビット		S-D-30	
20139		柱穴?	5B20045h→20139	AD-27・28	
20140	5K20140	土坑	人獣犬の石多量に配置 20178・20179→20182→20181	O-P-37・38	
20141		ビット		AA-33	
20142		ビット	20142→20077	AB-33	
20143		ビット		AB-32	
20144		ビット		AC-32・33	
20145	5B20397h	柱穴		AD-32	
20146		ビット	20148→20146	AD-33	
20147	5K20147	土坑	吉土土跡跡が多量に出土 20147→20148→5B20075h	AD-AE-33	
20148	5D20148	溝	粗砂で埋没 20147→20148→5B20075	AC-AE-31・33	
20149		ビット		T-33	
20150	5P20150	ビット	径5cm程度の溝を跡める	R-33	

Tab.29平城京右京北辺遺跡2区検出遺構一覧表(4)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
20151		ビット		R-32	
20152		ビット		R-33	
20153		ビット		R-33	
20154		ビット	20154→20016	Q-33	
20155	S B20210b	柱穴		R-33	
20156		溝	多数のビットを切る	O-Q-34	
20157		ビット		Q-32	
20158		ビット	20158→20091	Q-32	
20159		ビット		P-32	
20160	SK20160	土坑	20120・20291・20292・20293・20294・20298→20160→ 20257・20258	R-36・38	
20161		ビット		P-32・33	
20162		ビット	20162→20121	P-33	
20163		ビット	20163→20121	P-32	
20164		ビット		P-Q-33	
20165		ビット	20200→20165	Q-34	
20166		ビット		Q-34	
20167	S B20394c	柱穴		Q-34	
20168		ビット		Q-34	
20169	S B20395f	柱穴		Q-34・35	
20170		ビット		P-Q-35	
20171	SP20171	ビット		Q-35	
20172		ビット		Q-34	
20173		ビット	20173→20174	P-Q-34	
20174	S B20394a	柱穴		P-Q-34	
20175	SP20175	ビット	20184→20175→20200	P-34	
20176	S B20394q	柱穴	20176→20178	P-34	
20177		ビット		P-34	
20178	SP20178	ビット	20179→20178→20200	O-34	
20179		ビット	20179→20178→20200	O-34	
20180	SP20180	ビット		O-34	
20181		ビット		O-34	
20182		ビット	20182→20181→20178・20179→20182	O-34	
20183		ビット		O-34	
20184		ビット	20184→20175	P-34	
20185	S B20394d	柱穴		O-34	
20186		ビット	20186→20140	P-37	
20187		ビット	20187→20140	P-37	
20188		ビット	20188→20140	P-37	
20189		ビット	20189→20140	P-37	
20190	S B20190	竪立柱建物	20108・20112・20113・20114・20118を表E1a・eの柱穴で構成	O・P-32・33	
20191		ビット		P-33	
20192	SP20192	ビット		O-34	
20193		ビット		P-35	
20194		ビット	20195→20194	R-33	
20195	SP20195	ビット	20195→20194	R-33	
20196	SK20196	不明遺構	20227→20196→20248	Q-T-35・36	
20197	SK20197	土坑	20197→20198	P-Q-37・38	
20198		土坑	20197→20198	P-Q-37・38	
20199		溝	20199→20200	P-34	
20200	S D20200	溝	20131→20200 (20156と同一か)	O-Q-34	

Tab.30平城京右京北辺遺跡2区検出遺構一覧表(5)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
20201		ビット		P-34	
20202		ビット	20203→20202	P-34	
20203		ビット		P-34	
20204		ビット		Q-34	
20205		ビット	20206→20205	Q-34	
20206	SA20396c	柱穴	20206→20205	Q-34	
20207		土坑		R-T-37-38	
20208	SB20394b	柱穴	20280→20208	Q-34	
20209		ビット		R-33-34	
20210	S B20210	竪立柱建物	20087・20090・20095・20096・20115を含むa-eの柱穴で構成	T-U-32-33	
20211		ビット		R-33	
20212		ビット		T-34	
20213		ビット		T-34	
20214	S B20394r	柱穴	20227→20214	P-34	
20215		土坑	20215→20246	P-36-37	
20216	S B20394k	柱穴		O-34	
20217	穴蓋				
20218		ビット		T-34	
20219	SB20395a	柱穴		T-35	
20220	S D20220	溝		P-32	
20221		ビット		T-35	
20222		ビット		T-35	
20223	S B20395k	柱穴		R-35	
20224		ビット		R-35	
20225	S B20395j	柱穴		Q-34	
20226		ビット		P-35	
20227		溝	20227→20196	O-Q-35	
20228	SB20394p	柱穴		Q-35	
20229	S B20394d	柱穴		Q-35	
20230	S B20230	竪立柱建物	20337・20349・20350・20360・20361・20362・20363・20365・20366・20367・20368・20369・20371・20376・20377・20380を含むa-pの柱穴で構成	P-R-32-37	
20231		ビット		Q-35	
20232	SB20395h	柱穴	20348と同一	Q-35	
20233	SA20396e	柱穴		Q-35	
20234	SP20234	ビット		Q-36	
20235		ビット		Q-36	
20236	SP20236	ビット	土御簀原埋納	P-35	
20237		ビット		P-36	
20238		土坑		P-36	
20239		ビット		P-35	
20240	S B20240	竪立柱建物	a-cの柱穴で構成。20334・20378	O-P-32	
20241		ビット	20241→20242	P-36	
20242		ビット		P-36	
20243		ビット		P-36	
20244		ビット		P-36	
20245		ビット		O-36	
20246	SP20246	ビット	20215→20246	P-36	
20247		ビット		P-36-37	
20248	S B20394	柱穴		O-36	
20249		ビット	20245→20249	P-36	
20250	S D20250	溝	全ての遺構に付られる	O-34・35- U-34-36	

Tab.31平城京右京北辺遺跡2区検出遺構一覧表(6)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
20251		ビット		O・P-37	
20252	S B20394h	柱穴		P-36・37	
20253		ビット		P-36	
20254		ビット		P-36	
20255		ビット		P-36	
20256		ビット		P-36	
20257	S B20394g	柱穴		P-36・37	
20258		ビット		P・Q-36	
20259		ビット		F・Q-37	
20260		ビット	20021→20401	AD-26	
20261		ビット		Q-36	
20262	S B20395g	柱穴		Q-36	
20263		ビット		F・Q-37	
20264		ビット		F・Q-37	
20265	SP20265	ビット	20265→20266	P-37	
20266		ビット		P-37	
20267		ビット		P-37	
20268		ビット		P-37	
20269		ビット	20269→20271	O・P-38	
20270	失書				
20271		ビット	20269→20271	O・P-38	
20272		ビット	20273→20272	P-38	
20273		土坑	20273→20272	P-38	
20274		ビット		P-38	
20275		ビット		P-38	
20276		ビット		P-38	
20277		ビット	20277→20279	Q-38	
20278		ビット	20197→20278	Q-38	
20279		土坑	20277→20279	Q-38	
20280		ビット	20280→20208	Q-34	
20281		ビット		Q-37	
20282	S B20394j	柱穴		O-36	
20283		ビット		O-37	
20284		ビット		Q-37	
20285		ビット		Q-37	
20286		ビット		Q-36	
20287	S B20394e	柱穴		Q-36	
20288		ビット		Q-36	
20289		ビット		Q-36	
20290		ビット		O-36	
20291		ビット	20291→20160	R-37	
20292	S B20395e	柱穴	20292→20160	R-37	
20293		ビット	20293→20160	R-37	
20294		ビット	20294→20160	R-37	
20295		ビット	20160→20295	R-37・38	
20296		ビット	20160→20296	R-38	
20297		ビット		R-36	
20298		溝	20248→20160	R-35・36	
20299	S B20395d	柱穴	20207→20299	T-37	
20300		ビット	20120→20300	Q-37	

Tab.32平城京右京北辺遺跡2区検出遺構一覧表(7)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
20301	S B20395f	柱穴		Q-37	
20302	S B20394d	柱穴		O-35	
20303		ビット		O-35	
20304		ビット	20305→20304	Q-38	
20305		ビット	20305→20304	Q-38	
20306		ビット	20196→20306	Q-35	
20307	S P20307	ビット		R-35	
20308		ビット		R-35	
20309		ビット		T-35	
20310		ビット		P-38	
20311		ビット		T-35	
20312		ビット		T-34	
20313		ビット		T-33・34	
20314		竪堀小溝		T-37・38	
20315	S B20395c	柱穴		T-36	
20316		竪堀小溝		U-37・38	
20317		ビット		R-36	
20318		竪堀小溝		V-37・38	
20319		ビット		V-33	
20320		ビット		P-38	
20321		ビット		V-33	
20322		ビット		V-32・33	
20323		ビット		Q-34	
20324	S X20324	竪堀土か?		T-V-37・38	
20325		土坑	20200→20016→20325	Q-34	
20326		ビット		Q-34	
20327		ビット		R・T-32	
20328		ビット		R-33	
20329		ビット	20345→20329	Q-32	
20330	S P20330	ビット		Q-32	
20331		ビット		Q-33	
20332		ビット		P・Q-33	
20333		ビット		P-33	
20334	S B20240a	柱穴		P-32・33	
20335	欠番				
20336		ビット		P-33・34	
20337	S B20230n	柱穴		P-34	
20338		ビット		Q-33・34	
20339		ビット		P-32	
20340	S K20340	土坑	20340→20363・20372・20373	P・Q-37	
20341		ビット		Q-33	
20342		ビット		Q・R-32・33	
20343		ビット		R-32	
20344		ビット		R-32	
20345		ビット	20345→20329	Q-32	
20346		ビット	20377→20346	P-32	
20347		ビット	20347→20378	P-33	
20348	S E20348	井戸		P-33	
20349	S B20230e	柱穴		Q-36	
20350	S B20230f	柱穴		Q・R-36・37	

Tab.33平城京右京北辺遺跡2区検出遺構一覧表(8)

S-番号	遺構番号	種別	所見	地区	その他
20351		ビット		T-37・38	
20352		ビット		Q-32	
20353		ビット		O-35	
20354		ビット		O-35	
20355		ビット		O-36	
20356		ビット		O-37	
20357		ビット	20160・20357	R-36	
20358		ビット		Q-37	
20359		ビット	20359・20196	T-35・36	
20360	S B20230i	柱穴		P-35	
20361	S B20230k	柱穴		P-36	
20362	S B20230j	柱穴		P-36・37	
20363	S B20230i	柱穴		P-37	
20364	S E20364	井戸	20381・20364	P-34	
20365	S B20230d	柱穴		Q-35	
20366	S B20230c	柱穴		Q・R-35	
20367	S B20230b	柱穴		Q-34	
20368	S B20230h	柱穴		P-38	
20369	S B20230m	柱穴		P-35	
20370		ビット		P-33	
20371	S B20230a	柱穴		Q-32・33	
20372	ビット		20340・20372	P・Q-32	
20373	ビット		20340・20373	Q-37	
20374		土坑		R-37	
20375		ビット		T-37	
20376	S B20230p	柱穴		Q-32・33	
20377	S B20230o	柱穴	20381・20377	P-32	
20378	S B20240b	柱穴	20347・20378	P-33	
20379		ビット		R-36	
20380	S P20380	ビット		O-32・33	
20381	S K20381	土坑	20381・20337・20364・20377	P-34	
20382		ビット		W-38	
20383		ビット		V-38	
20384		ビット		R・T-33	
20385	S B20230g	柱穴		Q・R-38	
20386		ビット		W-38	
20387		ビット		W-38	
20388		ビット		V-38	
20389		ビット		O-34	
20390		ビット	S B20045の一部分?	AE-30	
20391		ビット		AB-32	
20392	S D20392	溝	西二坊大溝南側溝	AH-18	
20393	S D20393	溝	榑田トレンチ2 一条北大路南側溝		
20394	S B20394	竪立柱建物	20105・20127・20128・20133・20167・20174・20175・20185・20208・20214・20216・20218・20219・20248・20251・20257・20262・20287・20302東側溝a + c5柱穴で構成	O・R-34・36	
20395	S B20395	竪立柱建物	20169・20219・20223・20225・20232・20262・20292・20299・20301・20315東側溝a - hの柱穴で構成	T-U-33・36	
20396	S A20396	横列	20192・20199・20206・20233東側溝a - fの柱穴で構成	R-32・36	
20397	S B20397	竪立柱建物	20076・20135・20145を貫むa - hの柱穴で構成	AC・AD-32・33	
20398	S F20398	道路	西二坊大溝	AC・AH-19・22	
20399	S F20399	道路	坪内遺溝	AG-25・31	
20400		溝		V・W-37・38	

Tab.34 平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(1)

1区

S-10001 粟飯小遺

土師器	磁片
黒色土器	A類焼

S-10002 粟飯小遺

須恵器	壺
土師器	皿、磁片
瓦類	板
瓦類	平瓦、丸瓦
その他	焼土塊

S-10003 粟飯小遺

須恵器	壺、磁片
土師器	皿、磁片
黒色土器	A類焼
瓦類	丸瓦、磁片

S-10004 粟飯小遺

須恵器	磁片
土師器	壺、磁片
灰釉陶器	板
黒色土器	A類焼
瓦類	磁片

S-10005 粟飯小遺

須恵器	杯蓋、杯蓋(古墳時代)、磁片
土師器	皿、磁片
黒色土器	A類焼
國産陶器	信濃鉢(近世)

S-10006 粟飯小遺

須恵器	磁片
土師器	皿
瓦類	磁片

S-10007 粟飯小遺

須恵器	壺、磁片
土師器	皿、磁片
黒色土器	A類焼
瓦類	磁片

S-10008 粟飯小遺

須恵器	壺、磁片
土師器	釜、皿、磁片
黒色土器	A類焼
瓦類	板、皿
瓦類	平瓦、丸瓦

S E 10009 鏡方

須恵器	壺
土師器	釜、皿
灰釉陶器	板
黒色土器	A類焼
瓦類	平瓦、丸瓦

S E 10000 磨夷色砂

須恵器	壺、釜、杯蓋、杯(古墳時代)、杯蓋(古墳時代)
土師器	釜、壺、杯、皿
緑釉陶器	板
灰釉陶器	板
黒色土器	A類焼、B類焼
石製品	玉糸製器(緑色凝灰岩)
瓦類	平瓦、丸瓦
金屬製品	鉄釘

S E 10009 磨夷色粘質砂

須恵器	壺、釜、杯
土師器	壺、皿
灰釉陶器	壺
黒色土器	A類焼
瓦類	平瓦、丸瓦
土製品	土瓦
木製品	不明木製品
金屬製品	鉄釘

S-10010 粟飯小遺

須恵器	壺、皿、磁片
土師器	壺、皿、磁片
灰釉陶器	板
黒色土器	A類焼
國産陶器	板(近世)
瓦類	平瓦、軒丸瓦
遺棄製品	スタブ

S-10012

瓦類	平瓦
----	----

S-10013

土師器	磁片
-----	----

S-10014

土師器	壺、皿、磁片
灰釉陶器	板
瓦類	磁片

S-10015

土師器	磁片
-----	----

S-10016

土師器	皿、磁片
黒色土器	A類焼

S-10017

須恵器	磁片
-----	----

S-10019 柱穴

土師器	磁片
-----	----

S-10019 鏡方

土師器	磁片
黒色土器	A類

S F 10020 磨夷色粘砂

古式土師器	高杯
須恵器	壺、釜、壺蓋、杯、杯蓋、板(産地不明)、磁片
土師器	壺、釜、壺、皿、製塩土器、磁片
緑釉陶器	板
灰釉陶器	磁片
黒色土器	A類焼、壺、A類皿
瓦類	板
青磁	皿
石製品	滑石片
瓦類	平瓦、丸瓦
金屬製品	不明鉄製品

Tab.35平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(2)

S F 10020 黒灰色砂

漆器類	鏡・実徳系須恵器類・壺・杯・杯蓋
土師器	壺・甕・杯・瓶・皿
漆器類 (中世～)	実徳系須恵器類
灰釉陶器	瓶
黒色土器	A類甕
染付	瓶(近代・混入)
瓦類	平瓦・丸瓦
金属製品	鉄製戸刀子
その他	コンクリート片(混入)

S - 10021

漆器類	鏡・杯蓋
土師器	壺・皿
灰釉陶器	壺・瓶
黒色土器	A類甕
石製品	釧足冑
瓦類	平瓦・丸瓦・軒丸瓦

S P 10022

漆器類	杯・蓋(古墳時代)
土師器	瓶・皿
瓦類	平瓦・丸瓦・軒丸瓦

S - 10023

古式土師器	高杯
漆器類	杯
土師器	線片
黒色土器	A類
瓦類	平瓦

S - 10024

漆器類	線片
土師器	線片

S - 10025

漆器類	線片
土師器	線片
瓦類	線片

S - 10026

漆器類	線片
土師器	線片
瓦類	線片

S - 10027

土師器	皿
-----	---

S - 10028

古式土師器	壺・高杯
漆器類	線片
土師器	線片

S - 10029

瓦類	線片
----	----

S - 10030

土師器	線片
黒色土器	A類甕

S - 10031

土師器	線片
-----	----

S - 10032

漆器類	線片
土師器	鏡・線片

S - 10033

漆器類	線片
土師器	線片

S - 10034

土師器	線片
瓦類	線片

S P 10035

漆器類	鏡
土師器	皿・線片
黒色土器	B類甕(二重高台)

S - 10036

土師器	皿
瓦類	線片

S - 10037

漆器類	蓋・線片
土師器	線片

S - 10038

土師器	皿・製塩土器
金属製品	スラグ

S - 10039

土師器	線片
-----	----

S - 10040

漆器類	線片
土師器	杯・線片

S - 10041 紫銅小遺

古式土師器	高杯
漆器類	鏡・線片
土師器	線片
黒色土器	A類
瓦類	平瓦

S - 10042 紫銅小遺

漆器類	杯蓋・線片
土師器	鏡・線片
灰釉陶器	瓶
黒色土器	B類甕
瓦類	平瓦・丸瓦

S - 10043 紫銅小遺

漆器類	鏡
土師器	鏡・皿
瓦類	平瓦

S - 10044

漆器類	鏡
土師器	鏡・壺・皿
黒色土器	A類甕
瓦類	瓶
瓦類	平瓦・丸瓦

S - 10045

土師器	鏡
瓦類	平瓦

S - 10046

土師器	線片
-----	----

S - 10047

瓦類	線片
----	----

Tab.36平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(3)

S-10048	瓦類 破片	S-10070	須磨器 甕 土師器 甕
S-10050	土師器 破片 瓦類 破片	S-10071	須磨器 甕・破片 土師器 皿・破片 瓦類 平瓦 その他 埴土
S-10051	須磨器 破片 土師器 甕・破片 石器 砥石 瓦類 平瓦・軒平瓦・丸瓦	S-10072	須磨器 破片 土師器 破片 瓦類 破片
S-10052	土師器 甕 瓦類 破片	S-10074	須磨器 破片 土師器 皿 黒色土器 A類焼 瓦類 平瓦
S-10053	須磨器 甕 土師器 皿・破片 瓦類 平瓦	S-10075	土師器 破片 瓦類 平瓦
S-10055	土師器 破片	S-10077	土師器 甕・皿
S-10057	須磨器 甕 土師器 皿 黒色土器 A類焼・B類焼 瓦類 平瓦	S-10078	須磨器 破片 土師器 破片 瓦類 破片
S-10058	須磨器 甕 土師器 皿・破片 瓦類 平瓦・破片	S-10080 (S B10080 h)	須磨器 甕・甕 土師器 甕 黒色土器 A類焼
S-10059	須磨器 破片 土師器 破片	S-10081 (S B10080 l)	須磨器 甕・破片 土師器 皿・製塩土器・破片 黒色土器 A類焼 瓦類 平瓦
S-10060	須磨器 甕 土師器 甕 黒色土器 A類器種不明	S-10082 (S B10080 j)	須磨器 甕 土師器 甕・皿 黒色土器 A類焼 瓦類 平瓦
S-10061	黒色土器 B類焼 瓦類 甕 瓦類 平瓦	S-10083 (S B10080 k)	須磨器 破片 土師器 甕・破片 黒色土器 A類焼
S-10064	土師器 甕 瓦類 平瓦	S P-10084 (S B10080 s)	須磨器 破片 瓦類 破片
S-10066	須磨器 杯蓋(古墳時代) 土師器 破片	S P-10085 (S B10080 o)	土師器 甕
S-10067	土師器 甕・破片 瓦類 平瓦	S P-10086 (S B10080 p)	瓦類 瓦瓦
S-10069	土師器 甕 黒色土器 A類焼 瓦類 平瓦		

Tab.37平城京京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(4)

S- 10087 (S B 10080 q)

土師器	甕
黒色土器	A類陶
瓦類	鏡片

S- 10088 (S B 10080 f)

土師器	鏡片
瓦類	平瓦

S- 10089 (S B 10080 g)

土師器	鏡片
黒色土器	A類陶

S- 10090 (S B 10080 r)

深草器	甕
土師器	甕
瓦類	平瓦

S- 10091

瓦類	平瓦
----	----

S- 10092

深草器	鏡片
土師器	皿

S- 10093

深草器	甕・杯蓋
土師器	皿・甕
黒色土器	A類陶, B類陶, 甕
石器	礎石
瓦類	平瓦

S- 10094

深草器	甕
土師器	甕・皿
瓦類	平瓦

S- 10095

深草器	甕
土師器	甕・皿・鏡片
黒色土器	A類陶
瓦類	鏡片

S- 10096

深草器	甕
土師器	甕・皿
黒色土器	A類陶・A類鉢
瓦類	平瓦

S- 10097

土師器	釜・皿
黒色土器	A類陶
瓦類	平瓦

S- 10098

深草器	甕
土師器	杯・皿
瓦類	平瓦・丸瓦

S- 10099

深草器	甕・杯・杯蓋・甕
土師器	皿・甕, 製造土器・鏡片
瓦類	平瓦・丸瓦
金属製品	木簡装綴具・スラグ

S- 10102

黒色土器	B類陶
------	-----

S- 10104

深草器	杯
土師器	甕・皿
黒色土器	B類陶
瓦類	平瓦

S- 10105

土師器	皿
黒色土器	B類陶

S- 10107

土師器	皿・鏡片
-----	------

S- 10108

深草器	鏡片
土師器	鏡片
灰陶陶器	鏡片
瓦類	平瓦

S- 10109

土師器	釜・鏡片
黒色土器	B類陶
瓦類	鏡片

S- 10112

土師器	鏡片
瓦類	鏡片

S- 10113

深草器	甕
土師器	鏡片

S- 10115 (S B 10080 n)

深草器	鏡片
土師器	鏡片
緑釉陶器	甕
金属製品	鉄釘

S- 10125

古式土師器	甕
土師器	皿

S K- 10126

深草器	鏡片
土師器	甕・甕・皿・鏡片
黒色土器	A類甕, A類陶
瓦類	平瓦・丸瓦

S- 10127

土師器	釜
黒色土器	A類器種不明

S- 10128

土師器	皿
-----	---

S- 10130

土師器	甕・杯・甕
瓦類	平瓦

S- 10131

土師器	皿・鏡片
-----	------

S- 10132

深草器	甕・皿・鏡片
土師器	皿・鏡片
瓦類	鏡片

Tab.38平城京京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(5)

S-10133

土師器	皿
黒色土器	A類焼
瓦類	平瓦

S-10134

土師器	皿
-----	---

S-10135

土師器	釜・線片
瓦類	線片

S-10137

土師器	線片
-----	----

S K 10139

漆器類	甕・杯・壺
土師器	甕・壺・甕・皿
緑釉陶器	線片
灰釉陶器	椀
黒色陶器	A類焼・A類焼
瓦類	平瓦・丸瓦・坪
金属製品	鉄釘

S-10141

土師器	釜・皿・線片
黒色土器	A類焼
瓦類	線片

S-10142 (S 010001)

漆器類	甕・線片
土師器	線片
瓦類	平瓦

S-10143

土師器	線片
黒色土器	A類焼種不明
瓦類	平瓦・丸瓦・線片

S-10144

漆器類	線片
土師器	線片
瓦類	線片

S-10145

漆器類	杯蓋・線片
土師器	甕・皿
瓦類	線片

S-10146

漆器類	甕・線片
土師器	皿・線片

S-10148

土師器	皿・線片
黒色土器	A類焼

S-10149

漆器類	線片
土師器	甕
黒色土器	A類焼
石製品	玉杵製品

S-10150

土師器	皿・線片
黒色土器	B類焼

S-10151

土師器	甕
-----	---

S-10152

漆器類	杯身(古墳時代)・杯蓋(古墳時代)
土師器	皿・線片
瓦類	線片

S-10153

漆器類	杯身(古墳時代)
土師器	線片

S-10156

土師器	皿・線片
黒色土器	A類焼

S-10157

漆器類	甕・壺
土師器	皿
灰釉陶器	椀
黒色陶器	A類焼
瓦類	線片

S-10158

漆器類	杯
土師器	甕・壺・皿・椀・線片
黒色土器	A類線片
瓦類	線片

S-10160

土師器	甕・線片
黒色土器	A類焼

S-10161

土師器	甕・杯・皿
瓦類	椀
瓦類	平瓦・丸瓦
金属製品	スラグ

S-10162

漆器類	甕
土師器	甕・皿

S-10163

土師器	皿
灰釉陶器	瓦皿
黒色土器	A類焼

S-10164

土師器	皿
瓦類	平瓦

S-10165

漆器類	甕
土師器	甕・皿
灰釉陶器	椀
瓦類	平瓦

S-10166

漆器類	甕(肥子付)・壺・杯(古墳時代)
土師器	皿・甕埋土器・線片
黒色土器	A類焼
瓦類	平瓦

S-10167

土師器	皿・線片
黒色土器	A類焼

Tab.39平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(6)

S-10168	須磨器 甕 土師器 磁片	S K 10185	須磨器 甕・杯・壺 土師器 甕・壺・皿 黒色土器 A類甕 石類 磁石 瓦類 平瓦・丸瓦 金属製品 鉄釘 その他 焼土・炭化物・炒麥
S-10169 雑瓦	須磨器 甕・壺 土師器 甕・磁片 瓦類 平瓦・丸瓦	S D 10186 粟御小溝	須磨器 甕・杯・身・杯蓋・壺・磁片 土師器 甕・高杯・皿 緑釉陶器 柶 黒色土器 A類甕 瓦類 平瓦
S-10170 雑瓦	須磨器 甕・壺 緑釉陶器 柶 緑釉陶器 瓦瓦土器片 瓦類 平瓦・丸瓦	S-10187	古式土師器 高杯 須磨器 柶
S-10171 粟御小溝	古式土師器 甕・壺・高杯 須磨器 鉢・磁片 土師器 柶・磁片 黒色土器 A類甕 瓦類 平瓦	S-10188	土師器 磁片 瓦類 磁片
S-10172 粟御小溝	須磨器 杯蓋 土師器 甕・皿 黒色土器 A類甕種不明 瓦類 磁片	S-10189	緑釉陶器 柶 瓦類 平瓦
S-10173 粟御小溝	須磨器 壺・杯 土師器 甕・皿・磁片 黒色土器 A類柶 瓦類 平瓦・磁片	S-10190	土師器 甕
S-10175	土師器 磁片	S-10191	須磨器 甕・磁片 土師器 甕・皿・磁片 瓦類 平瓦・磁片
S-10179 (S B 10080m)	須磨器 磁片 土師器 皿 黒色土器 A類甕	S-10193	瓦類 磁片
S-10180	土師器 磁片 黒色土器 A類柶	S-10194	須磨器 杯(古墳時代) 土師器 皿 瓦類 平瓦
S-10181	須磨器 甕・磁片 土師器 甕・皿・磁片 黒色土器 A類鉢・A類柶 瓦類 平瓦	S-10195	須磨器 杯・杯蓋・磁片 土師器 甕・壺・磁片 黒色土器 A類鉢・A類柶 瓦類 磁片
S-10183	須磨器 磁片 土師器 磁片 黒色土器 A類柶	S-10196 (S B 10080-d)	須磨器 甕 土師器 甕 黒色土器 A類柶・A類甕種不明 瓦類 磁片
S X 10184	須磨器 甕・杯(古墳時代)・杯・壺 土師器 甕・鉢・甕・磁土器 黒色土器 A類柶 瓦類 柶 瓦類 平瓦・丸瓦 土製品 埴 金属製品 不明鉄器 その他 焼土	S D 10197 灰陶粘	須磨器 甕・鉢・杯・壺 土師器 甕・鉢・杯・壺・皿・甕・磁土器 瓦類 平瓦 土製品 埴 その他 焼土塊

Tab.40平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覽表(7)

S D 10097 埴埴砂

須臾器	甕・高杯・杯・壺
土師器	甕・壺・甌・皿・椀・甗・土師・磁片
黑色土器	A類陶
瓦類	椀
輸入陶器	青磁越州窯
瓦類	平瓦
土製品	埴輪

S A 10108 磯貝

須臾器	杯身(古墳時代)・杯蓋・磁片
土師器	甕・甗・土師・磁片
瓦類	磁片

S - 10109

瓦類	磁片
----	----

S - 10200

須臾器	甕
土師器	皿
黑色土器	A類陶
瓦類	平瓦

S P 10201

土師器	磁片
黑色土器	B類陶
瓦類	磁片

S - 10202

須臾器	甕
土師器	皿
黑色土器	A類器種不明
瓦類	平瓦・丸瓦
土製品	土馬

S - 10203

土師器	皿・磁片
-----	------

S - 10204

土師器	皿
友鈿陶器	椀

S P 10205

須臾器	甕・鉢・壺・杯・皿
土師器	甕・杯・皿・椀
瓦類	平瓦・丸瓦

S - 10206

須臾器	甕
友鈿陶器	椀
黑色土器	A類陶
瓦類	平瓦

S - 10207

土師器	磁片
瓦類	磁片

S P 10208

土師器	皿
瓦類	平瓦
金屬製品	不明鉄製品

S - 10209

須臾器	甕(古墳時代)
土師器	皿

S D 10210 雲網小溝

須臾器	甕・壺
土師器	甕・甌・皿
友鈿陶器	磁片
黑色土器	A類陶
瓦類	椀・磁片
白磁	磁片
瓦類	平瓦

S D 10211 雲網小溝

須臾器	甕・杯・壺
土師器	甕・皿
友鈿陶器	椀
黑色土器	A類陶・B類鉢
瓦類	平瓦
金屬製品	鉄釘

S D 10212 雲網小溝

須臾器	壺
土師器	甕・皿
友鈿陶器	椀
黑色土器	A類陶・B類鉢
瓦類	平瓦・丸瓦

S - 10213 雲網小溝

須臾器	甕・杯蓋・壺
土師器	甕・皿
黑色土器	A類陶
瓦類	椀・片
瓦類	平瓦・軒平瓦・丸瓦

S - 10214 雲網小溝

友鈿陶器	椀(?)
瓦類	平瓦・丸瓦

S - 10215 雲網小溝

土師器	甕
瓦類	平瓦・丸瓦

S - 10216

土師器	磁片
瓦類	磁片

S - 10217

土師器	皿
瓦類	磁片

S - 10218

瓦類	磁片
----	----

S - 10219

土師器	磁片
瓦類	磁片

S - 10222

須臾器	甕
土師器	皿
瓦類	平瓦

S - 10223

土師器	磁片
黑色土器	A類陶
瓦類	軒丸瓦

S - 10224

土師器	皿
黑色土器	B類陶
瓦類	平瓦・丸瓦

Tab.41平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(8)

S-10225

深草器	杯
土師器	甕
瓦類	丸瓦

S-10226

瓦類	平瓦
----	----

S-10227

瓦類	丸瓦
----	----

S-10228

土師器	甕
-----	---

S-10229

瓦類	平瓦
----	----

S D 10230

深草器	甕・杯・壺・円蓋碗・線片
土師器	釜・皿・線片
黒色土器	A類碗・B類鉢
金属製品	不明鉄器

S-10231 (S B 10080 a)

深草器	杯蓋・線片
土師器	皿・線片
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S-10232 (S B 10080 c)

土師器	甕・皿・線片
-----	--------

S-10235

土師器	皿
-----	---

S-10236

土師器	皿
瓦類	平瓦

S-10237

瓦類	線片
----	----

S-10238

瓦類	線片
----	----

S-10239 (S D 10197)

深草器	杯
土師器	甕・瓶・刺土器
瓦類	平瓦

S-10240 (S D 10197)

深草器	壺・杯・杯蓋・線片
土師器	甕・杯・皿・碗・刺土器
黒色土器	A類碗(流入か?)
瓦類	栴(流入か?)
瓦類	平瓦・軒平瓦・丸瓦
土製品	轉印口

S-10241 (S B 10080 b)

深草器	線片
土師器	甕・瓶
黒色土器	A類器種不明
瓦類	平瓦・丸瓦・線片

S-10242

深草器	甕・線片
土師器	皿・線片
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦・丸瓦・線片

S-10243

深草器	甕・高杯・杯蓋
土師器	釜・壺・皿
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦・丸瓦
金属製品	鉄釘

S-10244

土師器	線片
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S-10245

深草器	線片
土師器	線片

S-10246

深草器	甕・杯(古墳時代)・壺・線片
土師器	線片
黒色土器	A類碗・A類線片
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10248

黒色土器	A類線片
瓦類	線片

S P 10252

土師器	甕
-----	---

S-10263

深草器	甕
土師器	皿

S-10264

深草器	線片
土師器	甕
黒色土器	A類碗

S-10265

深草器	壺
土師器	甕
瓦類	平瓦

S-10268

土師器	甕・皿
-----	-----

S-10270

深草器	線片
土師器	線片
瓦類	線片

S-10274

深草器	甕
土師器	甕・皿
瓦類	平瓦

S-10275

土師器	皿
瓦類	線片

Tab.42平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(9)

S-10283

須磨器	鉢・杯蓋・杯(古墳時代)
土師器	甕・皿
瓦類	繒片

S-10284

土師器	皿
-----	---

S-10285

須磨器	壺
土師器	皿・繒片

S-10286

土師器	甕
瓦類	平瓦

S-10287

土師器	皿
瓦類	平瓦

S-10291

須磨器	甕・杯・壺
土師器	繒片

S-10296

土師器	繒片
瓦類	平瓦

S-10304 複瓦

瓦類	平瓦
----	----

S D 10311 複瓦

古式土師器	甕
須磨器	杯・杯蓋・壺・繒片
土師器	鉢・甕・杯・皿・樽・繒片
瓦類	平瓦
土製品	埴輪
その他	炭

S-10315

土師器	繒片
-----	----

S-10317 複瓦

須磨器	繒片
土師器	繒片
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10318 複瓦

須磨器	甕・杯・杯蓋
土師器	繒片
瓦類	平瓦・丸瓦・棧瓦

S D 10321 複瓦

須磨器	甕・杯・杯蓋
土師器	甕・樽・皿
瓦類	平瓦・丸瓦

S D 10323

須磨器	甕
土師器	皿・繒片
瓦類	丸瓦

S-10327

土師器	繒片
-----	----

S-10328

須磨器	繒片
土師器	繒片

S-10329 複瓦

土師器	繒片
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10331

須磨器	杯蓋
土師器	平瓦

S-10332

須磨器	繒片
土師器	製塩土甕
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10333

須磨器	壺
土師器	繒片

S-10335

須磨器	杯
-----	---

S K 10336

須磨器	杯
土師器	甕・繒片
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10337

土師器	甕
-----	---

S K 10340

須磨器	杯蓋
土師器	甕・杯・高杯
瓦類	平瓦・丸瓦・小型瓦

S D 10342

古式土師器	甕・杯・高杯
須磨器	壺
土師器	甕・杯・皿・繒片
瓦類	平瓦・丸瓦・繒片

S K 10345

須磨器	繒片
土師器	杯・皿・繒片
瓦類	平瓦・丸瓦

S K 10347

須磨器	杯
土師器	繒片
瓦類	平瓦

S K 10348

須磨器	甕・杯・甕・壺
土師器	甕・繒片
瓦類	平瓦・丸瓦

S X 10349 灰磚砂

須磨器	杯・壺
土師器	甕

S X 10349 磁灰磚砂

古式土師器	高杯
須磨器	杯蓋・壺
土師器	甕・杯蓋・皿
土製品	埴
木製品	木片

S K 10352

土師器	杯・繒片
-----	------

Tab.43平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(10)

S-10052 雜品

瓦類	平瓦・丸瓦
土製品	埴輪

S K 10205

漆器類	鏡・杯・鉢・壺・皿
土師器	鏡・壺・埴片
瓦類	平瓦・丸瓦
紙製品	スラフ

S K 10206

漆器類	鏡・鉢・杯
土師器	鏡・壺・埴片
瓦類	平瓦・丸瓦・埴片

S-10207

漆器類	壺
土師器	埴片

S E 10208 黒灰色砂質粘土

古式土師器	高杯
漆器類	鏡・杯・鉢蓋・壺・平皿
土師器	鏡・杯・皿・埴土器
石製品	自然石
瓦類	平瓦・丸瓦
木製品	木片
その他	埴の種・灰

S E 10208 灰褐色

漆器類	鏡・杯・鉢蓋・壺・埴片
土師器	鏡・杯・壺・皿・埴片
瓦類	平瓦・丸瓦

S E 10208 淡灰褐色砂質粘土

漆器類	壺
土師器	埴片

S E 10208 黒褐色

漆器類	鏡・鉢蓋
土師器	鏡・皿
瓦類	平瓦
木製品	木片

S E 10208 黒方 暗灰砂質粘土

漆器類	杯・鉢蓋・壺
土師器	鏡・杯・鉢蓋・埴土器
瓦類	埴片

S E 10208 暗褐色

漆器類	杯・鉢蓋・壺
土師器	鏡・杯
瓦類	平瓦

S-10209

漆器類	鏡・杯・鉢蓋
土師器	鏡・杯
瓦類	平瓦
木製品	木片

S-10200 雑瓦

漆器類	鏡
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10209

漆器類	鏡(混入)・杯(混入)・壺(混入)
瓦類	埴片(混入)

S D 10271

漆器類	杯・鉢蓋・平皿
土師器	鏡・鉢・埴
瓦類	平瓦

S P 10276

漆器類	壺
土師器	鏡・皿
瓦類	埴

S-10277

土師器	埴片
-----	----

S-10280

漆器類	鏡
-----	---

S-10281

漆器類	埴片
-----	----

S-10282

土師器	埴片
-----	----

S P 10284

漆器類	壺
土師器	皿
陶磁陶器	鏡(近現代)
瓦類	埴・平瓦

S-10289

土師器	鉢蓋
-----	----

S P 10410

漆器類	鏡
-----	---

S-10413

土師器	杯・皿・埴・埴片
-----	----------

S-10418

漆器類	鏡
土師器	埴片
その他	コンクリート(混入)

S X 10420

古式土師器	高杯
漆器類	鏡・鉢・杯・鉢蓋・壺・不明製品・埴片
土師器	鏡・把手付鏡・高杯・皿・埴土器・埴片
瓦類	埴
瓦類	軒平瓦・丸瓦・軒丸瓦・「種」刷印瓦

S-10427

土師器	埴片
-----	----

S-10430

土師器	皿
-----	---

S-10443

土師器	埴片
-----	----

S-10445 (S B 100433 h)

土師器	鏡・皿
-----	-----

S-10450

漆器類	平皿・埴片
-----	-------

S-10452

漆器類	壺
-----	---

Tab.44平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覽表(11)

S-10465 雜瓦		S-10598	
須磨器 甕		須磨器 甕	
土師器 線片		土師器 甕・杯・皿・製造土器・線片	
瓦類 平瓦			
S-10466		S-10591	
須磨器 甕		須磨器 線片	
瓦類 線片		土師器 線片	
S-10468		S-10592 雜瓦	
土師器 線片		須磨器 杯	
S-10473		鐵皮陶器 現代磁器	
須磨器 甕		瓦類 平瓦・丸瓦	
土師器 甕・杯		木製品 木炭	
瓦類 平瓦・丸瓦		S-10593	
S-10481		須磨器 甕・壺・線片	
土師器 甕		土師器 甕・線片	
S-10485 (S B 100K33 a)		S-10598	
土師器 線片		須磨器 線片	
S-10497		土師器 線片	
古式土師器 壺		瓦類 平瓦・丸瓦	
S-10499		S-10600	
土師器 甕・線片		須磨器 杯	
S-10509		土師器 杯・線片	
土師器 甕		S-10608	
S-10513		瓦類 平瓦	
土師器 甕・製造土器・線片		S-10609	
S-10545		瓦類 平瓦	
須磨器 杯		S X 10615	
土師器 甕		須磨器 甕	
S-10546 (S B 100K33 d)		土師器 甕・製造土器	
土師器 線片		瓦類 平瓦・丸瓦	
瓦類 丸瓦		S-10619 粟飯小瀝	
S P 10565		須磨器 線片	
須磨器 杯(古墳時代)		土師器 皿	
土師器 杯		S-10623 粟飯小瀝	
S-10579		土師器 皿	
古式土師器 高杯・壺		黑色土器 A類碗	
須磨器 甕		瓦類 平瓦・丸瓦	
土師器 甕・線片		その他 灰	
石製品 磁瓦		S D 10634 粟飯小瀝	
瓦類 平瓦		須磨器 線片	
S K 10581		土師器 壺・皿・台付皿・甕	
古式土師器 甕・高杯・壺		黑色土器 A類碗	
S-10582		瓦類 甕	
須磨器 線片		瓦類 平瓦・丸瓦	
土師器 甕		S-10626 粟飯小瀝	
瓦類 線片		須磨器 鉢	
S-10587		S-10633	
須磨器 甕		須磨器 甕・杯・壺	
土師器 甕・皿・線片		土師器 皿	
		黑色土器 A類碗	
		瓦類 平瓦	

Tab.45平城京京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(12)

S X 10634 灰埋砂

須磨器	鏡・鏝・杯
土師器	鏡・皿・瓶・陶埴土器
黒色土器	柶
瓦類	平瓦・丸瓦
木製品	木片

S-10635 粟御小溝

須磨器	鏡
土師器	線片

S-10636

須磨器	鏡・高杯(古墳時代)・鏝
土師器	鏡・鏝
瓦類	平瓦・丸瓦
木製品	木片

S-10638

土師器	鏝・皿
黒色土器	B類柶・B類線片
瓦類	平瓦

S-10641

古式土師器	鏝
土師器	線片

S-10642 粟御小溝

須磨器	線片
土師器	皿・線片
瓦類	平瓦

S-10659 粟御小溝

須磨器	線片
土師器	線片
瓦類	平瓦

S-10663

須磨器	鏡・線片
土師器	皿・線片
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10665 粟御小溝

須磨器	鏡
土師器	鏡・皿
須磨器 (中世→)	碓能須磨器鉢
瓦類	柶
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10667 粟御小溝

須磨器	鏡
土師器	皿
緑釉陶器	皿
黒色土器	A類線片

S-10680 粟御小溝

須磨器	鏡・杯・杯蓋
土師器	皿・柶
黒色土器	A類柶
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10686 粟御小溝

須磨器	杯
土師器	皿
瓦類	平瓦・丸瓦
金属製品	スラグ

S-10689

須磨器	杯
土師器	杯蓋
土製品	埴輪

S-10692 棟瓦

須磨器	鏡・杯・高杯・鏝
土師器	皿・陶埴土器
白磁	皿(現代)

S-10693

須磨器	杯・杯蓋
土師器	鏡・高杯
瓦類	平瓦

S-10694 粟御小溝

須磨器	鏡・鏝
土師器	皿
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10695 粟御小溝

須磨器	杯蓋
土師器	鏡・皿
瓦類	柶
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10696 粟御小溝

須磨器	鏡・杯蓋・鏝
瓦類	平瓦・線片

S-10697 粟御小溝

須磨器	鏝
土師器	鏝・皿
瓦類	柶
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10700

土師器	鏡
瓦類	線片
金属製品	スラグ

S-10701 棟瓦

須磨器	鏡
土師器	線片
瓦類	柶
白磁	柶
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10702 棟瓦

須磨器	鏝
瓦類	平瓦

S-10703 棟瓦

土師器	線片
瓦類	線片

S-10705 棟瓦

須磨器	鏡
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10706 棟瓦

瓦類	平瓦・丸瓦
----	-------

S-10707 棟瓦

須磨器	線片
瓦類	平瓦・丸瓦

Tab.46平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(13)

S-10730 雑乱

須磨器	鏡・杯・鏡片
土師器	釜・鏡片
黒色土器	A類鏡
瓦類	平瓦・丸瓦・鏡片

S-10731 雑乱

須磨器	鏡
土師器	鏡
瓦類	平瓦・丸瓦

S D 10711

須磨器	釜
土師器	釜・皿・椀
瓦類	平瓦・丸瓦・鏡片

S K 10755

須磨器	鏡
土師器	鏡・皿
黒色土器	A類鏡
青磁	越州煎青磁皿
石製品	磁石
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10759

須磨器	鏡
土師器	皿・煎椀
瓦類	平瓦
その他	タイル

S-10770

土師器	鏡・皿・椀
瓦類	平瓦
木製品	木片

S-10775

土師器	椀・甗埴土器
瓦類	平瓦

S-10785 雑乱

土師器	鏡片
瓦類	鏡片

S-10792

須磨器	杯蓋・甗
土師器	鏡・皿
瓦類	平瓦

S-10797

土師器	鏡片
瓦類	平瓦

S-10801

瓦類	平瓦
----	----

S-10802 雑乱

須磨器	鏡・甗
土師器	杯・皿
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10804

土師器	鏡
瓦類	鏡片

S X 10815

須磨器	杯・杯蓋・甗・鉢・鏡片
土師器	杯・皿・椀
瓦類	椀
瓦類	平瓦・丸瓦・鏡片

S-10818

須磨器	杯・杯蓋
土師器	鏡

S D 10821

須磨器	甗・甗(古墳時代)・甗・杯・杯蓋・甗・皿・平甗・横瓶
土師器	甗・甗・甗・高杯・杯・鉢・皿・椀・甗埴土器・鏡片
白磁	箱(現代・瀝人)
瓦類	平瓦・軒平瓦・丸瓦
土製品	埴輪・輪郭口
金属製品	鏡片
その他	炭

S-10822

土師器	鏡片
-----	----

S-10823

土師器	鏡片
-----	----

S-10828

瓦類	鏡片
----	----

S-10832

黒色土器	A類鏡
------	-----

S-10834

須磨器	鏡・杯
土師器	杯
瓦類	鏡片

S-10832

土師器	鏡片
瓦類	鏡片

S-10835

土師器	鏡
瓦類	平瓦

S-10836

土師器	鏡・鏡片
瓦類	丸瓦

S P 10837

須磨器	鏡・甗
黒色土器	A類鏡・A類椀
瓦類	平瓦・丸瓦・軒丸瓦

S K 10838

古式土師器	鏡・甗
須磨器	鏡片(瀝人か?)
土師器	鏡片
石製品	すり石

S-10860

須磨器	杯・鏡片
土師器	皿・鏡片
黒色土器	A類鏡
瓦類	鏡片

Tab.47平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(14)

S-10862

須惠器	銅片
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S-10863

黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S-10864

須惠器	鏡
黒色土器	A類碗

S-10866 覆瓦

土師器	甕・皿
瓦類	銅片

S-10869

須惠器	銅片
土師器	銅片

S-10870

須惠器	杯・銅片
土師器	皿
黒色土器	B類碗
瓦類	平瓦・丸瓦・銅片

S-10871

須惠器	鏡
土師器	皿
瓦類	平瓦・丸瓦

S-10877

須惠器	杯蓋(含須時代)
土師器	鏡・銅片
瓦類	平瓦

S-10879

須惠器	銅片
土師器	銅片

S-10880

須惠器	杯
土師器	鏡・銅片
黒色土器	A類碗片

S-10883

須惠器	銅片
土師器	銅片
瓦類	平瓦
金属製品	鉄釘

S-10884

土師器	皿
瓦類	平瓦

S-10885

須惠器	銅片
土師器	銅片

S-10887

土師器	銅片
-----	----

S-10888

土師器	鏡・銅片
-----	------

S P 10889

須惠器	鏡・杯(含須時代)・杯・杯蓋
土師器	鏡・皿・銅片
瓦類	平瓦

S-10891

黒色土器	A類碗
------	-----

S-10894

須惠器	杯蓋
土師器	杯
黒色土器	A類碗片

S-10896

須惠器	鏡・銅片
土師器	銅片
瓦類	銅片

S-10898

土師器	杯
-----	---

S P 10899

須惠器	杯蓋
土師器	皿
瓦類	平瓦・丸瓦

S X 10901 瓦蓋口

須惠器	鏡・早晚・杯・杯蓋・甕・小型甕・ 皿(内須津付甕)
土師器	鏡・把手付甕・甕・高杯・杯・甕・皿・銅片
黒色土器	A類碗・鉢
青磁	碗
石製品	埋函銅片
瓦類	平瓦・軒平瓦・丸瓦・軒丸瓦
土製品	不揃土製品
金属製品	スラグ

S X 10902 瓦蓋口

須惠器	鏡・早晚・杯・杯蓋・短頸甕・甕・銅片
土師器	鏡・把手付甕・高杯・皿・甕・銅片
石製品	花崗岩磨石
瓦類	平瓦・軒平瓦・丸瓦

S-10921

須惠器	甕
土師器	銅片

S-11001

須惠器	鏡
土師器	皿・銅片

S-11002

土師器	皿
-----	---

S-11005

須惠器	鏡
土師器	皿
黒色土器	A類碗
瓦類	銅片

S-11006

土師器	銅片
黒色土器	A類甕
瓦類	銅片

Tab.48平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(15)

S-11007	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>甕・磁片</td></tr> <tr><td>瓦類</td><td>平瓦</td></tr> </table>	深灰磁	磁片	土師磁	甕・磁片	瓦類	平瓦	S-11008	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>甕</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>甕・磁片</td></tr> <tr><td>石製品</td><td>磨石</td></tr> </table>	深灰磁	甕	土師磁	甕・磁片	石製品	磨石
深灰磁	磁片														
土師磁	甕・磁片														
瓦類	平瓦														
深灰磁	甕														
土師磁	甕・磁片														
石製品	磨石														
S-11008	<table border="1"> <tr><td>石製品</td><td>円鏡</td></tr> </table>	石製品	円鏡	S-11027	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>甕</td></tr> </table>	深灰磁	甕								
石製品	円鏡														
深灰磁	甕														
S P 11011	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>甕・磁片</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>緑釉陶器</td><td>杯</td></tr> <tr><td>瓦類</td><td>平瓦・斜平瓦・丸瓦</td></tr> </table>	深灰磁	甕・磁片	土師磁	磁片	緑釉陶器	杯	瓦類	平瓦・斜平瓦・丸瓦	S-11033	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>皿</td></tr> </table>	土師磁	皿		
深灰磁	甕・磁片														
土師磁	磁片														
緑釉陶器	杯														
瓦類	平瓦・斜平瓦・丸瓦														
土師磁	皿														
S-11012	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>黒色土器</td><td>A類碗</td></tr> </table>	土師磁	磁片	黒色土器	A類碗	S-11035	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>皿</td></tr> <tr><td>灰釉陶器</td><td>皿</td></tr> <tr><td>黒色土器</td><td>A類磁片</td></tr> </table>	土師磁	皿	灰釉陶器	皿	黒色土器	A類磁片		
土師磁	磁片														
黒色土器	A類碗														
土師磁	皿														
灰釉陶器	皿														
黒色土器	A類磁片														
S-11013	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>瓦類</td><td>平瓦・丸瓦</td></tr> </table>	深灰磁	磁片	土師磁	磁片	瓦類	平瓦・丸瓦	S-11037	<table border="1"> <tr><td>瓦類</td><td>磁片</td></tr> </table>	瓦類	磁片				
深灰磁	磁片														
土師磁	磁片														
瓦類	平瓦・丸瓦														
瓦類	磁片														
S-11014	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>甕・磁片</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>杯蓋・磁片</td></tr> </table>	深灰磁	甕・磁片	土師磁	杯蓋・磁片	S-11039	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>甕</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>瓦類</td><td>平瓦・丸瓦</td></tr> </table>	深灰磁	甕	土師磁	磁片	瓦類	平瓦・丸瓦		
深灰磁	甕・磁片														
土師磁	杯蓋・磁片														
深灰磁	甕														
土師磁	磁片														
瓦類	平瓦・丸瓦														
S-11015	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> </table>	土師磁	磁片	S-11044	<table border="1"> <tr><td>瓦類</td><td>平瓦</td></tr> </table>	瓦類	平瓦								
土師磁	磁片														
瓦類	平瓦														
S-11017	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>甕</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>甕</td></tr> </table>	深灰磁	甕	土師磁	甕	S-11046	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>皿</td></tr> <tr><td>瓦類</td><td>平瓦・丸瓦・磁片</td></tr> </table>	土師磁	皿	瓦類	平瓦・丸瓦・磁片				
深灰磁	甕														
土師磁	甕														
土師磁	皿														
瓦類	平瓦・丸瓦・磁片														
S-11018	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> </table>	土師磁	磁片	S-11047	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>皿</td></tr> </table>	土師磁	皿								
土師磁	磁片														
土師磁	皿														
S-11019	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>杯</td></tr> </table>	土師磁	杯	S-11051	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>皿・磁片</td></tr> <tr><td>瓦類</td><td>磁片</td></tr> </table>	深灰磁	磁片	土師磁	皿・磁片	瓦類	磁片				
土師磁	杯														
深灰磁	磁片														
土師磁	皿・磁片														
瓦類	磁片														
S-11020	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>黒色土器</td><td>A類碗</td></tr> </table>	土師磁	磁片	黒色土器	A類碗	S-11052	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>甕・磁片</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> <tr><td>瓦類</td><td>丸瓦</td></tr> </table>	深灰磁	甕・磁片	土師磁	磁片	瓦類	丸瓦		
土師磁	磁片														
黒色土器	A類碗														
深灰磁	甕・磁片														
土師磁	磁片														
瓦類	丸瓦														
S-11021	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>甕</td></tr> </table>	土師磁	甕	S-11053	<table border="1"> <tr><td>黒色土器</td><td>A類磁片</td></tr> </table>	黒色土器	A類磁片								
土師磁	甕														
黒色土器	A類磁片														
S-11022	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>皿</td></tr> <tr><td>灰釉陶器</td><td>杯</td></tr> <tr><td>黒色土器</td><td>A類碗</td></tr> <tr><td>石製品</td><td>石(磨石)</td></tr> <tr><td>瓦類</td><td>平瓦</td></tr> </table>	土師磁	皿	灰釉陶器	杯	黒色土器	A類碗	石製品	石(磨石)	瓦類	平瓦	S-11069	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>皿</td></tr> </table>	土師磁	皿
土師磁	皿														
灰釉陶器	杯														
黒色土器	A類碗														
石製品	石(磨石)														
瓦類	平瓦														
土師磁	皿														
S-11023	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>甕</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> </table>	深灰磁	甕	土師磁	磁片	S-11076	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> </table>	土師磁	磁片						
深灰磁	甕														
土師磁	磁片														
土師磁	磁片														
S-11024 甕類小溝	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>杯(古墳時代)</td></tr> <tr><td>土師磁</td><td>甕・磁片</td></tr> </table>	深灰磁	杯(古墳時代)	土師磁	甕・磁片	S-11077	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> </table>	土師磁	磁片						
深灰磁	杯(古墳時代)														
土師磁	甕・磁片														
土師磁	磁片														
S-11025	<table border="1"> <tr><td>瓦類</td><td>平瓦</td></tr> </table>	瓦類	平瓦	S-11078	<table border="1"> <tr><td>深灰磁</td><td>磁片</td></tr> </table>	深灰磁	磁片								
瓦類	平瓦														
深灰磁	磁片														
		S-11079	<table border="1"> <tr><td>黒色土器</td><td>A類碗</td></tr> </table>	黒色土器	A類碗										
黒色土器	A類碗														
		S-11080	<table border="1"> <tr><td>土師磁</td><td>磁片</td></tr> </table>	土師磁	磁片										
土師磁	磁片														

Tab.49平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(16)

S K11081 最下層

須恵器	釜・杯蓋・壺
土師器	釜・甕・高杯
木製品	木片

S K11081

古式土師器	甕(山陰系)
須恵器	平底・杯・杯蓋・壺
土師器	甕・杯・皿
瓦類	丸瓦

S K11081 上層

須恵器	甕・平底・杯・杯蓋・壺
土師器	甕・杯
瓦類	丸瓦

S D11082

古式土師器	甕
土師器	細片

S-11083

土師器	細片
-----	----

S-11084

土師器	細片
瓦類	平瓦

S-11085

須恵器	甕
土師器	細片
石製品	磨玉水製品

S-11086

土師器	細片
-----	----

S-11087

土師器	細片
-----	----

S A11088 a 抜き型口

須恵器	甕
土師器	甕・皿・細片
その他	焼土

S A11088 b 抜き型口

須恵器	杯蓋(古墳時代)・細片
土師器	甕・皿・細片

S A11088 c 抜き型口

須恵器	甕
土師器	甕・細片

S A11088 e 抜き型口

須恵器	甕
土師器	甕

S A11088 f 抜き型口

土師器	細片
-----	----

S A11089 a 柱礎跡

須恵器	甕
土師器	細片

S A11089 b 柱礎跡

土師器	皿・細片
-----	------

S A11089 c 礎方

土師器	細片
-----	----

S A11089 c 柱礎跡

須恵器	甕
土師器	甕

S A11089 d 礎方

木製品	木片
-----	----

S A11089 d 柱礎跡

須恵器	甕・壺
土師器	甕・皿・皿

S A11089 e 柱礎跡

須恵器	甕(添付)
土師器	細片
瓦類	平瓦

S A11089 f 築構跡

須恵器	甕(添付)
-----	-------

S-11091

土師器	甕
-----	---

S-11092

土師器	甕・皿・細片
黒色土師	A障泥
瓦類	平瓦
木製品	木片

S-11093

土師器	細片
-----	----

S K11084

古式土師器	甕・高杯・細片
-------	---------

S-11095

土師器	細片
-----	----

S K11096

古式土師器	甕・壺
木製品	木片

S-11097

土師器	皿・細片
-----	------

S-11099

土師器	細片
-----	----

S 11103

須恵器	細片
土師器	甕・皿・細片
瓦類	平瓦・丸瓦

S K11104

須恵器	細片
土師器	細片
石製品	切石
瓦類	平瓦・細片

S-11105

土師器	細片
瓦類	細片

S K11108

須恵器	細片
土師器	細片
土製品	埴輪

Tab.50平城京右京北辺遺跡1区出土遺物一覧表(17)

S K11109

須磨器	杯蓋(古墳時代)
瓦類	平瓦

S-11110

瓦類	平瓦
----	----

S-11111

瓦類	平瓦
----	----

S-11112

須磨器	鏡片
土師器	鏡片

S-11113

須磨器	壺
黒色土器	A類磁片

S-11114

須磨器	鏡片
黒色土器	A類磁
瓦類	平瓦

S-11116

須磨器	壺
黒色土器	壺
瓦類	平瓦

S-11117

須磨器	鏡・鏡片
土師器	皿・鏡片
瓦類	平瓦

S-11118

須磨器	杯(古墳時代)・壺
-----	-----------

1区 須磨灰砂

須磨器	壺・平瓶・高杯・杯・杯蓋・鉢・壺・皿・鏡片
土師器	鏡・把乎付鏡・釜・甕・高杯・杯・皿・小皿蓋・瓶・瓦二テュア土器器台・鏡片
須磨器(中世-)	東儀系須磨器鏡・福鹿須磨器鉢
緑釉陶器	皿・瓶
灰釉陶器	壺・耳皿・瓶
黒色土器	A類磁
瓦類	三足釜・すり鉢・皿・瓶
青磁	瓶
白磁	瓶
石製品	湯瓶嘴・河原石・紅銅片管・片管
瓦類	平瓦・軒平瓦・丸瓦・軒丸瓦
土製品	埴・鈴鐺・土塊
金属製品	スラグ

1区 灰砂

須磨器	鏡・壺・平瓶・杯・杯蓋・杯蓋(古墳)・鉢
土師器	鏡・把乎付鏡・釜・高杯・壺・皿・鏡片
緑釉陶器	瓶・鏡片
灰釉陶器	瓶・鏡片
黒色土器	A類磁・壺
瓦類	瓶
白磁	瓶
瓦類	平瓦・軒平瓦・丸瓦・軒丸瓦
土製品	埴・埴輪片
木製品	木片
金属製品	スラグ
その他	炭

1区 須磨灰砂

須磨器	鏡・杯・杯蓋・杯蓋・壺・皿
土師器	鏡・壺・高杯・杯・皿・鏡片
黒色土器	A類磁
瓦類	鉢・瓶
白磁	瓶
瓦類	平瓦・丸瓦
金属製品	スラグ

1区 雑瓦

須磨器	鏡
土師器	鏡片
瓦類	平瓦・丸瓦・軒丸瓦
土製品	土塊

1区 2区之間

須磨器	鏡片
土師器	鏡片
瓦類	鏡片
石製品	湯瓶嘴片
瓦類	平瓦

1区 北側雑砂トレンチ

須磨器	鏡・杯・杯蓋
土師器	鏡・杯・皿・製造土器
瓦類	鏡片
瓦類	平瓦・丸瓦

Tab.51平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(1)

2区

S-20001 竪掘小遺

瓦類	平瓦
----	----

S-20002 竪掘小遺

須磨器	甕
土師器	細片

S-20003

瓦類	平瓦
----	----

S-20004

瓦類	平瓦
----	----

S-20005 竪掘小遺

須磨器	甕
-----	---

S-20006

須磨器	細片
土師器	細片
瓦類	平瓦

S-20007 竪掘小遺

須磨器	杯
-----	---

S-20008 竪掘小遺

須磨器	甕
土師器	甕・杯
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S-20009 竪掘小遺

須磨器	細片
土師器	甕・甕
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S D 20010 曬灰色砂混泥

須磨器	杯・甕・甕・黒蓋土器
土師器	甕・甕・高杯・明蓋・黒蓋土器
緑釉陶器	甕
灰釉陶器	甕
黒色土器	A類碗・A類鉢
瓦類	平瓦

S D 20010 青灰色細砂

須磨器	甕・鉢・甕蓋、円蓋碗・甕、大型甕・杯・平甕
土師器	甕・甕、高杯
緑釉陶器	甕
黒色土器	A類碗、A類鉢
石製品	すり石?・片割削片
瓦類	平瓦
土製品	土甕

S D 20010 灰色細砂

須磨器	杯・杯蓋、甕・平甕
土師器	甕・甕
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦
木製品	炭

S D 20010 紅土ブロック混灰色砂(上位)

須磨器	杯蓋・甕・杯・甕
土師器	製塩土器・甕・杯・碗・甕・高杯
石製品	破石
瓦類	平瓦
土製品	土甕
木製品	不明木製品・炭

S D 20010 紅土ブロック混灰色砂(下位)

須磨器	甕
土師器	甕・高杯
灰釉陶器	甕
黒色土器	A類碗
石製品	片割削片
瓦類	平瓦

S D 20010 竪掘小穴群

土師器	細片
-----	----

S D 20010 曬灰色細砂

須磨器	黒蓋土器・杯・甕・杯蓋・甕
土師器	甕、碗
黒色土器	A類碗、甕
瓦類	平瓦
土製品	土甕

S D 20010 出土層位不明

須磨器	甕、甕、平甕、黒蓋土器、高杯
土師器	甕、甕、甕、高杯、黒蓋土器
緑釉陶器	甕
黒色土器	A類碗
石製品	破断線
木製品	炭

S-20011 雑瓦

須磨器	甕・甕
土師器	甕、杯、甕
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦、丸瓦

S P 20012

土師器	甕・甕
黒色土器	A類碗、A類鉢
瓦類	平瓦

S P 20013

土師器	甕、甕
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S-20014

須磨器	細片
土師器	細片
瓦類	平瓦

S K 20015

須磨器	杯蓋、杯、甕
土師器	甕、甕
瓦類	平瓦

S E 20016 曬灰色砂混泥

須磨器	甕
土師器	甕・甕
瓦類	平瓦

Tab.52平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(2)

S E 20016 雑材		S- 20028	
須磨器	杯・壺	土師器	不明品
土師器	甕		
瓦類	平瓦・不明瓦類品・平瓦(棟多量に付着)	S- 20029	
S E 20016 黒灰色泥		須磨器	鉢
須磨器	壺	土師器	磁片
土師器	甕・磁片		
瓦類	平瓦	S B 20030	
S E 20016 黒灰色砂泥		須磨器	杯
須磨器	杯	土師器	磁片・甕・皿
瓦類	平瓦	黒色土器	A類
		瓦類	平瓦
S E 20016 磁方		S- 20031 雑品	
須磨器	壺	須磨器	壺・杯
土師器	甕	その他	タイル
瓦類	平瓦		
土製品	木片	S B 20033 磁方	
S E 20016 部位不明		須磨器	磁片・甕・杯蓋
須磨器	杯蓋	土師器	磁片・甕・杯
土師器	甕・杯・杯	金属製品	鉄釘
S K 20017		S B 20033 (柱礎及び接ぎ取り及段下付)	
須磨器	皿・杯・杯蓋・高杯	須磨器	磁片
土師器	甕・皿・杯・杯蓋	土師器	磁片・杯・壺
土製品	土馬	瓦類	平瓦
S K 20018		S- 20034 褐色土	
須磨器	鉢・甕・甕・杯蓋・杯・壺	須磨器	杯
土師器	甕・杯・高杯		
瓦類	平瓦	S- 20035 褐色色細砂	
S- 20019		須磨器	杯
瓦類	平瓦	黒色土器	A類樹
S K 20020		瓦類	平瓦
須磨器	杯・杯蓋	S- 20036 褐色色細砂	
土師器	甕・杯	土師器	皿
瓦類	平瓦	黒色土器	A類樹
		陶磁陶器	緑釉樹
		瓦類	平瓦
S K 20021		S- 20037	
須磨器	甕・杯	土師器	皿
土師器	杯・皿・甕		
瓦類	平瓦・丸瓦	S- 20038 灰色細砂	
S- 20022		土師器	甕
土師器	皿	瓦類	平瓦
S- 20023		土製品	木片
須磨器	磁片	S K 20039 褐色色細砂	
土師器	杯	須磨器	杯・壺・甕
S K 20024		土師器	杯・甕
須磨器	杯・杯蓋・甕	土製品	SAIの管口
土師器	皿・杯	S K 20039 褐色色細砂	
		須磨器	壺・杯
		土師器	高杯・甕・皿
S K 20025		S K 20039 灰色砂	
須磨器	杯・甕・杯蓋	須磨器	杯・皿・壺・甕・甕
土師器	皿	土師器	甕・甕・杯・甕・皿
		瓦類	平瓦・丸瓦
		木製品	炭
S- 20026		S K 20039 褐色色細砂	
土師器	甕	須磨器	甕・杯
		土師器	皿・甕・杯
S- 20027		瓦類	平瓦
土師器	磁片		
瓦類	平瓦・丸瓦		

Tab.53平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(3)

S A 20040

須恵器	鏡片・杯
土師器	甕・杯
木製品	不明木製品
金属製品	銅製刀子

S D 20041

須恵器	甕・皿・杯・杯蓋
土師器	鏡片

S D 20042

須恵器	杯蓋・杯・鏡片
-----	---------

S D 20043

須恵器	鉢・皿・甕・杯
土師器	甕・甕・甕・杯蓋・高杯・甕

S D 20043 e- 25区上層

須恵器	杯
土師器	甕・皿・鏡片
黑色土器	鉢

S D 20043 e- 25区下層

須恵器	杯蓋
土師器	皿

S- 20044

須恵器	甕・杯・甕
土師器	鏡片

S- 20045 段下及び段上層リ(S B 20045 L)

須恵器	杯・甕・杯蓋
土師器	鏡片・甕・杯・製塩土器・皿
瓦類	平瓦・丸瓦
その他	陶土

S- 20045 段方(S B 20045 L)

須恵器	杯蓋・杯・甕
土師器	高杯・甕・製塩土器
瓦類	平瓦

S- 20046

須恵器	鏡片
-----	----

S- 20047

須恵器	鏡片
土師器	鏡片
黑色土器	A脚銅

S- 20048 段上層リ

須恵器	杯・杯蓋
土師器	甕・皿・製塩土器
瓦類	丸瓦

S- 20048 段方

須恵器	甕・杯・杯蓋
土師器	杯・甕

S- 20049

須恵器	鏡片
土師器	鏡片・皿

S- 20050

須恵器	鏡片
土師器	鏡片・高杯

S- 20051

須恵器	甕
土師器	鏡片

S- 20052

土師器	鏡片
須恵器 (中世-)	杯・甕

S- 20053

土師器	鏡片
-----	----

S- 20054

木製品	木片
-----	----

S- 20055

土師器	鏡片
木製品	木片

S- 20056

須恵器	甕
土師器	甕
瓦類	平瓦

S- 20057

土師器	皿
-----	---

S- 20058

須恵器	鏡片
土師器	甕・皿
黑色土器	B脚銅?
瓦類	平瓦

S- 20059

土師器	鏡片
-----	----

S- 20060

須恵器	鏡片
土師器	鏡片

S- 20062

木製品	木片
-----	----

S- 20063

土師器	鏡片
-----	----

S- 20064

須恵器	杯
土師器	皿・鏡片

S B 20065

土師器	鏡片
-----	----

S- 20067

須恵器	甕・杯
土師器	鏡片・甕
瓦類	平瓦

S- 20068

土師器	鏡片
-----	----

S- 20069

土師器	鏡片
-----	----

S- 20070

土師器	甕
-----	---

Tab.54平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(4)

S-20071	土師器 (古墳時代)	皿・鏡片・高杯
S P 20072	土師器	皿
S-20074	土師器	鏡片
	瓦類	平瓦
S B 20075 鏡乃	須惠器	杯(古墳時代)
	土師器	高杯・鏡片
S B 20075 鎌倉期	須惠器	杯(古墳時代)・杯・甕
	土師器	鏡片・皿・甕
S-20076 (S B 20077 b)	土師器	鏡片
S K 20077	須惠器	杯・甕
	土師器	鏡片・甕
	瓦類	平瓦
S P 20078 鏡乃 (S-20075dの一部)	須惠器	杯・甕
	土師器	皿・甕
	瓦類	平瓦・丸瓦
S P 20078 鎌倉期	須惠器	鏡片・杯・甕
	土師器	高杯・鏡片
S D 20079	土師器	鏡片
S-20080	須惠器	甕・壺・杯
	瓦類	平瓦・丸瓦
S-20081	土師器	蓋
	瓦類	平瓦
S P 20082	土師器	甕・鏡片
	瓦類	平瓦
S B 20083 鏡乃	土師器	鏡片
S B 20083 鎌倉期及び柱礎跡	古式土師器	高杯
	土師器	鏡片・皿
S-20084	土師器	甕
S-20085	須惠器	甕
	土師器	鏡片
S-20086	須惠器	鏡片・甕・甕・杯
	土師器	鏡片・皿
S-20087 (S B 20210 d)	須惠器	甕・甕
	土師器	甕・製造土師・杯・甕・皿
	瓦類	平瓦
S-20088	須惠器	鏡片
	土師器	鏡片・皿
S-20089	土師器	鏡片
	瓦類	平瓦
S-20090 (S B 20210 a)	土師器	鏡片
S-20091 雲錦小遺	須惠器	杯
	土師器	杯・皿・甕
	瓦類	甕
	輸入陶器	白磁甕
	瓦類	平瓦
S-20092	須惠器	杯
	土師器	鏡片
S-20093	土師器	鏡片
S D 20094	須惠器	甕
	土師器	甕・皿
S-20095 (S B 20210 c)	須惠器	鏡片
	土師器	鏡片
S-20096 (S B 20210 e)	須惠器	杯・甕
	土師器	鏡片
	瓦類	平瓦
S P 20097	須惠器	鏡片・杯
	土師器	鏡片・甕
	緑釉陶器	甕
	瓦類	鏡片
S-20098	須惠器	蓋
	土師器	鏡片
S D 20099	古式土師器	高杯
	須惠器	杯
	土師器	皿・甕
	瓦類	甕
	白磁	I・V類甕
	瓦類	平瓦・丸瓦
	その他	炉蓋
S D 20100	須惠器	杯
	土師器	甕・皿
	黑色土師	A類鉢
	瓦類	甕・皿
	白磁	甕

Tab.55平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(5)

S- 20101

須恵器	磁片
土師器	磁片
瓦器	瓦

S- 20102 (S A20106 a)

須恵器	磁片
土師器	磁片
瓦器	平瓦

S P20104

須恵器	甕
土師器	甕
瓦器	甕・皿

S- 20105 (S B20101 a)

須恵器	甕
土師器	甕・皿
瓦器	甕
瓦類	平瓦

S- 20106

須恵器	甕
土師器	甕
黒色土器	A類輪・B類輪
瓦類	平瓦
土製品	埴

S- 20107 雑乱

須恵器	杯
土師器	甕・皿
瓦器	甕
瓦類	丸瓦

S- 20108 甕方 (S B20100 b)

須恵器	磁片
土師器	甕・磁片

S- 20108 接合取口 (S B20100 b)

須恵器	蓋
土師器	甕
緑釉陶器	甕・磁片
黒色土器	A類輪

S- 20109

須恵器	磁片
土師器	磁片・皿
黒色土器	A類鉢
瓦器	甕・皿
瓦類	平瓦

S- 20111 雑乱

須恵器	甕・杯
-----	-----

S- 20112 (S B20100 a)

須恵器	杯
土師器	磁片

S- 20113 (S B20100 e)

須恵器	蓋
土師器	磁片

S- 20114 (S B20100 c)

須恵器	杯
土師器	甕・皿・磁片
黒色土器	A類輪
瓦類	平瓦

S- 20115

須恵器	杯
土師器	皿

S- 20116

須恵器	磁片
土師器	杯・磁片
瓦類	丸瓦

S- 20117 (S B20101 b)

須恵器	蓋
土師器	磁片・甕

S- 20118 甕方 (S B20100 d)

土師器	皿 (C字状口縁)
-----	-------------

S- 20118 接合取口 (S B20100 d)

土師器	甕
-----	---

S- 20119 甕方方 (S P20100)

須恵器	杯・磁片
土師器	皿・甕・磁片
黒色土器	A類輪

S- 20119 接合取口 (S P20100)

須恵器	磁片
土師器	甕・磁片
黒色土器	A類輪

S K20120

須恵器	平甕・杯・甕
土師器	皿・甕
土師器	甕
土師器	(中世 -)
瓦類	甕・皿
白磁	埴子罐
瓦類	平瓦

S D20121

須恵器	甕・磁片
土師器	杯・磁片・甕
瓦類	平瓦

S P20122

須恵器	杯
土師器	甕・皿
緑釉陶器	磁片
黒色土器	A類輪

S- 20123 (S B20101 c)

須恵器	磁片
土師器	磁片

S- 20124

須恵器	甕
土師器	甕

S- 20125

土師器	磁片
瓦類	平瓦

S- 20126

須恵器	磁片・杯・甕
土師器	皿・磁片

Tab.56平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(6)

S-20127 (S B 20284 j)

土師器	皿・釜
瓦器	柄・皿
瓦類	平瓦
木製品	木片

S-20128 (S B 20284 h)

土師器	線片・陶埴土器・皿
瓦類	平瓦

S-20129

須置器	杯・蓋
土師器	線片・杯
瓦器	皿
瓦類	平瓦

S E 20130 黒灰色土

土師器	皿・釜
須置器 (中世-)	山形柄・東漢系須置器鉢
瓦器	柄・皿
瓦類	平瓦・丸瓦

S E 20130 特内

土師器	皿・釜
瓦器	柄

S E 20130 縄方

土師器	皿・釜
瓦器	柄
白磁	椀V-4
木製品	木片

S E 20130 特材

瓦類	削りた平瓦・平瓦(「大」刻印あり)
----	-------------------

S P 20131

須置器	杯・蓋・鉢・壺
土師器	柄・皿
黒色土器	A類・線片
瓦器	柄
瓦類	平瓦

S-20132

土師器	線片
-----	----

S-20133 (S B 20284 m)

須置器	壺
土師器	製塩土器・釜・柄・皿・甕
黒色土器	A類柄
瓦器	柄・皿

S-20135 (S B 20287 g)

須置器	蓋・杯
土師器	柄・皿
黒色土器	A類柄

S P 20136

土師器	甕
-----	---

S K 20136 鎌倉期?

古式土師器	高杯
須置器	甕・線片
土師器	線片

S P 20137

須置器	壺
土師器	杯・線片・甕

S K 20137 縄方

須置器	杯
土師器	甕

S-20138

土師器	線片
-----	----

S-20139

土師器	甕
-----	---

S K 20140

須置器	杯
土師器	皿・羽釜
須置器 (中世-)	東漢系須置器甕・東漢系須置器鉢
瓦器	柄・皿・小型瓦器柄
磁器陶器	花青壺
瓦類	平瓦

S-20141

須置器	杯
-----	---

S-20142

土師器	線片
-----	----

S-20144

土師器	線片
-----	----

S-20145 (S B 20287 h)

土師器	線片
-----	----

S-20146

土師器	線片
-----	----

S K 20147

古式土師器	甕・小型丸高壺
-------	---------

S D 20148

古式土師器	高杯・甕・鉢
土師器	甕

S-20149

土師器	線片
黒色土器	A類線片
瓦類	線片

S P 20150

その他	自然石大壺
-----	-------

S-20151

須置器	線片
土師器	線片

S-20152

須置器	線片
土師器	線片

S-20153

須置器	線片
土師器	甕・皿

S-20154

須置器	杯・蓋
土師器	線片
瓦類	線片

S-20155 縄方 (S B 20210 b)

土師器	甕
-----	---

Tab.57平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(7)

S-20155 鎌倉群口 (S B20210 b)

須恵器	杯
土師器	甕

S-20156

土師器	皿・釜・鉢
瓦類	椀・皿

S-20157

須恵器	杯
土師器	椀・皿
瓦類	平瓦・丸瓦

S-20159

須恵器	磁片
-----	----

S K20160 暗褐色土

須恵器	甕・杯蓋・杯
土師器	皿・釜・甕・甍瓿土器
須恵器 (中世一)	東漢形須恵器鉢・十座山甕
黑色土器	A類椀・B類椀
瓦類	柄小型瓦葺椀
白磁	皿・椀
輸入陶器	白磁椀
灰釉陶器	灰釉陶器椀
石類	磁石
瓦類	平瓦
木製品	木片

S K20160 黒灰褐色土

土師器	皿
瓦類	椀
瓦類	平瓦

S-20162

須恵器	甕・甕・磁片
土師器	甕・甍瓿土器・磁片
瓦類	平瓦

S-20163

土師器	磁片
-----	----

S-20164

須恵器	磁片
土師器	磁片

S-20165

須恵器	甕
土師器	皿
瓦類	椀
瓦類	平瓦

S-20166

須恵器	磁片
土師器	甕・杯・磁片
黑色土器	A類磁片
瓦類	平瓦
木製品	木片

S-20167 (S B20394 c)

須恵器	磁片
土師器	磁片・甕
黑色土器	B類磁片

S-20168

須恵器	杯・杯蓋・椀・磁片
土師器	皿・甕・磁片
黑色土器	A類椀
瓦類	椀
瓦類	平瓦

S-20169 (S B20395 l)

その他	自然石
-----	-----

S P20171

須恵器	杯蓋・磁片
土師器	甕・椀・皿
緑釉陶器	椀
黑色土器	A類磁片
その他	凝灰岩

S-20172

土師器	皿・磁片
-----	------

S-20173

須恵器	甕
土師器	皿・甕
灰釉陶器	椀

S-20174 (S B20394 o)

須恵器	磁片
土師器	皿
黑色土器	A類磁片

S P20175

須恵器	磁片・杯蓋
土師器	甕・皿・釜
黑色土器	A類磁片
瓦類	椀・皿
瓦類	平瓦

S-20176 (S B20394 q)

須恵器	甕
土師器	皿・磁片
瓦類	椀・皿
瓦類	平瓦

S-20177

須恵器	杯
土師器	釜・磁片
黑色土器	A類椀
瓦類	磁片

S P20176

須恵器	磁片
土師器	皿・甕
黑色土器	A類椀・B類磁片
瓦類	椀
瓦類	平瓦

S-20179

土師器	皿
緑釉陶器	磁片
黑色土器	A類椀・B類椀
瓦類	磁片

Tab.58 平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(8)

S P 20190

須磨器	銅片
土師器	皿・釜・銅片
須磨器 (中世-)	甕罎系鉢
瓦器	柄・皿
白磁	柄
石製品	石鍋
瓦類	銅片

S - 20181

須磨器	銅片
土師器	皿
瓦類	平瓦

S - 20182

土師器	甕・皿
木製品	木片

S - 20183

土師器	皿
黒色土器	B類銅片
瓦器	柄
瓦類	平瓦

S - 20184

古式土師器	鉢
須磨器	甕
土師器	皿・釜
瓦器	柄・皿
瓦類	平瓦

S - 20185 (S B 20191 k)

須磨器	銅片
土師器	銅片・甕・土師
黒色土器	A類銅片

S - 20186

須磨器	銅片
瓦器	柄
瓦類	銅片

S - 20187

須磨器	甕
土師器	皿

S - 20188

須磨器	甕・鉢
土師器	甕
木製品	杖根

S - 20189

須磨器	甕
土師器	甕

S - 20191

土師器	甕・皿
瓦類	平瓦

S P 20192

須磨器	甕・鉢蓋
土師器	皿・釜
須磨器 (中世-)	甕罎系須磨器鉢
黒色土器	B類銅
瓦器	柄
石製品	碓石
瓦類	平瓦・丸瓦

S - 20193

黒色土器	A類銅
瓦類	平瓦

S - 20194

須磨器	銅片
土師器	銅片

S P 20195

古式土師器	高杯
須磨器	甕・鉢・甕・鉢蓋
土師器	皿・甕
黒色土器	A類銅
瓦類	平瓦

S K 20196

古式土師器	甕・高杯
須磨器	柄・甕・甕・鉢蓋
土師器	皿
緑釉陶器	鉢
灰釉陶器	皿
黒色土器	A類銅
瓦類	平瓦
その他	焼土

S K 20197

須磨器	甕
土師器	皿
瓦器	柄
白磁	柄
瓦類	平瓦

S - 20198

須磨器	柄・甕
土師器	皿・釜
黒色土器	A類銅
瓦器	柄・皿
瓦類	平瓦

S - 20199

須磨器	鉢蓋・銅片
土師器	銅片
瓦器	銅片
瓦類	平瓦

S - 20201

古式土師器	甕・高杯
須磨器	甕・鉢・甕
土師器	銅片・皿
黒色土器	A類銅

S - 20202

須磨器	銅片
土師器	甕・銅片
黒色土器	A類銅
瓦類	平瓦

S - 20203

土師器	銅片
黒色土器	A類銅

S - 20204

須磨器	甕・銅片
土師器	銅片
瓦類	瓦

Tab.59平城京京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(9)

S-20205

須恵器	杯・楕片
土師器	杯・楕片
黑色土器	A類楕片
瓦類	瓦

S-20206 (S B20206 c)

須恵器	楕片
土師器	皿・楕片
瓦類	瓦

S-20208 (S B20208 b)

須恵器	楕片
土師器	皿・楕片
黑色土器	A類楕片
瓦類	椀
瓦類	瓦

S-20209

須恵器	楕片
土師器	皿・壺・楕片
瓦類	瓦

S-20211

土師器	皿・壺
-----	-----

S-20212

土師器	楕片
-----	----

S-20213

須恵器	壺・杯蓋
土師器	椀・椀・製塩土器
黑色土器	A類椀
瓦類	平瓦・丸瓦

S-20215

須恵器	杯蓋
土師器	楕片

S-20216 (S B20216 k)

土師器	椀・楕片
-----	------

S D20220

須恵器	壺・壺・楕片
土師器	椀・皿
黑色土器	A類椀(混入)

S-20221

土師器	楕片・皿
黑色土器	A類椀
瓦類	瓦

S-20222

須恵器	楕片
土師器	椀・杯・楕片

S-20223 (S B20223 k)

古式土師器	壺
須恵器	杯蓋・楕片
土師器	皿・楕片
灰釉陶器	楕片
黑色土器	A類椀
瓦類	平瓦

S-20224

須恵器	楕片
土師器	壺・壺・楕片
黑色土器	A類椀

S-20225 (S B20225 j)

須恵器	楕片
土師器	皿・楕片
黑色土器	A類椀
瓦類	平瓦

S-20226

土師器	製塩土器・楕片
-----	---------

S-20227

須恵器	杯蓋・杯・楕片
土師器	鉢・皿・製塩土器・楕片

S-20228 (S B20228 p)

古式土師器	壺
須恵器	椀・楕片
土師器	楕片
黑色土器	A類椀
瓦類	平瓦
木製品	木片
その他	焼土

S-20229 (S B20229 d)

須恵器	壺・壺・杯蓋
土師器	皿
灰釉陶器	楕片
黑色土器	B類楕片

S-20231

須恵器	楕片
土師器	皿・皿

S-20232 (S-2024(上層) (S B20232 h))

須恵器	皿・壺・杯・皿
土師器	皿・皿・壺・製塩土器
灰釉陶器	紫色三動
瓦類	平瓦

S-20233 (S A20233 e)

須恵器	楕片
土師器	椀(東海系)・椀・皿・楕片・製塩土器
灰釉陶器	椀

S P20234

須恵器	楕片
土師器	椀・皿・杯蓋・壺
黑色土器	A類椀
瓦類	軒平瓦
金属製品	不明鉄製品

S P20236

須恵器	楕片
土師器	皿・楕片
黑色土器	A類椀

S-20237

須恵器	杯蓋
土師器	杯・皿
瓦類	椀

S-20238

須恵器	杯蓋・壺・杯・壺
土師器	皿・皿
黑色土器	B類椀
瓦類	椀・皿
瓦類	平瓦
金属製品	スラフ

Tab.60平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(10)

S-20209

須磨器	磁片
土師器	磁片
瓦類	平瓦

S-20241

須磨器	杯・甕・磁片・杯蓋
土師器	皿・瓶・磁片
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S-20242

須磨器	磁片
土師器	皿・甕・杯
黒色土器	A類碗

S-20243

須磨器	甕
瓦類	平瓦

S-20244

須磨器	甕
土師器	皿・釜
瓦類	碗

S-20245

須磨器	甕・釜
土師器	碗
瓦類	平瓦

S P.20246

須磨器	皿
土師器	皿・甕・製塩土器・磁片

S-20247

須磨器	甕
土師器	皿
其他陶器	碗
瓦類	碗
瓦類	平瓦

S-20248 (S B.20204.1.)

土師器	皿
-----	---

S-20249

須磨器	磁片
瓦類	碗
瓦類	丸瓦

S D.20250 褐色色土

古式土師器	甕・小型丸底甕・高杯・長脚甕
須磨器	甕・甕・杯
土師器	皿・甕(製塩土器の可能性大)
瓦類	碗
瓦類	平瓦

S D.20250 灰色粘土

古式土師器	高杯・甕・磁片
その他	碗の種

S D.20250 暗褐色土

古式土師器	甕・高杯
土師器	皿

S D.20250 出土層位不明

古式土師器	磁片
-------	----

S-20251

土師器	磁片
黒色土器	A類碗

S-20252 (S B.202094 h.)

土師器	磁片
瓦類	平瓦

S-20253

須磨器	甕・杯蓋
土師器	甕・皿
黒色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S-20254

土師器	磁片
瓦類	瓦

S-20255

土師器	甕・磁片
瓦類	碗
瓦類	平瓦

S-20256

須磨器	鉢
瓦類	碗

S-20257 (S B.20204 g.)

土師器	皿・釜
瓦類	碗

S-20258

須磨器	磁片
土師器	皿
瓦類	碗
瓦類	平瓦

S-20259

須磨器	磁片
土師器	皿
瓦類	碗

S-20260

瓦類	碗
----	---

S-20261

須磨器	杯
土師器	磁片・皿
黒色土器	A類碗

S-20262 (S B.20205 g.)

須磨器	甕・甕蓋
土師器	皿・甕・磁片
黒色土器	A類碗

S-20263

須磨器	甕
土師器	皿・釜
瓦類	碗
瓦類	平瓦

S-20264

土師器	皿
瓦類	碗

Tab.61平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覽表(11)

S P 20265

須惠器	杯
土師器	釜
瓦器	筒・小型筒
須惠器 (中世一)	東海系須惠器鉢
瓦類	平瓦

S- 20266

土師器	釜・皿
瓦類	筒

S- 20267

土師器	釜
瓦類	平瓦

S- 20268

須惠器	線片
土師器	筒
瓦類	筒

S- 20269

須惠器	線片
-----	----

S- 20271

須惠器	杯・線片
土師器	皿・線片
黑色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S- 20272

須惠器	杯
土師器	皿・製塩土器
瓦類	瓦

S- 20273

須惠器	壺・甕
土師器	線片
黑色土器	A類碗
瓦類	筒

S- 20274

瓦類	平瓦
----	----

S- 20275

瓦類	筒
----	---

S- 20276

須惠器	線片
土師器	線片
瓦類	線片

S- 20277

土師器	釜・皿
黑色土器	B類碗
瓦類	瓦

S- 20278

土師器	皿
黑色土器	A類碗
瓦類	筒
瓦類	平瓦

S- 20279

須惠器	線片
土師器	皿・釜
黑色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S- 20280

土師器	線片
-----	----

S- 20281

須惠器	壺・秤蓋
土師器	線片
瓦類	丸瓦

S- 20282 (S B 20304 j)

土師器	皿・製塩土器
瓦類	筒

S- 20283

土師器	皿
黑色土器	A類
瓦類	線片

S- 20284

瓦類	丸瓦
----	----

S- 20286

土師器	線片
-----	----

S- 20287 (S B 20304 e)

土師器	皿・線片
黑色土器	A類
瓦類	瓦

S- 20289

須惠器	線片
土師器	線片

S- 20290

須惠器	線片・甕
土師器	線片
瓦類	筒
瓦類	瓦

S- 20291

土師器	皿
-----	---

S- 20292 (S B 20305 e)

土師器	皿
黑色土器	A類碗
瓦類	瓦

S- 20293

瓦類	平瓦
----	----

S- 20294

土師器	線片
-----	----

S- 20295

須惠器	皿
土師器	製塩土器
黑色土器	A類碗
瓦類	平瓦

S- 20296

須惠器	線片
土師器	皿・線片
瓦類	筒

S- 20297

土師器	皿
-----	---

Tab.62平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(12)

S-20298	須臾器 杯・甕 土師器 皿 瓦類 硯	S-20313	須臾器 線片 土師器 硯
S-20299 (S B 20295 d)	須臾器 杯蓋・線片 土師器 皿・線片 瓦類 平瓦	S-20314 裏側小溝	瓦類 硯
S-20300	瓦類 平瓦	S-20315 (S B 20295 c)	土師器 皿・皿・線片 瓦類 丸瓦
S-20301 (S B 20295 f)	土師器 硯	S-20316 裏側小溝	須臾器 線片 土師器 硯 瓦類 線片
S-20302 (S B 20294 u)	須臾器 杯・杯蓋・甕蓋・甕 土師器 皿・甕 黒色土器 A類硯 瓦類 平瓦	S-20317	土師器 皿・皿 黒色土器 A類
S-20303	土師器 皿 黒色土器 A類硯	S-20318 裏側小溝	須臾器 杯・甕 土師器 硯 瓦類 硯 瓦類 平瓦
S-20304	須臾器 鉢・甕 土師器 甕・皿・線片 瓦類 平瓦	S-20319	須臾器 杯蓋・甕 土師器 線片
S-20305	須臾器 杯・杯蓋・甕 土師器 甕・皿・杯蓋	S-20321	土師器 線片
S-20306	須臾器 線片 土師器 皿 瓦類 平瓦	S-20322	須臾器 杯 土師器 線片 瓦類 平瓦
S P 20307	古式土師器 甕 土師器 皿・皿 緑釉陶器 硯	S-20323	土師器 皿
S-20308	須臾器 甕 土師器 甕・皿 瓦類 平瓦・丸瓦	S X 20324	須臾器 線片 土師器 皿・線片 黒色土器 A類・A類鉢 瓦類 硯(是入否?) 瓦類 丸瓦・平瓦
S-20309	須臾器 杯 土師器 皿・線片	S-20325	須臾器 杯・線片 土師器 皿・線片
S-20311	須臾器 杯蓋 土師器 甕・皿 黒色土器 A類硯・B類	S-20327 裏方	須臾器 線片 土師器 線片・製塩土器 黒色土器 A類
S-20312	須臾器 線片 土師器 線片	S-20327 表取口	須臾器 杯蓋・線片 土師器 線片 瓦類 平瓦
		S-20328 裏方	須臾器 杯 土師器 硯 瓦類 硯

Tab.63平城京京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(13)

S-20228 鎌倉群刀	須臾器 銅片・杯 土師器 銅片	S-20342	土師器 銅片 黒色土器 A類焼
S-20229 鎌倉群刀	土師器 銅片 瓦類 平瓦	S-20343	石製品 サヌカイト銅片
S-20229 鏡刀	土師器 銅片	S-20344	須臾器 銅片 土師器 銅片
S P 20230	須臾器 杯蓋・杯・銅片 土師器 皿・杯・鏡	S-20345	土師器 銅片
S-20231 鏡刀	須臾器 杯蓋・銅片 土師器 銅片	S-20346	土師器 銅片
S-20231 鎌倉群刀	須臾器 杯・杯蓋 土師器 鏡・銅片・製塩土器 瓦類 瓦	S-20347	須臾器 杯
S-20232 鏡刀	土師器 製塩土器・銅片	S E 20348 灰色粘土	須臾器 平皿・鏡・杯・杯蓋 土師器 杓・蓋・杯・製塩土器・皿・鏡 瓦類 平瓦
S-20232 鎌倉群刀	須臾器 杯・銅片・高杯・杯蓋 土師器 鏡・壺・銅片・皿・杯	S E 20348 暗褐色土	須臾器 壺・杯・鏡・蓋 土師器 壺・杯・鏡・製塩土器・高杯 石製品 後熟した石 瓦類 平瓦・丸瓦
S-20233	土師器 銅片	S-20349 鎌倉群刀 (S B 20230 e)	須臾器 杯・杯蓋 土師器 鏡・銅片
S-20234 (S B 20240 a)	須臾器 壺 土師器 製塩土器・銅片・皿・杯蓋	S-20350 鏡刀 (S B 20230 f)	須臾器 杯・蓋 土師器 鏡・皿
S-20236 鎌倉群刀	土師器 銅片 瓦類 平瓦	S P-20350 鎌倉群刀 (S B 20230 f)	土師器 銅片
S-20237 鏡刀 (S B 20230 n)	土師器 杯(職文あり)・銅片	S-20351	須臾器 銅片
S-20237 鎌倉群刀 (S B 20230 n)	古式土師器 壺 須臾器 杯・杯蓋 土師器 杯・銅片	S-20352 鎌倉群刀	須臾器 鏡・杯 土師器 銅片 瓦類 丸瓦
S-20238 鎌倉群刀	須臾器 杯・銅片 土師器 杯・銅片	S-20353	須臾器 銅片 土師器 鏡・銅片 黒色土器 A類 瓦類 瓦
S-20239	須臾器 壺 土師器 銅片	S-20354	須臾器 杯蓋 土師器 銅片・鏡
S K 20340	須臾器 鏡・平皿・杯蓋・灰 土師器 皿・杯蓋 瓦類 平瓦	S-20355	須臾器 鏡・銅片 土師器 銅片 瓦類 瓦
S-20341	須臾器 杯蓋・銅片 土師器 銅片	S-20356	須臾器 壺 土師器 製塩土器

Tab.64平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(14)

S-20057

古式土師器	甕
須恵器	磁片
土師器	磁片
瓦類	平瓦

S-20058

土師器	磁片
-----	----

S-20059

土師器	磁片
瓦類	磁片

S-20060 抜き取り (S B 20200 l)

須恵器	高杯
土師器	甕
その他	種の種

S-20061 甕方 (S B 20200 k)

須恵器	杯
-----	---

S-20061 抜き取り (S B 20200 k)

須恵器	磁片
土師器	甕・磁片

S-20063 抜き取り (S B 20200 i)

須恵器	磁片
土師器	磁片

S E 20064

須恵器	杯・甕・壺
土師器	甕・杯・製塩土器・甕・皿
瓦類	平瓦・丸瓦
土製品	土周

S E 20064 特内

須恵器	皿・杯・壺
土師器	製塩土器
瓦類	平瓦・丸瓦

S E 20064 動物内

土師器	甕
瓦類	平瓦

S E 20064 甕方

古式土師器	高杯・甕
須恵器	甕
土師器	皿
瓦類	平瓦

S-20065 甕方 (S B 20200 d)

土師器	磁片
黒色土器	A類(埋入の可能性大)

S-20065 抜き取り (S B 20200 d)

古式土師器	甕
土師器	磁片

S-20066 抜き取り (S B 20200 c)

古式土師器	甕
土師器	磁片

S P-20066 甕方 (S B 20200 c)

古式土師器	磁片
-------	----

S-20068 抜き取り (S B 20200 h)

須恵器	甕
土師器	皿
黒色土器	A類陶
木製品	木片

S-20069 甕方 (S B 20200 m)

土師器	磁片
-----	----

S-20070 抜き取り

土師器	磁片
-----	----

S-20071 (S B 20200 a)

土師器	磁片
-----	----

S-20072 抜き取り

土師器	磁片
-----	----

S-20073

須恵器	甕
土師器	磁片

S-20074 抜き取り

土師器	甕・磁片
-----	------

S-20075

土師器	磁片
-----	----

S-20078 甕方 (S B 20200 b)

須恵器	皿
土師器	杯・甕

S-20079

須恵器	杯・磁片
土師器	皿・磁片
黒色土器	A類陶

S P 20080 抜き取り

須恵器	杯甕・甕・磁片
土師器	皿・磁片
黒色土器	A類陶
瓦類	平瓦

S P 20080 甕方

須恵器	杯・甕
土師器	製塩土器・皿
灰釉陶器	甕
黒色土器	A類陶
瓦類	平瓦

S K 20081

古式土師器	甕・高杯
須恵器	杯

S-20082

須恵器	杯・磁片
土師器	甕・磁片
瓦類	平瓦

S-20083

須恵器	杯・磁片
土師器	皿・磁片
瓦類	平瓦

S-20084 抜き取り

須恵器	甕・杯・磁片
土師器	杯・甕・磁片

Tab.65平城京右京北辺遺跡2区出土遺物一覧表(15)

S-20285 (S B 20220 g)

須恵器	磨面土器・杯・杯蓋
土師器	瓶・壺
瓦類	椀
瓦類	平瓦

S-20286

須恵器	線片
瓦類	瓦

S-20287

須恵器	壺
土師器	線片

S-20288

須恵器	椀
-----	---

S-20290 群根跡(抜き取り)

須恵器	壺・杯
土師器	椀

S-20290 抜き取り

古式土師器	壺
須恵器	壺・壺
土師器	椀

S D 20292

須恵器	杯・壺・椀
土師器	椀
瓦類	平瓦・丸瓦

2区 供土

古式土師器	高杯・壺
須恵器	線片・皿・椀・鉢・杯蓋・壺・杯
土師器	線片・皿・椀・皿・杯・壺・製塩土器
緑釉陶器	椀・鉢?
灰釉陶器	椀
薬色土器	A類椀・A類鉢・B類椀
瓦類	椀
白磁	椀
瓦葺土器	深鉢
石器	二次加工ある銅片・磁石
石製品	凝灰岩片
瓦類	平瓦・丸瓦
土製品	土馬
木製品	不明木

2区 機皿

須恵器	皿
土師器	壺
薬色土器	A類椀

2区 灰黄色土

須恵器	壺・壺・杯蓋
土師器	椀・杯
石製品	不明石製品
瓦類	平瓦
土製品	埴

2区 暗褐色土(豊地土)

古式土師器	高杯・壺・壺・小型丸蓋
須恵器	椀・鉢・杯蓋
土師器	皿・皿・杯・製塩土器・椀・壺・椀(東海系)
緑釉陶器	皿
灰釉陶器	椀
薬色土器	A類椀
瓦類	椀
青磁	皿
石製品	不明石製品
瓦類	平瓦

2区 灰褐色

須恵器	杯・杯蓋・壺・壺・平皿・鉢
土師器	杯・皿・壺・高杯・椀・壺・壺
緑釉陶器	椀・壺
灰釉陶器	椀
薬色土器	A類椀
瓦類	椀・皿・小型瓦葺椀
白磁	椀
陶磁陶器	山形椀(北原系)・東海系須恵器椀
石製品	凝灰岩破片
瓦類	平瓦・丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦
金属製品	不明鉄製品

機跡トレンチ1

須恵器	椀・鉢・杯蓋
土師器	椀・杯・皿・製塩土器
瓦類	線片
瓦類	平瓦・丸瓦

機跡トレンチ2 S D 20293

須恵器	杯・壺・平皿・壺
土師器	椀・杯

2区 南側工庫立倉

須恵器	壺・壺蓋・線片
土師器	線片
瓦類	平瓦



Fig.164 平城京右京北边遗址1区第1遗槽面略图 (S = 1/200)

写真図版

遺物写真に付した数字は
Fig.番号- 遺物番号
の順である。



調査地全景（北西から）

PL 2



1区全景（上が北）



北側第2遺構検出状況（南から）



SD10323検出状況（東から）